山岳

Vol. 101／2006

エスパース

海外遠征の極上空間。エスパース

ガッシャブルム1峰（8068m）西稜上のC2（6600m）　背後はG4（7925m）とG5（7133m）
エスパース・マキシム 改造プロトモデル　　撮影：近藤和美

1970年の第1号エスパースの発売以来、
シンプルなフレーム構造で高い剛性を保持することを基本設計とし、
数々のアイディアと改良を重ねながら、
いつしか山岳テントの代名詞とまで言われるようになったエスパース。
現在ではスリーシーズンテントから厳冬期遠征仕様まで
10機種がラインナップされ、
最先端技術と革新的な発想で理想の山岳テントを目指し、
日々研究開発が続けられています。

2006 NEW LINE-UP

スーパーライト・エスパース

エスパース・デュオ ゴアテックス

カモシカスポーツはクライマーの信頼に応えます。

KAMOSHIKA®

カモシカスポーツ　ホームページ　http://www.kamoshika.co.jp/
山の店・本　店 ☎03（3232）1121　〒169-0075 東京都新宿区高田馬場1-28-6・2F
山の店・横浜店 ☎045（212）2044　〒231-0062 神奈川県横浜市中区桜木町3-11
山の店・松本店 ☎0263（48）2424　〒390-1242 長野県松本市和田1478-1
スキー・テニスの店 ☎03（3371）4333　〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-11
●AM10:30～PM8:00（月～金）／AM10:30～PM7:00（土・日・祝）

第百一年（通巻一五九号）

山岳

二〇〇六年

山岳　二〇〇六年　目次

長老と共にある日々―高野鷹蔵、武田久吉、冠松次郎……杉本　誠……7
霧ヶ峰・山の会……高橋保夫……17
山好きの大人たちのためのハイジ物語
――アルプスの娘の物語にひそむ意味について――……宮下啓三……37

東チベット・禁断の易貢蔵布（イゴンツァンポー）―未踏の山と谷を踏査する　二〇〇五年十～十一月……中村　保……54

*

図書紹介

『學習院登山史(I)一八八七～九五三　山桜―特別号』(田辺　壽)…74、『山　その大いなる旅―同志社大学山岳部・山岳会八十年の歩み』(宮下啓三)…76、『Mount Everest : the Reconnaissance 1935. The Forgotten Adventure』(薬師義美)…79、『大ヒマラヤ探検史　インド測量局とその密偵たち』(雁部貞夫)…81、『K2　非情の山』(横山厚夫)…84、『梅里雪山・十七人の友を探して』(越田和男)、『水絵の福音使者　大下藤次郎』(関塚貞亨)…90、『日高の風―孤高の山岳画家坂本直行の生涯』(平山善吉)…94、『山に学ぶ―歩いて観て考える山の自然』(岡沢修一)…97、『新日本山岳誌』…100、『目で見る日本

登山史』『日本登山史年表』…101、『Japanese Alpine News Vol. 7 2006』…104、会報『山』図書紹介一覧…106

＊

追　悼

渡辺徳逸（勝又一歩）…108、東浜義男（村木潤次郎）…110、金子泰助（編者）…111、今井喜美子（早川瑠璃子）…113、渡邉兵力（中村純一）…115、青柳安昭（井口謙司）…117、横江一郎（高澤光雄）…118、小谷隆一（塚本珪一）…120、塚本茂樹（山浦源太郎）…122、山村正光（遠藤靖彦）…124、会報『山』訃報・追悼文一覧…125　……108

＊

支部だより……126
会務報告（二〇〇五年六月～二〇〇六年五月）……158
『山岳』第百年掲載記事の訂正……A1

＊

日本山岳会百周年記念・所蔵山岳図書・絵画展　目録・解題……山岳編集委員会……A13
日本山岳会・自然保護の歩み（5）……自然保護委員会……A37
山岳図書目録（二〇〇五年）……図書委員会……A45

写　真

追　悼……112～113

表紙挿絵・本文中カット　遠藤光男

長老と共にある日々

――高野鷹蔵、武田久吉、冠松次郎――

杉本　誠

高野さん――行き届いた心配り

「どういうときに、神奈川県立一中生の私が、東京府立一中生の武田さんと初めてあったのかな」

たしか二回目のインタビューだったと思うが、高野鷹蔵さん（会員番号三）が独り言のようにもらした言葉を、不思議なことに四十四年後のいまもはっきり覚えている。お会いした目的は、一九〇五（明治三十八）年前後、日本山岳会創立と機関誌『山岳』の創刊のころの話をお聞きするためであった。武田さんというのは武田久吉さん（同五）、共に山岳会創立発起人であり、『山岳』編集に力を合わせた仲である。

ふたりとも山岳会創立の母体になった日本博物学同志会の会員だから、その関係であろうことは見当つくが、私が忘れ得ないのは、そのときの高野さんの表情のなかに旧制中学生同士のふたりが、追憶の映像として浮かんでいるのを見たからだ。

そのころ私は山岳雑誌『岳人』の編集部員だった。一九六三（昭和三十八）年一年間、同誌に連載の「日本山岳写

真史ノート」の取材で足掛け二年にわたり、関係者やゆかりの人々を訪ね歩いていた。高野、武田は誰よりも先にインタビューしなければならない重要なおふたりである。

本稿のタイトルに使ったように、当時の高野、武田両氏は「長老」としか表現しようがないのだが、冒頭の高野さんのつぶやきは「これからお聞きするのは、長老の回顧談ではない。青春を語っていただくのだ」との思いをつよくした。

杉並区阿佐ヶ谷の高野邸を初めて訪れたのは一九六二（昭和三十七）年の初冬であった。取材ノートには「駅より十分ほどの住宅地、庭のクヌギから、葉が舞い散っていた」とある。高野さんがこの地に移ったのは一九二四（大正十三）年である。それまでは横浜だったが、前年九月一日の関東大震災によって旅館、運送業を営む高野屋を失い「子供の健康のためには田舎ぐらしがいい」と阿佐ヶ谷を選んだ。家業を復興する資金は用意してあったが、かねがね「自分は商売向きではない」と考えていたのも、移転を決める理由になった。

子供たちに岳雄、秀岳、嵩と山に因む名前をつけたほどの高野さんが、大震災で失ったのは店だけではない。創刊から携わった『山岳』の諸資料、写真集『高山深谷』に使うために集めた一千枚を越す原板類も含まれる。それは「大震災を境に、その前の山や写真の記憶が薄くなった」と思うほどの失望感だった。私事になるが、以来、現在まで明治時代にさかのぼってガラス乾板による山の写真を収集し、一枚一枚、密着焼きと引き伸ばしプリントを作っているのも、高野さんのこの失望感のふかさが、私に事の重大さを伝えた結果ともいえる。

高野さんは物惜しみをすることが全くない人だと思う。また面倒見の良さは無類である。満足できるプリントを得るために輸入印画紙一グロス（一四四枚）を使い切るなどは前者の例だ。『高山深谷』八集を超豪華写真集に仕上げてゆく手間も、高野さんだからこそ掛けられた。後者については何人かが語っている。三枝守博氏（同三五）は「最初は家で現像していたが、あとは高野さんの暗室を使った」といい、田中薫氏（同四四四）の思い出にも「中学二年の私に、山岳写真の趣味を吹き込んでくださったのは高野さんだった」とある。後に田中氏は専門の地理学と写真術

の関係を詳述した『地学写真』（昭和十年八月、古今書院刊）と『地理写真手帳』（昭和三十五年十月、同）を出されたが、その遠因を辿れば高野さんに行きつく。

小島烏水著『日本山水論』（明治三十八年七月、隆文館刊）の序文に「友人武田久吉氏が植物標本を、高野鷹蔵氏が胡蝶標本及び右に関する資料を貸与せられたるを徳とす。二氏年歯少うして、きはめて篤学の士、居常、余の二氏に負ふところ多し」とあるのは、まさにその通りであろう。この序文が書かれた年の十月に創立された山岳会は、年歯少ない（高野二十一歳、武田二十二歳）ながら、打ってつけの人材を発起人七人の中に加えることができた。

高野、武田二氏の名前が再び並んで出てきたところで、話を元に戻す。横浜と東京に住み、通う中学校も違うふたりが会員となっていた日本博物学同志会は、始め日本博物学会といい、一九〇〇（明治三十三）年五月一日に東京府立第一中学校生四名（市河三喜、村松茂、村松操、小熊捍）で発足した。当初の会員は発起人を加えても七人だった。そのなかで機関誌『博物之友』を五月二十五日に出している。手書きの文集である。翌一九〇一年、二十世紀に入ると次第に会員も増え、手書きでは不便なので印刷物にすることにし、五月に第一号を発行、会名も日本博物学同志会に改めた。

横浜支部は、この年の十月に設けられ、高野さんは支部長となった。『博物之友』第一巻第五号（明治三十四年十一月十五日発行）には「本邦産しじみ蝶科中、印度地方に産する種名一班」と題して論説欄に寄稿している。以上の歩みは、高野さんが次第に山岳会創立に関わってゆく前史ともい

高野鷹蔵 氏

1963年1月12日、杉並区阿佐ヶ谷の高野氏宅にて筆者撮影。手に持っているのは筆者の持参した辻村伊助氏の写真。

えよう。

高野さんは、神奈川県立一中（現希望ヶ丘高校）から早大に進むが、もともとの動物好きから東大動物学科専科に入り直している。蝶類好きは子供のころからだった。このあたりの経過を高野さんは「蝶類の採集から山へ入り、それがもとになって山岳会をつくることになったのです」と、あっさり締めくくった。動物好きは終生つづいて、ローラーカナリアの飼育では屈指の権威者になられた。

私が阿佐ヶ谷に通っていたころ、毎月のように届いた高野さんからの手紙を再読して、この部分だけはそのまま伝えたいので次に記す。日付は一九六四（昭和三十九）年六月十六日、亡くなられる三カ月前である。

「此頃ふと考へたことは、私の家はご承知の如き有様（注・樹木が多い）で子供がよく、むさた（知らせ無し）で遊びに入りますと、つい腹を立てて『ダマッテ入ッテハイケマセンヨ』と叱ります。今迄、何処にも御断りをして山に登った事はありません。ちと、ここらで『通り抜けさして下さい』と御頼みするのもエティケットではありますまいか」。

武田さん——叱責と恩情

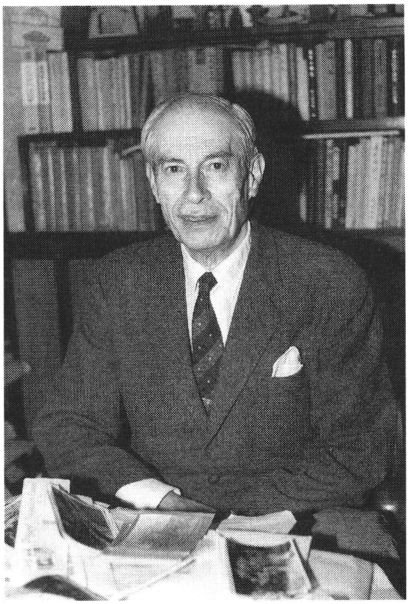
前につづいて、これも高野さんの言葉だが「忘れもしない山岳第一号の編集会議は、武田君の家で行った」を借用すれば、私の武田邸訪問は「忘れもしない第一回は昭和三十七年十二月十四日であった」となる。夜、すでに暗くなってから靖国神社の境内を横切って、千代田区富士見町のお宅の玄関に立った。その日の昼ごろ、武田先生（呼び馴れているので先生とする）から『岳人』編集部に電話があり「これを書いたのは君か、ずいぶん初歩的なことを知らないんだね」によっての訪問だから、叱られる覚悟はできていた。式台の上の障子が開いて六畳ほどの書斎に通される。書棚からあふれた本が床の上を占める中で椅子に掛けて待つ間も気が気ではない。

すっと伸びた長身、鼻下の白い髭、何よりも鋭い視線に射すくめられ恐縮している私に、先生の第一声は「君はど

こまで調べてあれを書いたんだね」だった。あれというのは、「日本山岳写真史ノート」の第一回目の内容についてだ。取材経過を黙って聞いていた先生は「そうか、間違いは三カ所にあるが、これから困ったら私のところに来なさい。いい連載になるよ」と言われ、それから、緊張のいっきに解けた私を相手に、メモを取る間も惜しい面白さで話がつづいた。

いま思い返しても、コチコチの私を一瞬のうちにリラックスさせる早業は名人芸のようであった。だが、それで安心してはいけない。八月の異動で社会部から『岳人』に移ったばかりの新米編集部員の私が調べる範囲は、どこの誰に尋ね何を読んでも、すべて先生の掌の上にある。考えてみればこれは怖いことであった。締め切りが近づくと、毎回、卒論が間に合わずにあわてふためいた学生時代がよみがえった。

しかし、新聞社に入って十年目、そろそろ取材のコツを覚え、何でもこなせると思いがちな時期に、緻密な記憶と体験、それに膨大な資料を揃えて徹底的に正確さを求める先生の叱責は、願ってもない教えであった。



武田久吉 氏

1963年3月18日、千代田区富士見町の武田氏宅にて筆者撮影。撮影をお願いするとネクタイをされ、ポケット・チーフが胸に飾られていた。

先生からの二回目の電話は、明けて一九六三（昭和三十八）年の一月八日午前十一時ごろにあった。御自身が少し興奮気味の口調で「辻村君の乾板が見つかったよ」と言われる。『スウィス日記』や『ハイランド』（共に平凡社ライブラリーに入っている）で、現在も哀惜、敬慕されている辻村伊助氏（同七四）は関東大震災によって家族、住まいもろとも土砂に埋没した。奇跡的に皮表紙の日記や「続スウィス日記」の

原稿類は掘り出されたものの原板は失われたと思われていた。高野さんが保存していたものも同時に焼失したのは前述の通りである。

絶対に無いはずの、その原板があった。驚喜して武田邸に行くと、キャビネ判のガラス乾板が二十一枚も揃っていた。上高地、明神池、鍋冠山、太郎兵衛平など撮影地の特定できる写真に加え、辻村邸のロックガーデンの二枚もある。これらの乾板は武田先生が自著用に辻村氏から借りていたものだという。

後に息女の澄江さんから父親像についてお聞きしたとき「辻村さんと父とは山と植物の話しかしていませんでした。辻村さんは、それ以外の詮索めいた話をいっさいされなかったのが、父の気に入ったのではないでしょうか」と言われたが、この言葉を裏づける文が『スウィス日記』の巻頭に載る「追憶」の中に出てくる。

「辻村君は何時頃から高山登りを始められたのか、詳しいことは一向に知らない。私自身が、元来人の身の上話にあまり興味を持たないから、尋ねもせず、又同じ様に自身の経歴とかいう奴を、売薬の効能書同然に心得てか、聞きたくもないのに喋り立てる人間とは、正反対な性質の君は、共通の興味を起さない古い話などに暇をつぶすよりも、目の前にある面白い問題について語る方が多かったから、ついぞ聞いたことはない」（平凡社ライブラリー版より）。

この文は、別の意味で次から次へ話題の移ってゆく先生の口調そのままになっていて、私にはなつかしいものだ。しかし、いざ取材記者の立場に立つと、これは困る。

『岳人』の連載で先生の登場となったとき、毎週のようにお会いしていたから「書ける」と思っていたのだが「書けない」のだ。理由は右の引用文にある通りで「自身の経歴を売薬の効能書同然に喋る人間」ではない先生だから、個人的なデータがほとんどない。困り果てた末、著書が多いのを幸いに細かく読み込み、そこから拾い出しては「本にあるこの部分についてですが」などと聞いて取材を進めた。

私は縁あって先生の著書『民俗と植物』の講談社学術文庫版に解説を書く機会があり、改めて読み返したが、その中で興味深かったのは、山に対する態度の変化が浮かび上がってきたことだ。つづめていえば明治時代は高山植物を

求めてひたすら山頂へ、大正になると山腹以下に興味が広がり、昭和に入ると山麓、ことに村民のくらしや信仰生活を調べるようになったのである。その大きな原動力は山岳会誕生以来のおつき合いの民俗学者柳田国男氏（同六七）の勧めによるものだった。その成果は『道祖神』（昭和十六年十二月、アルス刊）、『農村の年中行事』（昭和十八年十二月、龍星閣刊）、『路傍の石仏』（昭和四十六年三月、第一法規出版刊）にまとめられた。

柳田氏については山岳画家中村清太郎氏（同一五三）も「辻本満丸さん（同二〇）とは性が合ったようで、よく話をされていた。私も地名では多くの教えを受けた。どこでもというわけではないが、局部的にはすごく詳しかった」と語っておられる。これらの話から山岳会初期に集まった多彩な会員たちが、どのように交流し合ったかの一端をうかがうことができる。武田先生は、一九七二（昭和四十七）年六月七日に八十九歳で亡くなられた。発起人七人の中の最後の人であった。

冠さん――山を見、水を写す

「萬松山房」と名づけられた冠松次郎さん（同二三七）の都内北区岸町のお宅には、一九六三（昭和三十八）年春に三回訪問している。取材ノートの第一印象は「生涯を山で過ごした人らしく、頑健、体も心も」と記してある。いつも和服で、ゆったりした姿勢のまま応対された。日当たりのいい縁側で何の気取りもない表情にひかれて撮った写真が、二〇〇〇（平成十二）年十月から二カ月間、北区飛鳥山博物館で開かれた特別展「岳人・冠松次郎―その生涯とアルピニズム」のポスターや図録の表紙に使われた。最晩年の冠さんらしい、という理由のようだった。

改めて見直すと、温顔ながら縁側に置かれた左手のがっしりした大きさが、黒部の岩をつかんだ力を偲ばせる。それに前掛け。冠さんは江戸時代からつづく質商を継いだ人だからと思うせいか、着物の一部のように身についた前掛けの印象は濃い。

そのときの冠さんは八十歳。一八八三（明治十六）年生まれの武田さんと同年齢である。高野さんは八四年生まれ

冠　松次郎 氏

1963年3月27日、北区岸町の「萬松山房」にて筆者撮影。このころも山の回想録を書きつづけておられた。

船が見え、遠くに山々がつらなっていた。「本郷は坂が多いところで、坂の上にくると視界は山で一杯だった」というのが冠少年の原風景である。雪晴れの朝、雲取山を中心にした秩父の峰々がギザギザの姿で光っていて、少年の冠さんに山名の特定はできないものの、その姿に陶然とした。大江戸の面影をとどめる明治の初め、東京は山に取り巻かれていたのである。

一九〇二（明治三十五）年七月に初めて富士山に登り、翌年秋は日光に行く。奥白根、太郎、男体山だ。つづいて筑波、武州御岳、武甲、三峰と、かつて本郷台地から望んだ山々に足がのびた。日本アルプスへは一九〇九（明治四十二）年七月に初めて入った。徳本峠で辻本伊助氏に会い、これがきっかけで日本山岳会会員になった。

後に山岳写真の第一人者になり、自分でも「山旅と写真、それは私には離すことのできない楯の両面である」と、最初の写真集『日本アルプス大観』（昭和六年六月、木星社書院刊）に記すようになるのだが、大正時代に入っても「写真はきらい」だった。その理由を「写すことに気をとられて、山がよく見えないから」と説明されたが、子供の

で一歳若かった。取材に年齢を意識していたわけではないが、偶然、お年が並んだ。これこそ余計な話になるが、本稿を書いている私も七十九歳である。「いまの自分と似た年齢の人たちにインタビューしていたのか」との感慨が湧く。少し話がそれた。元に戻す。

冠さんは本郷の高台で生まれた。当時、周りに高層建築などというものはなく、消防の火の見櫓に上ると、南には品川の海や

ころから山にあこがれつづけてきた冠さんにとっては、山をよく見ることがすべてであったに相違ない。それが黒部渓谷に入り、前人未到の地となると言葉でも文章でも伝えられず、写真の有用性が浮上してきたのだ。

この経過は、冠さんに幸いした。当時の写真機は、原板の感光度が低く、大型になると三脚を必要とし、操作に手間がかかる。冠さんの「山をよく見る」時間を容赦なく奪った。冠さんからお聞きした多くの話の中で、私が至言と思うのは「写真は向こうから写ってくれる。自然が教えてくれる」だが、入山に写真機を携行する以前に、冠さんの目は、対象をよく見る修練を経てきたからこそ出てくる言葉だろう。

冠さんが一九七〇（昭和四十五）年七月二十八日に亡くなられて二十七年後、一九九七（平成九）年五月十四日に私は再び大きな出会いをする。冠さんが残したガラス乾板とフィルム約七百五十点と対面したのだ。事の次第はイタリアに端を発する。旧知の国立トリノ山岳博物館長アルド・アウディーズィオさんが来日の際に、私の収集写真を見て「トリノで展覧会をしたい」と言い出した。それはありがたい話だが、ひとつ条件がついた。展覧会終了後に館のコレクションにする、というのだ。前述のように私の収集品は長期間かけて一枚ずつためてきたもので一揃いしかない。

できるかどうか分からないなかで再び原板探しを始めた。故人になられた作者、代の替わったお宅などさまざまの事情はあったものの積極的な協力を得られて徐々に作品が集まってきた。冠さんについては、どうしても出品したい写真があった。一九二九（昭和四）年六月撮影、ガラス乾板上下二枚組の「剣の大滝を囲む大岩壁」である。

細かないきさつは省くが、孫娘のモーター・ジャーナリスト富樫ヨーコさんのご尽力によって、右の写真を含む大量の原板に加え、冠さん愛用のピッケル、朱線の入った地図、原稿類まで出てきた。冠さんのご子息郁夫さん（故人）と旧制一高旅行部同窓生の中村純二さん（本会元副会長）、『岳人』編集長永田秀樹さん（当時）と共に対面したのだが、頑丈な木箱から遺作を出すとき、皆、息を呑んだ。遺品は日本山岳会に寄贈され、イタリア展「日本アルプス・はるかなる山々の写真」出品作も十分な余裕をもって仕上がった。

これで一応の目的は達せられたのだが、ガラス乾板三百、フィルム四百五十、計約七百五十点の原板は保存状態が極めて良好で、冠さんの戦前の写真集『日本アルプス大観』、『雲表を行く』（昭和十七年十二月、墨水書房刊）に発表された作品はほとんどある。『岳人』では、全原板を借用して調査を進め、一九九七年八月号から十二月号まで五回の連載を行った。タイトルにあるように「今、よみがえる冠松次郎の世界」の展開だ。

こうして五月から半年余にわたって冠作品を見つづけられたのは、私にとって願ってもない好機となった。気にかかっているふたつの懸案に、何らかの手がかりが得られるのではないかと思った。ひとつは冠さんの水の表現、もうひとつは通過地点である里への接し方である。原板を一枚ずつていねいに見ながら、右の二点に関係がありそうだと思うと、意識的にチェックしていった。その結果、それぞれに何枚かの引き伸ばし印画を作ることができた。最良の状態で、ある程度の大きさに伸ばした印画は、印刷物などでは得られない情報量、作者の撮影意図を秘めているものだ。

もちろん、作者からじかに聞けないもどかしさはあるものの、水については、黒部渓谷以外の場所でも表現に苦心した作品が何枚か見つかった。里についても同様である。里は、冠さんが「山の人」と呼んだ登山の先達が住むところだ。三脚を立てて、その佇まいをガラス乾板にとどめても当然と思われる。

武田さんが柳田さんの勧めで民俗に視点を向けていった経緯は前述したが、冠さんにも、登山を山も人も含めた全体としてとらえようとした姿勢のあったことを、残された写真から感じ取ることができた。

ここで再び高野さんの言葉を思い起こせば、（山へ入るのに）「ちと、ここらで『通り抜けさして下さい』と御頼みするのもエティケットではありますまいか」にも通じるようだ。

（編者注：いまや本会創立当時に活躍した古い会員を直接知る人は極めて少ない。本稿は、創立期の会員に取材体験を持つ筆者に、昔の取材ノートをもとにした印象記を編集委員会から依頼して綴ってもらったものである。取材内容は一九八五年講談社刊『山の写真と写真家たち』に詳しい）

霧ヶ峰・山の会

高橋保夫

はじめに

「霧ヶ峰・山の会」と言いましても、現在では余程の山の愛好者か、とりわけ霧ヶ峰に関心を抱く人々を除いて、通り一遍にここを訪れる人々には無縁なものでありましょう。

しかし、この山の会は一九三五年に霧ヶ峰において開かれた集いで「前にも後にも、これほどの豪華な山の集いはみられまい」（『炉辺山話』）と、主催者梓書房の岡茂雄が回想するように、きわめて山の文化的色彩の濃い、山を中核とした人々の集いであり、近代の霧ヶ峰の歴史に大きな足跡を残すできごとでありました。

このたび「霧ヶ峰・山の会」が開催されてから七〇年を経て、昨年二〇〇五年秋に復活が叶ったのを機に、その知られざる「山の会」の概要とあわせて、そのゆかりの地霧ヶ峰のおおよそと、その会に直接たずさわった人々を中心に、またそれにつらなったと思われる人々も含めてしるすものであります。

霧ヶ峰小史

霧ヶ峰の過去をたどれば、縄文時代の以前から、黒曜石にはじまり、その後の諏訪大社の御狩の地（御射山）としてなど、人々と深く結ばれながら、それぞれの時代にその存在を示してきたと言えます。

一方では、現在の霧ヶ峰の特異な大きな草の広がりが示す、先人たちの「山と暮らしの文化」とも言える「草を刈る山」という歴史をたどっています。つまり、牛馬の飼料を産する山ということであります。

これは、おそらく人口の増加などに伴い、江戸期より必然的に、先人たちは山に草を求めたものと思われます。そして、現在のこの山の姿である、東西一〇キロメートル、南北一六キロメートルと言われる広大な草の広がりが、今に伝えられたものであります。しかし、この長い草刈りの歴史も、やがて一九六〇年代に至ると、牛馬の減少などに伴い終わりを告げています。

一方、この限りなく広がる草原を利用したスキー場の歴史も、一九三〇年代初頭からはじまっています。現在の「池のくるみ」にその端を発したスキーは、昭和に生きる人々は、農業に活用したものから観光の山へと、その利用の仕方を変化させたように見られます。

つまり、徐々にではありましたが、昭和に生きる人々は、農業に活用したものから観光の山へと、その利用の仕方を変化させたように見られます。

その最たるものが、一九六六年に着工された山岳観光道路の建設と思われます。霧ヶ峰を中心に蓼科と美ヶ原を結ぶ道路は通称「ビーナスライン」と呼ばれ、わが国の山岳観光道路のさきがけの一つとなったのですが、善かれ悪しかれ、さまざまな面で、霧ヶ峰に影響をもたらし、現在に至っています。

このように、霧ヶ峰の辿った道程は、いずれの時代も色濃く人々の影が見られ、そしてそれぞれの時代に先人達は、この山と共存しながら、また依存しながら生きたものと考えますと、まことに奥行きの深い山として尽きぬ興味を抱いたとしても、不思議なことではありません。

長尾宏也とそのヒュッテ——霧ヶ峰の四年

今から一〇〇年前、一九〇六年の日本山岳会機関誌『山岳』創刊号に、当時小学校の教師であった久保田柿村舎、のちに歌人として名を残す島木赤彦は、『女子霧ヶ峰登山記』を寄せています。島木はその登山記に「面積の広大なるに比して高さが二〇〇〇米にも満たないので、根からだらしのない不恰好な、どこに主峰があるのかさえ分らぬ草山で、言わば火山中の老朽者という位置にあるが、登ってみてどこまでも奥行の知れぬ広さが、他の詰屈な少壮火山と異なった良い感じを与える」と霧ヶ峰のおおよそを記し、さらに「去年は四回、今年は五回登っているが、未だ霧ヶ峰というまとまった感じが頭に這入らぬ、つまり不得要領の山であるから、何回登っても面白いのだ」と、その理解しがたい奥行きの深さに惹かれる様子を綴っています。この島木の霧ヶ峰に抱く印象は、現代のわれわれにも通ずるものがあると思われますが、昭和初頭、この登山記に惹かれて霧ヶ峰に強い関心を抱くようになったと言われる人物が現れました。もちろん、すべてがこの『登山記』によるものとも思えませんが、その岡山県人は、一九三二年、無人であった霧ヶ峰強清水（こわしみず）に山小屋を開くことになります。この霧ヶ峰に憧れを抱き、永住を夢見た人が『山の隣人』、『山小屋の窗（まど）』、そして『山郷風物誌』などを残した文人、長尾宏也であります。

のちに、「善かれ悪しかれ」という文言ではじまる、友人・岡茂雄による長尾の紹介は、「霧ヶ峰の観光開発の草分けは『ヒュッテ霧ヶ峰』創建の主、長尾宏也さんである」としています。（『炉辺山話』）

さて、霧ヶ峰の開発者と岡が呼ぶ長尾の小屋「ヒュッテ霧ヶ峰」は、一九三二年十二月二十日竣工した旨、記録されていますが、その規模は大きく、収容人員二五〇人と言われるものでありました。それほどに大きな施設をどのように経営して行く心積もりであったのか、現代のわれわれには知る由もありませんが、長尾は、おそらくこの霧ヶ峰の自然と共存しながら、そしてここを訪ねて来られる人々との新たな邂逅を愉しみとしていたにちがいないと思われます。

長尾は、「ヒュッテ霧ヶ峰」が竣工するほぼ半年前、詩人であり野鳥の研究者・中西悟堂とここを訪ねています。

そして、その中西はその時の想いを長詩『ヒュッテ霧ヶ峰』（『山の詩集』収載）にまとめ、後に長尾に贈っています。それは一九三三年八月に書かれたものでありました。中西はヒュッテと長尾に、願いとも祈りとも言えるような、数多のことをうたっています。その詩の一部には

おだまきやぎぼしの花を踏み分けながら
ヒュッテ建設の夢を語り合ったことを。

あるいは

君の言葉の中には
事業が人間的な温かさをもって為(な)される善意と
夢想を目のあたりに見る実際的な喜びとがあった。

また、

主（あるじ）の夢想はあらゆる困難をしのいで
やがて精神の花を咲かすだろう。
それは長い間に知らず識らずほどけて
スキーヤー達の心に滲みとおり
ここへ巡礼する人々のあいだに瀰漫(びまん)するだろう。

と。中西はこの長詩の中に訪ね来る人々に、長尾の考えることや小屋の影響を期待し、敷衍（ふえん）することを希望したのかも知れません。

同時に、この長尾を取り巻く人々には、中西悟堂や岡茂雄をはじめ多岐にわたるものがあり、あの頃の地元の考古学者・藤森栄一は長尾より幾分若く、その著『古道』にあの頃のヒュッテの様子とその周囲についていくつか書き残しています。藤森は、その人の交わりを「あの頃の日本の知性を代表する先生方」という表現で詳細に武田久吉、小

林秀雄、深田久弥、そして中西悟堂、中川一政などの名を連ね、自ら長尾に憧れた心情とともに、小屋への来訪を伝えています。そして、その中のひとりと思われる田部重治は、一九三三年二月のこととして、「ヒュッテ霧ヶ峰のある長尾君から、正月になったら遊びに来ないかと誘われていた。正月にはとうとう行かれなかったので二月の建国祭には出かけようという気になった」と、長尾との親しい間柄をことさらに強調しています。これは田部の記した『冬の霧ヶ峰』と題した短いものですが、長尾のもつ交友の多彩な広がりを如実に物語るものと思えます。しかし、こうした長尾のもつ豊かな交わりは、その著作活動や数多の岳人との交流から広がっていったものにちがいないのですが、その源を探れば、やはり長尾のもつ豊かな内面性が根底にあることは言うまでもないことであります。

さらに、このような人間性から生じる、山小屋はどんなものであったか推察すれば、自ずとそれは藤森の回想するような姿が現れ、そして山の文学や芸術を語りうる小屋の主、長尾をして、あの頃には前例を見ない新しい山小屋のスタイルが、徐々に芽生えたにちがいありません。深田久弥は、後に長尾の小屋で過ごした時のことを「食堂のわきの小さな茶房で、熱い紅茶をすすりながら、オーベルニュのレコードを聴いたり、山の話に夢中になったりして、更かした夜のことを忘れることは出来ない」と記し、「ポツリ、ポツリとボクトツな口調で、その無尽蔵な山の経験をたぐり出す様に話す長尾氏の風貌が今も目の前に浮かんでくる」(『山さまざま』)と、その小屋の想い出を綴っています。このようなことからも、全く過去に前例のなかった小屋を物語っており、これらは長尾のもつ純粋に新しいセンスが作り上げたものであろうと思われます。

一方では、しかし、長尾の霧ヶ峰での暮らしは一見、恵まれたものに思われますが、その実体は、どのようなものだったのでしょうか。これは、あの頃の巨費を投じての事業である上、明確にその未来を予測するに困難な雲上の地での事業であったことから考えても、関心を強く引くことであります。しかし、長尾のヒュッテの歴史をたどれば、その寿命はわずか四年で終わっています。あまりに短いものであり、公平にみても理解しがたいことであります。その上に、中西の長詩にある、あの霧ヶ峰への想いや夢想を考え合わせれば、さらに理解が難しくなります。

こうした経緯からして、おそらく長尾の霧ヶ峰における四年は、自らの理想と現実の間に、心が揺れ動く日々ではなかったかと推察されるのです。その現実とは、来客の極めて少なくなる無雪期のことであったのかも知れないし、また地元の一部の人々とのあつれきにあったのかも知れません。そのことについて、前記の岡茂雄は「夏期は他郷のハイカーの訪れは少ないこと」、あるいは「地元と反（そ）りが合わず、地元の妨害に悩まされることも多いらしい」（『炉辺山話』）と巧みな表現でそれを裏付けるように記しています。この地元と反りが合わない点について、長尾のもっている、あの都会的で豊かな独創性を、あの頃の地元の人々は受け入れられなかったと理解することもできます。いずれにしましても、山小屋建設後いくつかの予想されなかった難題が広がり、長尾をこの時期悩ませた様子がうかがえます。

長尾は、前記のように山小屋に新しい邂逅を夢想し、理想の一つと考えていたならば、この地元の人々との不和や妨害は、相当重く心にひびいていたものと推察されます。

一方では、開業以来ある面では、長尾の周囲は過去にない、さまざまな変化やヒュッテの竣工など、理想としたものの実現も叶い、喜びに満ちた日々も多く経験したものと思われます。しかし、竣工から四年経った一九三六年の暮に誰も予想しなかった事態が生じました。それは、自らはもちろんのこと、霧ヶ峰にも大きな転機をあたえることでありました。これについて、その前年の「霧ヶ峰・山の会」に参会した尾崎喜八が『灰のクリスマス』と題して回想しています。それは、「霧ヶ峰とそのヒュッテとを愛した人々に」と副題が付けられ、「だが気は重い。霧ヶ峰のヒュッテが焼け落ちたのだ」と、その災禍の現実とともに、それは「ヒュッテを知るものにとり、絶望的な落胆を残した」と綴られていました。同じく前年に尾崎と参会した中西悟堂は、翌年七月二十三日と記し、霧ヶ峰を訪ね、長尾とかつて辿ったと思われる東俣（ひがしまた）観音沢に野鳥を追っています。そして、その折に記したと思われるものに「それにしても、長尾宏也君経営のヒュッテの焼け跡を見るのがつらかった」（『定本・野鳥記』）、また、長尾自らも、愛犬「アカ」のこととともに、短く、この災禍について書き残しています（『山小屋の窗』）。

この事故が生じた後、つまり一九三六年の十二月二十三日、長尾の霧ヶ峰での暮らしは終わっています。そして、再度この地を訪れることはなかったと言われています。

長尾の、かつて中西と語り合ったヒュッテ創建の夢は、間もなく成就されますが、その後わずかに四年というここでの暮しは、どのように考えても、あまりに短いものでありました。あの四年前の霧ヶ峰への憧れを考えれば、善かれ悪しかれ、霧ヶ峰の観光開発の草分けと友人が呼んだ長尾にして、霧ヶ峰に思い残すことは、もはや尽きてしまっていたのかも知れません。

しかし、この長尾の短い霧ヶ峰の暮らしであったにもかかわらず、これらの霧ヶ峰にあたえた影響、あるいは後に残した足跡はある面ではきわめて大きなものがあり、時の経過とともにその評価はさらに高まるのではないかと思われます。それは、長尾の内面から発したと思われる山小屋の姿、あるいは長尾を取り巻く人々からうかがい知る高い精神性など、われわれの時代に豊かに残され、ある時は人々の心の糧となり、そして未来に豊かに生きつづけると思われます。

空前絶後の山の文化のイベント――「霧ヶ峰・山の会」のあらまし

今から七〇年前に開催された「霧ヶ峰・山の会」は、現在に至っては、一部の人々を除いて、知る人がいなくなりました。それは、その「集い」が開かれてから、数多の歳月の経過によって、あるいはすでに人々の心から、消え去られようとしているからなのかも知れません。

しかし、この会は、霧ヶ峰の歴史において重要なできごとであって、一九三五年八月十七日から二十二日まで五泊六日を費やして、霧ヶ峰の長尾の小屋で開催された集いでありました。それは、山のさまざまな姿を、さまざまな人々が楽しむ試みであり、集いであったと思われます。

一九三五年は、長尾宏也がこの地にヒュッテを開業してから、ほぼ二年有余の年月を経た頃にあたります。山小屋

の暮らしにも慣れはじめ、精神的にゆとりのある日々を送っていたことが推察されますが、一方では、地元の上諏訪町の一部には理解されない点もあったようで、それによる地元の人々との不和など、思わぬところから生じた新たな問題に直面した頃とも重なります。

このような折、長尾の小屋を訪れた人々は、話の端々から、彼の心の悩みの数々を察したらしい、と言われます。そして、それは長尾の友人たちの聞きおよぶところとなり、その一人、梓書房の岡茂雄は、それを心配し、なんとか友人長尾の内面に多少でも手を差しのべる方法はないかと思案した、といいます（『炉辺山話』）。岡は、その頃たまたま彼の出版社を訪ねてきた、かねてからの友人・深田久弥と、あの頃の雑誌『山』の編集者・石原巌との三人で相談し、考え出された結果が「霧ヶ峰・山の会」の誕生であった、とその経緯とともに書き残しています（『炉辺山話』）。こうしたことがその起源とすれば、それは、きわめて私的な、規模の小さなものからのはじまりであった、と考えられます。

一方では、しかし、その後の雑誌『山』に掲載された「山の会」についての「広告案内」を見る限り、すでに過去に例を見ない、特別な会として、その存在を読者に訴え、強く印象づけています。掲載されたその会の趣旨を要約すると、「参加者ともども、霧ヶ峰に起居を倶（とも）にし諸先生方の話に聞き入りながら、野外に花木や野鳥の影を追い、その団欒を倶に楽しみましょう」というものですが、その極めて斬新に思える会の「案内」としては充分なものであり、更に、講師の諸先生方の名を見るに至り、読者はこの会の特異性を認識させられたものと思われます。

梓書房発行の『山』を主催者とし、「霧ヶ峰・山の會」と称され、霧ヶ峰強清水の「ヒュッテ霧ヶ峰」において、一九三五年八月十七日から二十二日までの日程でおこなわれた催しに次のような人々が名をつらねていました。

まず、予告されたその講師の布陣は次のような人々であります。以下、それぞれの姓名のあとに当時の年齢を書き添えます。

木暮理太郎（一八七三〜一九四四）　六十二歳

日本近代登山初期を代表する登山家。田部重治と槍ヶ岳から剱岳を縦走する。秩父山系を好み、日本の山岳美をそこに見出す。著『山の想い出』。一九三五年、日本山岳会会長に就任。

「山の会」の演題は「登山談義」　八月二十日午後講義。

柳田国男（一八七五～一九六二）　六十歳

わが国の民俗学の創始者。渋沢敬三、岡正雄（岡茂雄の弟）など、その交わりは広い。著『遠野物語』等。

「山の会」の演題は「狩と山の神」　八月十八日午後講義。

武田久吉（一八八三～一九七二）　五十二歳

植物学者。日本山岳会創始者の一人。あの頃の駐日英公使アーネスト・サトウの次男。一九四八年、日本山岳会会長に就任。尾瀬周辺をたびたび歩き、『尾瀬と鬼怒沼』等を著す。

「山の会」の演題は「山の木と草」　八月二十一日午後講義。

藤原咲平（一八八四～一九五〇）　五十一歳

中央気象台長。お天気博士として知られ、霧ヶ峰へのグライダーの導入など、功績は大きい。霧ヶ峰の登山口、角間新田に生まれ、作家・新田次郎は甥にあたる。霧ヶ峰強清水に胸像が残る。

「山の会」の演題は「山と気象」　八月十九日午後講義。

辻村太郎（一八九〇～一九八三）　四十五歳

地理学者。『スウィス日記』を遺した辻村伊助は従兄。山崎直方に学ぶ。

出席予定であったが、事情で欠席となる。

「山の会」は以上の五名が講師として予告に名を連ねていました。その一方で、聴講者には次のような人々がいました。そのうち尾崎喜八と中西悟堂が請われて講師の役をつとめました。

石黒忠篤　五十三歳――農林次官。後に大臣となる。この「山の会」では、開放的な人柄に参会者の中心的存在で

あった。後に岡茂雄をして「大物の参加」と言わしめた人物（『炉辺山話』）

尾崎喜八　四十三歳――白樺派詩人。『山の絵本』、『雲と草原』などの著書。戦後、信州富士見に滞在中、一九四九年、日本山岳会信濃支部長に就任。霧ヶ峰と縁が深い。

「山の会」で「山と芸術」と題して八月二十一日午後に講演。

中西悟堂　四十歳――鳥類研究で知られる詩人。著『山岳詩集』、『野鳥記』等。

「山の会」で「鳥の話」と題して八月二十日夜に講演。

松方三郎　三十六歳――新聞連合社（現在の共同通信社）記者。欧州アルプスで活躍した登山家。一九四六年と一九六二年の二度にわたり日本山岳会会長に就任。著『アルプス記』、『アルプスと人』等。

村井（黒田）米子　三十四歳――女性登山家のさきがけ。

小林秀雄　三十三歳――当時気鋭の文芸評論家。

深田久弥　三十三歳――作家。著『日本百名山』等。

飯塚浩二　二十九歳――地理学者。著『大地と人類の進化』等。

長尾宏也　三十一歳――会場となった「ヒュッテ霧ヶ峰」の主。著『山の隣人』

以上に加えて、この会を主催した梓書房の岡茂雄と、会を取り仕切った石原巌、さらに他の参会者たちがいました。その中には大岡昇平、中村光夫といった、後に文壇で活躍する人たちもいました。

やがて秋風の立つと思われる頃、標高一七〇〇メートル前後の高原で、霧ヶ峰の逍遥に野外教室、小屋の涼気に浸る先生方の講義、そして夜の雑談会といった具合に、来る日も来る日も、参会者たちのすべてが、愉快で心身ともに明るく健全な時を過ごしたものと容易に想像されます。

この会に参加した詩人・中西悟堂は、『山の會素描』と題して、雑誌『山』（一九三五年第九号）に詳細を報告しています。ここでその素描を追ってみますと、八月二十二日のこととして、次のように記されています。

「おい、武田。白い虹が立ったぞ」「そうかい」という声に目が覚めて二階から首を出すと、木暮さんがヒュッテの浴衣で、くわえ楊枝で外に立っている。「これが立つと僕の国では、あらしが来るって言う」と木暮さんが言う。「そうかね。だけど今日は天気になるよ」と武田さんが言う。

この話を後に知った岡は、『炉辺山話』で「正に若者同士の遣り取りである」と書いています。中西の『素描』で八月二十一日の午前の講義について、「けさは小林秀雄氏が新たに加わっている」と記し、「話の中に人間性の美と愛の蒐集者、布術者としての君の面目が、きょうは穏やかに浮彫され……」と尾崎の講義について述べ、次の武田の話については、

「尾崎君が実のある話をしちまったんで、どうも困るね」と武田さんが言うあとから、石黒さんが「今度は花だ」と一発飛ばす。

と書いています。かと思うと、八月十九日の鎌ヶ池へのハイキングの様子を、「今日は柳田先生ご夫妻を除いて、一行十九名」と記します。ここで石原君が「悪沢が見える」「塩見も見える」と言っています。おそらく、当時まだ草原であった現在の留塚付近からの眺望をさすものと思われます。

「あの百合（ゆり）は？」と誰かが武田さんに聞く。「小鬼百合（こおにゆり）」「あの葉の枯れたのは？」「梅鉢草（うめばちそう）だよ」「これは？」「山鋸草（やまのこぎりそう）」「あれは？」とまた誰かが聞く。「糊空木（のりうつぎ）」武田さんの答は澱（よど）みがない。

一行は、東俣（ひがしまた）の沢渡（さわたり）を過ぎ、旧御射山（もとみさやま）の近くと思われるところに至ります。

今度は「富士の方でセットウと言ってる鳥は頬白（ほおじろ）ですか、頬赤（ほおあか）ですか？」と武田さんが質（たず）ねられる。「頬白です」「あいつを日本では、一筆啓上というが、西洋なら何といいます」質問に「さあー」とつまったが、「ハッピイ、ニューイヤーとでも申しますか」と言うとみんなが爆笑した。「もっとも頬

白は日本特有の亜種ですがとつけ足して置く」

このユーモアに溢れる中西に代表される和気あいあいの野外講習会は、武田と中西を中心に、毎日つづけられたものと察せられます。そして日暮れとともに次は雑談会であります。八月二十一日の夜は議論に終始した、と『素描』に記されました。

小林秀雄氏から「科学者は無機物の世界をも、支配しようとしますか」という難問がでて、武田博士がこれに答え、それから吾々は如何に山に登るかという話になり、石原巌君、小林秀雄氏、尾崎君のあいだに、ひとしきり論争。木暮の翁は、みんなの伯父の様に、剃るとばりばり鳴るという、乃木将軍のような白髭を、ランプのあかりに光らせながら、黙ってただ聴き入っている。……来る日も来る日も咽喉が乾くほど語り合っても、一向種が尽きないとは……」

こうして「山の会」の日々をたどってみますと、あの頃の多士済々の「集い」は現代のわれわれが考えるより、はるかに難解なものではなく、むしろ、参会者同士がたがいに思いやる精神（こころ）に支配された会であり、そして日々を愉快に過ごしたいと皆が願ったにちがいない、と思われます。

さて、「山の会」を発案して実行に移し、成功に導いた主催者・岡は、後に「前にも後にも、これほど豪華な山の集いはちょっと見られまい」（『炉辺山話』）と回想しますが、この会を成功させるため深田や石原を始め、それぞれの手を借りながら、計画を実行に移していました。しかし、意外なことに会が始まって三日目にあたる八月二十日に、岡はようやく会場に姿を現しました。岡は中央線の旅の途中、八ヶ岳の硫黄岳の「黄花石楠花（きばなしゃくなげ）」をにわかに思い出して途中下車してしまった、とその理由を説明しています（『炉辺山話』）

その岡茂雄は、信州松本の出身であり、ご承知のとおり、出版界に活きた人間であります。そして山を愛し、出版を通して多岐にわたる山の姿や山登りを広く普及させ、山のもつ、いわゆる「深み」を世に問いかけたひとりとして、この面での存在が大きなものであったと思われます。一九三〇年自らの経営する岡書院と梓書房を併合し、広く山岳

書を手がけることになり、日本山岳会が編集する『山日記』の刊行、そして月刊誌『山』を誕生させています。この雑誌はわずか二年余（一九三四年一月～一九三六年七月）の短命に終わりますが、その内容は過去にない斬新なものであったと言われています。

もちろん、岡茂雄の考える山登り、あるいは山に対する本質は、自らの著『本屋風情』にあるように、「独（ひと）り人跡の絶えた山道を辿り……」と記されているとおり、静かに山と対面することを志向するものでありましょう。

一方では、この昭和初期のわが国の登山界が、岡の考えるようなものとは異なり、その志向が「岩と雪」に傾く時代であったと言われます。しかし、こうした世の流れにさからうように、岡は一九三四年、『山』第十号に、自分の志向する山の姿を「高原特輯号」として人々に問いかけています。しかも明治後期以降の「高原」の意味合いを考えれば、この岡の試みは単なる特集号ではなく、更に深い意味があったものと思われてなりません。

その『山』の「特輯号」には、木暮理太郎の『高原』、尾崎喜八の『たてしなの歌』、柳田国男の『秋風の吹く頃に』、武田久吉の『霧ヶ峰』、中西悟堂の『高原譜』、そして長尾宏也の『高原の脈搏』などが含まれていて、あたかも翌年の「霧ヶ峰・山の会」を思わせるものになっていました。

年代と話が幾分交錯しましたが、こうした岡茂雄の出版活動とともに考え出されたのが「霧ヶ峰・山の会」であって、それは「山と静かに向き合う」岡の信条と重なり、山の持つ多様性を示すことに結びついたと思われます。

ともあれ、霧ヶ峰での「山の会」の数日間は、参会者の心をたがいに、さまざまに、強く結び付ける結果を招いたと言えそうです。

この会に家族で参加した柳田家の三女・堀三千は『霧ヶ峰の思い出』（『父との散歩』所収）という題で回想を書き残しています。

自然の中に浸ると、人間は純真な子供の様になる。誰も彼も楽しそうで善意にあふれていた。

三日目の朝、私達一行は一足先に霧ヶ峰を去ることになった。ヒュッテの前には、ほとんど全員が揃って送って

下さった。

去りがたい思いを込めて、私たちは皆に別れを告げた。……

ヒュッテの主人長尾さん御夫妻、黒田米子さんとお嬢さん、石原巌さんと妹さん、石黒忠篤さんともと子さん、中西さん、武田さん、飯塚浩二さん、尾崎喜八さんなど。皆が手を振って、なつかしい顔をこちらに向けていた。角を曲った時、特別ねんごろな尾崎喜八さんの「さようなら！」という声が、私たちの耳にひびいた。

この会でつちかわれた人々との固い絆を懐かしむように思い描く姿が、われわれの心にひびいてきます。それは、長尾が後に回想して「人間をつちかうつどいであったといえる」（『山小屋の窗』）と記したとおり、その家族も含めた思いがけない縁を発展させる機会をつくり出すなど、すべての参会者が、二度と再生できないひとときの喜びを分かち合う「集い」となり、一方では、霧ヶ峰に蒔かれたこの営みの種を、その精神とともに次の世代に引き継ぐにあたいするものと思われてなりません。

高原に発するヒュッテ——尾崎喜八との巡り合い

「善かれ悪しかれ、霧ヶ峰の観光開発の草分け」と岡茂雄から呼ばれた「ヒュッテ霧ヶ峰」創建の主は、他郷の人でありましたから、この山は、この地に縁もゆかりもなかった人によって開発された、ということになります。

一九三二年十二月に長尾が霧ヶ峰に棲みついて以後に始まった開発の歴史でありますが、四年後に小屋が焼失してからというもの、強清水にはグライダー関係の施設などがつぎつぎと集まり、戦後のスキーの隆盛に伴い、さらに施設の増加に拍車がかかりました。しかし、それらは、長尾流のヒュッテとは全く無縁なものと言われています。

そのような折、過去に観光開発とは縁のなかった、草原の一隅にすぎない沢渡に、かつての長尾の小屋に一脈相通じるような本格的な山小屋が、一九五二年十二月に竣工しました。送り仮名を添えて「沢渡り」とも表記されるその

場所は、広い火山台地のほぼ中央にあって、後に尾崎喜八が『霧ヶ峰紀行』で記すように、八島ヶ原（やしまがはら）湿原にも近ければ、車山乗越（くるまやまのっこし）にも程近い地に位置します。

それらの霧ヶ峰特有の草の広がりや穏やかな起伏を繰り返すたたずまいは、この沢渡りを中央にして限りない広がりを見せます。そして、一筋の流れとともに、他に得がたい場所であるこの地に、山小屋を開いたのが、戦後に入笠山に小屋を営んでいた高橋達郎でありました。

高橋は、戦後間もなく信州富士見に移り住むのですが、もとよりその生まれは信州安曇でありました。高橋は、あたかも時を同じくして東京から富士見に移った詩人・尾崎喜八と、その富士見で巡り合っています。あの頃、尾崎は地元の人々が「渡辺別荘」と呼んでいた「分水荘」に寄寓していました。

それから間もなくの一九四六年、高橋が尾崎の著書『山の絵本』をたずさえて、「分水荘」を訪ねました。それ以後、二人は家族を交えた付き合いを始めて、親交を深めました。あの頃に尾崎から受けた薫陶が、高橋にとって限りなく大きなものであったらしく、入笠山に続いて霧ヶ峰に山小屋を創建した時、その小屋の命名は尾崎によるものでした（『霧ヶ峰紀行』）。つまりヒュッテジャヴェルは、尾崎の訳した『一登山家の想い出』の著者エミール・ジャヴェル（一八四七～一八八三）の名からとられたのでした。

もう一方では、高橋の霧ヶ峰への憧れが、小屋の創建に深くかかわっていたものと思われます。それは入笠小屋経営時に覚え始めたスキーに起因したものでありました（『ヒュッテジャヴェルのマイスター』）。

他方、尾崎は、新しい山小屋の構想に、かつて焼失した長尾の小屋を重ね合わせて、長尾との交わりへの想い出とともに、自分の未来の夢を託す思いを抱いていたと考えられます。わが国の登山史に詳しい布川欣一が「尾崎は霧ヶ峰をハイマートの如く愛し、珠玉の詩文を豊かに紡いだ。それは自然ばかりでなく、戦前にはヒュッテ霧ヶ峰の長尾宏也、戦後にはヒュッテジャヴェルの高橋達郎に負うところが大きかったのではなかろうか」（『山旅の宿』）と、それをうかがわせる記述を残しています。

さて、一九五二年暮に竣工し、明けて正月から営業をはじめたヒュッテ・ジャヴェルは、従来の山小屋の姿にとらわれることなく、自由な発想で営業をつづけたようであります。山小屋というと「～小屋・～山荘」と名づけられるのが主流の時代に、片仮名の名をあたえられて、小屋の造作に至るまで従来のものとは一味異なる形態を取り入れるなど、いくつかの独創的な試みをおこなったようで、たんに山の一夜を過ごすための宿泊施設というだけでなく、広く世に「高原の山小屋」の存在と姿勢を問いかけたことからも、その発想をうかがい知ることができると思われます。高橋自身が絵を描き、文筆をたしなみ、訪れる人々とともに語らい、ともに草原を逍遥し、ともに考えたこと、そして自分の考える「良い山小屋」のあり方を模索しつづけたことども、結びついていたにちがいありません。

かつての、あの「山の会」に参加した深田久弥は『日本百名山』で、霧ヶ峰の特徴をとらえて「遊ぶ山」としています。この山を訪ねて来る人々の多くは「山巓を極める」より、そのおおらかなたたずまいに「快さ」を求めていることを思えば、高橋の実践したことと「遊ぶ山」との間には相通じるものがある、と考えられます。

このような山小屋であるヒュッテジャヴェルは、昭和初期にこの高原に発した長尾の小屋にならった要素を見逃せませんが、高橋自身の独創性によるものが多いことも確かです。長尾に発した尾崎とのかかわり、そして岡茂雄の高原賛美など、さまざまなことがらから引き出されたものも多く、一口で言い表しきれない「高原の山小屋」の個性的な姿が浮かんできます。それは、高橋のヒュッテジャヴェルから発した人々による、五指に余る数の山小屋が全国に散って存在しているという事実からも、霧ヶ峰に発した独創性を感じることができるように思われます。

布川欣一は『山旅の宿』で、現在のヒュッテの様子を次のように語っています。

小屋の前に立ち、どっしりとした、石積みの上の白い壁を見上げると、ベランダに並ぶプランターからナスターチュームの花が溢れ出ている。石の階段を上り、奥のダイニングルームに入る。白い壁、木の柱、石の床、安山岩の暖炉、瀟洒で落ち着いた雰囲気が好ましい。……入笠小屋以来理想の小屋を追求する、この主は世界的ピアニスト、W・ケンプとの邂逅をはじめ、エピソードが豊富だ。ベートーヴェンととんかつ、濃い緑茶好き。直接聞いた

話も多いが、尾崎のエッセイから得たものも少なくない。

この布川の描いたヒュッテの様子は、どうやら、高橋の後を受けた筆者の時代になってからのもののようです。やがてヒュッテジャヴェルの創業から五十五年の歳月が経ちます。尾崎との邂逅によって薫染されたあの頃から、善き人々との巡り合いがその歴史を作り出し、現在の山小屋の姿が残されました。

そして、次の時代に残し伝えるべきものも数多あるはずで、それは限りない草の広がりであり、古来から伝わる催事かも知れず、あるいは霧ヶ峰に蒔かれた、あの「山の会」のような文化的で高邁な精神の継承であり、尾崎と長尾から発する山小屋の姿であるのかも知れません。

復活「霧ヶ峰・山の会」のこと——山の文化の継承とその報告

昨年二〇〇五年は、「霧ヶ峰・山の会」が開かれてから七十年目にあたりました。あの会の主催者だった岡茂雄を初め、参会者はすべて鬼籍に入り、会のことを知る人も語る人も少なくなりました。これは、あの催しに多少なりとも関心を抱く者にとって、残念なことであります。あるいは、この山の過去を振り返るにつけ、忘れ去られるのがまことに惜しく思うのです。それは、霧ヶ峰に蒔かれた文化的営みの種とその精神が、継承されるべき価値を持つものであって、次の時代に渡して行きたい、と願う気持ちがつのったと言えば良いのかも知れません。

現代の山登りは多様なひろがりが見られます。その現代の山の風潮は、たんに山巓に達することの繰り返しであるようにも思われますが、それはそれで愉快なことであり逞しく頼もしいことにさえ思われます。しかし、もう一方では、かつて岡茂雄が述べたような、際限のない奥行きの深さを感じ、多様な山の姿と静かに向き合うことによって聞こえてくる自然のささやきを聞くなど、山の味わい方にもさまざまあります。

このように多様な考え方と楽しみ方を通じて学ぼうという気持ちから、「山を愛する人々が、それぞれの想いと知識を持ち寄り、交流を通して豊かに膨らませる、濃密で愉快な会を目指す」ことにしました。

しかし、空前絶後と言われた一九三五年の「山の会」の高邁なレベルにただちに届かないまでも、歴史、文学、科学、芸術などを集めて交流と発信をしようとした、その心を受け継いで、時代にふさわしい内容を与えて、次の時代に渡したい、と願っています。そして、この会の復活にあたっては、主催者であった岡茂雄と会場提供者であった長尾宏也両氏の御遺族からも賛同かつ参会をいただきました。尾崎喜八ゆかりの小屋としてヒュッテジャヴェルがこの催しを引き受けることになりました。

復活第一回の要点をかいつまんでご報告することにいたします。

名称：復活第一回「霧ヶ峰・山の会」

日程：二〇〇五年十月十六日（日）～十九日（水）

主催：「霧ヶ峰・山の会」実行委員会

委員：布川欣一（登山史研究者・埼玉県）、金子弘吉（山旅・山書愛好家・諏訪市）、高橋保夫（ヒュッテジャヴェル経営者・諏訪市）

後援：諏訪市教育委員会・長野県霧ヶ峰自然保護センター・八十二文化財団・長野日報・長野朝日放送・信濃毎日新聞社

講師：近藤信行氏（山梨県文学館館長・日本山岳会会員）演題『「霧ヶ峰・山の会」のこと』

沖野外輝夫氏（早稲田大学特任教授）演題『八ヶ岳山系の水』

三井建一氏（長野県霧ヶ峰自然保護センター職員）演題『霧ヶ峰の植物』

岡しげみ氏（岡茂雄氏の孫）と野沢佐々代氏（長尾宏也氏の三女）によるトークとインタビュー『（山の会）を担った父と祖父を語る』

関連行事：畦地梅太郎・山の版画展、山岳書頒布市（古書・新刊書）、第四十一回ヒュッテジャヴェル定期コンサート（和波孝禧ヴァイオリンの夕べ）

十月十六日（日）午後、参加予定者二十二名全員が到着。十八時から近藤信行氏の講義。一九三五年の「山の会」の時代背景、主催者と参会者の顔ぶれ、岡茂雄の業績とくに、雑誌『山』と岡書院の文化人類学を中心にした出版活動、山と登山にかかわる過去に例を見ない「山の会」の文化的意義を語りました。

十七日（月）午前、全員参加のワンデルング。霧雨の中、車山湿原から蝶々深山経由で沢渡に戻る一周の歩行。リーダーの役を、霧ヶ峰に精通する金子康一氏が担当。午後、「水の先生」とも呼ばれる沖野外輝夫氏が、霧ヶ峰の水質について講義。諏訪の酒は、古来酒造りに適した霧ヶ峰の伏流水によるが、日本全土での山の荒廃、とりわけ森林の衰退に起因する水質の悪化の例に漏れず、懸念要素があると指摘。諏訪地方、八ヶ岳山系の最も良質の水が蓼科山の麓で得られるとのこと。多年諏訪湖の浄化に尽力してきた科学者ならではの詳細な講義でした。夜は、自然保護センターの若手職員である三井建一氏の話。大学で森林学を修めた三井氏は、霧ヶ峰の植物に、外来種も含めた草原の森林化の問題を初め、現在のこの山のかかえる課題を、鮮明なスライド写真を用いて語りました。この間、前日に引き続いて山岳書の頒布会（古書はK書店、新刊書はH社の協力によります）。

十八日（火）午前、前日から続く雨天でしたが、御射山、八島ヶ原湿原経由、鷲ヶ峰往復。諏訪から出向いた蕎麦店「小坂」主人夫婦が信州そば打ちを実演。午後、岡茂雄と長尾宏也の遺族による話を通じて往時の様子を可能な限り推理することが試みられました。特に当時の霧ヶ峰とヒュッテの写真を交えて、遺族の話は詳細にわたり、不明であった点がいくつも明らかになりました。司会の役を布川欣一氏がつとめました。夜は全員が、それぞれの山に対する思い、山登りの意味合いについて語り合いました。多様な山登りのタイプのあることが再び浮き彫りになって、一同がますます山の奥行きの深さについて認識を深めました。長尾宏也の三女である野沢氏が「父が山小屋での最高の贅沢」と言っていたという「ホワイトホース」を、ゆかりのある店で買って持参していました。

十九日（水）朝食後、布川氏が「再度こうした会が開かれることを希望します」との言で終わる挨拶。再会を願いつつ解散。参加者全員が、山に対して気負わず、急がず、そして静かに向き合おうとする姿は、霧ヶ峰にふさわしい

ものでした。

「信濃毎日新聞」が「極めて身近な話で興味深い」という参加者の感想を引用しながら、また、「長野日報」は、「山歩きや講義などを通して、霧ヶ峰の文化的伝統を訴えた」という言葉をまじえて、この会の様子を伝えました。さらに、参会者の一人である沢田氏が雑誌『山と渓谷』に会の様子を語る文を寄せました。

さて、第二回となりました二〇〇六年の「山の会」は十月二十九日から三十一日にかけて催されました。講師は立正大学教授の福田孝昭氏（日本山岳会会員）と下諏訪町教育委員会学芸員の宮坂清氏で、それぞれ『火山の話』と『霧ヶ峰の黒曜石文化について』と題された講義をおこないました。三日目の晩はヒュッテジャヴェルゆかりの「ホーフピアノドリオ」の青木資子さんのピアノ演奏でドビュッシーの『月の光』などで、山の静かな秋の夜長を音楽とともに愉しみました。参加者全員の談話で会がしめくくられました。

追記：なお、本文中にしるされている通り、ここで話題とされた「ヒュッテ霧ヶ峰」は一九三六年十二月に焼失しました。現在同名の施設が存在しますが、「山の会」の舞台になったものとは別のものです。

山好きの大人たちのためのハイジ物語

――アルプスの娘の物語にひそむ意味について――

宮下啓三

（二〇〇六年二月に緑爽会の企画によって『映画「アルプスの山の娘」と講演のつどい』がおこなわれました。この日、一九六五年のオーストリア映画『ハイジ』の全篇、一九五二年と二〇〇一年のスイス映画『ハイジ』の一部を鑑賞しました。この会の解説として語ったことに当日時間の関係で語らずにいたことがらを加えたのが以下の稿です）

日本山岳会で『ハイジ』を語ることについて

緑爽会は自然保護の精神を実践にうつしながら登山を楽しんでいる日本山岳会員たちによって作られた、なごやかな雰囲気を持つクラブです。爽やかな緑を守りたいと願う気持ちを私も共有させていただきたいと思います。会員であろうとなかろうと、ここにおいでのみなさんは、山の緑に満ちた自然ばかりでなく、山に住む人々の心情を理解することもまた大事であると考えておいでのはずです。自然保護に人間保護の要素が欠けていてよいはずがありません。冒険や名誉を主たる目的とする人たちの場合はいざ知らず、大多数の登山者たちは、山の中で、あるいは山の見える風景の中で、自然に包まれ、自然に親しむことを楽しんでいます。私たちは自然によって心を保護されているに違い

ありません。

今日は二月十六日。日本山岳会の集会室が利用できる日というだけの理由でこの日が選ばれたにすぎません。しかし、偶然というものは必然的と言いたいくらいに深い意味を持つことがしばしばです。（一二二六年の）二月十六日は南無妙法蓮華経の七文字を世に広めた日蓮上人の誕生日です。宗教宗派の別を超越して敬虔な気持ちを抱くことの意味を考えるのにふさわしい日です。ハイジの物語が信仰心の抱きかた、すなわち人間の力を超えるものに対する謙虚さの価値を主題の一つにしています。（一一九〇年の）二月十六日は和歌の達人として誉れの高い西行法師の命日です。異郷を旅することから生まれる思いとは何かを考えるきっかけをあたえてくれます。ドイツに連れて行かれたハイジは故郷への思いに身も心も押しつぶされそうになります。（九三五年の）二月十六日、紀貫之が四国の任地から『土佐日記』をたずさえて京都に帰ってきました。地方から都会への帰郷でしたが、ハイジは都会から地方への帰郷をはたしました。

これだけでも偶然と言い捨ててしまうのは惜しい豪華な顔ぶれです。名のあがった三人の日本人が、思いがけないことに今日の話題であるアルプスの娘の物語の主要なテーマと結びつきを持っています。そればかりでありません。（一八八三年の）二月十六日、日本で最初の天気図が公表されました。登山する人たちに欠かせない公の気象情報がスタートした日です。ハイジの物語の中に見られる重要な単語の一つは、現代の日本の天気予報で使われていますが、それはスイスのアルプス地方で生まれた言葉でした。その天候現象はアルプス住民にとって山の暮らしの不愉快さを象徴するものでした。その言葉とは何か、後ほど種明かしをいたします。

少女ハイジの物語が児童の読み物であることを私は否定しません。日本の子どもたち向けの絵本やアニメになっている話を、なぜ日本山岳会でするのか、なぜ映画を鑑賞してみようというのか？　ヒマラヤの八千メートル峰やアンデスやアラスカの高峰にいどんだ会員たちの輝かしい成果が報告されてきたこの部屋で、子ども向けの話をするのは、会の名誉をそこなう、と思う人がいらしても不思議ではありません。会員の高齢化が議論の対象になりがちな昨今です。

今度は小児化、幼児化の現象を持ち込む気か、と言われかねません。

そうした種類の物言いに対する反論を私は用意しています。第一に、私たち自身もそうでしたが、日本の子どもたちの多くに絵本やアニメの画面を通じて山の世界に出会わせてその魅力を感じとらせる最初のものは、ハイジの物語です。風景としての山、心の安らぎをあたえる空間としての牧場。そうしたものと真っ先に出会わせてくれます。将来私たちの仲間となってくれるべき幼少年への山岳世界の啓蒙という観点から、私たちはこの物語に期待を託すべき理由をもっています。

第二に、ハイジの物語は、スイスばかりでなく、広く世界の山岳地帯に住む人々の生活と感情を理解するための重要な鍵を秘めています。ヨーロッパのアルプスを舞台とした「黄金時代」の最後をしめくくったのがマッターホルンの登頂です。ウィンパーの苦労に満ちた登頂と下山中の遭難事件は大きなセンセーションを巻き起こしました。彼の登頂記は何度読み返しても魅力を失いません。だが、登頂を語った彼の書物の中に、アルプスの深い谷間に住む人々の不幸な生活状況が再三語られていることに注意を向ける人がいたでしょうか？　日本山岳会の大先輩である辻村伊助の名著の誉れ高い『スウィス日記』に、ハイジの物語を裏付ける記述が数箇所で見つかります。登山を最上の楽しみの一つとしている私たちが大人の理解力を用いてハイジの物語を読み直してみたら、どのようなことがらに気づくことができるのか、ためしてみる価値が十分にある、と私は確信します。

生活の場としてのアルプス山岳地帯

美しい景観を求めて旅する観光旅行者も、大なり小なり冒険を楽しもうとする登山者および登攀者も、気象条件が良好である季節を選ぼうとします。しかし、その土地で生活する人々は天候を選ぶことができません。

日本の最高峰である富士山をスイスに移したら何番目の高さになるでしょうか？　日本山岳会の図書室にあるスイス山岳会編のスイス山岳のリストにもとづいて私が数勘定をしてみたところ、おおよそ一二五番目の高さということになります。几帳面な国民性を示すかのように地形図で調べた結果としてスイス山岳会が作成した書物に載っていた

数値によると、三〇〇〇メートル以上の峰が（イタリアとフランスとの国境線上にあるものを含めて）九八〇あるのだそうです。地図上に名前と標高を示す数字の載っているものという条件をもうけてのことです。日本の九分の一ほどの面積の国にこれほど多くの峰があるというのは、広い面積をもって盛り上がる火山と異なって、岩山が鋸状にギザギザした姿でつらなっているからです。高い山がせまい面積にたくさんあるということは、山々がけわしいことを意味します。人間の居住するのは谷間ですから、傾斜のきびしい山々にはさまれていれば、太陽が水平線よりずっと高いところから昇り、そして高いところに沈みます。平地にくらべて朝は遅く、夜が早く来ます。日本の最北端である北海道の宗谷岬でさえスイス最南端のキアッソの町より南に位置します。緯度の関係で、夏の昼間は日本より長くて美しい山岳風景を満喫するのに好適ですが、その短い夏が終われば観光客の潮がさっと引いてしまいます。日本より早く始まって遅く終わる冬の暮らしはけっして楽ではありません。

ここから先は、現代ではなく、ハイジとそれ以前の時代のことと思ってお聞きください。現代のスイスでは、道路と鉄道が発達して、暖房が行き届き、テレビとパソコンによって広い世界とつながり、スキー客でにぎわいます。雪に閉ざされて静まり返った村落の陰鬱さを感じる機会が格段に減りました。つい百年ほども前までは、ただでさえ生産性の低い土地で貧しい生活を余儀なくされる山岳地帯の住民が低い土地に出稼ぎに行くのは普通のことでした。そして、その昔、山岳地帯のスイス人男性が多くおこなっていたのが、外国の王侯貴族に雇われて兵隊になることでした。兵隊であるからには、生死を賭ける戦闘を覚悟しなくてはなりませんでした。それでも、常に戦争があるわけでありませんから、王侯君主の住む下界の大都会に行けて幸せだった、と思えなくもないはずです。しかし、都会には都会なりの生活風習がありますから、雇い兵は立ち居振る舞いからして田舎者であることを暴露して笑いの種にされることが普通でした。スイス東北部の山岳地帯の農民であった男が雇われてドイツ（当時のプロイセン）の首都ベルリンに行って、市民の嘲笑に耐えられなかった、という思い出話を書いたのは一八世紀の後半でした（ウルリヒ・ブレーカー『トッゲンブルクの貧農の生涯と偽りない生活』にその記述があります）。

それよりずっと以前、一六世紀の前半にイギリスのトマス・モアが名著の誉れ高い『ユートピア』を書きました。「理想郷」と訳されるように、この本はイギリス人が豊かに平和に何不自由なく暮す社会の仕組みについて語るものでした。ところが、イギリス人が理想的な生活を楽しむことを語るだけではすみません。幸福な民をねたんで外国の軍が襲うことがありえます。それに抵抗するために軍隊を作って戦うのであっては、イギリス人が犠牲になるわけですので、理想郷の名に反します。どうしたらよいか？　自分たちが戦わずにすんで、しかも他国からの襲撃を防ぐには、別の国から安い費用で兵隊を雇うにかぎります。『ユートピア』では「ユートピアの東五〇〇マイルあたりに住む民」である「ザポレット人」を雇うことが提案されます。「性質はすこぶる粗暴、残忍性を帯び、うっそうとした森やけわしい山岳地帯に生まれ育って、今もそこにいる人種。生まれつき頑健、どんな寒さにも苦役にも耐える。美食を好まず、土地を耕作せず、住居も服装もいたって簡素。ほめられるのは家畜の飼育ぐらいで、生計の大半は狩猟と泥棒によっている。戦争をするために生まれてきたような連中である」　これがスイスの山岳住民のことをさしていたのは明らかです。

総じて当時のイギリス人たちはアルプス住民を蔑視していました。そもそもアルプス自体を醜いものと感じていました。一六世紀末から一七世紀の初めにかけて傑作を次々に書いたシェイクスピアの劇の四ヶ所にアルプスとその住民にふれる台詞（せりふ）が見つかります。『ヘンリー五世』の中で「イギリス軍に襲いかかれ、雪崩が谷に落ちかかるがごとくに、アルプスの峰々が低い、いやしい谷底に雪崩の汚物を吐きつけるがごとくに」とフランス王が命じます。『テンペスト（あらし）』では「胸に頭の生えた奇形の人間がいる」という文句がアルプスの不気味さを暗示しました。『ハムレット』で出現する亡霊のイメージのルーツがスイス人による文献であったという説があります。実際にアルプスを見た経験を持とうが持つまいが、アルプスは醜くて役に立たないもの、という見方がヨーロッパで常識となっていました。

一九世紀の初め、一八一五年のウィーン会議で永世中立が諸国から承認されたかわりに、スイスの雇い兵の歴史は

実質的に終わりました（形式的にはバチカン教皇庁の警護にあたる役割が今もつづいています）。スイスの雇い兵のことがハイジの物語と深いかかわりを持つということが、今日の私の話のもっとも重要なテーマとなることを予告しておきましょう。

そこに行き着く前に私が特にふれておきたいと思うのが、先ほど触れたウィンパーの『アルプス登攀記』です。エギーユ・ヴェルトやマッターホルンなどでの初登頂のスリリングな記述に気を取られる読者には気づかれにくいのですが、アルプスの深い谷間の住民の中に「白痴や狂人」の多いことが再三にわたって語られています。生活水準の低さによる衛生状態の劣悪さに加えて、谷間での閉ざされた生活領域での近親交配による劣性遺伝が原因である、とウィンパーは書いています。辻村伊助の『続スイス日記』にも、不意に「白痴や狂人」という言葉が、スイス人の特性を語るくだりに出現します。

辻村伊助は、こうも書いています。「こころみに彼等を山岳から引き離して見るがいい、その時初めて、ペルーのインカ族を山地から追い下した白人のように、どんな罪を彼等に対して犯したかが分るだろう。郷愁（ノスタルディヤ）は山岳国民の通性である。郷愁を主題（テーマ）としたスウィスの民謡を聞いて、あのやるせない曲に涙を落さないものは、山に縁のない人間だ、スウィス国民の中の狂人か白痴に等しい部類だ、冷静に観察すればどこかに欠けている或るものを見出す、そしてそれを感ぜずに生きてゆかねばならぬ彼等の運命に同情するようになる」この指摘は、目に映る景色だけを楽しみ、興に乗って登山をおこなっただけの人ではなかった辻村伊助の感性の豊かさの証明であって、私が『スウィス日記』を愛読した理由でもあります。そして、山岳住民の心の問題に触れるものとしてハイジの物語を読み直すきっかけを、辻村伊助の文章があたえてくれます。

シュピーリの小説『ハイジ』のあらすじ

女流作家ヨハンナ・シュピーリの『ハイジ』の物語の筋を思い起こしておきましょう。なお、作者の名を「スピリ」としている日本語の絵本や訳書が複数ありますけれども、スイス人の発音ではシュピーリです。

日本で『ハイジ』の名で知られる物語は二つの小説を合わせたものです。一つ目は『ハイジの修業時代と遍歴時代』という長くて重い題がつけられています。ドイツの文豪ゲーテの二つの長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』と『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の題名が利用されています。

五歳の孤児であるハイジがデーテおばさんに連れられて山道を登って、おじいさんが一人暮らしをしている小屋に行きます。～朝、アルプスの自然の中でヤギ飼いの少年ペーターと思う存分駆け回ります。～秋、ハイジがペーターの住む小屋を訪問して、盲目のおばあさんから学校での教育の大事さを聞きます。～春、八歳になったハイジを学校に入れるようにと、牧師が説得に来ますが、おじいさんは耳をかしません。～ドイツの大都会であるフランクフルトの家庭で家政婦として働いているデーテおばさんが来て、お屋敷の娘の勉強と遊びの仲間となって教育も受けさせるためにハイジを引き取る、と言いますが、おじいさんは拒絶します。デーテはおじいさんの反対を振り切ってハイジを連れ出します。ここまでが「修業時代」であって、後半が「遍歴時代」に相当します。

フランクフルトのゼーゼマン家での生活がはじまります。病気で立つこともできないクララが車椅子生活をしています。～山の見えない生活になじめないハイジは、フランクフルトで一番高い教会の塔に登りますが、山はどこにも見当たりません。～ハイジは、ゼーゼマン家の家庭教師であるロッテンマイヤー女史から読み書きを教わりますが、おとなしく勉強していることができません。～ゼーゼマン氏の母親であるおばあさんが訪問します。アルプスの暮らしを思い出して悲しげな様子のハイジを優しく慰めてはげまし、読み書きの大事さを納得させます。～勉強は進みますが、山を思う気持ちがつのって体が弱っていきます。山に帰れますように、と神様に祈ります。～ゼーゼマン家に幽霊が出るというので大騒ぎとなります。ホームシックにかかったハイジが夢遊病にかかって夜中に邸内を歩き回っていたのです。医者がハイジをスイスに帰すようにすすめます。～ハイジが山に戻って来て、夢に見た風景に再会します。

この物語の続編として書かれた『ハイジは習ったことを使えるようになる』の中で、ドイツから訪問しに来たクラ

ラが立って歩けるようになる場面が感動的に描かれます。この続編で、頑固で人間嫌いだったおじいさんが村人たちと和解し、ハイジが村の学校に通うようになります。医者のすすめでクララがスイスに来て、アルプスの空気の作用で健康を取り戻し、他人の助けを借りずに歩けるようになります。

私の知るかぎりでは一九三〇年代にアメリカで名子役とうたわれたシャーリー・テンプルを主人公とする映画が作られていました。そのスチール写真を見ると、おじいさんの小屋の前に一頭の大きなイヌがどっしりとすわっています。原作には登場しないそのイヌはセントバーナード犬です。スイス西南端のグラン・サン・ベルナール（大サンベルナール）峠のホスピス（修道院経営の宿泊施設）に飼われ、雪に進退きわまった旅人を見つけ出して救う役目を負っていたと伝えられるイヌです。それがスイス東北端に位置するハイジの物語に登場するのは、長崎の蝶々夫人の住居の障子を開くと富士山の姿が見えるというに等しいのですが、ハリウッド映画はサービス精神を発揮させました。どうやらこれが日本の人気アニメ『ハイジ』に影響をあたえたようで、アニメにもとづいた絵本にもこのイヌが姿を見せています。日本製アニメを見れば、この大きなイヌが何もせずにおじいさんの小屋の前に寝そべっています。ペーター少年がヤギの群れを追って山野を忙しく駆け巡っています。原作になかったイヌが、イヌ以上に苦しい仕事にはげむ人間の生活を浮き彫りにする意外な効果をもつのは、何とも皮肉です。

一九五二年にスイスで作られた白黒映画の台本をそっくりそのまま使って一九六五年のオーストリア映画が作られました。どちらもサン・モリッツの奥のソリオという村落とその周辺で撮影されました。映画ではクララがフランクフルトの自宅でハイジの天衣無縫な性質に刺激されて立てるようになります。ただし、スイス映画にあったハイジの夢遊病の場面はオーストリア映画には見られません。一九七〇年代にイギリスの製作者がスイスでロケして作った映画は、ハイジの帰郷の後にスイスに来たクララがアルプスの自然によって気力を得て歩行できるようになるところで終わります。

スイス・アルプス地方で生まれた三つの言葉

さて、ハイジの物語に見られる二つの言葉に注目してみましょう。どちらも日本人によく知られているカタカナの外来語です。一つは「フェーン」です。「フェーン現象」という言葉を私たちは気象情報で耳にします。山脈の反対側に湿った空気が吹き付けて雪や雨を降らせてから、乾燥した高温の強い風となってこちら側に吹き降りる現象を言います。この言葉が『ハイジ』の最初の箇所にあらわれます（翻訳書では「アルプスおろしの南風」などとされています）。ペーターの一家が住む木造の家があちこち傷んで、フェーンのたびに今にもこわれそうな音を立てる、というのです。冬の時期にスイス東南部を訪れた辻村伊助は、陰鬱な冬景色の山々を見て「フェーンの前の静けさ」に思いをはせました（「テルス・カペルレ」の項）。日本山岳会の会長であった松方三郎は、スイスで経験したフェーンの時期の不気味な感覚を『フェーンもよい』という題の随筆で語っています。

ハイジの物語の舞台となっているのはグラウビュンデン州の北部、リヒテンシュタインのすぐ南、一山越せばオーストリアという位置にある土地です。そこの、ほとんど西隣と言ってよい土地に生まれ育った青年の遍歴を語るのが、ヘルマン・ヘッセの小説『ペーター・カーメンチント（邦訳書名：郷愁）』です。これの最初の章で「南風の季節に、山地の人々、特に女たちを襲い、眠りを奪い、五官をなでて刺激する南風熱」という文句が見つかります。「南風」はフェーンをあらわすために翻訳者が苦心して作った訳語です。

この「フェーン」は、言語学者の説くところによれば、「春の風」を意味するラテン語の「ファヴォニウス」が語源であって「西風」を意味する言葉でもあったそうです。古代ギリシアの昔から西風はもっとも気持ちのよい風とされて恋人の便りをはこぶ風としてたびたび詩にあらわれてきました。大西洋を北上する暖流が心地よい風を大陸に送るので、ヨーロッパでいちばん人気の高いのが西風です。しかし、アルプス地方の北側の土地では、これが別の意味を持つようになりました。その土地の春を代表するのが「南風」であり、長いきびしい冬の終わりを告げる、うれしい風であるはずの南風が、強いばかりでなく、人間を不快にし、精神の安定を狂わせる、嫌われ者となりました。そ

れがスイス山岳地帯の人々のドイツ語で「フェーン」と呼ばれるようになりました。この言葉が低地の標準ドイツ語に入り、そのまま英語に導入されました。世界的に広まったために、この言葉がアルプス山岳地帯の気象の不安定さと生活環境のきびしさを象徴していたことが知られずにいます。

スイス山岳地帯のドイツ語方言で私たちの日常使うカタカナ語になったもう一つの言葉は「ホームシック」です。それのもとになったのが「ハイムヴェー」という単語です。

一六世紀の後半、一五六九年、フランスでキリスト教の旧教（カトリック）と新教（プロテスタント）が争っていた時に、スイスからの雇い兵も戦争に加わっていました。それをスイスに報告した文書の中に、合戦で負傷したスイス人の一人が「ハイムヴェーで死んだ」と書かれていました。これがこの言葉の、記録に残るいちばん古い出現です。一七世紀の後半にスイスの医者（ヨハネス・ホーファー）がこの病いについて論文を書きました。

『ノスタルギア別名ハイムヴェーについての医学論』という題でした。スイス人のドイツ語方言を、ギリシア語の「ノストス（祖国）」を使って、「ノスタルジア（祖国病）」という言葉に変えました。

一八世紀の初め、スイス全土の自然科学的な研究をおこなったショイヒツァーが詳しく論じたことから、「ハイムヴェー」という言葉がドイツ語の世界に広まりました。ショイヒツァーが書いたものによれば、「故郷に帰りたいと思うスイス人がかかる病気で、その希望が実現しないと死にいたる」のであり、その症状は「憂鬱になって不安に襲われ、仕事の意欲を失い、睡眠不足または不眠症におちいる。血液の循環と呼吸に異常が生じて肉体的な変調をきたす。ベルン、グラウビュンデン、グラールスの出身者に特にその傾向が強い」というのです。ここに名のあがったスイスの土地はどれもアルプス山岳地帯にあります。グラウビュンデンとは、まさしくハイジの物語の舞台である土地です。そして、高熱に襲われて寝込んだハイジを診察した医者が「ハイムヴェーです」と診断します。英語の翻訳では「この子はホームシックです」とされています。

一八世紀の後半にフランス人たちがスイス人の病気に関心をもって、「ル・アムヴェ」とフランス語式に発音しま

した。ジャン＝ジャック・ルソーが「ル・アムヴェは、時には死に至る病です」と一七六三年に知人にあてた手紙の中で書きました。その二年後にこの言葉がスイス人特有の病気として百科事典に載りました。やがて、「ホームシックネス」という英語式の呼び名を生みました。この名詞の形容詞形が「ホームシック」です（日本人はこの形容詞を名詞として使っています。「私はホームシックにかかった」という言い方は、文法的には正しくありません）。これと平行して「ノスタルジア」という英語の単語が広まりました。ホームシックとノスタルジアはもともと同じ意味であるのに、辞書で「ノスタルジア」を引くと「重いホームシック」と書かれていたりします。

要するに、ハイジがドイツの大都会でかかった病は、まさしくスイス人独特と思われていた病であったのです。水銀柱で気圧を測れることが発見され、バロメーター（気圧計）が晴雨の予想だけでなく、高度の計測に利用できることが分かって以来、地図の製作者たちによって高度の計測に使われるだけでなく、多少とも科学心を持つ人が旅行にたずさえることが一八世紀以降に流行しました（長崎から江戸（東京）への往復の旅をしたシーボルトもその例に漏れません）。気圧と高度の関係が人間の心理と生理に深いかかわりを持つと考えるようになりました。先述のショイヒツァーも例外でなく、「ハイムヴェー」つまり「ホームシック」の原因は気圧であると考えて、次のような結論に至りました。

「気圧の低い土地に住んで薄い空気に慣れた山地の人間が気圧の低い土地に行くと、血管と内臓への圧迫が大きくなって血液循環と呼吸困難が引き起こされる」

でも、それが故郷への強い憧憬の感情とどういう関係があるのか？「熱が絶えず脳髄を刺激するので、祖国のさまざまの像が脳裏に焼きつけられるからであろう」とショイヒツァーは推理して、治療の方法を提案しました。「できるだけすみやかに故郷に帰すこと。それが不可能であるなら、高所に登らせて平地より低い空気を吸わせて応急の手当てとすること。医薬品の服用は効果がない」

フェーン、ホームシック、ノスタルジア。いずれもカタカナ語として私たちになじみの言葉となっていますが、そ

の誕生の土地であったスイス山岳地帯で持っていた意味と同じほどの重さを持って使われているでしょうか？　日本山岳会の先達である辻村伊助と松方三郎がスイスでこの言葉に敏感に反応したことを、私たちは理解できるでしょうか？

ハイジの作者とバンビの作者の墓地

ハイジの話をするだけでも、子どもじみている、と批判されるでしょうが、ここで私は子鹿バンビを引き合いに出したいと思います。ディズニー映画のキャラクターであってディズニーランドの人気者でもある、愛くるしい子鹿の誕生の場所はウォルト・ディズニーのアトリエではありませんでした。オーストリアの作家ザルテンの小説の主人公でした。その小説は、ハイジの物語と同様に、ゲーテの長編小説の伝統を引くものでした。幼い未熟な主人公がさまざまの体験と試練を経ながら身も心も成長して一人前になるに至る過程を描く小説の部類に属します。ディズニーランドのキャラクターとしては可愛らしい子鹿時代だけが目立ちますけれども、原作の小説では大きな角を持つ、堂々たる大人の鹿の姿を持つにいたります。

ディズニーのアニメとして知られるために、バンビがアメリカのハリウッド産であり、ロッキー山脈の鹿をモデルにしたものであると思われがちです。ほんとうは、作者ザルテンがオーストリアのアルプス山中のザルツカンマーグートという風光明媚な土地、すなわち『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台とされたザルツブルクの南に位置する谷間の森で見た鹿からヒントを得て小説を作ったのでした。

この物語は、人間の銃によって平和と安全をおびやかされるアルプスの森の動物たちの運命を、動物の立場から語ります。文明と名のつくものによって自然のいとなみが乱されることを動物の側から抗議しようとした作品、とも言えます。

バンビの物語が作られてからずっと後のことですが、ザルテン自身が人類の狂気によって身の危険にさらされました。ハンガリー出身のユダヤ人であって、ザルツマンという本名をザルテンというペンネームで隠してオーストリア

で作家として活動していたのですが、隣国ドイツに登場したヒトラーがナチズムの嵐の矛先を隣国であるオーストリアに向けるに至って、永世中立国スイスに安住の地を求めました。二度とオーストリアに戻ることなくスイスで生涯を終えました。その結果、『ハイジ』の作者シュピーリと『バンビ』の作者ザルテンが同じスイスの都市チューリヒに葬られています。シュピーリの墓はジールフェルト墓地、ザルテンの墓はウンテラー・フリーゼンベルク墓地にあります。

ハイジとバンビは、スイスとオーストリアにまたがるアルプス山脈によってつながります。人間が人間中心でしか考えず、都会で進展する文明を尺度にしてしか人間とその文化を計量しようとしない傾向への疑問と批判を秘めた物語の主人公であるという点で共通性を持っています。

シュピーリもザルテンもともに平地の都会人として、アルプスの自然とそこに生きる人間または動物を観察しました。土地の言葉である方言で仲間同士の会話をする時には雄弁であるのに、口下手を理由に下界の都会人には寡黙でありがちの山岳地方の住民たち。その人々の心情の深みから言葉に出ないものを汲み取ろうとしたシュピーリ。物言わぬ動物たちに代わって、自分たち本位の価値基準で自然の秩序を乱す人間への批判を試みたザルテン。ともに児童の読み物の世界に閉じ込めておくにはもったいないメッセージを、私たちは謙虚に聞き取らなくてはなりません。

かつてイギリス人たちがアルプスの高峰の初登頂争いをしていた時代に、彼らはアルプス住民を明らかに見下していました。日本山岳会誕生の思想的な背景には、ウェストンと志賀重昂と小島烏水、つまり重要な鍵を握っていた三人の人物すべてに感化をあたえたイギリスの美術評論家ラスキンの著述がひそんでいました。ラスキンがアルプス山岳地帯の風景の美を、近代的な自然科学と芸術意識の双方を駆使して論じて、大きな影響をおよぼしました。そのラスキンもまた、スイスの山岳風景の美を最大級の賛辞で称えたのに、山岳地帯に住む人間の物心両面での貧しさ、その結果の一つである精神障害と身体障害を負ったアルプス住民に対して、不快感を隠さずに批判していました。そもそも、産業革命によっていちはやく富と余暇を得たイギリス人たちが、都市周辺の工場から排出される石炭の煤煙を

きらってスイスに滞在することを流行させました。近代アルピニズムの発生がこのような事情と深くかかわっていました。富めるイギリス人たちと貧しいスイス人との関係が、登山の行為者と補助者の間の主従関係を生みました。登頂の名誉をイギリス人たちが占めて、その登山を助けたスイス人の功績は二の次とされました。ウェストンにも、日本の山岳住民たちに対して見下す態度がなかった、と言い切れるかどうか、日本に数多いウェストン信奉者に問いかけてみたいと私は思います。アルプスで生じていたことが日本でも起こっていなかった、とは言い切れません。都会人たちが余暇の楽しみと冒険のために登山をおこなうようになった時、意識が山のみに向けられて、山麓に住む人々の生活と心情を十分に思いやる余裕を持たなかったかに見えます。山の暮らしの不便さ、山の自然の過酷さにもかかわらず、便利な都会生活に順応しきれずに山を恋う山人の感情を、たんに言葉の意味として理解するだけにとどまらずに、自分たち自身のものとして追体験できないのであっては、ほんとうに山に登って山を知っていると言えるのかどうか、と都会生まれで都会育ちの私は、自分の過去の登山と山岳地帯での旅を思い起こしつつ、深く反省します。

「ホームシックにかかる」とか「ホームシックを感じる」といったふうにほんらいは形容詞である言葉を名詞あつかいするのは日本人の不正確な外来語の使い方の一つであって、「ホームシックネスにかかる」とか「ホームシックネスに悩む」といった言い方が英語文法に即した言い方です。しかし、今さらこんなペダンティック（衒学的）な主張をするのが滑稽千万であるほど、私たちは「ホームシック」になじんでいます。なじみすぎてしまって、かつてスイスのアルプス住民がこの言葉の語源となった「ハイムヴェー」にこめた意味まで風化させてしまっているとしたら、私たちはこの言葉を正しく理解していないことになります。

自然保護と言う場合、人間が自然を保護することが真っ先に思い浮かびます。この論理を逆転させて、人間が自然によって保護されている、と悟る時、私たち自身が謙虚さをほんとうの意味で身につけたことになるのでしょう。さらに、保護という言葉には、もう一つ別の意味が加わります。ホームシックの原因となり対象になりうるほどの故郷を持ち続けるには、故郷そのものが何らかの意味で保護されているべきだからです。

帰りたいと願う故郷を持つ人は幸いです。故郷を憎み、あるいは故郷にいたたまれずに脱出したいと思いつつ故郷にしばりつけられた身の上を嘆く人たちもこの世にたくさん存在します。私自身、東京の都心近くで生まれ育ちましたが、戦争で焼け野原となって以来、新しい道路と建築物によって以前の面影をまったくとどめていません。私はとうの昔に自分の生まれた場所を故郷と呼ぶのをあきらめています。登山の楽しみを知った私は、青春の記憶を宿す山々をひそかに自分の心の故郷と思うことにしてきました。日本山岳会の大先輩である松方三郎について、これまた大先輩である田口二郎が次のように書いています。

「私見ではあるが、松方さんはエッセイを書くごとに昔のアルプスを楽しく追体験し、むしろそこに帰郷したのではあるまいか。彼がアルプスを味わったのは二十代後半の三年間の短い期間である。その後の多彩な人生は人の知る通りだが、若き日のアルプス体験には、その後の豊富な人生にもかかわらず、いやその内面に豊かさが加わるごとに、それを綴り、それを懐に抱いて青春に回帰させる何ものかがあったのだろう」（『東西登山史考』）登山をする人たちの中に、これと似た思いを持って、山に帰郷することの楽しみ、あるいは過去の登山への郷愁をあたためつづける者が少なくないはずです。

現代のハイジ

人間を取り巻く環境は日に日に変わっています。ハイジの物語が書かれたのは一八八〇年ごろのことでした。当時のスイスの山岳地帯は産業の近代化について行けませんでした。生まれて間もなく両親を失ったハイジを母親の妹であるデーテおばさんに世話されていました。おばさんはライン河沿いの保養地であるラガーツ鉱泉の保養目的の客の世話をする仕事をしていました。フランクフルトから来た裕福な実業家であるドイツ人に見込まれて家政婦として雇われることになりました。典型的な出稼ぎです。そのためにハイジをおじいさんに押し付けざるをえなかったのです。一八七一年に統一国家となって経済発展の目覚しかったドイツは富の力でスイスを圧倒していましたから、スイスの山岳地帯の女性がドイツに働きに出るという設定はごく当然のことでした。

しかし、その後の一世紀足らずのうちにドイツが二度の世界大戦で多くを失い、失ったものを取り戻すための苦労を重ねている間に、永世中立国として戦争に加わることをしなかったスイスは、大戦に巻き込まれる危険性を懸命の努力で回避して、失うものがきわめて少なかったおかげで、国民一人当たりに換算してドイツをしのぐ経済水準を持つ国、世界的に見ても豊かな国になりました。もはやデーテおばさんのような形での出稼ぎは考えられません。ハイジの物語がもはや考えられにくい時代に私たちは生きています。

二〇〇一年にスイスで「新世紀のハイジ」と銘打った現代版のハイジの映画が作られました。基本的には同じ構造のストーリーですが、デーテおばさんは出稼ぎの家政婦としてフランクフルトに行ったのでなく、自立して才能を発揮しながら働く女性としてベルリンに行ったことにされました。学校に行かずにヤギの世話をするペーター少年は、義務教育が行き届く現代にありえない人物ですので、父親の仕事の関係でアメリカ暮らしをしていて転校してきた少年、つまりスイスの山奥の生活に当惑している少年とされました。ベルリンでハイジと出会う少女クララは、自閉症的で社会生活に十分な適応のできずにいる少女に変えられました。ベルリンに連れて行かれたハイジは電話とパソコンでペーターと交信します。もはや一九世紀のハイジ物語の前提条件の多くがなくなったかに見えますが、故郷を思う気持ちの質に変わりはありません。ハイジ自身の意志と冒険によってスイスへの帰還がおこなわれて現代版ハイジ物語が終わります。

私は「ハイジの村」と呼ばれて多くの観光客が立ち寄るようになったマイエンフェルトの奥に、地元の人の案内で入ってみました。深い谷を抜けて北上してから車を乗り捨てて夏に放牧場となる地帯を登ってスイス山岳会に属するシェザプラーナ小屋に達しました。標高一九〇八メートル地点にその小屋があります。アルプシュタインと呼ばれる小山脈が北側に縦に皺をきざむ岩の壁となってつらなっています。帰郷したハイジの目にうつった山として二つの実在する山の名が物語にあらわれますが、その一つがシェザプラーナです。翻訳書に「スケサプラナ」とか「大斜面山」とされていますが、現地の正規の発音では「シェザプラーナ」です。北面のオーストリア側にある北面に広い雪原がある

ことを知った翻訳者が「大斜面山」としました。スイス山岳会の小屋からはまったく見えません。そのあたりから西の方角、マイエンフェルトの北側にとがった峰を見せているのが二五六二メートルの「ファルクニス」で、いくつかの訳書で「鷹が峰」と意訳されています。

一九一四年の冬にスイス中央部の山岳地帯を歩き回った辻村伊助はフランスとイタリアを周遊した後に北上して東南部からふたたびスイスに入りました。サン・モリッツでセガンティーニの絵を鑑賞したりしてから北に向かって大きな旅を終えました。その帰路、チューリヒに向かう列車で進行方向左側に席を取ったために、ハイジゆかりの山々は残念ながら辻村の目に映じることがなく、『スウィス日記』は谷をはさんで向かい合う山々についてふれるにとどまりました。しかし、先に指摘した通り、彼はハイジの物語の重要なキーワードである「ホームシック」と「フェーン」に言及して、景色の表面を見て楽しむだけの観光客や登山者には気づかれないものを鋭敏に感じ取る能力を示しました。その能力を私は尊敬の念をもって評価したいと思います。

私自身、大声上げてハイジの名を繰り返すことに恥ずかしさを覚えます。しかし、私が尊敬する登山と文学の先輩である尾崎喜八や井手貴夫などの人々を山の世界に誘ったヘッセの小説『ペーター・カーメンチント』が、その主題に関してシュピーリの小説と深いところでつながっていることを思うにつけ、子どもの話と見くびって重要なメッセージを見落とすのは残念なことと感じます。

昨今、登山者の高齢化が話題にのぼりますが、中高年である人々がハイジの物語に隠されたものを汲み取って、それを若い人々、幼い者たちに伝える役目を持つならば、そして、山について語る書物を同じような心持で読んで、そのエッセンスを語る機会を持つならば、世代の別を超えて山の世界に対する興味と親近感が広まってくれるにちがいありません。

東チベット・禁断の易貢蔵布（イゴンツァンポー）—未踏の山と谷を踏査する　二〇〇五年十〜十一月

中村保

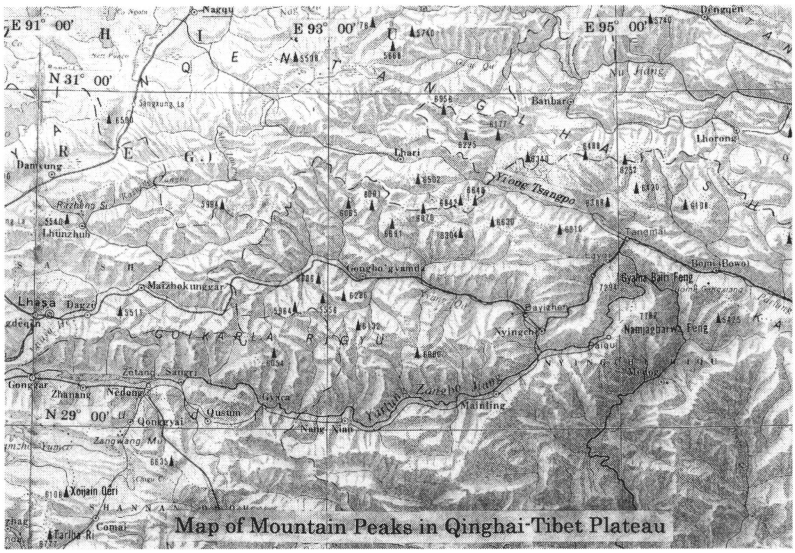
二〇〇五年秋、宿願の易貢蔵布（イゴンツァンポー）踏査行が三回目のチャレンジでようやく実現した。パートナーはいつもと同じ永井剛さん、二人合わせて一四三歳の老年探検隊である。ラサのガイド、タシが同行する。易貢蔵布の知られざる未踏の山々と氷河は素晴らしいが、それにも増して魅力的なのが川の美しさである。急流と瀞が断続的に続く清流は信じられないほど美しい。トルコ石色の碧い流れは、私の知る限り東チベットで最も美しい。念青唐古拉（ニンチェンタングラ）山東部の易貢蔵布の谷と囲繞する山々について、地理的概説・探検の歴史と二〇〇五年十〜十一月の紀行に分けて紹介する。

地理的概要と探検の歴史

一、地理的概要

チベット高原の東端でヤルン・ツァンポーが大屈曲点で世界最大の峡谷となり、ヒマラヤ山脈東端のナムチャバルワ峰（七七八二㍍）を抱え込むようにして流を南に変える。アジアの地図に目を向けると、その北側と東側に東チベット、雲南、四川にかけて圧縮されて歪んだ地勢のなかを数条の大河が南流し、山脈が東西か南北に縦に連なっていることに気づくだろう。東チベットの念青唐古拉山東部と崗日嘎布（カンリガルポ）山群および横断山脈と呼ばれる広大な山域である。「チベットのアルプス」と表現するに相応しい氷河を抱く壮麗な氷雪の峰や天を突く岩峰が連なっている。

〈地図 1〉



易貢蔵布はヤルン・ツァンポーの大屈曲部から北に向かう支流ポ・ツァンポーが通麦（トンマイ）付近で東西に二つに別れ、東が怕隆蔵布（パルンツァンポー）、西が易貢蔵布となる。怕隆蔵布の南側は岡日嘎布である。易貢蔵布は念青唐古拉山東部を東南東に流れる水源から怕隆蔵布との合流点まで直線距離で二三〇キロメートルの峡谷である。川は随所でゴルジュを形成し屈曲して流れているので、川の全長は直線距離の一・五倍近くぐらいあるだろう。標高五〇〇〇メートルの嘉黎高原の源流から中央部の尼屋（ニウ）まで直線距離で一二五キロメートル、ここまでを便宜的に上流部と呼ぶ。尼屋から怕隆蔵布との合流点・通麦まで直線距離で一〇五キロメートル、この間を下流部と呼ぶ。

易貢蔵布下流部の北側は全長三十五キロメートルの怡青（ハチン）氷河や若果（ルオグオ）氷河など東チベット最大の氷河が発達し、その源頭には無数の六〇〇〇メートルを超える未踏峰が連なる。下流部の南側は、氷河こそ発達していないが、未踏の六〇〇〇メートル峰と六〇〇〇メートルに近い氷雪の険しい鋭峰が居並ぶ。念青唐古拉山東部には約一五〇の未踏の六〇〇〇メートル峰が残されているが、そのうちの多くは上流部も含め易貢蔵布を囲繞する山々である。

源流に近い上流部は唐の時代から長安とラサを結ぶ街道が通過している。近年は嘉黎から尼屋まで、土砂崩れに曝されている悪路だが、自動車道路が延びている。英国隊が二度嘉黎から尼屋（嘉黎県の忠玉郷、キングドン・ウォードの Nye）まで

〈地図 2〉

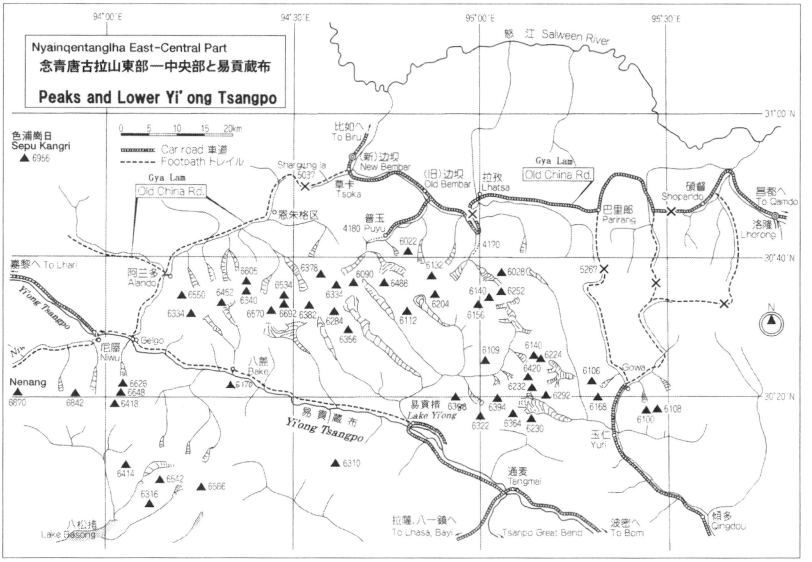


写真 1　Lake Yigong & Peaks to the northeast（易貢措湖）

入り尼屋から西側支流、尼屋曲（ニウチュ）に入っている。しかし、下流部は原生林を縫って蛇行し、深いゴルジュは往来困難にしている。下流部の北側は、湿潤な気候が大量の降雪をもたらし、大きな渓谷型の氷河を育て、秀麗な雪峰を造形し、美しい針葉樹林を涵養している。怕隆蔵布との合流点に近い易貢措（イゴンツォ）（湖）は、その特異な生成と繰り返さてきた大洪水によって住民は災難を蒙ってきた。現在でもその危険はあり、合流点の通麦から易貢措までの川沿いの道路では雨季には土砂崩れが頻発している。

西北西から易貢蔵布が流れ込む易貢措は南東の方向に長さは約十二キロメートル、河床の幅は二キロメートル近くある。湖の部分は年により変わると思うが、二〇〇五年の秋に見た感じでは、河床全体の西側は川の流れが蛇行し、湖の部分は長さ約八キロメートル、幅は東側の広いところで一・二キロメートルぐらいだろう。易貢措の周囲は開けた平地なりで農業が営まれている。大麦、唐辛子、大根などが栽培されている。馬は農耕と輸送に貴重な家畜である。平地の部分は比較的乾燥していて周囲はブッシュが茂っている。易貢郷の人口は一〇七〇人、村落と人口は北側が多い。住人は波蜜（ポミ）人とカンバである。穀物の生産は自給には十分ではなく、唐辛子の栽培をして換金、穀類の不足分を買っていると言う。南岸の村では近年お茶が栽培され小さな工場ができている。

二、探査の歴史

易貢措の発見者は英国の探検家F.M.ベイリーと測量の専門家H.J.モースヘッドである。一九一三年、ヤルン・ツァンポー探査の途上、怕隆蔵布を下り易貢蔵布の左岸を行き、七月三日に易貢措の東端で右岸に渡り、通麦に戻りポ・ツァンポーを下った。その時十二年前の一九〇一年に起こった左岸支流トゥラルン（Tralung）から土石流による易貢措の生成とすぐ後の大洪水について村人から詳しく聞いている。ベイリーの"No Passport to Tibet"(London 1957)から要約する。

「トゥラルン谷の上部にダムができており、三日間流が止まった。谷の下にすむ村人はやがてダムは水を支え切れなくなることを知っていたので事前に避難した。三日目の午後にダムは決壊し、奔流となって土石を押し流した。土石は易貢蔵布を横切り、右岸に幅二マイル、厚さ三五〇フィートの扇状に堆積した。左岸の三つの村、右岸の二つの村が埋まった。

災難はそれだけでは終わらなかった。巨大な土石流が易貢蔵布を堰き止め、湖ができ始め村は水没し家畜は溺れ死んだ。が、村人は高台に避難したので死ぬことはなかった。一ヵ月と三日後、易貢蔵布の水位はあがりダムが決壊し水位が下がった。かくして大洪水が引き起こされ、鉄砲水は易貢蔵布からヤルン・ツァンポーを荒れ狂って流れ下りアッサムにまで災害は及んだ。橋は流され、洪水による易貢蔵布両岸の削り跡は高さ一七〇フィートに達した。」

易貢措の東端には鉄鉱石の鉱山があった。そのことはベイリー

の紀行のなかで、モースヘッドが測量のため磁石を使ったところ磁気の値が狂ってしまったと記している。易貢措の端にある「鉄山」という岩のピークが今でも人目を引く。

二〇〇〇年の雨季の初めにも大洪水が発生した。易貢蔵布の傷跡は両岸の随所に見られる。洪水の削り後は数十メートルの高さである。橋は流され川蔵公路は数ヶ月不通になった。奔流はヤルン・ツァンポーを下り、水位は一瞬にして六〇メートルも上がり、被害はインドにも及んだという。

ベイリーとモースヘッドの後、一九三五年にF.キングドン・ウォードが易貢蔵布の下流部を通過した。下流部を辿った外国人はキングドン・ウォードが最初である。我われは七〇年の歳月を経て、禁断の峡谷の易貢措から上流に向かった二番目の外国人である。キングドン・ウォードは七月から八月にかけてベイリーと同じくヤルン・ツァンポー探査の旅の途中で易貢蔵布に入った。通麦の西の東久から四九八〇メートルの峠を越えて易貢措に入った。

易貢措から易貢蔵布の下流部の馬も通れないトレイルを辿り、二週間かけて易貢措から尼屋に達した。その時の紀行 "Assam Adventure" (London 1942) の中で「易貢蔵布のゴルジュはヤルン・ツァンポーのゴルジュより印象的であった。何故なら、これほど荒々しい景観を想像していなかったからである」とキングドン・ウォードは記している。彼は尼屋から西に向かう交易路となっている支流の尼屋曲に入り、ラチン・ラ（五三〇〇メートル）を越えて工布江達（コンポギャムダ）に抜けている。当時この当たりの地理的情報は殆んどなく、Assam Adventure に載っている地図を見ると、キングドン・ウォードは尼屋曲を易貢蔵布の本流と考えていたようだ。

一九四七年の夏に、プラント・ハンターのフランク・ラドロウに医師として同行したヘンリー・エリオットはラチン・ラを越えて尼屋曲中流部のニエト・サマまで行き、そこで植物採集をしている。私は二〇〇二年の秋に、ラチン・ラを越えて尼屋曲に入り、易貢蔵布を渡って、念青唐古拉山東部を北に横断することを企てた。そのとき、馬十一頭のキャラバンでプンカールを出発したが、降雪のためラチン・ラから引き返さざるを得なかった。

山に関して付け加えると、ベイリーは雪山や氷河については何も触れていないし、キングドン・ウォードも雪山や岩峰については少し書いているが、氷河については記述はない。易貢蔵布の北側にチベットでも多数の大きな氷河が存在することを二人とも知らなかった。キングドン・ウォードの地図では、易貢蔵布の北側は空白部である。

紀行～二〇〇五年十～十一月

一、易貢措へ

二〇〇五年十月二十三日、ラサ空港に降り立つ。チベット入りは十四回目である。今回も旅のアレンジは成都の四川探検旅遊公司の張継躍（ツァン・ジェ）とラサの西蔵登山協会のドウさんに依頼した。踏査のスケジュールを次の二つに絞った。

（一）　易貢措の北側の大氷河、できれば最大の恰青氷河に入る。

（二）　易貢措から易貢蔵布下部を尼屋までトレースする。

キャラバンの準備と高度順化をかねてラサ（三六九〇㍍）に三泊する。十月二十五日に、慶応大学山岳部ＯＢ隊が九月二十八日に初登頂したカルション峰（六六四七㍍）のＢＣ地点（四七八〇㍍）に出かけ五〇〇〇㍍まで登った。ラサから至近の距離に良い山が残されていた。熟年隊の目標にこの山を選んだ登頂者の河西瑛一郎さんの慧眼に敬意を表したい。

十月二十六日、快晴、七：三〇 am 三℃。ラサを出発、川蔵公路を一路東へ向かう。三日間快晴が続いている。祈祷のタルチョがはためく米拉山峠（メイラシャン）（五〇一三㍍）が中央チベット高原と東チベットの境界である。景観が茶褐色から緑の渓谷に変わる。道路は舗装され快適な六時間のドライブで林芝地区の中心である八一鎮（パイチェン）（三〇七〇㍍）に着く。この町は来るたびに現代的な都会に変貌しつつある。広東省が街づくりを支援している。ここで一泊し、キャラバン用の玉子、野菜、りんごを調達する。

十月二十七日、曇後雨、八：三〇 am 六℃。色季拉（セティラ）（四五〇〇㍍）を越える頃から雨となる。東久の手前まで舗装道路が続く。少数民族、メンパ族の村、排龍を過ぎヤルン・ツァンポーの支流、ポ・ツァンポー右岸の岩壁を穿った路を辿り、午後一時に易貢蔵布と怕隆蔵布の合流点（二〇二〇㍍）に着く。現在の通麦は合流点より少し東、怕隆蔵布の右岸にある。十年前は汚い小屋が三、四軒あっただけだが、今は街らしく整備されている。ここも広東省がサポートした。

いよいよ禁断の易貢蔵布に入れる時がきた。二〇〇二年の春に易貢措の近くまで行ったが、先の状況が分からず断念、二〇〇四年の秋には突然入域許可がキャンセルされ涙を呑んだ経緯がある。雨が降りしきる通麦で情報を集める。ラサとその周辺は三日間快晴が続いていたので、易貢蔵布も天気は良いだろうと期待していたが、もう八日も雨が続いていると言う。チベット高原と東チベットの峡谷部の気象の違いをあらためて実感する。なかんずく今年は天候不順で、雨季が明けるのが遅かった。

午後二：三〇に通麦を出発、合流点から易貢蔵布の右岸沿いの悪路を易貢措に向かう。この道は時々土砂崩れで不通になる。はたせるかな、四時ごろ土砂崩れでストップ。対向車のトラックを先ず通すために村人は道を直している。一時間半ほど待っ

て、急傾斜の狭い泥道をトラックは左右の前輪を八の字に撓ませながらようやく通過、素人目にはあわや転落かと思ったほど、恐ろしい場面であった。六：四五近くに易貢措の北側の易貢郷（郷は県と村の間の行政単位）の中心地、根扎村（ゴンツァ）（中白村二二六〇メートル）に着く。合流点から五〇キロメートルの道のりに四時間以上かかった。村長さんに頼んで郷の衛生院（病院）の一室を宿として提供してもらう。

村の中心には小学校、二軒の食堂と数軒の雑貨の店がある。食堂に村長を招いて夕食かたがた情報収集を行い、馬の手配を依頼する。村の実力者や、もし公安の役人がいれば、彼らにキャラバンの手配を頼むのが我われのいつものやり方である。

中村：「今までに易貢措から奥に入った外国人はいるでしょうか」

村長：「私の知るかぎる一組だけです。一九九二か九三年に六人のアメリカ人がやってきました。若果氷河にエンジン・トラブルで墜落したアメリカの飛行機の捜索と四人の乗員の遺体回収のためです。中央からの命令で波蜜県政府が協力しました。谷筋に橋をかけてトレイルを整備し、機体と遺体の一部を回収しアメリカに持って帰りました。彼ら以外で来たのは、ラサでNPOの医療活動に携わるイタリア人の女性医師だけです。彼女はここの衛生院でアドバイスをしました」

中村：「我われは山と氷河の偵察にきました。予定は若果氷河の手前、西側の恰青氷河に入ることと、易貢蔵布をできれば八盖（バケ）を経て尼屋まで遡り、嘉黎へ抜けたいと考えています。可能でしょうか」

村長：「恰青氷河に行き着くのはたいへんです。馬で一日行ったところの橋はなくなっており、馬が通れる道はありません。アメリカ人のために架けたその先の橋もなくなっています。もっと西側の別の大きな道格氷河へは馬を使って三日で入れます。尼屋までの情報はここでは分かりません。七〇キロメートル先の八盖までは馬を使えます。空身なら二日、キャラバンなら三、四日かかるでしょう。八盖から先のゴルジュ帯では馬は通れないでしょう」

村長さんの情報をもとに、探査の前半は北側の道格氷河へ、後半は易貢蔵布を行ける所まで遡ることとし、馬と馬方の手配を頼んだ。

易貢措を取り巻く山々と道格氷河（ダオゲ）

十月二十八日、晴後曇。馬の手配のため一日休養。降り続いていた雨が上がり青空が現れる。想像もしなかった華麗に氷雪をまとった尖峰の北面が易貢措の南岸に天を突いて聳える。土地の人は打巴西里（タバシリ）と呼ぶ。標高は五六四八メートルとさして高くないが、易貢措からの高差は三四〇〇メートルある。西に険しい尾根が連

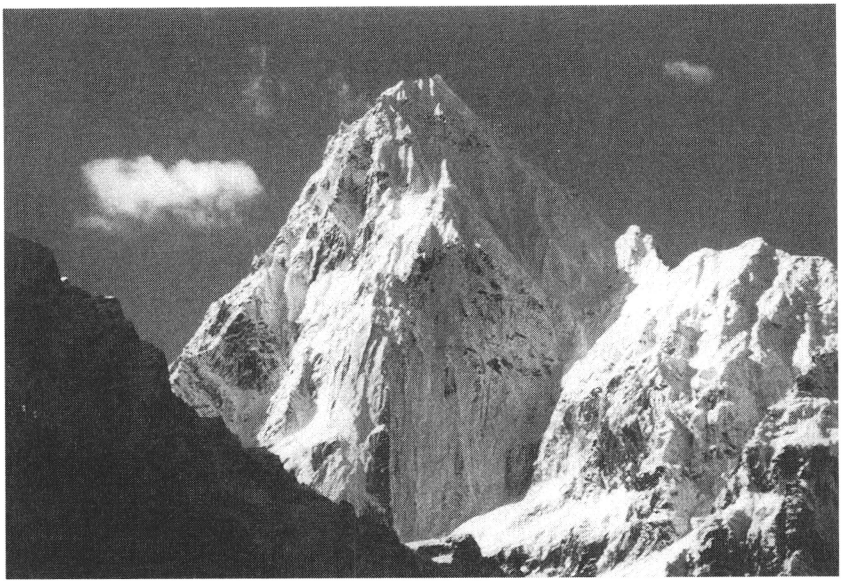


写真 2△　5648 m Tapaxiri, North face, South of Lake Yigong（易貢措）

山の写真位置図△内番号

なり迫力がある。その西側に波莫幇墩（ポモブンジュ）、別名、「七姑娘」と呼ばれる幾つかの尖った岩と雪の小塔が連なる五七八二メートル美しい雪峰がある。二つのピークの南に五九〇〇メートル峰が二つ地図上に存在するが見えない。

易貢措の北から東にかけて一回り大きい山嶺が連なる。土地の人が信仰の山として崇める納雍嘎簸（アヤゲモ）六三八八メートルが中央に聳える。肩幅の広い重厚なピークで、南面は圧倒的に雍ぎ落ちている。湖面からの高差は四〇〇〇メートル以上である。東南東に延びる尾根は五八六四メートルのピークを経て六三二二メートル、六一九八メートルの均整のとれた鋭峰へと連なる。これらのピークの北東側に全長十五キロメートルの夾別貢（チアビエゴン）氷河が発達している。視界にはないが、山嶺は波堆藏布（ポトイツァンポー）流域の則普（ゼプ）氷河を囲繞する山に続いている。

易貢措の西の端、桑林寺（サンリンス）（ラマ僧院）に近いところから大きな易貢藏布の大きな支流が北に延び、七キロメートルほど先の巴玉（バユー）（二三二〇メートル）で東西に分流する。東の谷が納雍嘎簸の山稜の北側で、本流である。この谷の北側から東の奥に恰青氷河をはじめ多くの氷河が発達している。西の谷は一八キロメートルほどで全長一四メートルの道格氷河に至る。末端に氷河湖がある。谷の途中に北から一二キロメートルの長さの貢普氷河が下ってきて末端に小さな氷河湖をつくっている。我われは二〇〇二年の春に、易貢藏布に入れなかったため急遽計画を変更し、東回りで長躯七五〇キロメートルをドライブし、念青唐古拉山東部の北側に入った。そのとき、易

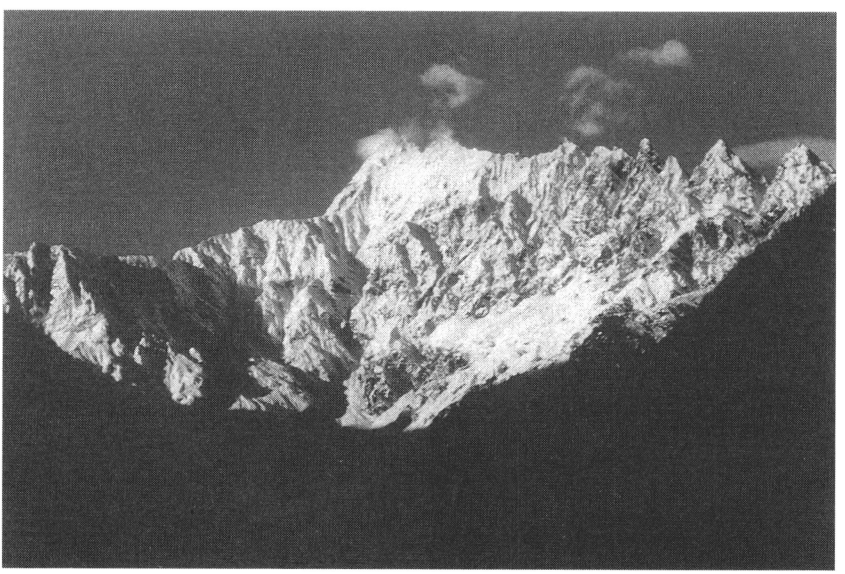


写真3△6　5782 m Pom-obunju (Seven sisters), North face, South of Lake Yigong (易貢措)

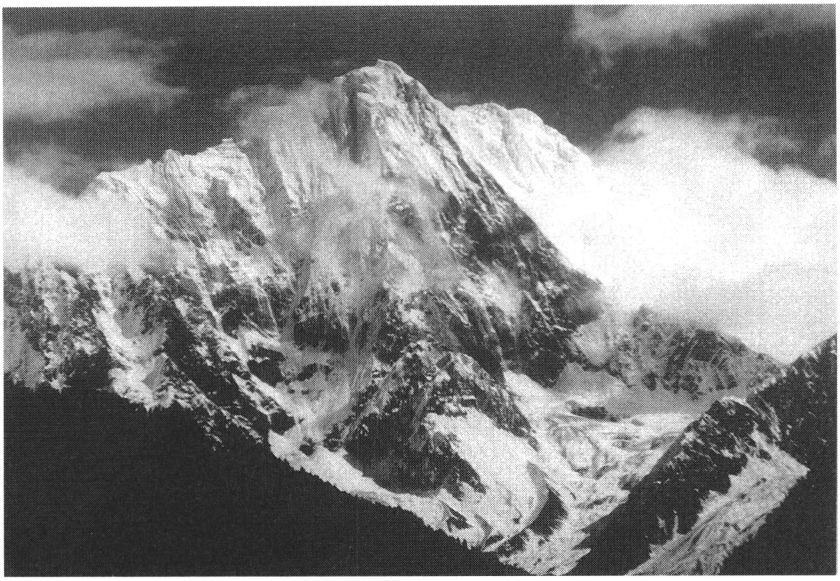


写真 4△　6388 m Ayagemo (Holy mountain), South face, North of Lake Yigong

写真 5△1　6322 m (Left) 6198 m(Right) Unnamed, West face, NW of Lake Yigong

貢蔵布に流れ込む大氷河源頭の六〇〇〇㍍峰の写真を北側から撮っている。

十月二十九日、晴後曇後雨、八：三〇am五℃。食堂の主人によると、天気が一番いいのは今の時期で、冬は山の上は雪、谷は雨が多い、二〇〇四年は十一月から十二月によく雨が降ったと言う。天候が非常に不安定な地域だ。

朝九時には約束通り馬がやってくる。馬六頭、カンバの馬方五人である。馬にたいし馬方の数が多すぎる。普通は一人の馬方が少なくとも三頭の馬を面倒みるが、ここでは様子が違う。飼い主が馬方としてきている。キャラバンの経験がないせいか、皆勝手に行動する。今までに四川、雲南、東チベットで使ってきた馬方と比べ質が悪い。五人の馬方のうち四人が二〇～三〇代で、二頭連れてきた一人だけが年配である。粗野で野卑、欲だけは人一倍なので、連中の扱いに苦労した。馬の費用は交渉の結果、馬一八〇元／一日、馬方一八〇元／一日に落ち着いた。これは相場並みである。

十時に根扎村を出発、北への支流を開けた平坦な道をのんびり進む。正面に五六〇〇㍍クラスの鋭いピークの連なり、北西の道格氷河の方角にシャープな円錐形の岩と雪の尖峰が二つ重なり合って見える。五八〇〇㍍ぐらいだろう。登攀意欲をそそるピークだ。昼に分岐点の巴玉村（二三二〇㍍）に着く。小さい集落で僅かな耕作地と放牧地がある。東が恰青氷河、若果氷河への比較的開けた谷で、谷の奥は雪峰に取り囲まれている。

われわれは西の谷に入る。谷は狭まり原生林となる。景観は一変し、さるおがせが纏わりつく椚、針葉樹、棘のあるブッシュが混成する湿った樹林帯を進む。足元は苔むし、岩がごつごつした泥道なので馬は難儀する。日差しが届かず薄暗い。亜熱帯雨林のようだ。ここがチベットとは想像もつかない。刺のある蔓が身体にまつわりつき落馬する。いつしか雨になる。この谷に来たことがあるのは私が乗る馬の馬方一人だけである。彼によるとこの谷へ入るのは狩猟のためだけで、牧草地は殆んどないので放牧はごく限られていると言う。午後三時半、僅かに開けた草地（二四二〇㍍）にキャンプする。じめじめした居心地に悪いところだ。この先は当分馬の草場がないと馬方が言ったが、一時間ほど先にもっと良い草場があった。一日の行程を短くしようとする馬方たちの常套的な作戦で、彼らのやり方はキャラバンの最後まで続いた。

十月三〇日、曇時々小雨、八：三〇am六℃。十時近くにキャンプ地出発。湿った薄暗い原生林の樹林帯を進む。苔が地表から樹木の下部を覆っている。植生は広葉樹より針葉樹が多くなる。二七〇〇㍍辺りから針葉樹がメインになる。途中、貢普氷河末端の小さな氷河湖（二七二〇㍍）を見に行く。変哲もない池の感じ。午後三時半、小さな牧草地（二八七〇㍍）に着き、ここでキャンプする。壊れかかった無人小屋が一軒あり、牛が

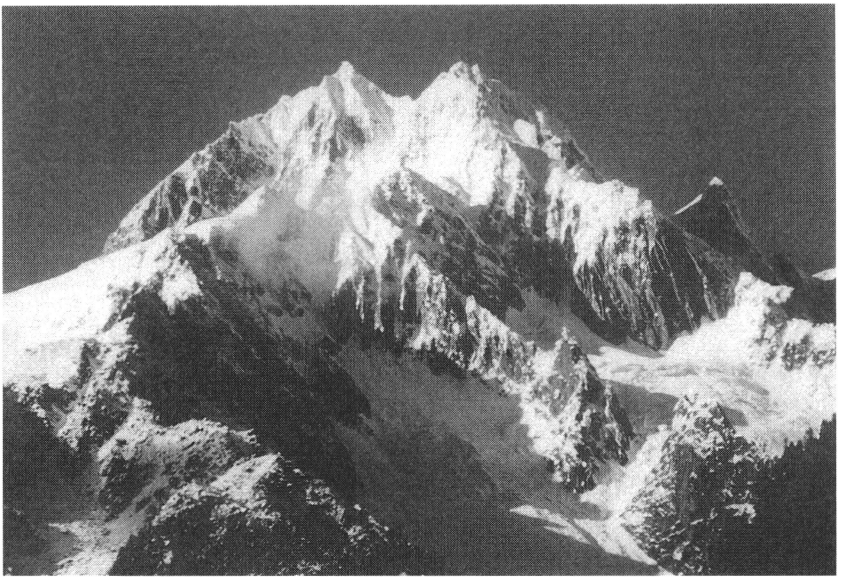


写真 6△9　5846 m Unnamed, South face, A peak near Qiaqing Glacier（哈青氷河）

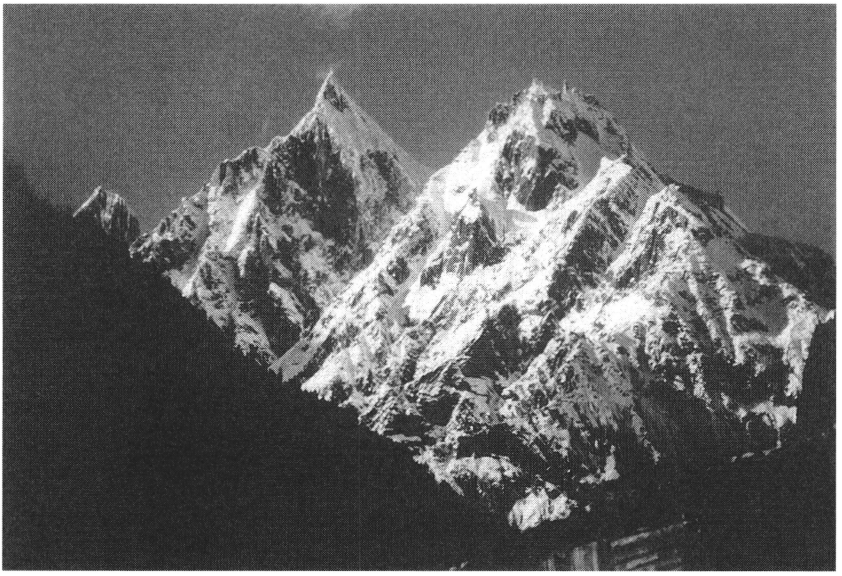


写真 7△8　CA 5800 m Unnamed, East face, Peak of Daoge Glacier（道格氷河）

数頭いる。夜中に相当雨が降る。

十月三十一日、曇時々小雨、九：〇〇 am 五℃。馬方とひと悶着おこす。易貢措で聞いた、三日で道格氷河に着けるという情報が間違っていた。馬方はこのキャンプ地から先、橋は架かってないので渡渉しなければならない、馬は行けない、氷河までは徒歩であと三日かかると言う。歩くといっても荷物を運ぶポーターはいない。天気は悪化の兆しを見せている。仕方なしに断念して引き返すことにする。今回は氷河には縁がないようだ。十時半にキャンプ地を出発して、来た道を戻る。天気は荒れ模様で山は雪、寒風が吹き降ろす。午後五時に根扎村に帰着する。衛生院の漢族のドクターに血圧を測ってもらう。二人とも正常なので安心する。ドクター夫婦はたいへん親切でよく面倒をみてくれた。

易貢蔵布を遡る

十一月一日、曇後雨、八：三〇 am 八℃。主目的である第二ステージに入る。往復十日の予定で準備をする。馬一頭とタシのアシスタントを一名追加する。馬七頭、馬方六人で午前十時に根扎村を出発する。念願の禁断の地に入ると思うと気持ちが高揚する。

易貢措の西端の村を過ぎて開けた谷を暫く行くとゴルジュ帯になる。キングドン・ウォードが驚嘆した峡谷である。両岸は樹木の茂った数百メートルの岩壁の下を急流が蛇行する。首が痛くなるくらい見上げないと空は見えない。トレイルは左岸を高巻きし、斜面を削り、岩を穿ってつくられているが、幅広い道である。大岩壁を過ぎると道は河原に近づき、また登って高巻きを繰り返す。キングドン・ウォードの時代、馬は通れなかったらしいが、いまは馬のキャラバンができる。それでも、危険な箇所は少なくない。雨のなかのキャラバンは厳しい。八盖郷の役人の話では、この六年の間に二〇頭の馬が川に落ちて死んだと言う。危険な箇所が少なくない。

易貢蔵布の流れは、言葉で表現できないほど美しい。時に青白の急流となり、また白く泡立つ激流となり轟音をたてて下る。やがて緩やかな流れになる瀞となる。吸い込まれるような青い清流である。岸辺の松柏とのコントラストが鮮やかである。ヒマラヤの東で一番美しい川だろう。夕刻六時近くに塔魯（タルー）（二五七五メートル）の村に着く。今日は途中で泊まれる場所がないので頑張った。この村は三十一家族、二百人で、行政的には八盖郷に属する。電気はないが、日用品を売る家はある。村の広場にある集会所に泊めてもらう。屋根があり、囲炉裏と火があるだけ有難い。折りよく、八盖から役人が来ていたので、村の事情通も呼んで情報を集めるが、八盖に外国人が来たことはない、八盖からは三方に雪山がよく見える、ということ以上には役立つ知識は得られなかった。夜は大勢の村人と子供が集まってきて

夜中まで賑やかだった。

塔魯の北西には全長二一キロメートルの江普氷河と六六九二メートルを最高とする幾つかのまったく知られていない六〇〇〇メートル峰があるが、今回は探査できないのが心残りである。塔魯の南側には布泰格（フーロング）という六三一〇メートルのピークがあるが同定できない。

十一月二日、雨、八：三〇am六℃。雨降り続ける。塔魯から道は極端な泥道になる。八盖までの道案内に村人一人と馬一頭がキャラバンに加わる。馬八頭、馬方七人で、塔魯を十時半に出発。馬も馬方の数も多すぎ金がかかるが仕方ない。江普氷河から下る川の橋を渡り、暫くすると、道は泥沼のようになる。深いところでは三〇センチメートル以上もぐり馬が難儀する。歩く馬方も泥まみれだ。植生は道格氷河への谷と同じで、湿った亜熱帯雨林的な原生林である。

ここで、植物の専門家、キングドン・ウォードの観察を *Assam Adventure* から引用しておこう。

「大きな樹林帯を一マイルほど登った。老木は周囲の長い幹をもっていたが、オーク以外は何の木か分からなかった。大きな複雑な葉をもった美しい木は、多分セドゥレラかアイランサスだったろう。頭上を厚くおおう枝葉は密生していた。絡まった大きな蔓、豊かな苔類、よく成長している下生えは同定できた。が、収集は困難だった。ここの湿潤なセミ常緑樹林はゴルジュ帯の谷底に沿って生成しているだけで、数百フィート崖の

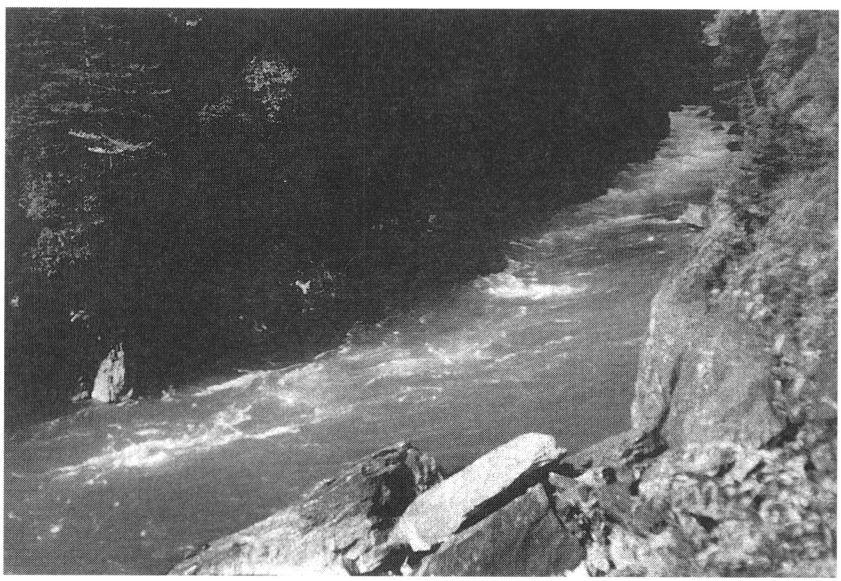


写真8　Yigong Tsangpo（易貢蔵布）

上部では平均的によく見られる針葉樹か、ドクニンジン或いは松が優勢である。我われは少なくとも海抜八〇〇〇フィートのところにいて、巨大な雪山の山稜に完全に取り囲まれていた。谷底に滞留した湿気が暖かさを保ち、シェルターの役割をはたし、いつも変わらぬ湿った大気がこのような森林を育んできた」

道はずうっと易貢蔵布の左岸沿いである。易貢措の西端から八盖の少し先まで橋は架かっていない。約八〇キロメートルのあいだ右岸には村落がない。ゴルジュ帯が人を寄せ付けないのだろう。八盖までは村落はすべて左岸で、支流との出合いの小さな段丘を耕作している。易貢措から八盖までの間にある村落は、塔魯、巴瑞（ラマ寺あり）、巴（芒果）、冬竹、木玉（ポユー）である。午後一時半に巴（芒果）の村はずれで昼食、二時間近くかかる。ガイドのタシが馬方たちの時間稼ぎだといって怒るが、彼らは馬耳東風である。五時にキャンプする。標高二六四〇メートル。

十一月三日、曇後晴、八：三〇 am 五℃。気温下がり、気圧上がる。十時に出発。樹林帯の泥道を進む。青空ではないが右岸に雪山が覆いかぶさるように見えてくる。五七〇〇～五八〇〇メートルの鋭角的な山容で新雪を纏った西壁は迫力がある。下は深いゴルジがつづく。午後三時半に開けた牧草地を過ぎる。放牧小屋がある。ここから八盖の南側の秀峰、タシランルン六一七〇メートルの東面が見える。この辺りはゴルジュが途絶え美しい清流が続く。午後六時に支谷との合流点（二七五〇メートル）の針葉樹の

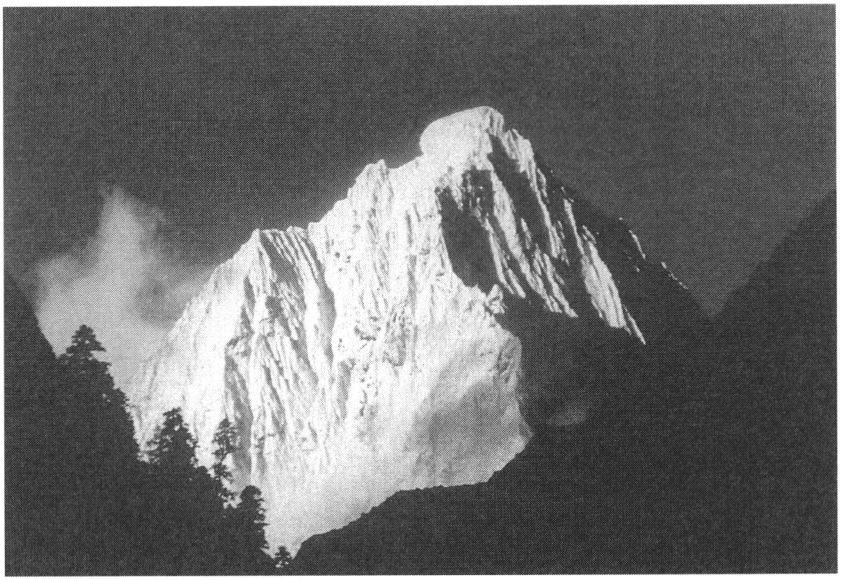


写真9△　6170 m Tashilanglung, East face, South of Bake（八盖）

大木の下にキャンプする。

十月四日、晴、八：三〇 am 二℃。夜半は満点の星空だった。朝暗いうちにテントをでてテントの裏手を登り、タシランラン北東面のモルゲンロートを撮る。美しく幻想的な写真である。明け方になると霧が谷に立ちこめ、八時半ごろから晴れ上がる。この谷の好天のパターンのようだ。九時、キャラバンより一足先に出発する。暗い樹林帯を抜け開けた冬竹の村にでると南正面の谷の奥にロシア地図の五八九一㍍峰北面が姿をみせる。巨大な氷雪の塊のようだ。しばし圧倒される。ここでは易貢蔵布は静となりゆったりと流れる。トルコ石色の青さとのコントラストは絵のようだ。

午後一時に木玉（二八〇〇㍍）の村に着いて昼食。塔魯に次ぐ大きな村だ。村人が群がってくる。土地の人はこの村をプューと発音する。キングドン・ウォードはBoyuと書いている。中国の地図でなぜ木玉（ムユー）と標記するのか分からない。一般論だが、チベット語の発音を漢語で表すこと自体が、本来の読み方から離れていってしまう。方言の場合はなおさらである。多くの西欧人が批判しているところである。午後四時半に八盖郷の行政の中心、八盖村（二八四〇㍍）に着く。郷政府の建物の一室を借りて泊まる。この日は泥道のなかで落馬して指先を切り、左手首を捻挫する。鞍がしっかりしてないので常に不安定である。

八盖にて

十一月五日、晴時々曇、八：三〇 am 二℃。八盖村とその周辺は開けている。奥に大きな氷河と幾つかの六〇〇〇㍍峰を頂く谷が合流する右岸の段丘に広い耕作地があり、農家が点在、村の中心部は村落を形成している。易貢蔵布の青い本流はますます印象的な渓谷美を醸しだしている。村はずれに木造の立派なラマ寺がある。郷の中心地だけはある。しかし、七〇年まえにここを通過したキングドン・ウォードはこの村をションギー（Shonggy）と書き、あまり説明はしていない。もう少し上流の現在の日卡村をラグーンカ（Ragoonka）と記し、この辺りの経済活動の中心としている。時代の変遷だろう。

この日は馬方たちの要望を入れて休息する。午前中は上流へ歩いて往復するが、景観に変化はなかった。直ぐ南側に聳えるタシランルン六一七〇㍍は北壁上部が雲に隠れたままだ。北側の氷河の奥の六〇〇〇㍍峰は時おり雪の尖峰が見え隠れするだけで全貌は姿を現さない。暫く村の中心部を散策する。村人は愛想がいい。

午後と夕方に郷の役人から情報を集める。一番の関心は易貢蔵布下流部と上流部の中間地点、尼屋（忠玉郷）までのルートである。八盖村と尼屋との村人の往来はあり四日かかるという。ただし、馬で行けるのは一日半ぐらいで、後は悪路で馬は通れ

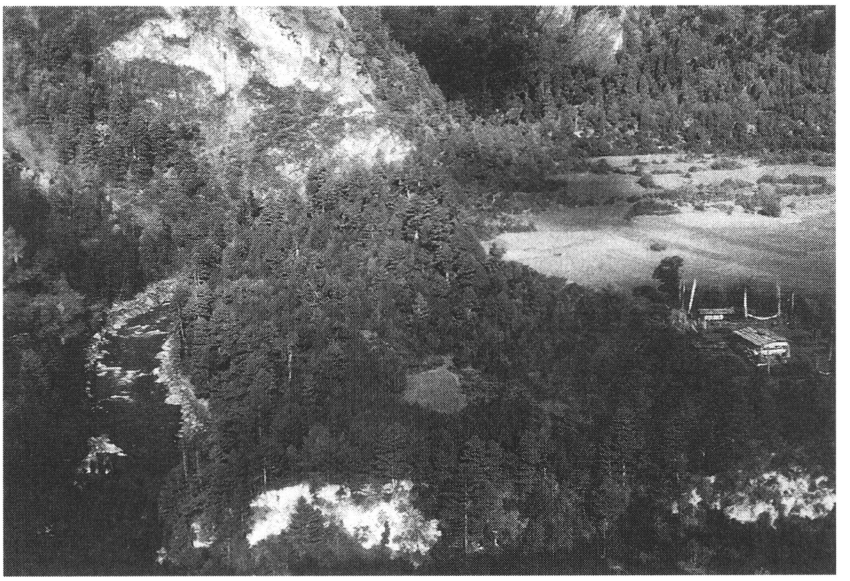


写真10　Bake Village & monastry（八盖村とラマ寺）

ないので歩かねばならない。キングドン・ウォードの紀行でも、尼屋の少し下流のゴルジュ帯は危険な高巻きを強いられたり、道に迷ったりして、行程中で一番難渋している。もう一つの関心事は外国人が入って来ているかである。村人は、外国人は来ていないと言うし、六年間ここに住む郷政府の次長さんも同じことを言う。多分、キングドン・ウォード（一九三五年）以降、外国人は来ていないのだろう。

八盖の現在を紹介しておこう。八盖郷の人口は一四二四人。八盖村は三十六家族、一九二人。住民の大部分は波蜜人だが、カンバもいて混血が進んでいる。郷全体で小学生は一一一人。チベット自治区政府は教育には力を入れている。通麦から易貢措へ来る途中でトラックに乗った三〇人ほどの子供に出会ったが、彼らは波蜜の中学に入学するために八盖郷から出てきている生徒である。子供一人を中学に入れるために、政府は牛一頭とソーラー・バッテリーを家族に提供して、子供たちが義務教育をうけられるようサポートしている。易貢措から八盖村まで自動車道路を建設する計画があり、着工は二〇〇七年以降である。禁断の辺境も早晩変わって行くだろう。郷政府の役人は、八盖の人間は性質が悪く盗みが多いと言う。しかし、村人の表情は明るく、フレンドリーである。我われの馬方たちのほうが粗野で不親切である。

ガイドのタシは馬方に手を焼いている。きつく締め付けると

反乱を起こしかねないので、機嫌をとりながら我われの旅に齟齬をきたさないように気をつかっている。我われのために持ってきた食料も半分以上は馬方に食べさせている。さらに、八盖村で乾麺やビール、白酒（中国の焼酎）を買い与えたが有難がる素振りはない。身勝手でサボりたがるし、要求はエスカレートするばかりである。一九世紀の末、一八九二年にチベットを西から東に横断した英国の軍人探検家、ハミルトン・バウワーが東チベットのカンバの要求に苦労していたことを思い出す。

雨は降らないので好天のサイクルに入りつつあるようだが、まだ高峰には絶えず雲が纏わりついていて、写真が撮れない。午後から夕方にかけて雲が多くなり、山は雪模様で寒くなる。夜になると落ち着いて星がみえてくるが、夜中の雲の動きも変化が大きい。谷間のせいか、夜半は暖かいが明け方になると冷えてきて、午前八時半ごろが最も寒い。快晴が続く日はもう暫く待たねばならないようだ。

帰路につく

十一月六日、晴、八：〇〇 am 三℃。後ろ髪を引かれる思いで帰路につく日だ。

北の谷の氷河と六〇〇〇メートル峰の全容を写真に収められなかったのは心残りである。馬が通過できない一番難しい区間、八盖から尼屋までの易貢蔵布下流部の完踏は将来の楽しみに残す。尼屋から八キロメートルほど下ったところ、北から流れ込む支流、夏曲（シアチュー）との合流点から下流のゴルジュ帯が最難関のようだ。深い峡谷で、キングドン・ウォードは「見上げると空が帯状に見える」と表現している。

易貢蔵布にたいする欧米の関心は強い。二〇〇五年十二月に英国アルパインクラブ・二〇〇五シンポジウム（テーマ「ヒマラヤの東」）で一五〇枚のスライドを使って基調講演をしたが、そのとき易貢措の山が特に興味を引いた。ミック・ファウラーは打巴西里の圧倒的な氷雪の北壁に目を輝かせて。登山家以上に易貢蔵布を注目しているのが川下りの冒険家たちである。帰国して暫くすると、知らないご仁から一通のEメールが届いた。

「トム、あなたの易貢蔵布のニュースと写真を今受けとりました。驚きです。よくやりましたね。私は二〇〇三年に水源からポ・ツァンポーをカヤックで下る国際的なチームをリードしました。その年、カヤックで易貢蔵布を源頭から一二五キロメートル下って尼屋の先のゴルジュの手前まで漕ぎ下りました。ゴルジュの入り口まで歩いて行きましたが、危険すぎるので下降を断念しました。今年（二〇〇五年）然烏湖（ラウー）からポ・ツァンポーの合流点まで、怕隆蔵布をカヤックで完全下降しました。その後、我われは易貢蔵布を遡ろうとしましたが、車道を僅か一五キロメートル行ったところで、土砂崩れのため先に進めませんでした。将来、いつの日か完全下降を計画しています。あなたの情報は真に役に

たちます。ところで、尼屋からどの辺りまで入ったのでしょうか。川蔵公路の橋から何キロぐらい上流まで遡ったのでしょうか。いつリポートを出しますか。……二〇〇五年十一月二十四日　クリス・ジョーンズ（Rafting and Kayaking In Tibet, Tibet Wind Horse Adventure）」

ジョーンズに私の情報と写真を送ったのはアメリカの川下りの専門家、ピート・ウインである。ピートはメコン川を東京農大と合同で下っているし、サルウィン川源流初下降、インダス川初下降などのトップクラスの専門家である。メコンが縁で、私はピートに川の写真を送り続けている。山の世界以上に川下りの世界はネットワークが狭いようだ。易貢蔵布は川下りの冒険野郎にとっても禁断の地であり垂涎のフィールドのようだ。

午前九時に馬が揃う。出発にあたって郷政府の次長さんが、危険な場所では必ず馬から下りて歩くようにとアドバイスしてくれる。薪あつめの籠を背負った娘さんたちと前後してあるく。快活で笑い声が絶えない。八盖村の集落を見下ろす小さな峠で別れを告げる。帰りは速い。放牧小屋のあるところでキャンプ（二七一〇メートル）する。

十一月七日、晴、八：三〇 am 三℃。右岸のバルンのいう谷の奥にタシランルン六一七〇メートルの東面が見える。午前十時に出発し、午後二時に巴（芒果）で昼食、馬方は二手に分かれて食べている。タシに聞かせると、仲間割れだという。理由は、私と永井さんを載せた馬の荷物（人間）の目方は変わらないのに、食料や装備を積んだ馬は積荷がどんどん軽くなっていくので不公平だということらしい。六時には塔魯に着いて往路と同じく集会所に泊まる。馬方にあらかた食べられてしまい、食料が殆んど底を突く。馬方たちはビールで酔っ払い夜中に戻ってきて、我われが寝ている枕元で騒いだり、踊ったりし大騒ぎをし、挙句は嘔吐する始末。穏やかな永井さんもさすがに我慢できず、静かにしろと怒鳴る。

年配の一人を除き、馬方たちの話題は殆んどセックスのことらしい。露骨な会話が飛び交う。我われにも身振り手振りで示す。村に着くごとに夜這いを試みるが成功していないようだ。易貢措の村では若い娘さんは町へでて食堂などサービスで働くが、男の若者には農業以外にあまり働き口はないと言う。嫁を迎えるのが大変なのは日本の田舎と似ている。独身の馬方たちの欲求不満に同情の余地はあるが、余りにも野卑なのでうんざりする。

十一月八日、やっと快晴の天気になる。八：三〇am四℃。明け方暗いうちに起きて、右岸の山の写真を撮るために村の裏手を登る。やがて陽が差し始め連山がモルゲンロートに染まる。五六〇〇メートルから六三〇〇メートルのピークが連なっているはずだが、ロシアの地図の上で同定できない。主峰の布泉格（プロンノン）六三一〇メートルを想定するが自信がない。今日はキャラバン最後の日だ。歩いて

ゴルジュ帯の写真を撮る。岩を噛む奔流、吸い込まれるような青く美しい流れの景観はどんな美辞麗句で表現しても誇張しすぎることはないだろう。

易貢措の西端の村で永井さんは新調してきたストックを盗まれ、私の馬方はどこかへ行ってしまう。この日は殆んど歩き通して、午後六時に根扎村に帰着する。衛生院に落ち着いてすべて終わったとリラックスしていたら、馬方と費用の精算で悶着が起きる。分別あると思っていた年配の馬方から意表をつく要求を突きつけられる。彼だけが馬二頭を連れてきたので、馬方の費用は二人分払えと言って譲らない。十一日間のキャラバンなので、八八〇元出費がかさむ。埒があかないので、村長に仲裁に入ってもらい、彼の裁定に従い三〇〇元で手を打った。交渉が終わって、馬方の飛躍した論理に感心する。

十一月九日、快晴。打巴西里五六四八㍍のモルゲンロートを撮る。通麦で待機していたランド・クルーザーがやって来る。午前十一時に衛生院を出発する。厄介な馬方たちではあったが二人が見送りにきてくれた。親切なドクター夫妻と別れを惜しむ。易貢措の南岸から湖と対岸の納雍嘎簸六三八八㍍と六三二二㍍峰の写真を撮りながら、のんびりと通麦に向かう。一仕事終わったという安堵感に浸りながら川蔵公路を西に進む。翌朝、色季拉（四五〇〇㍍）への途中でナムチャバルワとギャラペリを見るために魯朗（三三八〇㍍）に泊まる。

十一月十日、快晴、八：〇〇am（マイナス一℃。三年振りにナムチャバルワとギャラペリ三山を望む。八一鎮には泊まらず、八松措まで足を延ばす。時間があるので、北東のベナ谷の入口まで往復し、錯高郷の中心の結巴村（三五一〇㍍）で旧知の格桑多吉さんの宿に厄介になる。家族ぐるみで暖かく迎えてくれ、熱々のチベット風すいとんで歓待してくれるのが嬉しい。

十一月十一日、快晴、八：三〇am（マイナス六℃。冬の訪れである。寒い。八松措に紅葉と岸辺の六〇〇〇㍍峰が映える。午後四時、ラサに帰る。忙しい旅だったが大きな収穫をえた。ドウさんから英国のミック・ファウラーの隊がカジャチョ六四四七㍍をNZのシーン・ウオーターがビルタソ六六九一㍍をそれぞれ初登頂に成功したこと、スイス隊はチュウチェポ六五五〇㍍に挑んだが登れなかったと、念青唐古拉山東部の登山情報をえた。翌日、成都へ飛んだ。忙しい旅だったが収穫は大きかった。

図書紹介

学習院輔仁会山岳部・山桜会 編

『學習院登山史（Ⅰ）一八八七～一九五三 山桜―特別号』

二〇〇六年三月刊
A4判　七六〇ページ

総頁数七五七頁の學習院登山史（Ⅰ）は不思議な本である。この本はタイトルからして、これまでの多くの学校山岳部の記念誌とは趣を異にしている。

この本は一八八七年（明治二〇年）學習院の雑誌である輔仁会雑誌に初めて登山記録がのったことからスタートして、一九一九年（大正八年）に輔仁会旅行部（山岳部とスキー部に分かれていた）が出来て今日に至る山岳部の活動の記録である。しかし記録というには何故か心にひっかかる。

明治二十年といえば、ウェストンが中央アルプスに初めて登ったのが明治二十四年、槍ヶ岳に登ったのが明治二十五年であり、城数馬・小島烏水・武田久吉・高頭仁兵衛等、日本山岳会創設の人々が日本の山々に登り始めたのが、ウェストンを追って明治三十一～四十年の頃であり、山岳会創立が明治三十八年（一九〇六年）であることを思えば、まことに古く意義あるスタートであったと言える。記録というより、この間に山を登り山のことを考えた人たちの「山登りの哲学のかたまり」みたいなものだ。

編集にあたった橋本實・錦織英夫・石川正弘他五名の編集者たちは、編集の方針を冒頭の松方三郎さんの「随想」と「編集方針」に書かれているが、まことに自由闊達な調子で書かれている。

本史の中でいろんな人がいろんな世代で「インディヴィジュアル（individual）」という言葉が大切にされている。あとがきで石川正弘は「……歴史書を読む時、人は概ね、善と悪、白と黒、勝者と敗者といった風に分別してしまいがちであるが、本院登山史もまた決して数人の卓越した人物によってではなく、友人や先輩との濃密な関係の中で、時には山登りに対する意見の相違を調整しつつ創られてきたことに気がつくのである。『良き山登り』といったようなものがあるとすれば、それはかなり偶然性の高い人と人の出会いによって左右されるのではなかろうか。本院山岳部には特にその点が顕著であるように思われる……」と書いている。そういう人間関係が「individual」

つまり「自由気儘に勝手にやる」という気風が強く大切にされている。記録することより登ることだということから、とにかく、この本を作るにあたって編集の人達は資料集めに大変苦労されたという。編集者が図書館に埋もれた資料と三年の間格闘してこの本を作ったという。この本を読むと、明治の時代から學習院の山登りにかかわった山岳部の枠を超えた多くの秀れた先人達が一人一人山に対した想いがたくさん盛られている。特に明治という日本人にとって大変創造的なアクティブの時代を創造しリードした秀れた人々が學習院という特異な人脈の中から多く「山に登ること」に関連し、學習院という枠に捉われず他校の山を登る人達と自由に交流し、共に登ることの中に學習院大学輔仁会山岳部・山櫻会の秀れた「山に登る心」が育まれていることが良くわかる。

特に本登山史が「學習院登山史コア・パースン一覧」と「個人別略歴」に三〇頁を割いて、六十余人を載せていることは圧巻である。細川護立・乃木希典・長岡外史・レルヒ・志賀直哉・板倉勝宣・松方三郎……と真に秀れた豊かな人々の血と心がこの山岳部の源流にある。

學習院の山登りが山を登ることだけでなく、もっと大きい広い多くの心に育まれ、自由気儘に自分の好きなように山を登った国士の在ることに驚く。そして真に自由に良い山登りをする仲間を求めて自由に他の学校との交わりも深い。「涸沢の岩小屋での生活」、「関のスキー合宿」、日本にとって初めての海外遠征であったアルバータの遠征登山等々、真に多彩豊潤である。この登山史には麗々しく「～記念ヒマラヤ登山隊」といった記録は少ない。あくまで仲間の一人一人が何処に何を考えて誰と登ったかを大切にしている。

つなぎとして編集にあたった方々が自分達が育てられ伝えられてきた山に登る心を豊かに正しく伝えている。

この本は良く見てみると真に体系立っていない本だ。しかし、その時代に生きた部の人達だけでなく、その周りの人も含めて大事に編集している。

登山史というか山岳部の歴史は何の為にあるのだろうか。やはりそれぞれの時代にそれぞれの人が如何に登り生きたかを書きとどめ、かつ後に伝えることに尽きるだろう。そういう意味では読みづらい体系のない本だが、山登りを大切にしている者には読んで心に残るものが多い本である。

付記――先日「山櫻通信No.25」を送って頂いた。その中にこの本を読んだ現役の学生さんの感想文があったので、それの一部を書き残して終わりとしたい。

「……この一冊の本は見掛けの面持ちから取っ付きにくく感じていましたが、開いてみると人間味溢れ、無味乾燥な時事的な記録では決して無く、一人の人間の視点から見た当時の状況を垣間見ることができて、とても興味深く感じます。そして読

んでいく中で、他の大学とうちの大学の違いを考えました。しかし、言語で表現することは難しいですが、雰囲気の違いをおぼろげながらイメージはできました。

そうしたニューアンスが集約されているのがあの登山史であり、そこに学習院山岳部の概念があるように思います。統一的な考えを強制しない雰囲気、各人が考える山登り。この概念を考える上での共通する項目は、全員が学習院の山岳部に所属し、その時代を生き抜き、時代を創り上げて布石を残していったこと。そして、今の学習院山岳部があり、今までそうした歴史で繋がっていると考えると、とても不思議なことのように思えます。……（Mさん）」

（田辺　壽）

同志社大学山岳部・山岳会 編

『山　その大いなる旅』

―同志社大学山岳部・山岳会　八十年の足跡―

二〇〇六年五月刊

二一cm×二四cm　六七〇ページ

堅牢な白い函から濃紫色の布を張った厚い表紙に包まれる書物を引き出す。やや小ぶりな色紙と呼べるほどの大きさのこの書物は紙質といい、程よい活字の色といい、上品で上等であって、類書を尻目にかける立派な造本に驚嘆させられる。二段組みされた活字の大きさが適切で、重量と厚さに抵抗を感じないで読むことができる。たんに思い出話と記録を寄せ集めて周年を祝おうというだけの記念出版物でないことが察せられる。編者たちの思いがこのような外面から伝わってくる。文字を読むより先に、私は「幸せな本だ」と思った。そして、内容もまた、自分たちの刻んだ歴史の足跡を「大いなる旅」と呼ぶことのできる幸せを告げる。

一九二五年に生まれたスキー部を前身とする山岳部が誕生後八十年を迎えた。すでに七十年目に節目を祝う映像資料を作った同志社大学山岳部の出身者たちが、今度は文字によって歴史を一冊にまとめたのが本書である。

巻頭に海外登山の成果を見せる美しい写真と祝辞のたぐいが並び、巻末に置かれた編年体の行動記録が本書の三分の一を占める。実質で四〇〇余ページの寄稿と座談のうちの一〇分の一近くを遭難死した部員たちの追悼が占める。愛児を失った親の慟哭を語る文章も欠けてはいない。死者たちへの哀悼の意を表する気遣いが、私にはキリスト教会のレクイエム（鎮魂歌）と似たものに感じられた。このような気配りに私は感動を覚えた。そして、影の部分を隠し立てしない正直さが「幸せな本」とい

う印象をいっそう強める。

栄光の部分を後回しにしたことを同志社大学山岳部にかかわりを持つ人たちに叱責されるかも知れないことを覚悟の上で、あえて私が影の部分を先に取り上げたのは、影によって光がいっそう輝きを増す、と言いたかったからである。

日本登山史が大学生たちによる雪と岩の時代を開始させた時代に、同志社大学の学生たちが、先陣を切る他の大学にならって山岳部を誕生させた。日本アルプスからヒマラヤやアンデスへと向かう道筋それ自体は、この歴史の流れに沿うものであった。その流れの中で意識的に入域の困難である地域を目指すことを理念として掲げ、この理念に沿った計画を立てて実行しようとするエネルギーが一九六〇年のアピ（七一三二㍍）から、一九六三年のサイパル（七〇四〇㍍）、一九八一年のスークーニャン（六二五〇㍍）、一九八五年のナムナニ（七六九四㍍）、一九八八年のカント（七〇五五㍍）、二〇〇二年のカキュ・カンリ（六九五九㍍）に至る一連の初登頂を実現させた。西ネパール横断、アラスカ学術調査（リーガン登頂）、アンデス・アマゾン探検（サルカンタイ登頂）と一九七〇年のダウラギリ主峰登頂が華麗な間奏曲を奏でる。さらに日本山岳会とその支部に参加した会員たちが、平林克敏氏のエベレスト登頂を筆頭に、マカルー、K2、ローツェで活躍した。入学と卒業のサイクルによる新陳代謝のはげしい大学山岳部の宿命を克服する立派な業績であった。いや、高さと困難さだけを基準にして山岳部や山岳会の価値を測るのでは不十分である。同志社大学山岳部がヒマラヤ方面に耳目が集中する時代にいち早く北方のカムチャツカに足跡を印していたことを見逃してはいけない。ちなみに、日本山岳会創立百周年を記念して発行された『英文ジャーナル・日本登山の百年』に日本人による海外登山の主要なものが挙げられている。Doshishaの名とともにアピ、ダウラギリ、スークーニャン、カント、およびアンデスとサハリン（樺太）での活動が言及されている。同志社大学山岳部の活動の質の高さが英語文献にも示されている。国際的な情報となったこれらの遠征の詳細が本書に網羅されている。

本書から読み取れるもう一つの特徴として、山岳部の枠を超える登山についての報告を挙げておこう。同志社大学は学生数が多い大学とは言えない。いわゆるマンモス級の大学であれば裾野の広さに比例した山岳部員数と活動の質と量とが期待できるだろうが、そうでない場合は比較的に少ない部員たちが密度の濃い人間関係によって登山の質を高めることになる。それは良い意味での人間関係の醸成を助ける効果を持つ。気心を通じ合わせることと登山行為の質を高めることが不即不離の関係を持つ。戦後いち早く復興の歩みを開始できたのも、また、アピ遠征が日本山岳会隊のマナスル初登頂に次ぐ日本人隊による二つ目の初登頂としての快挙であったのも、このような特性の賜

物であったことが本書から推理できる。さらに、付属高校を持つ大学の特徴として高校時代に経験を積んだ者たちが大学に進んで、大学入学時に登山を開始する者たちを刺激してくれる、ということもまた特性の一つに挙げられる。畏敬すべき行動力を保たせる幸福な関係が部員とOBによって維持されてきたことを本書から読み取ることができる。しかし、それでもなお大学単位で成り立たない行動もある。そのような場合に大学の範囲を超える必要に迫られる。本書においては、先述のエベレスト登頂に成功した平林克敏氏を始め、日本山岳会東海支部隊に参加してマカルーにおもむいた後藤敏宏氏、同じく東海支部隊に同行して冬季ローツェに挑んだ千田敦司氏、日本山岳会青年部隊に加わってK2を目指した佐野崇氏がそれぞれに実例を報告している。

もとより、突出した成果を誇るのが目的でこの書が編まれた、と思うべきではない。要領良くまとめられた編年体の部活動の歴史の部で山岳部に籍を置いて行動に参加した者たちの名が並ぶ。そこには京都北山や比良など大学を包む山域での行動とその参加者も記録されている。京都からヒマラヤまで、途切れのない道がつけられているかのようである。同志社の同志社らしさがこのようなところにさりげなく示されている。

これらの活動を振り返って往時を懐かしむ会員たちの記憶と記録を読むうちに、同志社大学の個性が印象的に浮かび上がる。京都を包む山々が、学生たちを早くから誘っていた。創立者である新島襄が一八七二年から一八七四年にまたがる欧米滞在において山野を歩く若者たちの運動を刺激と感じ、体育と知育の両面から登山を奨励した。「山河跋渉」と呼ばれた山歩きの行動が「日本の学生登山の草分けともいえる習慣であった」というのも誇張ではない。数ある大学山岳部の亜流に甘んじるのでなく、同志社の山岳部の個性的な歴史を誇らかに振り返ることのできる人たちの「幸せ」を慶賀したい。

会員による随想集の部分では卒業後に山岳部での体験が趣味や実業にどのように生かされたかが語られる。それと並んで、戦争によって青春を奪われた者の嘆きの声も聞かれる。山に始まって山に終わるのではない。山岳部に在籍したことが人生の全体にとってどのような意味を持ったかを暗示させる章を配したところに本書の特性の一つがある。

会員たちによる寄稿と座談は、しかしながら時にアルピニズムをスポーツと認めるか否か、山岳という自然の舞台を必要としないクライミングを山岳部の活動にどう位置づけるべきか、といった真剣な議論に及ぶ。さらに日本の登山界全体を覆う高齢化現象と山岳部の量的な衰微の現状から将来への不安が告げられる。同志社大学山岳部もまた、長い青春期を謳歌したとは言え、長寿であるがゆえの老いの悩みをかかえる。それを過去礼賛に酔うことに終わらせずに、正直に語っているのが、この

八十年誌の特質であり、その特質が本書を味わい深く一読の価値をもつものとさせている。

（宮下啓三）

Tony Astill 著

Mount Everest : the Reconnaissance 1935. The Forgotten Adventure

Published by the author, Southampton, U.K., 2005. 26.3×18.5 cm, xvii＋359 pp.,

一二五図、九地図。三〇ポンド（約六七五〇円）

この二〇〇六年の春のエヴェレストも、たいへんな賑わいであったようで、北側（中国）から三〇〇人、南側（ネパール）から二〇〇人もの人たちが頂上に立ったという。遭難者も十一人、まさに魔性のなせる業とでもいえようか。一九五三年の初登頂以来、登頂者数はこれで軽く二〇〇〇人を超えた。そして種々の記録も競われる。無酸素、時間競争（早登り）、登頂回数、年齢（若年と高齢の記録）、さらにスキーやパラパント、商業的公募登山などなど……。いまでは普通の登り方をしていては、だれも見向きもしないのかもしれない。

一九九三年にイギリスのオードリー・サルケルドとアメリカのジョン・ボイルが『エヴェレスト文献目録』を編集・出版した。それには単行本などエヴェレスト関係の本が六〇〇点近く収録されている。それから十三年、文献がさらに加わっているであろうが、世界の最高峰にふさわしく、その数は他の山々を抜いて、やはり世界最多ということになる。

さて、イギリスは一九二一年に最初のエヴェレスト偵察隊を派遣して以来、その都度、きちんとした公式報告書を公刊してきた。そう思い込んでいたところが、一九三五年の第五次隊（エリック・シプトン隊長）の単行本はなかったのである。ただ、翌年の第六次隊（ヒュー・ラトレッジ隊長）の公式報告『エヴェレスト――未完の冒険』（一九三七年）の第二章に十四ページあるだけで、これには驚いた。もちろん、シプトンは隊長として『アルパイン・ジャーナル』や『ジオグラフィカル・ジャーナル』にレポートを書いてはいるけれど、彼自身がまとめた公式報告書はないのである。それはどうしたことなのか……。トニー・アスティルもわからないという。

一九三五年のチベット当局の登山許可は、ギリギリのタイミングでロンドンに届いたため、本格的な登山隊を組むことができず、偵察隊的な編成となった。〝ラージ・エクスペディション〟を好まないシプトンがそれを率いることになり、六人の登山の精鋭たちに、地図作成の専門家M・スペンダーが入り、七人の侍が揃った。その中には有名なH・W・ティルマンもおり、

こうして「small & light」なチームができあがった。予算はそれまでの一万二〇〇〇ポンドから、一人当り二〇〇ポンド、合計一四〇〇ポンドへと激減する。シェルパは十五人雇用された。

一行は五月末にダージリンを出発し、再びそこに帰る九月末までの間に、エヴェレストの東面、北面、西面と広く歩きまわり、偵察と測量を行った。三カ月の間に六〇〇〇メートルを超える山々を二十六座も初登頂する。もちろん、エヴェレストの攻撃基地ともなるノース・コルにも到達する。そこでは、前年の三四年に単独行をして消息を絶ったモーリス・ウィルソンの遺体と日記も発見、遺体はクレバスに埋葬した。また、この遠征隊のシェルパ・チームに十九歳のテンジン・ノルゲイがいた。十八年後にE・ヒラリーと共にエヴェレストの山頂に立つことになるが、ヒラリーが初登頂の栄誉を得ることになったのは、この三五年の隊にニュージーランドからL・V・ブライアントが参加し、活躍したからだという。

ここに紹介する本は『エヴェレスト偵察行――一九三五年』。これまでくわしい報告がなく、さらに本格的な登山ではない偵察だったから、副題のように、〝忘れられた冒険〟であった。それが一九九五年に隊員だったチャールズ・ウォーレンが『アルパイン・ジャーナル』に遠征日誌の一部を公表した。それをきっかけに、トニー・アスティルが隊員たちの日記や手記を遺族、関係者から提供してもらい、そして本書をまとめることになった。したがって、アスティル著というよりも、アスティル編といったほうがよいかもしれない。

序文をジョン・ハントとE・ヒラリーが書き、はじめにメンバーの紹介がある。隊長のシプトン（P・スティール）、ブライアント（N・ハーディー）、E・ケムプソン（K・メルドラム）、ティルマン（著者ほか）、C・ウォーレン（M・ウォード）、E・ウィグラム（A・サルケルド）、M・スペンダー（著者ほか）。そして本文はダージリンからダージリンまでの毎日を、各隊員の日記で構成し、順序よくまとめてあって、それぞれの動きがよくわかるようになっている。三五九ページの本文中には、一二五葉の写真が挿入されて、単調になりがちな日記に変化を持たせ読者を退屈させないように工夫している。それらはこれまで未発表だったものを含み、ほとんどはイギリス地理学協会（RGS）の貴重な保存記録資料の中から複製された。

用紙は上質で分厚く、判形は大きいから、ずっしりと重く、一・五キロの重量は片手には重たい。しかも、これは著者自身の、日本でいうところの自費出版である。ダストラッパー（ブックカバー）はていねいにも同じものが二枚つく。それにはスペンダーが作成した、エヴェレスト北面の見事な彩色地図が印刷されている。一枚を普通の地図として利用できるように考えたものだろう。これは『ジオグラフィカル・ジャーナル』（第八八巻、一九三六年）に公刊され、同じものが『ヒマラヤン・ジャー

ナル』（第九巻、一九三七年）にも転載されている。

本文の目次は以下のようである。

1. 許可・目的・隊員選考
2. ダージリンへ
3. ダージリンでの準備
4. ダージリンからサールへ
5. ニョンノ・リ山群
6. サールからロンブクへの横断
7. 偵察の開始とロンブクからエヴェレスト峰へ
8. ノース・コル
9. 東ロンブクとドヤ・ラの間
10. エヴェレストの西面
11. チャンツェ北峰とラピュ・ラ
12. カルタへもどる
13. カルタから帰途につく

重量感あふれる第一級のエヴェレスト文献、これによって〝忘れられた〟空白の遠征記録が埋められ、エヴェレストの登山史がより完全なものになるであろう。そして山岳図書の収集家にとっても見逃すことのできないものである。著者のアスティルはかねてより山岳図書店（現在はLes Alpes Livresといい、サザンプトン在住）をやっている。私も彼の古い顧客の一人だが、年に一、二度、リストを出してカタログ通信販売を主とする。RGSの特別会員であり、山岳会の准会員である。

なお、並製本のほかに、番号入りの特装本が二五〇部作られている。それは装丁が天金なのと、それらの贈呈者名簿が追加されているだけで、他は並製本といっしょである。

直接注文は左記へ。

Tony Astill at "Arcadia," Hazel Grove,
Ashurst, Southampton SO 40-7AJ, England, UK.
Eメール・アドレス：alpes@supanet.com

（薬師義美）

薬師義美 著

『大ヒマラヤ探検史
インド測量局とその密偵たち』

白水社　二〇〇六年九月刊
A5判　三四〇（本文）＋四四（索引等）ページ
六八〇〇円＋税

グレート・ゲームの陰の立役者たちを描いた貴重な一書だ。『ヒマラヤ文献目録』（一九九四年）や数々のヒマラヤ古典の翻訳で知られる薬師氏の掲題の一大労作がついに上梓された。

A5版、本文三二九ページ、ほかに詳細な索引、探検年表、参考文献リストなど約五〇ページを付載。堂々たる大冊で、しかも主要な登場人物たちの肖像写真や関連の地図を多数収めている。それらの一点ずつが貴重な資料なのである。

本書は全十六章から成るが、始めの六章は①「イギリスのインド支配」②「アジア内陸とキリスト教宣教師など」③「清朝のチベットの地図化とインド測量局のスタート」④「大三角測量の開始とヒマラヤ地域の探検」⑤「エヴェレスト長官とさらなる探検」⑥「エヴェレストの発見」から成る。

即ち、イギリスの東インド会社によるインド支配への道に始まり、それを継承して開始されたインド測量局による測量事業へ至る歴史的経過が描かれている。勿論、その間にG・レネル以下G・エヴェレストとその後継者たちの列伝、さらにW・ムーアクロフト、F・ドリュー、G・ヘイワード、R・ショーら、当時の未知の地で活動した様々な探検者たちが登場する。

そして、次に本書の主要テーマである「パンディット」の時代がやって来る。インド測量局の関係者が雇用し、測量術を教え、辺境の路線調査、地形の測量といった地図作成のためのデータの収集に当たらせた現地人のいわば密偵たちを「パンディット」と呼ぶ。彼らの多くは変名あるいはコード・ネームで呼ばれていた。

十八世紀以降とくに十九世紀に入って、にわかに先鋭化した、大ヒマラヤから西のパミールに至る広大な山岳地域を舞台にして行われた、いわゆる「グレート・ゲーム」の先兵として身の危険をかえりみず踏査活動に赴いたのが、この「パンディット」であった。

本書の著者は、パンディットたちの踏査が、それぞれの地域の探検史の上で、どういう意義を持つかを、およそ半世紀にわたって蓄積、蒐集して来た貴重な文献その他の資料によって解明すべく努めている。特に「ロイヤル・ジオグラフィカル・ジャーナル」（以下にJ・R・G・Sと略称）、同じ時期に同じ王立地理学協会が刊行していた「プロシーディングス」、さらにフィリモアの貴重な労作『インド測量局記録集成』（五巻）などを駆使して、極めて判り易い文章で、パンディットの世界の全体像を描くことに成功した。これには、著者自身による、ごく近年に至る迄に幾度となく行った現地踏査による知見のうら付けなどもあり、そのことが本書への信頼度を高めているのだ。

私がこうしたインド辺境のパンディットたちの活動に格別な関心を抱くようになったのは、K・メイスンの『ヒマラヤ、その探検と登山の歴史』（白水社、一九五七年）やわが国のヒマラヤ研究の先進、深田久弥、吉沢一郎、望月達夫といった諸氏の著述活動によるところ大なるものがある。そしてその時期に神田の古書店で入手したヘイワード（cf. 本書一一六ページ）の「ギルギットからヤシンへ至る探検」（JRGS一八七二年

七月刊）を読んだことが大きい。これはＪＲＧＳの抜刷を製本した物だが、京大の藤田豊八博士（東西交渉史）の旧蔵書で、その署名と明治三十八年八月十四日という日付けが記入されていた。

ヘイワードがヤシンのダルコット村で殺害されてから三十数年後に早くも、藤田博士はヘイワードの上司宛ての現地報告（書簡）を読んでいたことになる。私が読んだのは、ヘイワードの死後、約百年たってからである。

その時私はすでに一九六八年にダルコット峠に立っていたが、実際に峠を越えて南麓のダルコット村（ヘイワードの殺害された場所）へ下ったのは一九九七年のことであった。

それ以後、私はＪＲＧＳやプロシーディングスの一八〇〇年代のバックナンバーや抜刷をコツコツと集めるようになった。近年、イギリスのヒマラヤ本の著述や蒐集で知られるＬ・ボウムや中ア・ヒマラヤの研究、著述家のＰ・ホップカークやアメリカのＪ・ボイルらの蔵書の売り立てがあり、成書やオフ・プリントの重要文献を数十点入手することができた。

欧米に多くの知己を持つ薬師氏にしても、こうした文献についての入手の苦労を私以上に重ねて来たに違いない。手許に経済的なゆとりが少し出来る頃には、多くの貴重な文献は何処かへ飛んで行ってしまうからである。

広大なヒマラヤ山系の山地を探り歩いたパンディットの残した記録は広範囲にわたる。ヒマラヤ登山のほかに、トレッキングと呼ばれる山地旅行を多くの日本人が体験している時代である。本書の全ての章が、そうした人々の興味や関心の対象となるが、特にネパールやチベットへの旅の経験者には、十章の「チベットへ、さらにそれを越えて」や十二章の「エヴェレスト峰とカンチェンジュンガをめぐって」、十四章「ツァンポとブラマプトラ河の解明」、それに続く十五章「その後のツァンポとチベットの探検」あたりが面白いと思う。ツァンポ河の解明は以前にベイリーの本の翻訳が出て、よく読まれた。関係するパンディットで言えばキントップの探検にまつわる話は、かなり知られている。

一方、私のようにヒンドゥ・クシュやカラコルムに関心を持つ読者には、九章「北西辺境地帯の探査、ミルザ、ハヴィルダール、ムラー」や十一章「フォーサイスのヤルカンド使節団とパンディット」などが見逃せない。かつて、われわれが熱心に読んだＫ・メイスンの本では、ヒンドゥ・クシュ方面の記述に乏しいのが、私には不満であった。

ここで九章「北西辺境の探査」のうちから「ミルザ・シュジャ」の例を記しておこう。一八六八年から六九年にかけて、モントゴメリー（当時はインド測量局の長官代理）の命をうけて、アフガンからワハン谷を遡上して、パミール・クル（チャクマクティン湖）へ至り、中国側のタシュクルガンを経てカシュガル

へ出るという大踏査行である。

ミルザ一行はアフガン領内でさまざまな障害に遭い、ワハン（パミール）に入ったのは、六九年一月上旬の厳冬期となった。近年、チトラルからワハン谷へ潜入した本会々員の平位剛氏のルートとミルザのルートはかなり重なる。ミルザの踏査の山場の一つがこの湖であり、平位剛氏による高度は三三九〇㍍、ミルザは四〇五四㍍と近似した測定値を得たことを薬師氏は紹介し、さらにキラ・パンジャの座標について、先駆者ジョン・ウッド（ヴィクトリア湖を発見した）とミルザの測定値がほぼ等しいことに注目し、「測量の腕は確かなものである」と賞している。

薬師氏の右のミルザの踏査行についての行文は「カブールからカシュガルへ至るミルザの探査報告」（ＪＲＧＳ、一八七一年、Vol. 41）に拠ったと思われるが、同報告には、ミルザの作成したかなり大きな「ワハン」の路線地図が付載されていたように思う。路線地図の典型として、これは是非とも本書に収録してほしかった。勿論、ミルザを含めて、六人のパンディットが北西辺境からパミールを舞台に行った探査の足跡図（薬師氏作成）は、本書の一四四～一四五ページに収められ、極めて有用だ。

近時、コンピューターにより、世界のあらゆる地域が図示されて、しかもカラーで検索できる時代になった。しかし、バーチャル的な疑似体験で何でもわかったような気にさせられるのはかえって危険であろう。そういう時代であるからこそ、一箇の人間がその体力と知力を傾けて未知の世界を拓いた記録に目を向けたいのである。本書はその記録を集成した秀れた業績である。

（雁部貞夫）

ジェニファー・ジョーダン 著
海津正彦 訳

『K2 非情の山』

山と溪谷社 二〇〇六年四月刊
A5判 四六二ページ 二四〇〇円＋税

カラコルムにあって標高八六一一㍍、世界第二の高峰Ｋ2の頂に挑んだ「5人の女性サミッターの生と死」（邦訳書サブタイトル）を、臨場感あふれる、いかにもジャーナリストらしい達者な筆致で描く。私はまったくのヒマラヤ門外漢だが、文字通りに〝巻を措く能わず〟、分厚い本書の残りページを惜しみながら読み終えた。近頃、読んだうちで出色といえる山の本であった。

著者は一九五八年生まれのアメリカ人女性で、本書の奥付に記される紹介には「作家、ジャーナリスト、ラジオ・テレビのニュースアンカー、ボイスタレントなどとして幅広く活躍する」とある。その彼女が、今回、こうした物語を書くにいたったのは、ジョン・クラカワーの『空へ』（一九九六年にエヴェレストで起こった大量遭難を伝えるノンフィクション。本書と同じ海津正彦氏の訳で文藝春秋、一九九七年刊。のち文春文庫）を読んだのに始まるといい、本書の「プロローグ　なぜK2なのか」には、次のように記されている。

「一九九六年にエヴェレストを襲ったあのそら恐ろしい嵐の物語を通じて、高所登山の容赦ない現実を読み進むうち、ふと気がつくと、私は何百万読者と同じようにこれまで知らなかった八〇〇〇メートルの、あの非情な世界に引き込まれていた。その高さを超えると生命は死にはじめるのだ。いわゆる『死の地帯』へ自ら求めて入っていく、毛色の変わった人たちというのはどんな人なのだろう？　脳細胞を毎分何百万単位で殺しながら、文字どおりの恍惚に耽る理由というのは、いったいどこにあるのだろう？」さらに、このような疑問をもったのを発端にして〝非情の山〟K2に登頂した女性登山家に目を向けていくようになったという。続けては「……K2に登頂した女性は誰と誰？　そして、何よりも不思議なのは、登頂した女性で今も生きている人がいない理由だった」としたうえで、それらの女性たち、すなわち次の五人の跡をたどることになった。

ワンダ・ルトキェヴィッチ／ポーランド（一九四三～九二）
一九八六年にK2登頂。一九九二年にカンチェンジュンガを登山中に死亡。

リリエンヌ・バラール／フランス（一九四八～八六）　一九八六年に夫のモーリスと共にK2登頂。下山中に夫婦とも死亡。

ジュリー・トゥリス／イギリス（一九三九～八六）　一九八六年にK2登頂。下山中に死亡。

シャンタル・モーデュイ／フランス（一九六四～九八）　一九九二年にK2に登頂。一九九八年、ダウラギリを登山中に死亡。

アリスン・ハーグリーヴズ／イギリス（一九六二～九五）
一九九五年にK2に登頂。下山中に死亡。

これらの女性たちは海津氏の「訳者あとがき」を借りると「……登山経験にしても、男勝りの経験豊富な精鋭クライマーから、男性に頼る部分の多い、言ってみれば可愛いクライマー、さらには身勝手で悪女的な要素をそなえたクライマー」など様々であり、また異性との関係も「離婚を繰り返しつつ常に恋人を求めている女性や、夫べったりの幸せな妻、夫がいながら年上の男性に魅かれていく中年女性、男を手玉に取ると見えるような行動をとる女性、離婚を考えつつ家族の絆を断ち切れない案外

古風な妻」と五人五様であったというが、ここで〝それゆえにこそ〟と強調するとすれば不遜を免れないかも知れないが、それゆえにこそ私はこのK2の女性登山物語にいっそう引きつけられた。

著者はプロローグに、彼女たちの両親や配偶者、子供、兄弟姉妹、友人などに会って話を聞くうちに「平面的だった彼女たちの生涯がみるみる膨れ上がってきて、極彩色を帯び、私たちにも共通する心の葛藤を実感できるようになってきた」とも述べているが、その実感はヒマラヤの高峰からおよそ縁遠い私のような一読者にとっても同じである。

本書を終わりに近い「エピローグ　情熱の代償」まで読み進むと、そこに二〇〇二年夏、著者が映画撮影のためにK2へ旅したときの一情景が語られている。たまたま彼女は「おそらくは世界最高所で執り行なわれている埋葬式」に参列することになったが、それは五年前の一九九七年八月にK2に近い七三六〇メートル峰スキルブルムに登頂後、ベースキャンプが雪崩に襲われて遭難した日本の神奈川ヒマラヤ登山隊の六人のうちの五人の遺体が発見されて火葬をしているところだった。「火葬の積み薪の場違いな暖かさを受けながら座り込み、踊る炎の向こうに、何千メートルの高さでそそり立つK2を透かし見ていた。そして、この夏、折にふれてそうしたように、私は膝のあいだに首を落として、泣いた」彼女は、本書を「K2の女性たち。ようやく私は、一書を物しました」の一行で終えている。

なお、神奈川ヒマラヤ登山隊のリーダーは広島三朗氏であり、彼もまた、その不運な遭難によって亡くなっている。広島さんは一九七七年に日本山岳協会とパキスタンとの合同で成し遂げたK2の第二登（初登は一九五四年、イタリア隊による）の折の登頂者の一人だった。一九九七年のスキルブルム登山はかつてのK2登頂二十周年を記念する意味合いが多分にあったと仄聞している。

いま私が痛切に思うのは、このような本書の図書紹介はなんとしても広島さんに書いてもらいたかったということである。当時とはすっかり登山環境の変わってしまった近年のK2を、また、そこで繰り広げられた女性登山家たちの物語を広島さんは独特の諧謔味のある筆遣いで私たちに紹介してくれたに違いない。私はそれを読みたかった。本書読了後、はにかんだような笑顔で快く署名をしてくださった『K2登頂　幸運と友情の山』（広島三朗／実業之日本社／昭五三）を、私はもう一度読みなおした。

最後に、今年（二〇〇六年）八月二日の「朝日新聞」夕刊に以下のような記事が載ったのをそのままに引用しておく。なかに小松由佳隊員がK2登頂八番目とあるが、本書に描かれた五人に続いては、六番目が二〇〇四年七月のエドゥルネ・パサバン（スペイン）、七番目に今年の七月二十六日、小松由佳より

も数日前にニヴェス・メロワ（イタリア）が夫と共に登頂している。

「東海大、K2ダブル快挙／日本女性が初登頂、世界最年少も更新／世界第二の高峰、パキスタンと中国国境のカラコルム山脈にあるK2（八六一一メートル）に挑んでいた東海大山岳部隊（出利葉義次隊長）が一日午後四時五〇分（日本時間同八時五〇分）、登頂に成功した。登頂したのは二人で、小松由佳隊員（二十三）は日本人女性初登頂（世界八人目）、二十一歳十カ月の青木達哉隊員は世界最年少での登頂となった。同大山岳部の創部五十周年を記念して、世界で最も困難といわれるK2登頂を目指していた。五四年にイタリアの山岳隊が初登頂した南東稜より少し南側の南南東支稜から挑み、このルートからの女性の登頂は世界でも初めてとしている」

（横山厚夫）

注：朝日新聞からの引用文中の算用数字は「山岳」編集委員会の、本欄の数字表記の原則に合わせて漢数字に改めたものである。

小林尚礼 著
『梅里雪山・十七人の友を探して』

山と溪谷社　二〇〇六年二月刊
A5判　三〇三ページ　二三〇〇円

本書は『岳人』誌に連載されたものを加筆、修正、再構築したものである。単なる登山記でもない、探検紀行でもない、十五年におよぶ著者と一つの山との関わりとその山への思いの変遷が綴られている。示された副題が重たく、ひも解くのを躊躇する向きもあろうかと思われるのだが、著者の人柄が表れた筆致によるものだろう、読後感は爽やかで明るい。

一九九一年一月三日夜半、中国雲南省の最高峰・梅里雪山（メイリー・シュエシャン　六七四〇メートル）の初登頂を目指し標高五一〇〇メートルの第三キャンプに終結していた「日中合同第二次学術登山隊（日本側登山隊長・井上治郎）」の十七名がBCとの最後の交信のあと消息を絶った。全員遭難か無線機の故障かの判断もつかず、中国人民解放軍の偵察機からも、地上からの救援隊からも生存につながる情報はついに得られぬまま、事態は最悪の状態に至り、日本の海外登山史上最悪の遭難となった。十七名中十一名が京都大学学士山岳会（ＡＡＣＫ）を中心とす

る日本隊員であった。

当時京都大学の現役山岳部員であった著者は、この信じ難い報せを受けた後、救援隊派遣の準備、同期生で親友だった隊員の留守家族との対応などに奔走することになる。だが、救援活動の打ち切りが決定されても「信じ難かった。いったい何が起こったというのか！　日本で待つ者にとって日常は何も変わらず、自分はまったく傷ついていない。実感を伴わない死の通告を、僕は受け止めることができなかった」という著者も、この時点で自身のこの山とのその後の長く深い関わりを知る由もない。

何の消息もつかめず絶望視のまま五年の歳月が経ち、一九九六年に再挑戦を目指す登山隊「日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊（日本側総隊長・斎藤惇生元ＪＡＣ会長）」に社会人となった著者は参加する。時を経て、親友を含む遭難者らの記憶が少しずつ遠くなっていくのが恐ろしく「それを打ち消すため、彼らと生きた証を何らかの形で残したい」との動機付けがあった。山麓の住民（チベット人）に抵抗されつつも頂上間近まで迫ったこの隊も、天候悪化の兆しで登頂を断念し、遭難隊の痕跡も確認できぬまま苦渋の判断で撤退を余儀なくされた。著者はこの登山を通じて、梅里雪山を「聖山」と崇め、その聖山への登山を企てる登山隊を憎悪する地元民の抵抗を肌で感じた。そして、著者がこの山に接した時、初めて山を「神々しい」とまで感じたこととも相まって、「『聖山』について考える機会を与えられたことが、その後につながってゆく」。

更に二年後、遭難から七年が過ぎた一九九八年七月、現地住人より氷河上の最初の遺体発見の報せをうける。遺体発見現場は、遭難現場である氷河の源頭から標高差千数百メートル下流の氷河中流部だった。日中合同の収容隊に参加した著者が目にしたものは、七年の歳月を経てアイスフォールを落下し、今氷河に無残に散乱する遺体と遺品、「それはまるで、聖山が不浄なものを吐き出したかのような光景だった」。この年、十人の遺体が収容され、五人の身元が確認された。著者は帰国後、勤め先を退社し、写真家への道を歩むことを決意した。

翌年更に遺体、遺品の発見が続くと、ＡＡＣＫでは現地の村に常駐者を派遣するという方針が打ち出され、著者に白羽の矢がたてられた。著者という人材あっての決定なのか、決定後の人選なのか、一読者にはその辺の事情は分からないが、いずれにせよＡＡＣＫならではの底力だろう。

梅里雪山の主峰「カワカブ（白い雪）」を聖山と崇め、これを汚すと考えられた登山隊にこれまで度々抵抗してきた山麓の明永村の人達だったが、単身この村に戻った著者は、先ずは村長一家に受け入れられ、居候を許される。以後幾度となく長期滞在を繰り返し七年の歳月が経つ。

村人と暮らし、遺体捜索活動の傍ら、村人とともに聖山カワ

カブ一周の巡礼を繰り返して心を通わせて行くのだが、「聖山」に登ることを決して許されたわけではない。人々は「カワカブを最高位の神として信仰して」おり、村長はいう。「聖山とは親のような存在」であり、それに登る行為は、「親の頭を踏みつけることと同じだ」と。

やがて、著者は「聖山とは何か」を追い求め、著者にとってかつては登山の対象でしかなかったこの山への思いが変化し始める。カンチェンジュンガ、マナスル、マチャプチャレなど、過去のヒマラヤ登山でも聖山に登ろうとする登山隊に抵抗する山麓の住民があった。だが、登山隊が住民の側に立って、その真の心情を理解しようと努めたことがあっただろうか、と著者は考える。そして、「聖山とは、そこに生きる人々が、自らの存在を賭けて信じているものである。外から来る人間が、登山のためにその信念をふみにじることが許されるだろうか。僕は、カワカブに登ろうとは思わなくなった。いや、登ってはいけないと思うようになった。」

既に写真家への道を歩みはじめた著者は、聖山を撮影対象とし、「聖山とは、生命の源である」と考え、自分の旅を「聖山に出会う旅」と位置づけた。二〇〇三年秋には十六人目の遺体がアイスフォールの下で発見されたが、残る一人の遺体が見つかるまでこの旅はまだ終わらない。

一方、著者が通い続けるこの山を取り巻く環境は大きく変化した。急速な近代化の波に洗われるなか、ユネスコの世界自然遺産にも登録されて観光地化の進む山麓の暮らしの変貌ぶりも興味深い。かつては通信もままならなかった僻地の山村明永村には舗装道路がつけられ、四階建てのホテルができた。慰霊碑のある展望台の周辺は、民宿や売店の建設ラッシュだそうだ。氷河上の遺品を密かに集めて金にしようとする村民が現れたり、慰霊碑の銅版にある日本語と日本人名が傷つけられたり、という負の変化もある。

多数の写真が著者の写真家としての腕の冴えを見せている。遭難から十五年を迎え、本書の出版後、写真展「チベットの聖山『梅里雪山の世界』」が全国各地で好評裡に開催された。写真展に込めた著者のメッセージには、「最後の一人が見つかりますように」との祈りとともに、「遺体捜索という過去に向いた行為を、未来へつづく生産的な活動につなげてゆきたいという願い」があった。

著者は一九九九年五月、日本山岳会有志による「日本リャンカン・カンリ登山隊（隊長・伊丹紹泰）」に参加し、チベットの未踏峰リャンカン・カンリ（七五三五）の初登頂を果たしたことを付記しておきたい。この隊は当初日本山岳会が進めて、偵察隊まで派遣し、著者も隊員として選ばれていた「ガンガー・プンスム遠征隊」の挫折後の流れを汲むものだった。

（越田和男）

高階秀爾著（評伝）・原田光・川西由里編（画集）

『水絵の福音使者　大下藤次郎』

美術出版社　二〇〇五年十二月刊
B5変形判　布装上製本　函入り
評伝二一六ページ　画集二七二ページ
定価七八〇〇円＋税

夏目漱石の小説『三四郎』に、雑司ヶ谷の野々宮理学士宅を訪ねると、妹のよし子が縁側で茅葺の隣家を水彩で描いている描写がある。『三四郎』は一九〇八年（明治四十一年）に朝日新聞に発表され、二〇世紀初頭から日露戦争以降の東京の風俗や社会情勢を巧みに取り入れながらストーリーを展開しているが、この場面もその一つで当時、中流・知識階級の子女に水彩画が流行していたことが取りあげられている。

水彩画は十九世紀末頃（明治三十年前後）から趣味とする人が増えて、日露戦争前後にその流行は頂点を迎えていた。その火付け人の筆頭は大下藤次郎で、一九〇一年（明治三十四年）に初歩の手引書『水彩画之栞』を発刊し、さらに一九〇四年（明治三十七年）には、より専門的な『水彩画階梯』を刊行、翌年七月には現在も続いている雑誌『みづゑ』を創刊する。その翌年の一九〇六年（明治三十九年）には、丸山晩霞ら水彩画の同志とともに水彩画講習所を開設、地方にも支所を開くなど、水彩画の普及と発展のため精力的に活動を続けて、一九一一年（明治四十四）十月に四十二歳で早逝する。『水絵の福音使者』は、正に大下の生涯にふさわしい称号である。

この本を手にしたとき、先ず丁寧に仕上げられた造本に感じいった。大下藤次郎が水彩画普及のために刊行した『みづゑ』の創刊は、山岳会の創立の三カ月前の一九〇五年七月で、二〇〇五年に美術出版社は創業百年を迎え、本書はそれを記念して出版された。藤次郎の孫である大下敦同社会長が企画監修したこの本の「B5変型判」というサイズは現在の規格本にはない。週刊誌を一回り小さくした判は、明治から大正の初期に出版された多くの豪華本に倣っており、小島烏水の大作『日本アルプス』四巻も、ほぼ同じ大きさである。

象牙色の堅牢な函に入れられた評伝、画集の二冊本は色違いの光沢を抑えた布地で被われた上製本と、凝った函の造りは、ともに本好きには垂涎物であろう。まず評伝の布はオレンジに渋をかけた色に、また画集は浅葱色に染めあげられ、背の表題、著者名などは銀箔の型押し文字を使っている。そして評伝、画集の表紙の上部三分の一の箇所に大型の記念切手大の浅い横四角の凹みを型押しして、その凹みにマット紙に印刷した縮小版

の水彩画代表作を貼り付けている。評伝の表紙には小島烏水が所蔵していた上高地から見た「六月の穂高岳」（画集96図）が、画集の表紙には凪いだ紺碧の海と鮮やかな夕焼け雲、浅葱色の空を描き分けた「赤道直下にて」（46図）が貼られている。そして評伝、画集の二冊を入れる象牙色の函にも上部三分の一に縦三・五㌢、横五・七㌢の四角い窓が額縁のように開けられていて、窓から画集か評伝の表紙絵が見える仕組みである。

なお本書が美術出版社から出荷される時には画集を前に評伝が後ろに入れられていて、函の窓からは「赤道直下にて」が見えるようになって納本されていた。中垣デザイン事務所の中垣信夫＋山本円香が装幀した本書は第四十回造本装幀コンクール展で、「東京都知事賞」を受賞している。

大下は一八七〇年（明治三年）に本郷真砂町で、旅館、馬車問屋、料理屋などを広く商う巳之吉の長男に生まれ、当初は家業と絵画の両立を図り、一八九一年（明治二十四年）に中丸塾に入門するが、両立は難しく一八九三年（明治二十六年）父没とともに家業は義兄に任せ、画家の道を歩みだす。その前年に生涯の友となる三宅克己に出会う。絵画の勉強のために画家、文士、学者を積極的に訪問、交友の輪を広げた。身体は弱いが活動的、目的達成のためには粘り強く、几帳面で克明な日記を残す記録魔でもあった。社会の動きにも敏感でジャーナリストのセンスもあり、経営の才があり実務家でもあった。

中丸塾に入る前、師事しようとして不在のため会えなかった画家原田直次郎を一八九五年（明治二十八年）一月に訪ねて、後に森鷗外を紹介される。鷗外は『水彩画之栞』の序文を寄稿するなど、折にふれて大下を後援するようになる。また藤次郎没後に未亡人の依頼をうけて年譜を作成し、また『みづゑ』の存続に小島烏水とともに尽力することになる。

文士との交流では小諸在住の丸山晩霞の紹介で島崎藤村の知遇を得たほか、一八九八年（明治三十一年）に軍艦「金剛」の豪州訪問に同行する許可を得て、航海経験のある志賀重昂を訪問し教えを受ける。志賀との関係で田山花袋、国木田独歩、民俗学の柳田國男を知り、自然と芸術を語り合いながら交流を深めてゆく。そして鷗外を除く五人は、山岳会創草期の会員であり、大下も山岳会会員となって小島烏水の知遇を得て、山岳会に深く関わってゆくことになる。

大下は絵画の勉強に貪欲であった。「赤道直下にて」の夕雲、小品「雲の観察」（146図）を見ても描写は極めて巧みだが、さらに雲を勉強するために、中央気象台に岡田理学士を訪ねて教えを乞い、また大下の優れた自然描写に興味を持った植物学者牧野富太郎と知り合うなど、とにかく意欲的である。

私の大下の絵との出会いは一九四三年（昭和十八年）七月、尾瀬長蔵小屋での数葉の絵葉書であった。戦時下の尾瀬には私たち同行三人と長く滞在中だった画家の四人だけ、昔の静かな

尾瀬の再現であった。その中での精緻な、しかも詩情豊かで情緒溢れる画面との出会いは鮮烈だった。

さて画集には作品六百四十九点が収録されている。現存する作品は森鷗外ゆかりの島根県立石見美術館所蔵の水彩画二百五十数点を含めて三百四点、他に絵葉書・小品、スケッチなど百六十点の計四百六十四点、所在不明の作品（印刷物より拾う）は百八十五点を数える。不明作品を探したのは編集者である。絵は山岳や渓谷、湖沼、森林など自然を描写したものだけではなく、人物画も静物もあり、スケッチに見るべきものもあり、多彩である。二ページにまたがる大型画面も数枚あるが、小型画にも傑作がある。絵は初期の作品を除いて山岳、水辺風景、静物などに分類され、必ずしも制作年代順ではないが、それぞれの絵に制作年が入っているので、筆遣いや色彩表現の進化あるいは変化を見るのも、この画集の楽しみとなろう。

画家があるきっかけで作品に一段の進歩を見せるときがある。大下が日誌に一八九八年（明治三十一年）は「有望を以て迎へ」と書いているように（評伝―年譜参照）、その年の三月から九月まで軍艦「金剛」に乗船、豪州へ旅行したことが、きっかけとなった。その旅行で描いた「赤道直下にて」（46ページ～47ページ）を見れば、大下の飛躍を実感できるのではないか。

山の絵では第一回文展に出品した「穂高山の麓」（98図）の構図が気に入った。画面の穂高は岳沢の下部ゴルジュの残雪と森、左側の西穂の稜線の濃い緑、美しい湿原だった近景の田代池、柳、落葉松の緑も多彩で自然に囲まれた画家の歓喜が伝わってくる。しかし岳沢の描写は現場で描いたと思われる原画の「残雪」（97図）がより好ましい。

小島烏水は自著『日本アルプス』1に「西山峠」（90図）を「西山峠の針葉樹と悪澤岳」との説明をつけて掲載している。また大下は一九〇八年（明治四十一年）八月の日誌（評伝の年譜参照）に『日本アルプス』2のために「雨雲の冨士」を描くとあり、編集者が山岳会図書室を訪れて、第二巻の第四図「雨雲の冨士山」を写真に撮ったという。それが画集の二五一ページのモノクロ画面（632図）である。

大下は自然主義の実践のため、一九〇一年から四年ほど多摩川上流の青梅に住んだ。青梅郊外に住む田邊壽山岳会副会長が69図の「多摩川」は「今も全く同じ景色だ」と感嘆していたが、百年経っても変わらない東京もあり、初期の作品の「小石川」（3図）「日暮里」（4図）「巣鴨の牛小屋」（7図）のように明治の面影が全く失われた東京もある。「秩父贄川」（70図）も好ましい。初期の作品で緑は後年のように多彩ではないが、河原の点景も渓谷の奥に向かって重なる山々、雲も稚拙ながら後年の達人への萌芽が見られる。

静物―草花では、最初の「つつじ」（148図）が、風景画でもある。大下の風景画の人物は点景としても必要な位置に描

かれている。「つつじ」の中の二人の婦人も画面に奥行きを与えて好ましい。「静物 林檎」（158図）にも注目した。セザンヌの静物画を印刷で見たときは、そのよさがよく判らなかったが、実物を見てそのオーラに圧倒された。この絵も実物を見たい。

小品、スケッチにも見るべき作品が多い。例えば205図の「人物スケッチ」。二階の開いた障子から学生と襷（たすき）掛けの仲居風の女が向き合っている。ドラマの場面を見るような、『三四郎』ではない『婦系図』あるいは『雁』の世界である。この情景に金色夜叉の絵葉書を発刊する大下の多面性を見る。

280図の「渓流」は、十時間以上歩いて入った尾瀬を知るものにとって忘れられない風景である。沼田から約二十キロの追貝を過ぎると街道の右側を流れていた片品川が橋を越えて、左側に移ると、大町桂月が天下の絶景と呼んだ「吹割れの滝」がある。片品川は滑（なめ）となって幅広い流れのまま、急に滝となって落ち込む。そして岩盤の弱いところが侵食されたのか、十数にわたる狭い隙間を、滝が向き合って落ちている。冠松次郎が戦時中に出した写真集『雲表を行く』に同じ構図の写真を撮り、大町桂月の紀行文とともに載せている。また同じ太平洋画会の吉田博も、木版画で「渓流」と題して、ほぼ同じ風景を描いている。いまはバスであっという間に過ぎてしまうが、沼田街道を歩いた旅人は「吹割れの滝」を前に休憩して、この奇観に見惚れたのである。

大下藤次郎は一九〇七年（明治四十年）十一月に山岳会に入会した。そして翌年五月十七日に日本橋地学協会で開かれた第一回の会員大会以降、第三回大会まで自作水彩画を展示し、また小島烏水の依頼をうけて『山岳』第三年第一号の表紙を描き、山岳会に深く関わった（評伝の年譜28ページ）。

また一九一〇年（明治四十三年）一月十六日に志賀重昂別邸、代々木の四松庵で開かれた晩餐会に大下は中央新報記者の神東惇とともに幹事となって会を取り仕切った。当日は山岳会役員のほか、酒井子爵、柳田國男法学士、田山花袋、吉江孤雁、画家の丸山晩霞など四十人が、座敷にすし詰めになって和洋中華の山岳料理を味わった。接待には両幹事のほかに主人役の志賀ご本人、夫人、十三歳の富士男少年、大下、神東両夫人も配膳や酒酌に当たった。定刻午後二時前に始まった宴は、九時過ぎまで続いて、大いに盛り上がった。そして大下、神東両夫人が帰途に着いたのは十時を過ぎ、志賀夫人は十二時過ぎに電車も車もないまま、真っ暗な泥濘の道を赤坂の本邸まで歩いて帰った、と『山岳』の会員通信欄に小島烏水は書いている。

大下藤次郎は、明治という時代を駆け抜けて一九一一年十月に四十二歳で逝った。『みづゑ』は廃刊の危機だったが、小島烏水らの尽力もあって続けて発行され、そして創刊から百年を記念して孫の大下敦が企画監修、曾孫の健太郎が発行人となっ

て『水絵の福音使者　大下藤次郎』を出版した。そして大下が愛した山岳会は『山岳』誌上に本書を紹介する。これも縁というものであろう。

（関塚貞享）

滝本幸夫 著

『日高の風―孤高の山岳画家坂本直行の生涯』

中札内美術村　二〇〇六年四月刊
B6判　二五二ページ

本書は副題に「孤高の山岳画家坂本直行の生涯」とあるように、坂本直行（本名なおゆき、一般的には「ちょっこう」と呼んでいる）の本格的な伝記である。

私の知る直行は、北大山岳部を卒業し、その後大変な苦労をして、北の大地を開墾した北海道の開拓史を飾る人である。この間、文筆活動にも励み、私達の心に残る名著をいくつかあらわし、併せて北海道の山々を描いた農民画家としても知られている。

このように私達は、直行を、その絵と文章によって知ることが出来たが、その生涯について多く知ることはなかった。本書は、これ等の点について、豊富な資料にもとづき、彼の全生涯を、時系列的に、全十七章にまとめあげている。

この辺で、本書について具体的にふれてみると、まず一章から三章は、「祖父坂本直寛の生涯」「少年期」「北大時代」とつづく、いわゆる生い立ちの記である。

ここで特筆すべきは、直行と幕末の志士・坂本龍馬の関係である。直行は、龍馬の血をひく「反骨の人」として、著者は、龍馬と直行を「一本の強い系譜で結ばれた」と書き、この辺りのことを詳しく説明している。直行のこの龍馬的性格が、好んで最も困難な開拓を決意させたのであろうが、そこには、登山と同じように、万全で周到な準備もうかがい知ることが出来るのである。

直行は、明治三十九年（一九〇六年）釧路で生まれた。このため今年は生誕百年の年でもあり、本書はこのための記念誌でもある。

このあと大正三年、八歳のとき札幌に移るが、この頃から山登りに目覚め、手稲山に登り、絵を描き始めている。そして中学に入ると（大正八年）、この年八月、羊蹄山に登り、以来、札幌郊外の山へと足繁く通い、大正十三年、北大農学部へとすすむ。在学中は、山岳部創部と同時に入部、道内の山々を踏破している。

次に四章から七章は「父との確執と新天地」「新天地での生

活」「生涯の伴侶ツルとの出会い」「自立」というようにその青年期が書かれている。

北大を卒業した直行は、東京の園芸会社に就職し、温室栽培の勉強をする。そして、希望に胸をふくらませ北海道へ帰ると、父から経済的理由で、温室施設の資金は出せないと言われ、大いに落胆する。父に対する反抗心から今までにも増して、再び、北の山々を彷徨し始めるのである。こんなある日、北大で一緒に学んだ野崎健之助から一通の手紙をもらう。「広尾の原野に牧場を開いたから、手伝いに来ないか」というものだった。直行は、父の反対を押し切ってこの話にとびつき、帯広へと向かう。

目の前に広がる重畳とした山並みと、広漠たる原野、そして振り返るとそこには清澄な太平洋があった。これらの風景の「澄んだ色彩」に心を奪われ、新天地での生活に入るのである。

野崎牧場へ来て二年目、直行は、この牧場に家政婦として来ることになった石崎ツルを知る。ツルはこのとき十七歳、将来の伴侶との出会いである。ツルとの結婚は、父の反対で難渋するが、昭和十年、開墾のための原野を手に入れ、豊似に仮の住まいを設け、独立する。そして翌昭和十一年、開墾に入り、この年の三月、ツルと結婚する。

次は、本書のクライマックスともいうべき、開墾と生活の闘いが、八章から十一章に「開墾地の生活」「子供たちの成長と過酷な自然」「ペテガリ岳の遭難とサイロの建設」「農民運動の発芽と大凶作」として綴られている。

開墾での生活は、重労働に明け暮れ苦しかったが、仔牛が生まれ、春には若草の饗宴と萌えいずる花々の群生に喜び、山菜を採る。開墾からの収穫もあり、初年度は上々の滑り出しだった。しかし、幸せそうだった開墾にも、自然は容赦なく襲いかかって来る。霜が来る。冷風と共にガスが忍び寄り、雨が降り続き、山に雪が来ると、この年の収穫はほとんどなかった。

こんな生活の中のある日、突然ペテガリ岳における山仲間の遭難の知らせを受ける。直行が第一次の遠征を共にした十名の仲間のうち八名が雪崩で遭難したのである。この悲しみから立ち直ったのは、かねてからの悲願であったサイロ建設の夢がかない、この年に完成したからだった。この頃、わが国は大東亜戦争に突入し、生活はますます苦しいものとなっていった。冷害は二〜三年おきに必ずやってきて大凶作をもたらし、豊作の年などは少なかった。

ここで直行の側面というべき農民運動について、十二章から十五章に「新居の完成」「農民運動への傾倒」「父弥太郎の死と子供たちの独立」「峯孝と小田豊四郎との出会い」などが、家庭を中心に描かれている。

直行は、今まで一度も父に無心したことがなく、したくもなかったが、この時になって初めて家を建てる相談をした。いろ

いろあったが、父はこれを承諾し、ここで初めて家らしい家を持つことになったのである（昭和十九年六月）。そして昭和二十年、日本は戦争に負けた。終戦による混乱は、開墾地にも変化をもたらし、農民を守る闘いが組織され、昭和二十一年一月、広尾町農村建設連盟が結成され、直行はその委員長となったのである。

こんな中、昭和二十五年、父弥太郎の死をむかえる。直行は形容しがたい淋しさを感じる。又、ある日、武蔵野美大教授、彫刻家、峯孝の訪問を受ける。峯は、北海道の土に根ざした酪農家の顔を作ってみたいと、直行の家を訪ねたのである。ここで直行との友情が生まれ、峯は直行に個展を開くよう提言し、第一回個展が昭和三十二年札幌で開かれ、ここに直行の農民画家としての出発が見られるのである。また、時を同じくして終生の友となる帯広の菓子店「帯広千秋庵」（現、六花亭）の小田豊四郎の訪問を受ける。これが六花亭の小冊子「ヌプリ」を生み、後に直行の絵による包装紙を、そして紙袋を生んだのである。

この後、直行は、その苦労に報われることなく、本書の締めくくりとでもいうべき「開墾地からの撤退」と「終焉」が十六章と十七章に書かれている。このとき直行は、南十勝の原野に入ってから三十年が経っていた。そして疲れてもいた。絵を描いて生活が出来ればどんなに楽かとも思えた。反面、開墾は命を賭けて闘った所産でもあった。こんななか、子供達は次々と原野を離れていき、そしてそこには一抹の淋しさもあった。一方、札幌での個展は大成功を収め、また、昭和三十四年から隔年で東京でも個展が開かれ、これも成功していた。

このような状況の中で直行は離農する決心をするのである。瀕死の百姓生活は遂に瀕死のままで終焉をむかえるのである。しかし、直行にもツルにも悔しさはなかった。原野での生活は子供達にも恵まれ、三十年間風雪と闘い続けた歴史もあった。

昭和三十五年、直行は、原野を離れて豊似に移った。「これからまた山に登って、山の絵を描こう」　直行の心はさわやかだった。またツルは、この一言に内心「頑張って下さい」と言っているようだった。そして画業に専念する。豊似での五年間の生活を終え、昭和四十年、直行は日高に別れを告げて札幌へ出、本格的な山岳画家として活動を始めたのである。しかし、そこには予期せぬ病魔が直行の体をむしばみ始めていた。昭和五十年五月二日、直行は静かに息を引きとったのである。享年七十五歳だった。

疾風の如く、波乱に富んだ人生を駆け抜けた直行の壮絶な生涯は、読み終えるとそこには、さわやかな日高の風が吹いていた。

（平山善吉）

小疇尚研究室 編

『山に学ぶ―歩いて観て考える山の自然』

古今書院　二〇〇五年五月刊
B5判　一四一ページ　四〇〇〇円＋税

明治大学山岳部は体力では他の山岳部に決して負けないと、自他共に認められているが、明治大学山学部（自称明治大学山岳部地理学科）で、山を歩くこと（入山日数と体力）では他大学に決して負けないと自負している若者（ちょっと年をとった若者も含まれるが）が本書の書き手である。それは、彼らから「師匠」と呼ばれて親しまれている（恐れられている?）小疇尚教授のあり方でもある。ここ三十年ほどの間に山の地形研究は急速に進み、日本のみならず、世界の山岳地域に出かけていって成果を持ち帰るようになり、小疇尚・岩田修二・小泉武栄・小野有五・清水長正氏らによってまとめられて出版されている。これらの研究を進める揺籃の場として、一九七一年結成された、寒冷地形談話会があり、明治大学の小疇研究室は常にその中心にあった。いま、その研究室が閉じられたとき、山に学ぶ楽しさを知った研究者たちが、その楽しさを何とか若者たちに伝えたいとまとめられたのが本書であり、若者のみならず、山の魅力にとりつかれているすべての岳人に勧めたい一書である。

本書は、サブタイトルに「歩いて観て考える山の自然」とあるように、まず、観てからということで、はじめに「山の写真館」としてヒマラヤやヨーロッパアルプス、アラスカ、南極と日本の山の写真がある。ここではもう少し考えるヒントがあっても良かったのではと思う。さらに全編カラー写真と図が多用されていて、山を観る視点が示されている。

また、本書の内容は、各執筆者たちが実際に歩いて観て調べたことに基づいて書かれており、初心者を対象とした書き方だが、最新の研究内容も書かれていて、山の研究者にとっても興味深い内容となっている。

さらに、高山地形、特に氷河地形、周氷河地形が本書の中心となるが、本書の内容は山の自然全般におよび、山の形と自然景観、日本の山岳地形の特徴となる積雪に関わる地形と植生、火山地形、観光開発や環境教育、エコツーリズムと多岐にわたって扱われていて、まさに山の自然に惹かれている登山者にとって、自然愛好家にとって、興味深い内容になっている。

本書は六章からなり、1章の「山の魅力と自然地理学」では、小疇尚氏による氷期と現在の日本の高山の植生・地形形成作用・地形の垂直分布図があって、山を観て考える助けになる。さらに、大雪山の白雲岳付近の地形分類図がある。高山の山頂部は多様で複雑で、美しい自然が見られるが、スケールが比較的小

さなものが多く、自然観察や自然の理解に格好の場所であると語られている。

2章は清水長正氏が「山の時間軸」を取り上げている。山は長い時間をかけて形成されたものであるが、現在の山地の景観を考える上で欠かすことの出来ない時代が氷河時代＝氷期である。氷期についてはよく知られるようになったが、その理解の出発点となったヨーロッパアルプスの北麓の地形の説明がある。続いて、海の堆積物に記録されている海水温の記録から氷期と間氷期（氷期と氷期の間の温暖期）が確認されることが示される。さらに、モレーンの分布と火山灰からわかる日本の氷河地形の編年が示される。

3章の「山の姿を変える作用」が本書の中心で「火山の作用」「山を切り崩す作用」「周氷河作用」「積雪の地形作用」「氷河と氷河作用」からなる。

「火山の作用」では、プレートテクトニクスの視点から富士山の成因や発達史の解説がある。ついで、カルデラの成因と広域火山灰、プレートの拡がる境界にある火山としてアイスランドの火山についての説明がある。

「山を切り崩す作用」ではまず、白馬連峰を例に高山の景観を決定づける山稜の凹凸を決めているのが岩石の割れ目の密度（節理密度）であることが説明されている。続いて地すべりの話。新潟県中越地震に伴う地すべり災害とその対策も紹介されている。

「周氷河作用」では、日本の高山を代表する穂高のような岩壁がむき出しでごつごつした山容の山も、大雪山のような丸みを帯びた山容の山も、その山容の形成に周氷河作用、特に凍結融解作用が深く関わっていることが説明されている。鳳凰山や大雪山の構造土、周氷河作用の研究が小疇氏の地形研究の出発点である。以後日本各地で構造上の発見や周氷河作用による地形研究が展開されるようになり、白馬岳では多数の大学院生や学生が参加した高山地形グループによる定量的な研究となった。自然地理の分野ではよく知られるようになった周氷河作用だが、登山者の間ではどうであろうか。日本の高山地形景観の理解に欠かせない周氷河作用が図や写真を用いてわかりやすく解説されている。また、スイスアルプスで見られる岩石氷河が日本アルプスにも存在することが報告されている。

「積雪の地形作用」では雪崩のつくる地形が取り上げられている。日本の山の特徴として多雪があり、登山者は常に雪崩に注目してきたが、その、雪崩のつくる地形については研究例が少なく、あまり注目されてこなかった。下川和夫氏、原田暁之氏らにより雪崩や、多雪が関わる地形についての研究の紹介があり、日本海側の山地の景観に積雪が大きく関わっていることが説明されている。

「氷河と氷河作用」では、北アルプスの詳細な氷河地形研究

を続けている長谷川裕彦氏を中心に、その研究の一端を示す、北アルプス南部の氷河分布図や南極やアコンカグア南麓の氷河の侵食や堆積に関わる写真があって、その認定を巡って日本の地形研究の出発点から議論が絶えない、氷河と氷河の造る地形がわかりやすく説明されている。日本の氷河地形問題については明治大学の山岳研究の流れを造った岡山俊雄氏が、かつて『山岳』にその論考を載せ、日本の氷河地形研究史を語る上では欠かせない文献となっている。

4章は「山を彩るいのち」で、山の植生景観を山を彩るいのちとして取り上げている。「風に彩られる景観」「雪に彩られる景観」「山を彩るいのちの意味」の項目で、特に雪と植生、景観の関係が論じられている。「山を彩るいのちの意味」では日本の高山景観を特徴づけるハイマツを取り上げている。なお、近年小疇氏は東ヨーロッパのハイマツに注目し調査を進めている。

5章は「山とひと」で、ここでは明治大学山岳部炉辺会のドリームプロジェクトの一環として組織された学術調査隊の隊員としてネパール、クンブーとアンナプルナで観光地理の調査を実施した横山秀司氏によって観光開発と自然保護の問題が取り上げられている。開発に歯止めをかけ自然や景観を優先した持続可能な観光に移行しているヨーロッパアルプスを紹介しつつ、オーバーユースになっている日本の山岳観光に問題を投げかけている。また、細田浩氏によって南アルプススーパー林道の現状が報告されている。

6章は「山の景観から学ぶこと」で、ここではまとめとして、執筆者代表の澤口晋一氏が毎年学生巡検で訪れる白毛門を例にして、山の景観から学べることの意味と面白さを語る。また北上山地の巨大風車を取り上げて、クリーンエネルギーという名目で自然破壊が進行している事実を告発しつつ、自然に学ぶ、山に学ぶことの大切さを若者たちに投げかけている。

氷河地形や周氷河地形といった項目ごとに初級編・中上級編と分けた参考文献の解説があるのも、本書を見てさらに興味を持った読者にとっての道しるべとなる。誤植等、気になる点もあるが、改訂版が出るということなのでそれに期待したい。

（岡澤修一）

本稿の筆者である岡澤修一氏（会員番号七九二二）は二〇〇六年八月に逝去された（享年五十七歳）。謹んでご冥福を祈るとともに、遅滞なく校正をしてくださったご遺族に感謝の意を表する。（山岳編集委員会）

日本山岳会百周年関連の発行物

日本山岳会百周年にあたって日本山岳会によって企画発行された二つの書物、すなわち『新日本山岳誌』と『英文ジャーナル』、およびこれに呼応するかのごとく良いタイミングで出版され、日本山岳会の百年の歴史を回顧するについて貴重な示唆をあたえてくれる『目で見る日本登山史』の内容を以下に紹介する。二つは、百周年の節目を飾る、多数の会員たちの協力が生んだ出版物であり、一つは、山岳会百年の歴史を日本登山史の全体像の中に位置づけるのに役立つ労作として特別の意義を持つからである。編者たちの労苦をねぎらいつつ、本誌に記録としてとどめ、同時に広く会員の関心を喚起する次第である。

日本山岳会編　著
『新日本山岳誌』

ナカニシヤ出版　二〇〇五年十一月
A5版　一九七四ページ　一八〇〇〇円＋税

高頭式の『日本山嶽志』が出版されたのは、日本山岳会の発足の翌年であった。まだ信仰目的以外の登山が一般化していなかった時代に登山を好んだ高頭が、親に反対されたため、その腹癒せに思い立って、全国の山岳についての資料を集めてその情報を一書にまとめたのだという。二一三〇座の山についての情報が盛られた、一三六〇㌻の大著であった。同時に山岳に関するあらゆる知識を網羅しようとする意志によって、山岳事典の趣を持っていた。後に日本山岳会の二代目の会長に推挙されたこの人の偉業をしのびながら一世紀後の現代の日本山岳に関する情報を集大成して百周年の記念の一つとしようという計画が立てられた。高木泰夫氏を委員長、大森久雄氏と柏木宏信氏を副委員長とする四十余名の委員会が発足し、二十三の支部と二つの地区（関東と関西）の会員たちが協力した。立案から完成までかなりの歳月を要した。委員会に名を連ねて重要な役割をつとめた小倉茂暉氏と山村正光氏が本書の完成を待たずに世を去った。

中央分水嶺の完全踏破と並んで、日本山岳会の全国組織ならではの協力から生まれたこの知的な産物が、高頭式の書をはるかにしのぐ約三二〇〇座の山岳についての、地理と歴史と民俗および登山案内を要領よくまとめた見事な書物となって、百周年の年に誕生した。

会長による序文と日本の山地山脈（図）を巻頭に、参考図書一覧・執筆者写真提供者一覧・あとがき・索引を巻末に配して、本書の中核をなすのが二つの部分、すなわち日本山岳の地形地

質から環境問題に至る、図版に富む解説と、個々の山岳についての記述である。前者が約一八〇㌻、後者が約一七〇〇㌻。厚さと重量は「広辞苑」にいささかも劣らない。

日本山岳概説

Ⅰ（1）日本の山の特徴（1　島弧としての日本列島　2　日本列島の山地の配列）

（2）日本の山地の特徴（1　山地の気候　2　山の植生と動植物　3　湖沼・湿原　4　山の地質　5　地形　非火山山地の起伏　6　火山　7　氷河地形　雪食地形　周氷河地形　8　山の暮らしと産業　9　環境破壊と自然保護）

Ⅱ　山地・山脈別山座解説（北海道・本州・四国・九州）

たんに高さと難易度あるいは知名度にとらわれていたのでは本州中部が支配的になったであろう。しかし「単なる登山案内ではなく、その山の歴史、民俗、動植物、地質など総合的なものと、二〇〇〇年前後の状況がわかること」が目的とされることによって、読んで楽しく、いろいろ教示と刺激に富む内容となった。低い山々も立派に権利を主張する。大阪の人工の山である標高五メートルの天保山に負けじと、東京の都心にある標高二六メートルの愛宕山が「山岳展望の原点」を根拠にして名乗りをあげる。大阪府堺市の蘇鉄山が標高七メートルながら、初登場の機会を得たのは、二〇〇〇年に国土地理院がこれを山と認知したからであった。他方、登山ガイドブックに見られない山々が数多く登場する。特に九州から南西方の島々が、宮之浦岳を持つ屋久島ばかりでないと言わんばかりに、かなりの高度の山を持っていることが本書によって教えられる。多くの新しい認識をあたえてくれて、どこをどう拾い読みしても楽しい山岳事典である。

山と溪谷社編

『目で見る日本登山史』
『日本登山史年表』

山と溪谷社　二〇〇五年十一月
B5版　（本巻）三五二＋（別巻）二七一ページ
七八〇〇円＋税

日本山岳会が二十五年の歴史を刻む間に日本の登山は質量ともに大きく発展した。文人と自然観察愛好者たちによって山岳の世界が世に啓蒙されることからスタートして、進取の精神を旗印とする学生たちによって岩と雪の世界での活動が盛んになっ

たのを経て、登山は大衆化の一途をたどった。この気運の中で一九三〇（昭和五）年に『山と溪谷』が創刊された。日本最初の商業的な山岳雑誌の誕生であった。これを嚆矢としてさまざまな定期刊行物が生まれては消えた。その中にあって『山と溪谷』が日本山岳会百周年の年に七十五周年を迎えた。山と溪谷社がこれを記念して二冊一組の書物を出版した。この二冊に盛られたことがらは、日本山岳会の会員が会の歴史を広い視野をもって振り返ろうとする際に数々の重要な示唆をあたえる。

1 『目で見る日本登山史』

第一部　近代登山前史
江戸後期～外国人による登山～山の調査・観測　未知への旅

第二部　探検の時代
近代登山の夜明け～日本山岳会設立と探検登山～雪山への試行～山岳趣味と登山の啓発～山と溪谷の魅力を探る～山案内人群像～山岳団体の設立

第三部　岩と雪の時代
アルピニズムの洗礼～積雪期初登頂とクライミング～大正登山ブーム～女性のパイオニアたち～バリエーション・ルート～極地法　ヒマラヤへの道～谷川岳の開拓～昭和前期の登山事情と出版

第四部　先鋭と大衆の時代
復興の足音～社会人の台頭とRCC～マナスル登頂と海外登山～登山とスキーの大衆化～登山の高度成長期～ヒマラヤ・ラッシュ～多様化と商業化～現代の登山状況と課題

2 『日本登山史年表』
明治以前（六七五～一八六八）～明治（一八六八～一九一二）～大正（一九一二～一九二六）～昭和〈戦前〉（一九二六～一九四五）～昭和〈戦後〉（一九四五～一九八九）～平成〈一九八九～　〉～日本人による海外登山史年表

堅牢な造本による本巻は「目で見る」と表題にある通り、よくぞこれほど集めたものだと感嘆しないでいられないほど多くの写真によって、文字情報では得られないことがらを知らせてくれる。まこと数年にわたって資料を渉猟しつづけた編者の執念に似たひたむきさを反映する。全二十六章のうち積雪期登山と岩壁登攀に関連する四つの章が遠藤甲太、ヒマラヤ関連の二章が池田常道、大衆化とスキー流行についての一章が松本保彦、最新のクライミングに関する一章が田中幹也の各氏によって解説されているが、他の十八の章が布川欣一氏の文章に導かれている。年表は、一九七五年以降について田中氏の情報収集があったものの、全体が遠藤氏によって作成された。

本巻の実質的な編集主幹である布川欣一氏は、限定された読者のものにとどまっていた山岳書の記述を一般性のある登山史

に組み込んで、登山史を広範な読者に近づけさせたい、という願いを出発点とした。登山史のパイオニアワークの中の誤りを正したり、登山家の影に埋没しがちな測量技師や案内人などの存在に光を投げたり、服装や用具といったものに応分の登場機会をあたえた。これには布川氏自身の注目に値する著書『山道具が語る日本登山史』（山と溪谷社、一九九一年）が先行していて、そこに発揮されていた好ましい性質の実証主義が、埋もれていた資料の掘り起こしを成功させたのであった。各章の前に解説として置かれた文章において、筆者たち、とりわけ布川氏が、登山史の建設的な文化の形成を進歩発展としてとらえるばかりでなく、自然破壊などのネガティブな要素を内包してきたことを鋭く指摘して、登山の未来について多少の憂慮の念を隠さない。正と負の両面で聞くべき言葉が発せられている。

別巻の年表は、国内の部は六七五年の役小角による大峰山脈の開山から二〇〇五年四月の真達朋子氏による奥三河鬼岩の女性としての完登攀まで、海外の部では一八六八年の栗本鋤雲のアルプスでの植物収集から二〇〇五年七月の山野井泰史氏による四姑娘山北西の花崗岩壁登攀まで、時代と世相の変化に相応して形を変える登山の様相を代表する事例が多彩に並ぶ。すべての事実を網羅的かつ統計的に並べるのでなく、取り上げるべき項目の取捨選択にあたって、一定の原則が設定された。遠藤氏は「困難度や規模の大きさ」よりも「自己の人生を登山に賭ける度合い」を判断基準として据えた。生命の安全を確保した上でおこなわれる高難度のフリークライミングより「危険度の高いアルパインクライミング」が優先される。組織と物量を頼みとする登山より「スマートな個人的な登山、とくに単独登山」により大きな価値を置く。

二つの巻のいずれの場合にも、山崎安治氏の名著『日本登山史』と『日本登山史年表』およびその周辺の著作が最も重要なベースとされた。本巻では安川茂雄氏の『近代日本登山史』、別巻では日本山書の会の『近代日本登山史研究』が、山崎氏の先行研究を補った、ということである。事実誤認や誤解の例が多々見つかった由ではあるけれども、訂正され修正されるのはパイオニアワークの宿命であって、山崎氏や安川氏の業績の価値そのものを減じるわけでない。日本山岳会の会員たちの中から登山史の先蹤者たちが現れて、良い手本として活用されたことをこそ、日本山岳会の文化的な営為の価値の証明である、と理解したい。

『新日本山岳誌』が現時点における日本山岳の叙述であるのに対して、『目で見る日本登山史』は時系列による映像と記述であって、両者が横軸と縦軸として補完しあう時、読者の興味がいっそう活性化され、日本山岳と人間の関わりに理解が一層深まるに違いない。両者を並置させて内容を紹介したゆえんがここにある。

"Japanese Alpine Centenary 1905—2005 Japanese Alpine News Vol. 7 2006"

Edited by Tamotsu Nakamura

Published by The Japanese Alpine Club

（『日本登山の百年　一九〇五～二〇〇五英文ジャーナル第七号　二〇〇六年版』日本山岳会百周年記念号）

中村保編、日本山岳会　二〇〇六年五月刊

A4版　三三六ページ　頒価三〇〇〇円（日本山岳会事務室扱い）

日本山岳会英文ジャーナルの第七号が「百周年記念号」と銘打たれた、美麗な写真と図版の多い、見事なできばえの冊子として発行された。日本登山史を要領よく語るとともに国際的な登山界での日本人の実績および最新の活動記録を収めている。海外に日本登山界の過去と現在を知らせるのに役立つ。これの出版を歓迎する声が海外から多く寄せられている。国際化の掛け声の割には甚だしく発信の乏しい日本からの情報が喜びをもって迎えられている。企画から原稿依頼と編集作業の一切に至るまで、ほとんどすべてを独力でおこなった中村保氏の情熱と労苦の大きさが、この重い一冊に凝縮している。これまで日本語で語られたことのない話題および今回初めて整理されてまとめられたことがらを少なからず含んでいる。加えて約三〇〇点の写真と一〇〇点近い概念図や地図のたぐいによって視覚的にも楽しみが多い。コスト・パフォーマンスの面から見ても、高度の楽しさを安価で味わえるのが嬉しい。

以下はその内容である。会報『山』に載った目次と多少日本語の表現が異なっているのは、英文タイトルの日本語訳を基本として若干の解題の文言を加えることとしたためである。

序文　日本山岳会会長　平山善吉

百周年記念スピーチ

前アメリカ山岳会会長　M・リッチー

メッセージ　元アメリカ山岳会会長　B・クリンチ

英国アルパインクラブ会長　S・ヴェナブルス

ヒマラヤン・ジャーナル名誉編集長　H・カパディア

ネパール山岳協会長　ツェリン・シェルパ

第一部　日本の登山と探検の一世紀

日本アルプスでのW・ウェストンとその後継者たち

宮下啓三

日本における山岳信仰（山岳崇拝と日本山岳会の誕生）

江本嘉伸

日本アルプスから世界の大山脈へ　池田常道
ヒマラヤにおける日本人の登山（戦前・戦後）　山森欣一
日本人の初登頂後に再登されていない一四の七〇〇〇㍍峰　山森欣一
北極と南極での日本人による探検と冒険　児玉　茂
中央アジア・チベットにおける初期の日本人探検家　金子民雄
日本地図および地図製作についての管見　長岡正利
川口慧海のチベットにおける足跡　高山龍三・大西　保
ヒマラヤの東・チベットのアルプス――概説と未踏の六〇〇〇峰二〇〇座　中村　保
世界の山における日本人の初登頂・初登攀のリスト（ヒマラヤ以外での）　児玉　茂
第二部　二〇〇五年における価値の高い登山記録
A　登山・登攀
チベット――カルシュン峰（6647㍍）初登頂　慶応義塾大学体育会山岳部　河西瑛一郎
チベットのマッターホルン――カジャチョ（6447㍍）初登頂　英国　M・ファウラー
チベット――中央チベット・ドブゼボ（6412㍍）初登頂　英国　D・バックルとM・スコット
新疆省――崑崙ユメ・ムスターク（6345㍍）初登頂　AACK（京都大学学士山岳会）　伊藤寿男
新疆省――天山山脈トムルティー（4886㍍）初登頂　防衛大学　福楽　勘
インドヒマラヤ――パレチュ・パティ渓谷周辺の山々（六〇〇〇㍍峰初登頂）　日本山岳会東海支部　鈴木常夫
インドヒマラヤ――シブリン北壁新ルート登攀（平出和也他）　中村　保（編）
アラスカ――デナリ・ダイヤモンド、ハンチントン登攀　横山勝丘
B　中国四川省
チョンライ山系・ポタラ山（5428㍍）北壁初登攀　山野井泰史
チョンライ山系・イーグル・ロック・ピーク初登頂　スイス隊　L・デュル
チョンライ山系・二つの岩峰群での初登頂　アメリカ隊　C・ケロッグ
チョンライ山系・ビペン渓谷の岩壁初登頂　アメリカ隊　T・チャンドラー
夏塞（5833㍍）初登頂　カナダ・ニュージーランド女性隊　P・ディーヴォル
海子山（マウント・ヤラ　5820㍍）西稜挑戦　中国・アメリカ隊　J・オットー

西部未踏山域の探査　山梨県　青木　茂
ガンガ山群の踏査　長野県　古畠俊彦
大渡河流域の未踏の山と忘れられた遺産・石塔群　中村　保

C　紀行
南極圏――サウス・ジョージア島の2005年度踏査と登山　英国隊　J・フリーマン＝アトウッド
南極大陸ヴィンソン・マシーフでのオメガ基金による探査遠征　オーストラリア隊　D・ギルディー
冬季の極東シベリア自転車横断　安東浩正
メコン河完全下降（中国から河口まで）　東京農業大学　北村昌之
東チベット・禁断の易貢蔵布探査行　中村　保

D　調査研究
日本アルプス大日岳の巨大雪庇の掘削調査　富山大学　川田邦夫
大ヒマラヤを横断する活断層の、西ネパール・フラム・カルナリ川での調査報告　広島大学　熊原康博

E　記録
2005年における日本人のヒマラヤでの活動記録　山森欣一

（山岳編集委員会）

会報『山』図書紹介一欄――二〇〇五年度――

●四月号（七一九号）
飯田年穂・近藤等共訳『ボナッティ　わが生涯の山々』（山と溪谷社）
岡本武司著『おれ　にんげんたち』（ナカニシヤ出版）
Jonathan Neale著『Tigers of the Snow』
徳久球雄・石井光造・武内正編『日本山名事典』（三省堂）

●五月号（七二〇号）
京極紘一著『素晴らしき幸運な登攀』（私家版）
山と溪谷社編『山がくれた百のよろこび』（山と溪谷社）
岡田汪著『夫婦登山ことはじめ―袴で登った剱岳』（私家版）
井上重治著『カラコルム・ヒマラヤに魅せられて』（遊人工房）
ウインパー著・大貫良夫訳『アンデス登攀記（上）・（下）』（岩波書店）

●六月号（七二一号）
The Alpine Club刊『The Alpine Journal 2004』
成蹊踏高會編『覆刻＊記録・會報』（日本経済評論社）
神戸大学東チベット学術登山隊編『神戸大学東チベット学術登山隊報告』（神戸大学山岳会）

鈴木裕子著『山と私』（私家版）

●八月号（七二三号）

梅棹忠夫・山本紀夫編『山の世界』（岩波書店）

中村保著『チベットのアルプス』（山と溪谷社）

●九月号（七二四号）

大島亮吉著・大森久雄編『（新編）山　紀行と随想』（平凡社）

高桑信一著『古道巡礼』（東京新聞出版局）

高澤光雄編『山の仲間と五十年』（秀岳荘）

Harka Gurung著『Peaks and Pinnacles—Mountaineering in Nepal』（ネパール観光協会）

●十月号（七二五号）

日本山岳会医療委員会編『山の救急医療ハンドブック—山で起きるケガや病気の現場での対処法』（山と溪谷社）

大森義彦著『健康長寿登山』（東京新聞出版局）

●十一月号（七二六号）

黒部の衆著『黒部別山—積雪期—』（黒部の衆）

村山雅美著『地の果てに挑む』（東京新聞出版局）

菊地俊朗著『白馬岳の百年』（山と溪谷社）

永田秀樹編『山の遭難　生きた、還った』（東京新聞出版局）

●十二月号（七二七号）

山と溪谷社編『目で見る日本登山史』（山と溪谷社）

菊地敏之・前之園多幸著『クライマーズ・ボディ』（東京新聞出版局）

村口徳行著『四度目のエベレスト』（小学館）

●二〇〇六年一月号（七二八号）

谷山宏典著『登頂八〇〇〇メートル　明治大学山岳部十四座完登の軌跡』（山と溪谷社）

山森欣一著『欣ちゃんの山一辺倒』（アテネ書房）

渡部由輝著『永遠の未踏峰』（山と溪谷社）

●二月号（七二九号）

沢木耕太郎著『凍』（新潮社）

谷口凱夫『翼を持ったお巡りさん』（山と溪谷社）

松浦隆康著『静かなる尾根歩き—奥多摩から八ヶ岳まで10コース』（新ハイキング社）

John Harlin Ⅲ編『The American Alpine Journal 2005』（American Alpine Club）

●三月号（七三〇号）

志水哲也編『山と私の対話—達人の山旅1』（みすず書房）

高桑信一編『森と水の恵み—達人の山旅2』（みすず書房）

佐伯邦夫著『山との語らい—剱岳のふもとから』（山と溪谷社）

寺田政晴著『夜景を楽しむ山歩き』（東京新聞出版局）

寺田和雄著『山憶い　都市憶い』（茗溪堂）

追悼

渡辺徳逸氏（一九〇〇～二〇〇六）

二〇〇六年一月二十三日、会員番号一七八四、渡辺徳逸翁はこの世を去った。享年百五歳と六カ月。翁は百歳で、第十九代会長斎藤惇生氏の紹介で再入会した。現会員の皆様は、そんな高齢でと驚いたことだろう。戦後の混乱で会員籍を失ってからも、会員としての自覚を持ち続け、後進の指導を続けていた。私もその指導を受けた一人で、日本山岳会の大先輩のお名前をよく耳にした。久しく日本山岳会の皆様と離れていた翁は、歴史ある富士山須山口登山道復活の実現から、にわかに皆様とお近づきになった。

一九三九年、小島烏水初代会長と鳥山悌成氏の紹介で入会してから、戦火が激しくなるまで、小島烏水氏や冠松次郎氏らの指導を仰ぎ、自己研鑽に努め、富士山の研究を深めていった。今から十三年前、須山地区の方たちが翁を囲む会を立ち上げると、自分の生い立ちや須山口復興の熱い思いを語り始めた。翁は多くの文化人や著名人との交流があったが、そのことをひけらかすこともなく、自らの功績を語ることもなく、地元須山の発展を願い続けていた。翁は生涯の中で、富士山須山口の復興を夢見ており、日本山岳会に復帰できることなど考えてもみなかったが、晩年その二つが同時に実現でき、「夢のようで大変有り難い。富士山のおかげです」と語った。

小島烏水氏との交流は学生時代からで、地元須山口復興の有様を何度も相談している。小島烏水氏が、廃れ行く須山口と村山口のことを嘆き「古くして滅び行くもの皆美しく」と詠めば、若山牧水氏は「かたはらに秋草の花語るらく滅びしものは懐かしきかな」と、同じく廃れる古道を嘆いている。

冠松次郎氏は黒部の主として有名だが、晩年は小島烏水氏の影響を受けて富士の古道に興味を持ち、翁と村山口や須山口をよく歩き、富士の側火山にも興味を持った。冠氏との面白いエピソードがある。

富士山から下山の途、十里木の横山家に宿泊した折、冠氏が風呂から出ようとしたが落としたはずの垢が体毛につき「熊のようになった」とぼやいた。すかさず翁は「そういう時は体を揺すってから出るものだ」と教えたそうだ。

冠氏が国立公園協会主事の時、白馬岳に方位盤を作ろうと、白馬岳の剛力に荷揚げを頼んだところ、けんもほろろに断られた。仕方なく翁に相談すると「富士山の剛力さんはどうだろう」と小見山正氏を紹介された。小見山氏は荷揚げから一カ月後に

過労でこの世を去った。冠氏と翁は家族から、父は二人に殺されたようなものと恨まれた。小見山氏は箱根外輪山の一つ金時山に山小屋を建設中で、志半ばで逝ってしまわれたので、今は娘の妙子さんと孫娘が山小屋を守っている。

富士山にケーブルカー建設計画が持ち上がった時、翁は冠氏から民間の立場で反対運動を依頼されて建設を阻止した。そのとき近隣の首長からも恨まれた。冠氏が日本山岳連盟発足の狼煙をあげた時、翁は発起人に名を連ねている。逆に翁が富士山をテーマにラジオ放送を手掛けたとき、岳人の立場で冠氏が参加している。その他、冠氏が藤木九三氏を愛鷹山荘に連れてきた話、藤木氏が秩父宮様の山のご指導のため御殿場を訪れ、翁の住まいの珠山荘に立ち寄った話、今西錦司氏も愛鷹山荘を利用している話などもあった。安らかなところへ行かれた今、翁は先輩たちに会って須山口復興の報告をしているのかも知れない。

合掌

略年譜

一九〇〇年七月二十四日　駿東郡須山村に正五郎、はつの三男として生まれる

一九一四年　須山村尋常高等小学校卒業と同時に東京青山師範学校に入学

一九一七年　東京外語大に編入。アルパインクラブ会員・外語大客員教授ウイリアム・ヘーゲル氏と出会い、山の楽しさを教わる

一九一九年　勉学中の吐血により郷里での養生を勧められ須山に戻る。以降森林浴で養生の傍ら富士山研究に没頭。教授依頼の翻訳で収入を得る

一九二八年　静岡商業高等学校の生徒が愛鷹山で遭難し、それを契機として愛鷹山荘の建設と登山道の整備に尽力する

一九三九年　小島烏水・鳥山悌成両氏の紹介で日本山岳会に入会。会員番号一七八四

一九七八年　富士山資料館開館と同時に館長に就任。文化財の保護と文化の発展に寄与した功績で文化庁より表彰を受ける

一九九八年五月三十日　日本山岳会のメンバーと富士山須山口登山歩道の完成を祝う

二〇〇〇年　会員番号一八七四で日本山岳会に復活

二〇〇四年十一月二十四日　日本山岳会資料映像委員会のインタビューを受ける

二〇〇六年一月二十三日　心不全のため逝去

（勝又　一歩）

東浜義男氏（一九一九〜二〇〇六）

大平洋戦争は一九四一（昭和十六）年十二月に始まったが、その戦中と戦後十年くらいの間、早大山岳部では無線通信の実験にかなり力を注いだ時期がある。このことは部の報告には全く記されていない。元来電波管理法に触れることであり、あまり公にできなかったせいもあるが、およそうまくいったことはなかった。先輩今村正二の設計した無線機を理工学部在籍の部員が協力して実験したことであり、よい装置ができれば、当時手掛けていた極地法登山の運営には何よりの武器となるはずであった。

東浜は他の二、三人と組んで実験していたが、私がこのことを知るのは新人の昭和十六年冬、神の田圃のスキー合宿のときである。『リュックサック』十号の年報には、特別班として松田、東浜、青木の三人の名前があるだけで内容は記されていない。一九四二（昭和十七）年春、横尾尾根計画では何事もなかったが、翌年の前穂北尾根のときには再び無線機の実験が組み込まれていた。当時の下級部員にとって悩みの種は乾電池の存在である。真空管式の無線機で、重い箱形乾電池を使っていたため、十個も二十個も積み重ねて運ばなければならなかった。計画の途中、一人が八峰直下で表層雪崩に流されるという事故が起こった。梓川に向かって開けた小さなカールの底で止まったが、足を痛めて動けない。取りあえず天幕を張って負傷者を収容し、東浜、青木が付き添った。この時、屏風ノ頭との連絡に無線機が少し役に立ったようだ。しかしカールの下は滝状の岩壁で、負傷者は下ろせない。早速、スキー二台で橇を作り、稜線から涸沢本谷、横尾の谷を経て徳沢まで下ろした。この間雪崩を恐れてすべて夜間作業である。雪に覆われた上高地の河原を曳くのは楽であったが、登山道に入るとわずかな上下に手こずったのを覚えている。中ノ湯からは人夫の力を借りて一段落。しかし一週間ちかくを浪費して計画は中止となった。ほとんど屏風ノ頭に上がっていた天幕資材を下ろすのはあまり楽しくない。橇犬の次は荷下げかとぼやきながら上下したが、東浜は撤収作業の指揮者を務めた。三月中旬、氷雨のなかでB・Cの後片付けも大体終わりに近づいた時である。われわれ二年生は要領よく荷をまとめて下ろうとしていた時、東浜の雷が落ちた。こんな時二年生は最後まで残って後始末をすべきなのに、一年生を置いて先に下るとは何事だという叱声である。

その時の恥ずかしさは骨身にこたえた。その年の九月、東浜は繰り上げ卒業し、山岳部との縁は薄くなるが、敗戦後は家業の東浜油脂の疎開先、長野県豊野に住んだ。一九四七（昭和二十二）年日本山岳会信濃支部発足とともに先輩の百瀬孝を助け

て支部委員に名を連ね、高校山岳部の人たちの指導に力を注いだ。一九五二年、鳥海山で行われた国体では監督として高校生チームを率いたが、その高校生の中に太田晃介、平林克敏などの名前を見出すと、時代の移り変わり、山登りの世界の人の繋がりの妙を感じるのである。

その後、副支部長として名を連ねたときもあったが、東京に戻り、米国企業の日本代表として仕事をするようになったせいか、山登りとの縁は薄くなったようだ。私自身、昭和年代後半の十五年ほど東京を離れていたので東浜の消息には詳しくないが、一九九〇（平成二）年、彼が永年会員になってからは顔を合わせ、話を交わす機会が増えた。

そして、一九九九（平成十一）年七月、「百瀬孝さんを慰める会」が松本東急インで催された時、再び東浜の晴々した顔を見出すのである。昔の紅顔の青年たちも今や錚々たる信濃支部の有力者となって顔を揃えた。百瀬、東浜にとっては昔の教え子に会うような気持ちであったろう。稲門の後輩としては村木、小倉、日下田が参加した。

そしてさらに数年、年次晩餐会が顔を会わせる唯一の機会であったが、何事もなく過ぎて、本年二月突然の訃報に接することになった。ご遺族の配慮かも知れないが、山の関係者は誰も葬儀には参列していない。昔、東浜が信濃支部報に記していた。「山に登る人々には所謂エライ人が多い。もっとつつましやかな気持ちでお互いに融和できないものか…」という考え方に相応しい静かな最後であったといえるかも知れないが、私にとっては少し寂しすぎるお別れであった。

東浜義男氏は一九一九（大正八）年生まれ。一九四〇年日本山岳会に入会（紹介者関根吉郎・吉阪隆正）。会員番号一八三四。一九九〇年永年会員。二〇〇六年逝去、享年八十七歳。信濃支部時代のことについては、赤羽孝一郎氏のご教示によるところが多い。

（村木潤次郎）

金子泰助氏（一九一三〜二〇〇五）

金子泰助氏は在籍五十九年という古い会員であった。しかし、九十二歳という高齢での死去であり、家族と連絡がつかず、金子氏と付き合いのあった会員がいたのかどうかも分からないので、追悼文を依頼すべき人が見付からなかった。そこで、会に残っている資料によって金子氏の足跡の一部を記しておきたい。資料といっても、『山岳』や『会報』への記述はないようで、入会申込書と、永年会員となった際に提出されたごく簡単な身上書だけである。幸い入会申込書には、便箋七枚にのぼる山歴

が添付されていて、金子氏の若いときの山登りの一端を窺い知ることができる。

金子氏は塚本繁松・垣内政彦両氏の紹介で一九四六年入会、会員番号二四一六である。出生地は浅草区馬道で、入会時の住所は下谷区上野桜木町で、勝村組内とあるから建設会社の社員だったようだ。入会申込書に添付してある山歴は、陸軍の便箋を用いており、前書きに「戦災ノ為山日記焼失セル為年度不明デスガ思ヒ出シタモノノミヲ記シマシタ。所属ハ東京浅草山岳会デス。恥ズカシキ岳歴ニテ入会ノ資格アリヤヲ疑フ次第デス」とある。山歴は昭和七年（十九歳）から召集を受けた同十六年までを、山域ごとに記している。

北アルプスでは、浅草山岳会の合宿であろうか、大町―針ノ木峠―五色ヶ原―立山―剱沢合宿―八ッ峯、源次郎等登攀―剱岳―立山―富山（二十日間）というものや、上高地―コブ尾根登攀―ジャンダルム―穂高―奥又白下降―上高地―霞沢三本槍―焼岳―島々（八日間）がある。南アルプスでは、穴山―釜無川中ノ川遡行―六合小屋―鋸岳往復―甲斐駒―早川尾根―鳳凰山―日野春（五日間、単独）や、日野春―屏風小屋―甲斐駒積雪期登攀成功―日野春（四日間、単独）という一月の記録もある。単独で登った二月の富士山では八合目でビバーク、吹雪のため九合目で退却という経験もしている。谷川岳一ノ倉沢の岩壁登攀、スキー登山・ツアーと、精力的に広範囲の山登りを行っている。

一九四一～四五年は応召して登山は不可能となり、一九四六年日本山岳会に入会するが、その後の登山については、一九九六年、入会五十年に達し永年会員になったときの身上書には「平凡」の一語で済ましている。感想の欄には「あこがれのヒマラヤの時代になったが、年をとりすぎた」と。

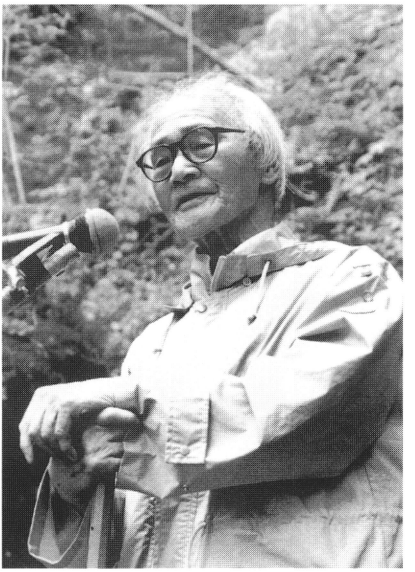
これら限られた資料から察するに、金子氏は若いときから山の魅力にとりつかれ、ヒマラヤの夢も描いたが、戦争により中断、戦後になって本会に入会する機会を得たものの、山登りの方は意に任せなかったようだ。しかし、会を大事に思う気持ちは強く、終生会を離れることはなかった。身上書の入会時の紹介者欄には「塚本繁松様、垣内政彦様」と書き、五十年を経ても紹介者への敬意を忘れない。そんなことは当然といってしまえばそれまでであるが、紹介者を忘れてしまっている例さえ少なくないのが現実である。会に残してある入会申込書の綴りを見ていると、山歴や経歴を何も書いていない、入会してやるといわんばかりの傲慢な印象を受ける申込書すら目にすることもあるだけに、金子氏のような、目立つところには出ないながらも、陰ながら会を愛し、謙虚に真面目に会を見つめ続けてくれてた会員は貴重だと思う。会が今日まで続いてきたのは、そのような会員の支えがあればこそである。

筆者は、本誌の編集に永年携わった望月達夫氏から「追悼欄

追　悼
OBITUARY

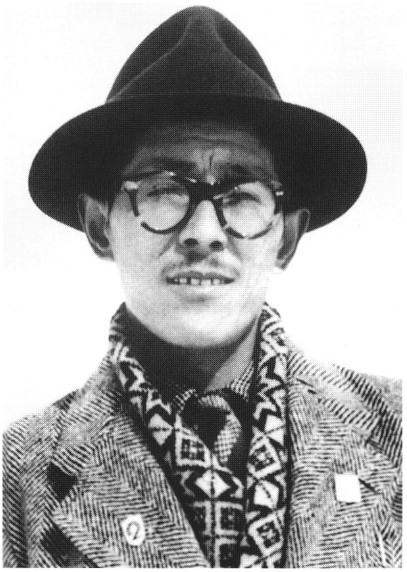
名誉会員
渡　邉　兵　力氏
WATANABE Hyoriki
（Hon. Mem.）
（1914～2005）

名誉会員
今　井　喜美子氏
IMAI Kimiko
（Hon. Mem.）
（1905～2006）



渡　辺　徳　逸氏
WATANABE Tokuitsu
(1900～2006)

青　柳　安　昭氏
AOYAGI Yasuaki
(1927～2006)

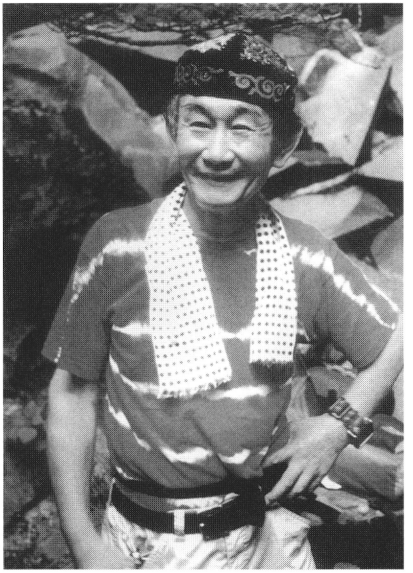


横　江　一　郎氏
YOKOE Ichiro
(1917～2005)

小　谷　隆　一氏
KOTANI Ryuichi
(1924～2006)

塚　本　茂　樹氏
TSUKAMOTO Shigeki
(1929～2005)

山　村　正　光氏
YAMAMURA Masamitsu
(1927～2005)



に取り上げる基準の第一は会への貢献。長期間会費を払い続けてくれたことも立派な貢献である。その貢献に応えて永年会員は有名・無名を問わず追悼欄に取り上げるべきである」との教えを受けた。こうした考え方は会の運営においても忘れてはならないことであろう。

（編者）

今井　喜美子　氏（一九〇五～二〇〇六）

今井喜美子さんは、三月二十七日静かに旅立たれた。享年百歳と九カ月。二十九日の通夜の別れ、たるみひとつない色白の肌、息をのむ美しいお顔に、大勢の参列者は驚かれたのではないだろうか。

喜美子さんは昭和の初期に、村井米子さん、中村テルさん、黒田初子さんと並んで、わが国の女性登山のパイオニア的役割を果たされた方であった。一九三二（昭和七）年剱岳八ッ峰と源次郎尾根（女性初登攀）、一九三五（昭和十）年穂高・滝谷、同・ジャンダルム、同・飛騨尾根（女性初登攀）等の記録がある。日本山岳会には中屋健弐氏の紹介で一九四七（昭和二十二）年入会し、会員番号は三〇一九だった。一九九五年名誉会員に推挙され、九七年永年会員となった。

喜美子さんは日本山岳会のなかでも、大勢の会員から敬愛された方であった。今井ファンの山男たち、同じく女性会員もあまたおられることを知っている私は、追悼の辞を執筆するなどおこがましいとの思いしきりであるが、私の心の中にある喜美子さんを綴って追悼の辞とさせていただこうと思う。

彼女の百年という長いご生涯の中で、親しくさせていただいたのは晩年の四十年ほどである。ご自宅に斉藤桂さんと伺ったのが皮切りで、明るい二階の部屋でお酒をいただき、日本酒大好き人間だった私を、以降呑み仲間の一人として遇してくださった。日本酒が本当にお好きな方で、それからは頻繁にお誘いの電話を下さった。忘れられないのは、いつも電話の冒頭で「瑠璃ちゃん？」と呼んでくださったことで、母以外にこの呼び方をいただいたのは喜美子さんだけである。

七十歳代の頃の彼女は、軽い山行を入れた山旅を次々と計画された。毎回は無理だったが、いろいろなところへお供させていただいた。戦争中、ご主人の雄二氏が炭焼きをされた跡地や、渡邉兵力さんの妹さんご夫妻の蓼科の別荘は特にお気に入りで何度も伺った。尾瀬、会津、箱根、高峰高原等々。旅行に出る時は、他人まかせにせず、宿や切符の手配にいたるまで全部自分で仕切られた。その昔女流登山家として活躍された頃の前向きな活動姿勢を垣間見る思いがした。

米寿のお祝いの会での今井喜美子さん
宮下啓三・画

喜美子さんは、請われて長年エーデルワイスクラブの顧問をされた。また彼女はスキーの名手であり、指導員の資格もお持ちであった。一九三一（昭和六）年二月二十一日付けの「国民新聞」にその証しが残っている。「関の女王今井喜美子さん」という大見出しの横に、彼女のすらりとした長身のスキー姿がある。昭和初期の関、赤倉は、スキーのメッカの地であった。女王の名を欲しいままに滑走されたその頃の身長は百六十五センチもあったそうだ。私も三水会第一回阿寺沢集会の折のすらりとしたお姿を鮮明に記憶している。

「喜の会」は私にとっても貴重な思い出の会である。四半世紀も続いた「今井喜美子を囲む呑む会」であり、山岳会の中でこよなく酒を愛する常連の集まりでもあった。手元にあるはがきには、一九八七（昭和六十二）年五月（今井・高橋・冨田・片岡・斉藤（健治）・斉藤（桂）・石井・岩堀・早川・吉武・館野・原・宮下（啓）・高田・岡野谷）出席者十五名とある。貸し切りの小座敷「おちあい」で芋煮鍋をつつき語り呑む会では、独特の笑顔を絶やさず喜美子さんは、いつも愉しそうに聞き役にまわられるのである。そのうち沼津の加田勝利さんとの交流が始まり、皆で沼津のかもしか小屋を訪れたこともあった。加田流一気呑みに興じた夜は、本当に楽しかった。翌日加田さんは、どうしても金時山の頂上までお連れしたいと、喜美子さんを途中からおぶって登って下さった。長身の彼の背中に赤子のようにおんぶされた可愛いお姿は、今も目に焼きついている。一九九四（平成六）年十月、喜美子さん八十九歳、快晴の日であった。

翌一九九五年の日本山岳会創立九十周年記念の会場にて、名誉会員に推挙された。山岳会と同年の九十歳であった。

山とは関係ないが、喜美子さんにはもう一つの顔があった。「杵屋栄紀峯」、長唄の名取りであり、大先生であった。山・スキー・長唄、この三点は三つ巴のように、喜美子さんの全人生を支え合っていたのではないか、と推測できる。全盛期の頃、よく長唄の会に招かれた。朝の十時頃から夜の八時頃まで、大

勢の弟子たちが引きもきらず舞台に上がる。そのそばで喜美子さんが、出突っ張りで伴奏の三味線を引き続ける。そのお姿に、なんとすごい体力であろうと驚嘆するばかりであった。三百曲くらいは、唄も三味線も暗んじておられると弟子たちから聞いたことがある。その後、山岳会の岩堀瑞子さん、小倉董子さん、森宏子さん、安藤文子さんたちが弟子入りされ、喜美子さんの米寿の会では揃って「操り三番叟」を唄いあげ、当夜の百五十人余の参列者からの拍手鳴り止まずで、弟子たちから最高のプレゼントを受けられた彼女の至福のお姿を思い出す。

喜美子さんは、最晩年よく骨折され、入院した河北病院で理学療養士佐藤幹枝先生にめぐり会われた。この方が、喜美子さんの亡くなるまで誠心誠意、心と体を支えて下さった。お人柄が強運を呼ぶのであろうか。

私事ではあるが、私の実母も喜美子さんと同年の明治三十八年生まれである。私は三十代で母を亡くした。お会いしていると、ふっと彼女の中に母を重ねている自分を感じることがしばしばであった。

いつも穏やかな優しい笑顔の中に、秘められたしなやかで強靱な精神の持ち主だった人。常に人と対峙するとき、さりげなく一歩下がった控えめの姿勢を持ち続けた人。おしゃれで、素敵な明治女。山と人生の生き様を示唆して下さった大先輩、今井喜美子にめぐり会えた幸福を、あらためて心に噛みしめている。

著作に、夫・今井雄二氏との共著で『心に山ありて』『続・心に山ありて』『花と氷河』、『山岳講座』第六巻に「婦人と夏期登山」がある。合掌

（早川瑠璃子）

渡邉兵力（ひょうりき）氏（一九一四～二〇〇五）

渡辺氏は一九一四（大正三）年七月二十七日、父・八郎氏、母・朝子さんの長男として東京で生まれた。父・八郎氏は秩父宮家の御用掛であったが、山好きでもあり、小学生だった兵力さんは父に連れられて富士山に登ったり、宮様のお供の際にも五色温泉行に加えられてスキーをやったりと、恵まれた環境であった。

成蹊学園小学校に入学してから同高等学校を卒業するまでの十四年間は同学園で過ごし、山岳部に籍を置いたため、ここで登山の原点が体得できた。すなわち高木文一・正孝兄弟や、三枝守維、立見辰雄ら良き山仲間を得、一九三一年にはその仲間で谷川岳芝倉沢に虹芝寮を建設、一九三三年には一ノ倉沢奥壁の積雪期初登攀を成し遂げた。

一九三五（昭和十）年、東京帝国大学農学部農業経済学科に入学後、直ちにスキー山岳部（ＴＵＳＡＣ）に入り、ヒマラヤ遠征を念頭においた南千島チャチャヌプリの冬季初登行に参加した。また在部中、小川登喜男や田口二郎とも知り合いとなり、誠によき時代の大学山岳部生活を体験したといえる。

一九三八（昭和十三）年大学卒業後、北京の大同学院（現・北京大学）に勤めた。一九四二年橋本喜美子さんと結婚、長女佐喜さんと次女真喜さんをもうけた。一九四六年に中国から引き揚げ、日本農業研究所に入所、翌年には松方三郎氏の紹介で本会に入会、会員番号は三〇二九である。ＴＵＳＡＣ・ＯＢ等の東大山の会にも入ったが、この時代は仕事が忙しかったとみえて一九五一年当会を退会している。

一九五六年、戦後初の国際的活動である南極観測が始まり、東大、京大、北大等の山岳部ＯＢが協力することになった。設営部門では兵力氏が最適任と思われたが、当時本人はあまり乗り気でなかった。南極に熱心だった日大の初見一雄氏と私は、西堀副隊長の意も汲んでお茶の水のコーヒー店で兵力氏と三時間以上話し合い、ようやく腰を上げてもらった思い出もある。学会の諸権威がおのおの観測の充実を主張する南極特別委で、西堀氏の補佐役である兵力氏が、観測の前にまず設営が必須である点を諄々と説き、諒承を得た話は有名である。第一次隊が南極オングル島沖に接岸したとき、基地候補地として西堀案と永田案の二つが出たが、兵力氏は前者を強く主張して実現に導き、その先見の明は現在でも評価されている。

一九六三（昭和三十八）年、東大では初めてカラコルムに遠征隊を送ることになり、隊長に加藤誠平ＴＵＳＡＣ部長、副隊長に兵力氏が選ばれた。隊長が関節炎のため現地に到着直後帰国となり、副隊長と隊員の努力でバルトロ・カンリ峰の初登頂に成功した。南極やバルトロの時代はアルピニストとしての兵力氏の最も充実した時代であった。

一九六六年には当会に復活入会、一九七〇年から七五年まで農林省農業総合研究所長となり、七六年から八四年までは日大農獣医学部の教授を勤めた。この頃から山の先達としての活動が始まった。一九七六（昭和五十一）年にはナンダ・デヴィ登山隊総隊長に選ばれた。健康診断の結果現地には行けなかったが、この隊は大学山岳部ＯＢと第二次ＲＣＣ等社会人山岳会員とが協調のうえ遠征に当たるという学生部としても清新な試みであった。兵力氏は「加藤保男、高見和成、長谷川良典、重広恒夫など、こちらから近付きになりたいホープたちが隊員で、むしろ勉強になり楽しかった」と自由な発言だったが、一方では「マナスル以降の遠征は遊びだから募金などに頼るべきではない」とか「遭難の責任は本人にあることをもっと自覚すべし」等厳しい指摘も忘れなかった。

一九八〇（昭和五十五）年、日本山岳会チョモランマ登山隊

を組織するに当たり、西堀会長は兵力氏を副会長として推薦した上、かつての北京滞在を評価して登山隊長に任じた。この登山は成功であったが、それ以上に中国登山協会との交渉や中国隊員との交流が順調で、その後の中国での登山活動の促進に大変効果のあった点が指摘できよう。

一九八四（昭和五十九）年、勲三等瑞宝章を受章、翌年には当会名誉会員に推挙された。晩年は『自然（じねん）流スキー術』を出版、自ら技巧に走らない楽しいスキー滑降を実行し、周囲の人々を大いに楽しませた。九十歳近くなっても、兵力氏らしい記念講演を行ったり、若い人々とウィットに富む議論を戦わせたり、山のロマンを追い続ける岳人であった。

一九九九（平成十一）年、夫人が亡くなられ、その後は自炊による独り暮らしとなったが、定期的に病院で検査も受け、元気に過ごしていた。一昨年秋頃から食が細くなり、外出もあまりしなくなった。昨年六月に肝臓に異常が見つかったが、自身の意志で入院はせず、大好きなわが家での独り暮らしとなった。最期を迎える三カ月前から佐喜さんが、一カ月前からは英国在住だった真喜さんも加わって、食事の世話が行われた。兵力氏はまさに両手に花だといって喜び、大いに会話も弾んだ。お二人は、あんなに楽しい日々はなかったと述懐されている。

二〇〇五（平成十七）年九月六日、最後まで意識も明瞭で苦しむこともない、肝臓がんによる静かな往生となった。誠に幸せな人生であったといえよう。合掌

（中村純二）

青柳安昭氏（一九二七〜二〇〇六）

永年会員青柳安昭さん（会員番号三七四〇）が、二〇〇六年一月二十八日、入院後十日余で逝去された。

誇り高き信州教育を支えた教師の一人で、多くの教え子や山仲間、教師仲間に惜しまれながら永久の別れとなった。

信濃支部は、今年第六十回のウェストン祭を開催し、支部誕生六十周年を迎えた。その六十周年を記念して支部報の復刻が企画された。出来たての復刻版を中野支部長と二人で、ご自宅へお届けしたのが逝去一カ月ほど前の年末のことだった。三年くらい前から人工透析の治療を受けていることは聞いていたが極めて元気で復刻を大変喜んでいただけた。

信濃支部は第一回ウェストン祭を機に結成され、支部報第一号が発行された。しかし、諸事情により五号発行のあと四年間休んでいたが、第六号を自ら編集しガリ版刷りの手作り支部報をつくったのが青柳先生だった。

その後、第十号までガリ版刷りの支部報が発行されている。

復刻にあたり原本をお借りしたり、先生の支部報によせる思いは特別のものがあったように感じた。復刻版を生前に届けられたのが、せめてものささやかな恩返しとなった。

県内各地で教職四十年、そのあと故郷の堀金村教育長を務められ、臼井吉見文学館の創設に尽力した。

青柳先生の生家は文字通りの北アルプス山麓、すぐ裏山が常念岳や蝶ヶ岳に繋がっている。初めての登山は十一歳、小学六年生の時の常念岳。その年、上高地を訪ね焼岳にも登っている。

長野青年師範学校では山岳部の部長を務め、昭和二十二年戦後の寂寞たる時代に単独で南アルプスの全山踏破したのが「自分では記録に残る登山だった」と言っていた。

教師としての初任地が乗鞍山麓の安曇小中学校大野川部校で、最後が安曇小中学校校長だった。現在は松本市となったが、当時の安曇村は槍ヶ岳、穂高岳から乗鞍岳、そして上高地をもつ山の村だった。今となっては聞くこともできないが、初任地と最後は先生の強い希望だったようにも思われる。

その間に大町山岳総合センターに専門主事として勤務、一九七一年からは文部省登山研修所の講師となり一九七五年より七七年までは主任講師をつとめている。

安曇小中校の校歌は元信濃支部長尾崎喜八氏の作詞、ウェストン祭の記念山行、徳本峠越えに毎年児童と保護者が大勢参加されるのも、青柳先生の陰の力にあると思われる。

先生は主として北アルプスをゲレンデとして夏も冬も登っていたが、むしろ教育者、指導者として多くの後進を育てたことが大きな足跡だったように思う。

奥様から、没後発見したとのことで、見せていただいた自分史には「山と共に生きた安昭の一生」と副題がつけられている。やはり没後見つかったものには「黄胆の黄色消えよと爪を切る」一月十八日詠む。と書かれ「こんな日がくるとは知らず生きてきた」「人生是夢也」とも記されていた。

没後教育功労により瑞宝雙光章を授章した。心からご冥福をお祈りいたします。

（青柳安昭氏は一九四九年日本山岳会に入会。紹介者は小穴信一・高山忠四朗両氏。一九九九年永年会員になる。享年七十九歳。）

（井口謙司）

横江一郎氏（一九一七〜二〇〇五）

二〇〇三年十二月六日開催された年次晩餐会で横江一郎氏は永年会員に列せられた。そのお祝いを支部晩餐会でと楽しみにしていたが、残念ながらお見えにならなかった。翌年の支部晩

餐会の出欠葉書に「何時もおたよりを頂きありがとうございます。前より入院しておりましてまだ長引くと思いますので、しばらくの間おたよりをお休みにして下さい」と寄せられた。それが二〇〇六年四月の支部総会出欠葉書には、ご家族から「前年十二月二十一日死去いたしました。お世話になりましてありがとうございました」とあって愕然とした。

私は商売絡みで横江氏とお会いしたのは一九五五年版の『山日記』が縁である。それに「登山団体一覧」があり「北海道庁山岳部　横江一郎　昭和二十三年（一九四八）創立　会員二〇〇名」とあった。また、この年から拡販用に『山日記の栞』が発行され、伊藤秀五郎氏の「平原に聳える山々」、奥田五郎氏の「大雪山を囲むアイヌ地名」、それに松方三郎氏や深田久彌氏など錚々たる方々が執筆されていたので、それを道庁勤務先の民生部福祉課に訪ねていって配付をお願いし、喜ばれながらお世話になった。当時は山岳団体が続々と誕生し、山の本はよく売れた時代だった。

横江さんは一九一七年に札幌で生まれ、戦前の山スキー全盛期に近郊の山々を登っていた。早稲田実業から早稲田大学へと進んだ。北海道庁に就職してからは総務部人事課勤務が長く、戦後、山とスキーの愛好者たちとチロルスキー山岳会を創設、四季を通じてご家族とも登られている。一九五二年に第九回国民体育大会が北海道開催と決定。二年後の七月に山岳競技が大雪山開催となると、俄然多忙を極めることになる。

北海道新聞一九五二年十二月三日夕刊によると、十二月一日午前十一時、札幌産業会館で北海道スキー連盟理事会が開かれ、横江氏は常任理事に推される。また、当日午後五時から札幌石田屋で北海道山岳連盟設立発起人会が開かれ、そこでも常任理事に指名されている。

翌一九五三年三月二十七日に札幌市民会館で開かれた、第九回国体準備委員会第二回常任委員会で、道庁総務部内に事務局設置が決定し、横江氏は総務係長に任命され重責を担うことになる。その席には日本体育協会はじめ東京から関係者が出席していた。

その翌日、横江氏は日本山岳会入会申込書に記入している。紹介者は林和夫・藤井運平の両氏、入会承認は四月一日付で会員番号四〇四七。

当時、国体山岳競技の運営は日本山岳会本部が担っていた。林氏は総務・国体担当理事、藤井氏は支部担当理事で、林氏は前日に会議に出席、藤井氏はこの年から札幌の日本カーリット社に勤務していたので、藤井氏の署名もその場でなされ、林氏はすぐ本部に持ち帰って入会手続きをされたものであろうと推察される。

第九回国体の大雪山開催経緯については、横江氏は本部と連携を取りながら地元山岳団体と調整が図られ、大会を成功裏に

終えたことは、『会報』一七五号（一九五四年九月）で報じられている。

一九六九年七月二十日に北海道支部は再発足。道岳連役員を退かれた後だったので、支部集会には出席され、語らいの場を楽しんで居られた。一九七七年五月二十三日の支部総会で大塚武支部長が横江氏を会計監事に指名され、一九八四年の橋本誠二支部長の時代まで八年間、支部の発展に尽くされた。

その間、一九七九年八月に皇太子さま（浩宮徳仁親王）が来道された際、七日に旭岳から黒岳への大雪山縦走をご案内されて大役を果たされた。

戦後、北海道の登山界に尽力された功績は大きい。

（高澤光雄）

小谷隆一氏（一九二四〜二〇〇六）

「知の登山の系譜」のなかで

京都府山岳連盟の会長は森本次男・今西錦司・角倉太郎・久我良房・角倉太郎・小谷隆一・清水朝一の系譜がある。

私たちにとって小谷さんは常に「隊長」であった。一九三七年に京都第二商業学校に入学され、森本次男先生の登山との出会いがある。先生の山には『京都北山と丹波高原』、『樹林の山旅』にあるように、日本の山にある深い心の糧となるものの発見があった。そして、いつの間にか「京都北山からヒマラヤへ」という言葉が生まれていた。

小谷さんは森本先生の、「登山は足で登るだけでのものではない」という教えを基に、松高、東大山岳部の系譜の流れを継承し、私たちもそのあり様が山行と人生のなかに存在することになる。

一九六〇年代に入り、小谷さん宅の数多くの山岳文献の並んだ明るい部屋に数名の青年が集まり、山の本や地図を広げて海外の山への研究が熱っぽく始まった。それは、小谷山岳塾の開学の日でもあった。

京都のもう一つの知の登山の系譜として、京大山岳部、学士山岳会があり、私たちは角倉太郎連盟会長と共に今西錦司先生をお招きして、ヒマラヤ登山のご指導をお願いした日があった。山を選ぶという課題について、今西先生は私たちに「未踏の山であること、姿の良い山」ということを話された。

そして、私たちの山探しが始まる。入国出来そうなガルワール・ヒマラヤのティルスリを目標とし、立教隊、長谷川伝次郎らの先人の継承を考えた。一九六一年偵察、一九六二年本隊の計画書も出来たが、中印国境問題の解決がつかず、カラコルム山域に変更した。

一九六三年のカラコルム山域偵察の結果、ディラン峰の許可を受ける。

小谷隊長以下九名は一九六五年に京都府山岳連盟隊として入山。ディラン峰登山の記録とも言える、ドクター北杜夫の『白きたおやかな峰』では、小谷隊長の知的で暖かいリーダー像が描かれている。私たちの力は及ばず七月九日に登頂を断念した。この登山を契機に「京都・カラコルムクラブ」を結成し、カラコルムや中国西部山域での意味のある多くの登山活動が続けられた。

中国山岳の解禁には小谷さんがいち早く一九七九年十二月、北京飯店にて中国登山協会との会合を持たれ、未踏のコングール峰を選択された。私たちはヤングハズバンド、ヘディン、スタイン、スクリーンと古典的な学習から始めた。コングール峰・七七一九メートルへの登山は一九八〇～八九年と長く、一九八〇年小谷隊長以下六名による偵察。そして、一九八一年小谷総隊長以下九名、学術調査隊四名で編成。「七月北稜に向かった鴫満則・寺西洋治・松見新衛の三名消息を絶つ」この時の悲しみと苦渋は大変なものであった。この悲しみと無念は再度北稜からの登山の計画と実行を進展させた。

一九八八年須藤建志・高橋省吾による北稜偵察。一九八九年名誉総隊長谷垣禎一、総隊長小谷、他十四名により登山隊を編成。六月四日ベース・キャンプ設営、七月十一日安田パーティー、須藤パーティー、武藤パーティーの九名全員は北稜からの登頂を完成させた。この年、北京・天安門広場では多くの若者たちの悲しい物語があったが、中国の方々は私たちの登頂を讃えてくれた。この日、中国が理の文化を有する国であることを知り、中国登山協会の史占春主席は和をもって、小谷さんをいつも暖かく迎えてくださった。一九八一年に敗退した時、史占春先生は「小谷さんのためにコングール北稜ルートは誰にも許可しません。必ずおいでください」と言ってくださった。

報告書の中で小谷さんは、「すでにベース・キャンプを離れて帰国の途についていた私は、北京の京倫飯店の一室で中国登山協会の王鳳桐氏から成功の第一報を受けたが、その瞬間涙が出て止めることができなかった」と書かれている。この登山で小谷さんからは若い登攀隊員のチームワークの良さと技術のすばらしさを褒めていただいた。

一九八六年の太白山・京都府・陝西省合同登山は日本隊員四十五名、中国隊員十六名。登山よりも友好をと小谷さんも史占春主席も話しておられたように六十一名の隊員たちはお互いの国と文化と友情を確認したのであった。

隊員たちは報告書の中で「史占春主席の、友好の山には高さに制限がないという言葉に感激した、中国が身近なものになった、中国人のものごとに取り組むまじめさに感動、日本の文化の源流に肌で接した」など多くの感銘を持った。

小谷さんは会社経営においては進取の姿勢と石門心学の教えを常に持たれていた。それは「思いやる心、正しい心、敬う心、知恵を生かす心により信を得る」という。小谷さんからいつも登山隊のリーダーとして同様の心のあり方を私達は教えていただいた。

私たちにとって知の登山とは人生でした。

小谷隊長ありがとうございました。

安らかにお眠り下さい。

略年譜

一九五三年　日本山岳会入会（紹介者は篠田軍治・太田敬両氏、会員番号四一〇二）

一九六六年　伊勢藤紙工代表取締役

一九七三年　京都府スキー連盟会長

一九八三年　京都府山岳連盟会長

二〇〇三年　日本山岳会永年会員

著書に『山なみ帖』（茗溪堂刊）がある。また、厖大な山岳書の蔵書「小谷文庫」は信州大学山岳科学総合研究所に収められた。

（塚本珪一）

塚本茂樹氏（一九二九〜二〇〇五）

「塚本さん、浅輪さんが見舞いに来てくれたじ！具合はどうだいね。」塚本さんの耳元で呼びかけると、目を開けようとなさる。しかし、もうわれわれを見ることはできないようだ。「塚本さん！」「塚本さん！」と浅輪さんと二人で繰り返し声を掛けると、その都度かすかに瞼が動いたような気がするが、やがてそれもなくなった。結局、浅輪さんも私も塚本さんと一言も言葉を交わすことが出来ないまま、病室を離れた。その日、二〇〇五年五月三十日の夕方、塚本さんは亡くなられた。後になってお聞きした話では、奥さんが午後に病室へ戻ると、ベッド脇に浅輪さんのお見舞いが置かれているので「浅輪さんが来てくれたの？」と尋ねると塚本さんははっきりうなずかれたそうで、われわれが来たことはちゃんと承知なさっていたのである。

塚本さんは、一九五六年に信濃支部に入会（紹介者東浜義男・高山忠四朗両氏。会員番号四四五〇）し、チーフリーダーとして積雪期の山行などにわれわれを率い、また一九六七年四月から七四年三月まで信濃支部の第四代支部長を務め、信濃支部の「山や」意識を育ててこられた。塚本さんは早稲田大学山岳部

ＯＢで、アコンカグアの登頂者でもあり、山に素人の私など入会当初は傍に近寄るのも憚られた。信濃支部総会などで塚本さんが山行計画を話されるのを、はるか末席で拝聴していた記憶が私には残っている。信濃支部の山行で塚本さんが最も活躍された時期は、入会当初から一九六〇年代で、その頃の信濃支部は今と全く違って二十代の会員が大半であった。塚本さんは厳冬期の白馬岳、ゴールデンウィークの岳沢、初冬の富士山など積雪期の山行を信濃支部の最も重要な合宿と位置づけておられた。実際の合宿では、降雪や雪崩についての的確な判断にはいつも感心させられた。何よりも堅雪の急斜面をこともなげに登降する塚本さんの抜群のバランス感覚には、私のような新人は目を見張った。このリーダーのいう事ならば、どんなことでも従ってしまう気にさせられた。こうしたリーダーのおかげで積雪期の北アルプスについては地元の利もあり、われわれは皆本当に強くなった。一九七三年には、残念な結果に終わってしまったが、ヒマラヤの雪山アンナプルナ峰に塚本さんを隊長とする登山隊を送ったのも、信濃支部の雪山志向からは自然の成り行きだったとも言える。

信濃支部の雪山活動は塚本さんらが中心となって築かれてきたが、塚本さんはかねがね信濃支部は「山や」の会でなければならないとおっしゃっており、雪山志向はその具体的な表れである。最近は会員が高齢化して、雪山山行は困難になるから「山や」を続けることは出来なくなりませんかとお訊ねしたことがあるが、「そんなことはない。高齢者は高齢者なりに自分の力を尽くして登ることが『山や』なのだ」と諭されてしまった。塚本さんは、単に技術的困難さだけを求める登山ではなく、もっと内面的なものに価値を置いておられ、特に周囲の目を意識するみせかけだけ格好いい登山には、良い評価を与えなかった。それより、登ろうとする山に何を感じ、何を考えて実行したのか、意識を自分の内側に向けて登山することが重要とお考えだったと思う。こうした考えは今の信濃支部会員にも引き継がれており、自分で考え、自分のやり方で山登りをする個性的な会員が多く育っている。

病に倒れてからは塚本さんご自身もおそらく北アルプスはもう無理と思われていたであろうが、病院に伺うたびに「涸沢へもう一度行く」とおっしゃっていた。私が、上高地くらいならお供しますよと言っても、「涸沢へ行く」と言われる。それでは岳沢でどうでしょうかと申し上げても「いや涸沢だ」と繰り返される。「山や」としてアルピニズムを実践された涸沢には数々の思い出もおありであったのだろうし、せめて涸沢まで登ることで、いつまでも「山や」であり続けたいと願っておられるのだろうと察した。塚本さんには、山登りの「いろは」から教えてもらい、なにもかも本当にお世話になった。私自身の山人生は、その多くを塚本さんから得ているにもかかわらず、涸

沢どころか上高地へもお供せぬままお別れしてしまい、一期一会の言葉どおり、塚本さんとの瞬間瞬間をもっと大事にすべきであったと、深く悔いが残っている。

多くの方に敬愛され、山一筋にご自分の気持ちを集中して、人生を生き抜かれたことに心から敬意を表し、今はご冥福をお祈りするのみである。

（山浦源太郎）

山村正光氏（一九二七～二〇〇五）

山村さんは一九二七年山梨県で生まれ、四〇年に旧制甲府中学に入学した。四四年から終戦までは陸軍特別幹部候補生として国内で兵役に就いた後、旧国鉄に入社された。八五年に退職するまで一度も転勤することなく一車掌を貫き通した。国鉄時代から二〇〇五年十二月に他界されるまでの業績は多岐にわたるが、四十年間ほどおつきあいいただいた中での思い出に触れてみる。

山村さんといえば、登山関係の書物としては異例の大ヒットとなった『車窓の山旅　中央線から見える山』を始めとして、『中央本線各駅登山』、『分県登山ガイド』、『富士を眺める山歩き』、蜂谷・小俣氏と共著の『甲斐の山旅・甲州百山』等の著書がある。「とうとう俺も山を食いものにするようになってしまったよ」と苦笑いしていたが、『車窓の山旅』の出版記念パーティーでは多くの関係者が出席し当人は喜色満面だった。その後、読者から不親切な内容だという投書があったそうで、「あれはガイドブックではないのに」とぼやいていた。

山村さんが主催し、「霧の旅会」のメンバーを核として毎年五月下旬に金峰山麓の有井館で行われていた木暮碑前祭には、お付き合いが始まって間もない六九年から入院する前年まで、私は、ほぼ毎年駆り出された。木暮翁と山村さんを慕って、多いときには五十人余りが集まり、山菜をつまみに岩魚の骨酒を飲みながら焚火を囲んで話は尽きなかった。多くの先輩たちから貴重なお話を伺ったはずだが、残念ながら二日酔いと共にあらかた消えてしまった。翌日の軽登山も含めて、山村正光真骨頂発露の独壇場だった。

八五年からは、朝日カルチャーセンター立川教室に講座を持って多くの生徒を育てられた。その教え子たちによる古希祝いの書『山雷の古希』で、私の知らない山村さんの生き生きとした姿を見い出すことができる。それには山村さんも寄稿されていて、七一年茅ヶ岳での深田久弥氏の不幸と事後対応は「生涯の中でいちばん印象に残っている山行」だったと書き残されている。その後、九七年十一月、深田久弥氏終焉の地に自ら揮毫の

石柱を担ぎ上げ、現在も女岩から登りきった山頂直下に建っている。

山梨県内で登らなかったところは皆無ではないかと思える山村さんだったが、その登行意欲は国内に留まらず、五十歳を過ぎた七八年には鶴城山岳会（甲府一高ＯＢ会）のメンバーとして、三カ月にわたるカラコルム遠征に参加し、当時入山が難しかった地域から貴重な情報を持ち帰った。加えて、この遠征には特筆すべき後日談がある。同隊が鶴城山岳会にちなんで「鶴ヶ峰」と仮称したガユン氷河右岸の六千メートル峰が「クランピーク」として、山村さんが無名氷河に現地の伝説上の宗教者の名前から仮称した「ハスラット氷河」、「カファル氷河」が一九九〇年にスイス山岳研究財団カラコルム地図に正式採用された。

九一年からはモンゴルに入れ込み、仲間を募って毎年のように通っては土産の酒を片手にその素晴らしさを語ってくれた。そして、モンゴルの民族衣装を纏い、クリスチャンとして旅立たれた。

長い間ご交誼をいただきまして有り難うございました。心からご冥福をお祈りします。

（山村正光氏は一九六〇年日本山岳会に入会。会員番号五〇六二。紹介者は山下一夫・山本良子両氏）

（遠藤靖彦）

会報『山』訃報・追悼文一覧

二〇〇五年十月号（七二五号）
渡辺兵力名誉会員追悼の記　成蹊高校時代の渡辺兵力君（三枝守維）・渡辺兵力さんの想い出（磯野剛太）

二〇〇六年二月号（七二九号）
山村正光さん追悼の記　山村の前に山村なし……（大森久雄）

二〇〇六年三月号（七三〇号）
渡辺徳逸さん追悼の記　渡辺徳逸翁を偲ぶ（斎藤惇生）・翁の思い出（勝又一歩）

二〇〇六年五月号（七三二号）
今井喜美子名誉会員追悼　百歳の昇天（小倉董子）
小谷隆一さん追悼　海外登山の友好と絆（塚本珪一）

支部だより

北海道支部

二〇〇五年度の支部活動は、本会百周年という一大事業に対応しながら進めた。総延長が一一三二㌔もある中央分水嶺踏査を〇五年度中（〇六年四月の積雪期まで）に完了しなければならないこと。百周年北海道ブロック記念式典と北海道支部四十周年記念祝賀会の開催準備を進めること。あわせて、支部定例山行、道委託の高山植物盗掘防止パトロール、自然児学校、ルーム開放事業などの計画の策定と実施である。これらの事業はいずれもその軽重の比はなく、すべて落ちのないように同時展開していくこととなる。

四月十三日支部総会終了とともに支部長を中心に、事務局長、委員長らがコーディネーターとなって、それぞれの事業担当責任者の指定や実行委員会の編成を完了し、打ち合わせ、関係者集会などを次々と開催し、骨格を固めていった。

○中央分水嶺踏査は、総会終了時点で七五二㌔、六六・四%終了。残る三八〇㌔のうち積雪期踏査可能ルートを五月連休までに集中して実施することとし、四月二十六日から五月五日までに八パーティが道南、道北の困難なルートに山中泊を重ねて踏査し、八六㌔を実施した。また、八月二十日、二十一日にかけて全国公募による道東地区分水嶺フィナーレ登山を計画。小雨模様の中、森武昭本部委員六名を含む二十九名が美瑛富士避難小屋先まで登り、オプタテシケ山から二泊かけて縦走してきた十一名の踏査隊を出迎え、感動の対面でフィナーレを祝った。積雪期を迎え〇六年三月までにさらに踏査距離を伸ばし、〇六年総会前には、一〇〇㌔を残すのみとなり、次年度早期達成の見通しがついた。

○記念式典関係では、まず、北海道ブロック百周年記念式典を八月二十六日札幌市内のホテルで、平山善吉会長を始め全国から十六名の来賓と、六十九名の支部会員・会友の参加を得て開催。平山会長の祝辞と記念講演、南極の氷のオンザロックで乾杯など賑々しくすすめられた。翌日は、記念山行としてクオベツ丘陵未踏査分水嶺に平山会長を先頭に四十四名の会員・会友が参加し、約一時間をかけて四〇〇㍍の藪をこぎ、道央東地区の踏査を完了した。

さらに、支部四十周年記念祝賀会を十二月十日、平山会長、平林克敏副会長、支部会員・会友七十名の参加で開催した。

○定例事業として、（一）定例山行は、知床半島沢めぐりをメインテーマに、観月山行、雪上訓練、初雪滑りなどを実施した。（二）第六回自然児学校を八月四日（木）から七日（日）まで、新冠町内特設キャンプ場で、参加児童十九名、実行委員二十八名により開催。好天に恵まれ、子どもたちと自然の中で有意義に過

ごした。(三) 北海道委託事業の高山植物盗掘防止パトロールを六月から九月の間に、指定された三十名の会員で延べ百十五回実施。高山植物の保護活動に貢献した。

○本会百周年、北海道支部四十周年を経過したことで、支部の五十周年に向けた今後の活動重点として取り組む課題は、次の三点を挙げる。

(一) 未踏査分水嶺(知床半島から日高分岐、日高山脈など)への展開。北海道の北から南への中央分水嶺は完全踏査した。しかし、北海道には前記主脈分水嶺があり、支部独自の取り組みとして、これまでの経験と実績を十分に生かした踏査計画を立てて実施していく。(二) 山岳文化の創造。高齢化社会を反映する高齢会員の増加による登山活動の停滞は時代の流れであるが、これら会員の持つ得がたい実績と経験を山岳紀行や山行記録として収録していくことや、写真・絵画展開催による支部事業への参加意欲の向上を図るため、新たな視点の山岳文化の創造を進めていく。(三) 委員会活動の充実。支部活動が活性化していくためには、各委員会が、付与された任務を確実にかつ活発に実践していくことが望まれる。また、会員の参加意欲を高める事業を創生し、委員会活動の充実を目指す。

(長谷川　雄助)

■青森支部

二〇〇五年度の青森支部の活動は、六月に行われた日本山岳会百周年記念事業である白神山地ブナ林再生事業がメインであった。豪雪による林道通行止めなどのアクシデントがあったが、全国から多くの参加者があり、無事終了できたことを関係各位に感謝したい。

△〇五年度青森支部事業報告▽

四月二日　中央分水嶺踏査(玉清水山～赤倉岳)(二名)
四月三日　中央分水嶺踏査(大倉岳)(二名)
四月四日　中央分水嶺踏査(梵珠山～大釈迦峠)(二名)
四月二十九日～五月一日　支部春山山行　南北八甲田(ベース酸ヶ湯駐車場テント)(十名)
五月九日　中央分水嶺踏査(魔ノ岳～梵珠山)(三名)
五月十六日　支部総会(青森市)(八名)
五月二十一日　日本山岳会通常総会(一名)
五月二十八日～二十九日　東北ブロック百周年記念式典(猪苗代町)(三名)
六月二十四日～二十六日　百周年事業白神山地体験林業(七十五名)
七月二日　中央分水嶺踏査(御鼻部山～滝ノ沢峠)(一名)

七月二日　中央分水嶺踏査（発荷峠～白地山）（一名）
七月九日　中央分水嶺踏査（猿倉岳～櫛ガ峰）（一名）
八月十八日　中央分水嶺踏査山行終了集会（九名）
九月十七日～十九日　百周年事業白神山地体験林業（二十四名）
十月十五日　日本山岳会創立百周年記念式典（五名）
十一月十九日～二十日　支部秋山山行（北八甲田仙人岱小屋）（五名）
十二月三十日～一月二日　支部冬山山行（北八甲田仙人岱小屋）（三名）
一月七日～八日　九十五会八甲田スキー（酸ヶ湯温泉）（二十八名（内支部六名））
一月二十一日～二十二日　山岳スキー研修会（竹越会員山荘）（七名）
二月二十二日～二十三日　八甲田山スキーコースポール立て（六名）
三月四日～五日　支部早春山行（秋村会員山荘）（八名）
三月二十二日～二十三日　八甲田山スキーコースポール立て（四名）
○六年度の活動の重点は、引き続き白神山地ブナ林再生事業を実施するとともに地域に貢献できる活動（登山教室、自然保護活動、遭難対策など）にも力を入れていきたい。**（須々田　秀美）**

■岩手支部

二〇〇五年度は中央分水嶺踏査を完踏すべく努力して来た（〇六年六月完踏）。〇六年度以降は支部独自の計画の元に現在の会員の中で、「国内登山」と「海外登山」や「自然保護活動の啓蒙」を推進していきたいと考えている。また、〇七年は日本山岳会全国支部懇談会を岩手支部主管で行うこととなった。岩手の山と観光を案内したい。

△二〇〇六年度支部活動▽
四月三日（日）　支部委員会・総会（盛岡市上田公民館）出席二十二名
懇親会　盛岡市上田「唐変木」出席二十一名
四月八日（金）～十日（日）　〇五年度百周年記念自然保護全国集会（高尾の森）　出席、小野寺正英
四月二十四日（日）　月例山行　蟻巣山（中央分水嶺）幹事　菊池。参加者八名
五月一日（日）～三日（金）　大倉森―高倉山（中央分水嶺）　四名参加、先達　中屋
五月五日（木）　大森山―蟻巣山（中央分水嶺）　五名参加、先達　小野寺、佐藤（英）
五月八日（日）　月例山行　横長根（一五一五メートル～九八二メートル）―笹

森山―国見峠―仙岩峠（中央分水嶺）幹事　松田（和）、参加者十名

五月十四日（土）　全国支部長会議、日本山岳会通常総会　菊池支部長出席

五月二十八日（土）～二十九日（日）　日本山岳会百周年記念東北ブロック記念式典　ホテルレステル猪苗代　出席　菊池修身、松田和弘、松田好子

記念山行　磐梯山　西村幸雄　四名参加

六月十八日（土）　春の例会山行　田代岱山荘―横長根（中央分水嶺）　幹事　松田　五名参加

七月二十四日（日）　月例山行　高倉山―比山―鍋越峠（中央分水嶺）　幹事　中屋　五名参加

七月二十五日　ＪＡＣ岩手支部通信　24号発行

八月二十五日（木）～二十九日（月）　夏の例会　縞枯山荘　幹事内山、高橋（タ）出席十一名

例会山行　八ヶ岳縦走　参加者十一名

九月十日（土）　支部長・事務局担当者会議　東京　日本山岳会会室　出席　菊池支部長

九月二十三日（金）　月例山行　貝梨峠（中央分水嶺）　中止　幹事　中屋

十月十五日（土）　日本山岳会創立百周年記念式典　新高輪プリンスホテル　十名（岩館公子、熊谷敬子、高木恵美子、玉山保子、小田島政行、中谷充、大西攻、浅野新一、高木弘、菊池修身）

十月二十二日（土）～二十三日（金）　秋の例会　ホテル愛山（岩泉）　幹事　山崎　参加者十五名

例会山行　宇霊羅山　中止（雨のため）

十一月四日（金）～六日（日）　日本山岳会関西支部創立七十周年記念式典　高野山（和歌山）

日本山岳会百周年記念式典関西支部　出席　菊池修身

十一月六日（日）　月例山行　前塚見山　幹事　音石、参加者四名

十二月十七日（土）～十八日（日）　支部晩餐会　志田荘（陸前高田市）　幹事　西村　参加者十三名

晩餐会山行　氷上山　参加者十一名

二〇〇六

一月二十一日（土）　早池峰山　中止　幹事　佐藤（英）

二月十九日（日）　月例山行　八幡平　幹事　平山（一）、平山（順）　参加者八名

二月二十五日（土）～二十六日（日）　支部長・事務局担当者会議　富士吉田市（富士研修所）　出席　菊池支部長、松田和弘（代理出席）

三月十九日（日）　月例山行　紫波三山　幹事　熊谷（英）、高木（弘）　参加者七名

三月三十一日（金）　会計監査　出席　音石、小野寺、菊池、松田、村上（力）　（菊池　修身）

秋田支部

二〇〇五年度定例総会を、四月二日に開催。委任会員を含め五十四名の会員が出席、〇四年度決算および事業報告、〇五年度事業案、予算案が提案され、全議案が原案通り承認された。

本年は役員改選が行われ、支部長は佐々木民秀氏再任、副支部長に鈴木要三、福田光子の両会員、事務局長に鈴木裕子が推薦され、承認された。また、佐藤昭義、北林嘉鶴子の両前支部長が顧問に選任された。

そのほか、加賀谷昭一会員から、県スポーツ功労賞を受賞したことに対する御礼の報告があった。

支部山行は、本会創立百周年記念事業である中央分水嶺踏査を主として行った。

春の残雪期には、与須毛堂森から四角岳、三森山北部から土倉林道、花山峠から秣岳分岐、仙岩峠から五番森、花山峠から須金岳の五区間の踏査をしたが、例年に比べ雪が少なく、雪を追いかけながらの踏査になったことや、体調を崩した会員もおり、諸般の事情で予定どおりに踏査できず、次の残雪期へ繰り越しになった区間も生じた。

夏期は登山路のある区域を選び、横岳（秋田駒ヶ岳）から白滝の上分岐、秋期は落葉で見通しの良い頃の薮こぎとして、女神山から県境峠までの踏査を行った。延べ四十一名（内会員外二名）が参加した。

五月二十八日、百周年東北ブロック式典に五名参加。この機会にと、福島県の山、鎌倉岳、二ッ箭山、蓬田岳、額取山、吾妻一切経山の登山を楽しんだ。

十月十五日、創立百周年記念式典に二十名参加。翌日は、「百蔵山と岩殿山」班と「八ヶ岳・赤岳と蓼科山」班に分かれ、それぞれ登山を楽しんだ。

そのほか、秋田支部会報「秋田山岳」を三回発行し、通算六十五号となった。また、本会が開催する総会等の諸会議、自然保護全国集会等、ならびに県内山岳団体の会議・事業に積極的に参加し、情報の収集と交流を深めた。　（鈴木　裕子）

山形支部

二〇〇五年度の支部行事は、支部総会で始まった。山形支部の現在会員数は七十四名、支部設立五十五周年を迎えることができた。

四月二十三日　支部総会　山形市・教育会館　十九名出席

二〇〇五年度事業報告ならびに会計報告　承認

二〇〇六年度事業計画ならびに収支予算案　承認
役員改選（任期二〇〇五年四月～〇七年三月）が行われ新役員が選任された。
支部長　斎藤哲郎、副支部長　松田孝一、今野秀穂
事務局　長岡伸恭、渡辺誠、椎名高夫
会計　國井聖仁
監事　阿部勇作、田中洋子
自然保護委員　佐藤淳志、菅原富喜
支部委員　斎藤哲郎、松田孝一、今野秀穂、長岡伸恭、渡辺誠、椎名高夫、國井聖仁、佐藤淳志、菅原富喜、後藤彰、畠中六左エ門、東海林敬、志田郁夫、梅本幸巳、佐藤映子

〈事業報告〉

○五年四月二日　中央分水嶺踏査登山（金山峠～番城山）　五名参加
四月九日　第一回役員会　山形テルサ　十五名出席
四月九～十日　日本山岳会自然保護全国大会　高尾の森　佐藤淳志参加
四月十日　中央分水嶺踏査登山（萱平～舟引峠）　十一名参加
四月十七日　中央分水嶺踏査登山（栗子山～駒ヶ岳分岐）　六名参加
四月二十三日　定時総会　山形市・教育会館　十九名出席
四月二十四日　中央分水嶺踏査登山（栗子～八森山）　二名参加
五月二十～二十一日　支部長会議　東京・弘済会館　斎藤参加
五月二十八～二十九日　日本山岳会百周年東北ブロック記念式典　福島・磐梯山　九名参加
六月十一～十二日　中央分水嶺踏査登山打上会　吹浦・酒田屋　二十九名参加
七月十六～二十二日　写真展「心に映える山々」酒田文化センター　後援
七月二十二～二十四日　支部山行　西吾妻山　九名参加
八月六日　第二回役員会　新庄市民プラザ　十名出席
九月十日　支部山行「巨木巡り」最上町　八名参加
九月十日　支部長・事務局担当者会議　東京・日本山岳会　斎藤、長岡参加
十月十五～十六日　創立百周年記念式典　東京・高輪プリンスホテル　十一名出席
十一月五～六日　宮城・山形支部分水嶺合同打上会　月山・志津宮城五名・山形十二名出席
十一月二十六～二十七日　支部晩餐会　八幡町遊楽里　三十四名出席
十一月三十～十二月四日　日本山岳会百周年記念　山形支部会員「絵画・写真展」山形・文翔館　入場者約千名
十二月十一～十二日　絵画・写真展反省会　尾花沢・加登屋　九名参加

○六年一月二十八～二十九日　樹氷原を滑る会　蔵王・アストリアホテル　十四名参加
二月二十五～二十六日　支部長・事務局担当者会議　山梨・富士研修所　斎藤、長岡参加
三月十八～二十日　鳥海山スキー登山　八幡町・滝の小屋　十三名参加
三月二十五日　第三回役員会　新庄市・ユメリア　十二名出席
二〇〇五年度は日本山岳会の創立百周年記念の年に当たり、この記念すべきメモリアルに身を置くことに幸せを感じる。
今後の課題としては、全国各支部にもみられるように会員の高齢化対策として、若い会員の入会を積極的に進めて行きたいと考えている。
（斎藤　哲郎）

■宮城支部

四月二十二日の総会において、新支部長に千石信夫、副支部長に佐々木郁男・木皿謙会員が選出され、その新体制のもとで新年度がスタートした。役員の詳細は次のとおり。
総務常任委員長＝林田健治、大田正、本郷佐千子。会計委員＝佐々木まさ子。集会委員長＝中條俊一、宇都宮昭義、高橋功、鈴木晃三、高橋二義。編集出版委員長＝高橋二義、林田健治。海外高所登山委員長＝東野良。医療委員長＝千葉正道、西郡光昭。自然保護委員長＝柴崎徹、木皿謙。指導遭難岳連対策委員長＝佐藤昭次郎。女性懇談会委員長＝本郷佐千子、鳥田笑美。装備担当委員＝三宅泰。会計監事＝庄司駒男、千田早苗。
かねてからの懸案事項であった支部設立五十周年の記念事業に本格着手するために、臨時総会を開催し正式に推進することが満場一致で了承された。一方、中央分水嶺については残りの区間を無事踏査完了することができた。
今後の重点事項としては、五十周年記念事業は計画段階から具体的な作業に入る。さらに、支部の若返り対策などを検討するため、地元の大学山岳部などと交流・懇談し対策案を模索していきたい。
支部行事報告は次のとおり。
四月十五日～十七日　分水嶺踏査山行　黒伏高原J・Jスキー場～船形山～銀山温泉　参加者八名　担当　高橋二義
四月二十二日　支部総会　勾当台会館　参加者十八名　担当　支部長
五月八日　分水嶺踏査山行　鍋越峠～半森山付近　参加者三名　担当　高橋二義
五月十四日　分水嶺踏査山行　鬼首～水沢森付近　参加者四名　担当　佐藤昭次郎
五月二十日～二十一日　全国支部長会議および通常総会　麹町「弘済会館」　参加者一名

五月二十八日～二十九日　東北ブロック百周年記念式典　磐梯山
周辺　参加者七名　担当　福島支部
六月十一日～十二日　分水嶺踏査山行終了記念登山　蔵王自然の家　参加者十四名　担当　千田早苗、佐々木まさ子
七月二十一日　臨時総会　勾当台会館　参加者二十四名　担当支部長
七月三十日～三十一日　夏山山行　火打岳　参加者七名　担当千石信夫
八月十日　ビールパーティー　ホテルサンルート仙台　参加者十八名　担当　本郷佐千子
八月二十八日　沢登山行　新湯沢（栗駒山）　参加者五名　担当高橋二義
九月十日～十一日　支部長・事務局担当者会議　参加者一名　本部
九月二十二日　役員会　県民会館　参加者十五名　担当　支部長
十月二日　秋山山行　沢渡黒伏山　参加者九名　担当　三宅泰
十月十三日　五十周年実行委員会　県民会館　参加者二十名　実行委員長
十月十五日　日本山岳会創立百周年記念式典　高輪プリンスホテル　参加者九名
十一月十日　役員会　県民会館　参加者十一名　担当　支部長
十一月十三日　芋煮山行　白糸の滝～表磐司　参加者十六名　担当　宇都宮昭義
十二月七日　支部年次晩餐会　ホテルサンルート仙台　参加者二十八名　担当　佐々木まさ子
十二月十日　五十周年実行委員会（資料を見る会）　遠刈田温泉　参加者十二名　担当　記念誌部会
十二月十五日　五十周年実行委員会　県民会館　参加者十一名　担当　実行委員長
一月一日　元旦登山　泉ヶ岳　参加者六名
一月十二日　役員新年会　森のパルク　参加者十四名　担当事務局
一月二十一日～二十二日　冬山山行　名号峰　参加者二名　担当高橋二義
二月九日　五十周年実行委員会　県民会館　参加者十一名　担当実行委員長
二月十八日～十九日　スキー山行　山形蔵王　参加者七名　担当飯塚とみ子
二月二十五日～二十六日　全国支部長・事務局担当者会議　本部参加者二名
三月九日　役員会　県民会館　参加者十五名　担当　支部長
三月二十五日～二十六日　早春山行　糸岳　参加者五名　担当佐藤昭次郎

（千石　信夫）

福島支部

二〇〇五年度事業は創立百周年記念東北ブロック式典および中央分水嶺踏査の二項目に的を絞って実施した。

記念式典は毎年持ち回りで実施しているブロック会議と併せて挙行することに決定した。期日は五月二十八、二十九日（一泊二日の日程）、場所は県中央部に位置し、道路事情も良い猪苗代町とした。山は磐梯山、猪苗代湖、裏磐梯湖沼群と、景観にすぐれた登山コース。宿泊施設の確保も可能ということで選定した。次に中央分水嶺踏査は人員確保の面で計画推進に遅滞があり、一部次年度に持ち越したが新年度早々に実施して完了した。なお、この踏査の一部には通過困難な場所もあり、線でつながらない箇所もあったことを附言しておきたい。

なお、例年会員の現況を記載していたが、在籍者名簿の確認事務未済につき、登載できなかった。

〈実施項目〉

一、役員会：四月十八日（日）　はりまや（福島市）。新年度事業計画（百周年記念式典開催要項の策定）、会計監査実施。支部長以下九名出席。

二、定時総会

四月二十三日（土）　はりまや（福島市）。事業および決算報告、次年度事業計画および予算審議。支部長以下二十三名出席。

三、創立百周年記念式典

五月二十八、二十九日（日）猪苗代町「リステル猪苗代」にて開催。本部から平林副会長が出席し、祝辞を述べた。また記念講演は尾形好雄氏（福島市出身）を講師にお招きし「末踏峰への挑戦」と題し、ヒマラヤの巨峰群を登頂した体験をお話いただいた。二日目は、①磐梯山、②雄国沼登山、③裏磐梯周遊の三班に分かれて実施した。五十三名参加（詳細は「山」二〇〇五年七月号に逸見征勝会員の報告記事）。

四、中央分水嶺踏査

①〇五年十月二十九日　甲子峠―大白森山―大白森山東ピーク往復

②〇六年一月二十九日　鎌房山往復

③〇六年二月二十五日　鳳坂峠―三角点―演習場入口

④〇六年三月四日　勢至堂峠―鬼面山分岐―丸山―鳳坂峠

⑤〇六年三月十八日　白河高原牧場―鎌房林道―自衛隊演習場内―一本樅

右実施者、高田雅雄会員

五、その他

①〇五年八月二十八、二十九日　吾妻小屋納涼会、中止

②〇六年二月四日　新年会はりまや（福島市）、二十四名出席

③〇六年二月十二日　安達太良山スキーツアー、荒天のため中止

④〇六年三月十二日　雪山を歩こう会、中止

六、本部諸会議

支部長・事務局担当者会議、年次晩餐会などへ支部長以下担当会員が出席した。

（安藤　治）

越後支部

▼支部総会　会場は県下四地区の外福島県会津地区持ち回りで開催してきた。本年は福島県会津が担当で、二〇〇五年五月二十八日(土)福島県北塩原村「ホテル観山」で開催した。

出席者三十一人（委任状百五十二人）が集い、原案どおり承認された。

翌二十九日(日)は、親睦登山を実施（二十二人参加）した。会場は北塩原村雄国山一二七二㍍で、好天に恵まれ裏磐梯の眺望を楽しみながら親睦を深めた。

▼中央分水嶺踏査登山　越後支部では、〇四年支部分担区間約百㌔（尾瀬ヶ原への入り口に当たる鳩待峠から三国峠）を、三分割しそれぞれに担当を決め実施したが、登山道もない藪稜線が多く、また、天候不順で困難を極め秋までの全区間完遂を翌年に残した。〇五年六月十一、十二日に残り区間（谷川連峰／平標山～三国峠）を完遂し、打ち上げ式を現地湯沢町浅貝で実施した。

▼第四十八回高頭祭　〇五年七月二十五日(月)弥彦山大平園地高頭仁兵衛翁寿像碑前で実施。高頭祭は、高頭仁兵衛（日本山岳会発起人の一人／初版『日本山岳誌』著者）がはじめて登山をした弥彦山で、毎年同一日に開催することとし一九五三年（昭和二十八年）から続いている。

ご存知の方も多いかと思うが、毎年七月二十五日に弥彦松明登山祭（今年で五十二回目）と合わせ実施するもので、越後一宮の弥彦神事や夏の祭礼（一部無形文化財となっている）として併催している。

山頂から麓までの松明下山（弓張提灯と松明の灯火が風に揺れ、長い行列が山腹をうねりながらにぎやかに麓の弥彦神社まで下る）は、参加する者、見物する者が一体となり幽玄の世界にひたるひと時である。

▼日本山岳会創立百周年中部ブロック記念式典開催　越後支部が主管となり、〇五年九月十七、十八日岩船郡関川村で開催した。四支部（静岡・山梨・信濃・越後）から百二十五人が参加。特別来賓として平林克敏副会長、高木碕男前岐阜支部長を迎え、記念講演講師に二村ピッケル製作所の鍛造師二村善市氏（愛知県）と工学博士の小野健越後支部会員のお二人をお招きし、それぞれに登山を志す者に興味ある高度な文化講演を開催した。

翌日は、会場村にある朴坂山四三八・二㍍（一等三角点）へ登山と、観光めぐりを実施し、記念にふさわしい式典を実施した。

▼支部晩餐会　第十六回支部晩餐会を〇五年十二月十日(土)新潟東映ホテルを会場に、出席者七十四名の出席を得て開催した。

席上小野健、渡辺龍吉両会員の藍綬褒章授章祝賀会を併催し、ご両人の功績を称え、また支部会員の親睦を深めた。

▼越後支部は新潟県山岳協会事業へ参加することを伝統としている。

支部異動状況（支部会員の異動、支部会員数、役員数等）＝支部会員二百三十三人、会友十人、計二百四十三人、支部役員数二十人（支部長一、副支長一、監事二、支部委員十五、事務局長一）新入会員四人、物故会員一人。

（横山　征平）

■信濃支部

二〇〇五年度の支部活動は、四月九日の東京都高尾の森での自然保護全国集会の参加に始まり、四月十七日の支部通常総会、六月四日、五日の第五十九回ウェストン祭と例年通り行った。

支部山行は昨年同様百周年記念行事の一環である中央分水嶺踏査にふりわけて実施した。七月の高ボッチ高原、鉢伏山、ニツ山往復に始まり、八月、十一月、十二月に各一日ずつ、三月十八日、十九日に経ヶ岳～牛首峠間の未踏部分を行い踏査を完了した。

その他の行事についても、百周年関連のものが多く、四月二十四日の木曽郡鳥居峠での東海支部中央分水嶺踏査打上げ式への参加。九月十七日、十八日の新潟県関川村での百周年中部ブロック記念式典および記念山行には中野支部長他十九名が参加。十月十五日に行われた日本山岳会創立百周年記念式典および祝賀会には中野支部長他二十九名が出席。その場で長年のウェストン祭開催の実績が評価されて信濃支部が特別団体表彰を受けた。また、上條岳人、保科文人、久保田宣夫の三氏が永年会員の表彰を受けた。

だが北アルプス南部地区遭難対策協議会の救助隊長を務められ、警察協力賞等数々の表彰を受けられ、また岳沢ヒュッテの経営者としても多くの登山者に親しまれていた上條岳人会員が、本年四月十七日不慮の事故で逝かれたことは非常に残念なことだった。

その他、十一月四日には、関西支部創立七十周年記念式典への出席。また、長年の懸案だった支部報の復刻版が、井口謙司会員外五名の編纂委員のお骨折りで、一九四八年（昭和二十三年）六月の第一号から、二〇〇五年五月の第四十五号まで、七百九十ページに纏められて十一月に刊行された。

この一年を振り返ってみると、百周年に明け、百周年で終わった感があるが、新年度は、信濃支部六十周年を迎え、種々の記念の催しを予定し、すでに実行に移しているところだ。現在の悩みは、今年の本部総会で、平山会長の挨拶の中でも触れられたように、若者の登山離れや会員の高齢化は信濃支部でも同じであり、山行をどの程度のレベルで計画すればよいのかというのが最大の課題である。六十周年行事が一段落する次年度には、この問題を中心に、各支部員が納得できる方策を見出したい。個人的には、他人からは稚拙に見えても、主体性を持った自分自身が主役の安

全で楽しい山歩きを実践することを心掛けていきたい。

加えて、公益社団法人化に向けてその一翼を担う支部として、問題は山積しており、先を見据え、自分達が楽しむ山行だけでなく、公益性を踏まえた支部としての事業を模索していきたい。

（金子　丞二）

■山梨支部

二〇〇五年は支部員の協力により、日本山岳会百周年記念事業を無事に終了した年であった。

また、支部行事のひとつとして、例年秋に木暮祭を実施しているが、〇五年は木暮翁の生地の強戸山岳会の方々が二十数名参加され、会をたいへん盛り上げていただいたので、そのお礼も兼ね、忘年登山に群馬県へ赴き、妙義山と木暮翁の碑を尋ねた。

加えて、〇八年に支部の六十周年を迎えるにあたり、日本山岳会百周年と併せて、第一回の山の博物館「山を知ろう山へ行こう山と登山の魅力」と題して映画上映や講演会を行った。山梨学院大学のメモリアルホールに四百五十名が参加、盛大な記念行事を行うことができた。翌〇六年には同様に山梨学院大学の協力により、「山の自然」と題して第二回の講演会を実施した。第三回は〇七年に「山と文学」、〇八年には六十周年式典と共に、山のフェスティバルとして記念行事を締めくくりたいと計画している。登山のノウハウ伝授や救急法の講座、山岳写真・絵画の作品展、登山用品フリーマーケットなどを参加型スタイルで開催する予定である。支部員八十余名が一堂に会し、支部の魅力、喜びを分かち合いたいと願っている。

山登りの楽しみは何よりその実践であることは当然であり、ほかのどのような会においてもその喜びを越えることはできない。しかしいかにこの記念行事を楽しく魅力あるものにするかは、支部員の参加にあると思っている。そしてその楽しさや魅力をいかに多くの方々に知っていただき、その参加を促すかである。幸いにも第一回は四百五十名、第二回は四百名の盛会裏に終了した。〇七年度、〇八年度に向かって、さらに魅力ある楽しい会にするべく支部員一同の協力を願ってやまない。

また支部山行の新年登山、春の総会登山、夏山、忘年登山と年四回は支部の年中行事として多くの会員が集まれる機会として定着していきたいと考えている。

日本山岳会に入会してよかったと思える会として、また全国の支部のそれぞれの会合にも参加し、その楽しさも知ってもらいたいと願っている。支部の方々には山梨県に来ていただき、交流を図りたいと考えている。山梨県は県下の七〇パーセントが山林であり、環境に恵まれた魅力のある土地である。（古屋　学而）

静岡支部

二〇〇五年度静岡支部通常総会を五月十日静岡労政会館で開催した。出席二十五名、委任状六十一名（支部会員百二十名）。大石支部長挨拶の後、議長に支部長を選出し議案を審議し可決した。議案は例年の通り前年度の事業、会計、監査報告。ついで〇五、〇六年度支部役員案（特に、支部役員として規約にある則闕の役である副支部長に児平隆一会員を選んだ）、〇五年度事業計画、予算案についてであった。

月例集会は七月、十月は浜石岳野外センターで行い、四月、六月、九月、二月、三月は静岡労政会館で行った。その他八月は納涼懇親会を兼ねて静岡駅北中島屋グランドホテルの「クロスロード」で、十一月は伊豆「静岡大学天城フィールドセミナーハウス」で、十二月は由比・浜石岳下の蕎麦打ち体験施設で、一月新年会は静岡市「魚長」で開催した。新年会が三十八名とここ十年ほどで最も出席がよく、ついで納涼会二十一名、労政会館は十五～二十一名と出席状況は前年より改善された。浜石岳は六名、九名と参加率が下がり悪くなり引き続き問題が残っている。

山行等では、十月の定例会の日に興津駅から定例会場の浜石岳へのハイキングを計画したが雨天のため直前に中止した。念のために事務局と大村会員の二名が歩いた。また、秋の懇親山行は十一月十二、十三日に静大天城フィールドセミナーハウスでの芋煮会、その後の岩手出身の森下すま子さんによる朗読の会で「銀河鉄道の夜」に聞き入った。非会員を含めて二十六名が参加。十三日の三蓋山（一〇一三㍍、ミカサヤマ）懇親山行には十六名、非会員を含めて十八名が秋空の下全員登頂した。天城山主稜線上にありながら他の登山者に会うこともなく楽しめた。恒例になってきたミカン狩りを、十二月十一日に豊島宏始会員の農園で行った。

なお、この〇五年度のメインイベントである日本山岳会創立百周年記念式典には二十四名が参加した。また、百周年中部ブロック記念式典（静岡、越後、信濃、山梨支部）が新潟県関川村「関川村ホール」で盛大に行われ当支部からは九名が参加した。引き続き「御宿玄太郎」での懇親会に参加し、支部の出し物では杉本宣明会員がヨーデルを披露した。翌日の記念懇親山行で一等三角点の「朴坂山」四三八㍍にも登らせていただいた。

支部通信「不盡」五十八号を九月に、五十九号を三月に発行した。五十八号では、「『静岡百名山』てん末記」（児平隆一）の他、特集「山スキー」として、「山スキーと秘湯温泉」（古田徹司）、「シーハイル」（加藤弘司）、「山スキーの記憶」（有元利通）、村山口古道を歩いた「富士山」（平井泰）を掲載。五十九号では、「アウトドア用品」（近藤浩之）、「親父山楽会の合宿」（山内眞行）、「二〇〇五東海道旅の詩人ウオーク　さやの中山と西行&芭蕉の旅の追体験に参加して」（榛葉華子）、「アコンカグア登頂とその代償」（大島康弘）、「秋の懇親山行の報告」（有元利通）、田中喜

左衛門発掘史料である日記「寸又川一九三〇（昭五）」と発掘者長田義則の「【添え書き】田中喜左衛門の寸又川」が主な記事となっている。

※なお、長田会員の発掘をもとに「ＡＡＣＫ」（京大学士山岳会）［Newsletter］No.37ではそれまであまり知られていなかった田中喜左衛門についてその人物、山歴等について更に発掘して紹介している。

（有元　利通）

東海支部

日本山岳会創立百周年を記念して、東海支部独自の行事として百山ラリー、ローツェ南壁登山、台湾玉山登山、第八次インドヒマラヤ登山等を実施。また他支部との連繋行事としては中央分水嶺踏査などを実施してきた。そのなかでも百周年行事の要ともいうべき記念式典と御在所岳集中登山が十月二十九日と三十日に行われた。当日は本部から平山会長以下の参加を得ると共に、各支部からも多数の方が参加され、大成功の内に全ての行事を終えることができた。

二十九日の式典および懇親会は今池ガスビル大ホールにて来賓・支部員・支部友二百名以上の参加を得て、午後三時三十分寺西支部長の「開会の辞」で幕を開けた。

支部長挨拶では東海支部が長年に亘り、海外登山を実践し活発な支部活動を展開したということで特別表彰を受けたことが報告された。また、日本山岳会の将来について「会員の高齢化、若手の入会減など難しい問題が山積みですが東海支部は五十歳を超えた人達で隊員を構成したインドヒマラヤ登山隊をもう八回も出している。また昨年よりスタートした猿投の森づくりの会も日帰りで山に入り、森を勉強し、森づくりの手伝いを楽しむ、これらも新しい山岳会のあり方ではないでしょうか。もちろん海外登山の東海支部ですから今まで以上に世界の山に出かけます」と述べた。

来賓祝辞では最初に平山会長から祝辞をいただいた。東海支部の活動はめざましく、次の百年を目指して今後も一層の活動を期待している、と述べられた。

続いて伊藤衆議院議員から、日本山岳会の百周年式典に参加できたことの感謝と、議員自身は山登りとは縁はないが猿投の森の設立に関与でき山岳会に貢献することができたことを誇りに思う、との挨拶をいただいた。

最後に中日新聞の小出常務からは、西洋では十八世紀まで山には悪魔がいるとの信仰があったが日本では山には神が住むとの信仰があり日本の文化に深く関わっている。例えば言葉では登校・下校などにあるように、神聖なところへの出入りには登る・下るとの思想が根付いている。登山とは単なる運動ではなくこのようにプロセスを味わう行為であると感じている。とのユニークな挨拶をいただき、さらにこのような活動に対しては中日新聞として

も積極的に支援していきたいと考えている。との積極的な言葉があった。

●百周年記念行事報告

日本山岳会創立百周年に向けて東海支部でも三年程前から独自の企画を立案し、実行してきたのでその内容について和田副支部長が映像を中心に報告した。

≪百山ラリー≫

・趣旨　日本山岳会々員および支部友会々員が東海地区の山を中心に百山に登る。

・期間　二〇〇三年一月一日～二〇〇五年十二月三十一日

・対象となる山　日本山岳会選定三百名山など千七百五十山。海外や東海の名山二十を含む。

・中間報告　最速達成者　加藤守彦、和子夫妻、最高平均高度　現在　加藤守彦、東海の二十名山登頂者　現在六名、最多登頂者　現在　加藤守彦、百山登頂達成者　現在六十六名、射程圏内八十五名程度か

≪冬季ローツェ南壁登攀登山隊二〇〇三≫

東海支部は、〇三年にローツェ南壁へ二度目の登山隊を派遣した。前回は〇一年であったが、初挑戦ということもあって、七六五〇㍍地点までしか到達することができなかった。しかし、田辺隊長は、この登攀でローツェ南壁登攀の確かな手応えをつかんで帰国した。支部では、田辺隊の報告を聞き、再挑戦を〇三年の十二月と決定した。本計画は、日本山岳会の百周年記念事業のひとつに組み入れていただき、会を上げての計画として派遣させていただき、満を持しての再挑戦であったが、八二五〇㍍地点まであと二五〇㍍というところで敗退という結果であった。支援していただいた多くの関係者の期待に添うことができずまことに残念な結果であった。

登山隊は前回と同様、中日新聞社、文部科学省、愛知県、名古屋市の後援を得て、さらには、経済界、各企業、関係者各位の多大な支援を賜って実現した。特に東海支部にあっては、支部員、支部友各位から募金やグッズ販売などを通して温かい支援を賜った。帰国後、全隊員を交えて報告会を開催したが、冬の八〇〇〇㍍の岩壁がいかにすさまじいものであるか、あと二五〇㍍がいかに困難であるかを知ることが出来た。

またいつの日かチャレンジする機会の訪れることを期待したい。

≪中央分水嶺踏査≫

権兵衛峠から野麦峠までの七七㌔を東海支部が受け持ち〇三年九月から始まった。昨年は年末までに七七%まで実績を延ばし、残る区間は今年の残雪期に仕上げる予定とした。今年は三月に入っても降雪が多くラッセルに加え、密生した樹林帯を潜り抜けるという二重苦を味わうなか、遂に三月二十六日に七七㌔が一本の線につながった。踏査には一年半の間に二十一回の山行を行い、参加した支部員支部友は三十五名、延べ二百人余の成果である。四

月二十三日鳥居峠で多数の参加者の見守る中で踏査完了記念式典が盛大に執り行われた。

《インドヒマラヤ登山隊》

・実施時期　二〇〇五年七月九日～八月十七日
・総隊長　寺西申生
・隊長　A隊（ラカン峰）水野起己　雪崩の危険のためドゥン峰北壁新ルートに変更、B隊（六二〇六メートル）鈴木常夫
・隊員　柳原、足立、水野（和）、三浦、金田、野呂、正田、田辺、山中

《台湾・玉山　雪山登山計画》

・実施時期　二〇〇五年十一月六日～十二日
・登山対象　玉山（三九五二メートル）、雪山（三八八六メートル）
・リーダー　尾上　昇
・参加者　リーダー以下　十七名

●映像でつづる日本山岳会百年史

資料・映像委員会で編纂したスライドを委員長の羽田栄治会員の解説で鑑賞した。内容は日本アルプス登山探検時代、初期の海外登山、山の宮様、女性登山のパイオニア、日本人初のヒマラヤ、山岳会ルームの変遷、マナスル初登頂、上高地山岳研究所、ヒマラヤ登山の実績、自然保護への取り組みなど貴重な映像を見ながら山岳会百年を振り返った。

●アトラクション

式典終了後アトラクションとしてMountain Music Fairのプログラムを鑑賞した。内容としては山岳会が活躍の場を持ったアルプス、ヒマラヤ、アンデスの民俗音楽で約一時間出席者と一体となって楽しむことができた。

アルプスは長野県木曽郡の大桑アルプフォルンクラブ二十名の演奏、百瀬令子・山本章によるスイスアコーデオン演奏、スイス連邦ヨーデラーツイストで最優秀の認定を受けた伊藤啓子によるヴォーカル・ヨーデルの独唱

ヒマラヤは一九九四年以来日本で活躍しているパンチャ・ラマヒマラヤサウンズによるネパール民族音楽の披露

アンデスは名古屋大学フォルクローレ研究会ＯＢを中心に結成されたデ・ラ・アンデスによるフォルクローレの演奏が行われた。

●懇親会

式典の後フリーマーケットが七階で開催され、その後九階ホールで立食による懇親会が出演者も参加して全員で和やかに開催された。最後にはフリーマーケットの高額商品を中心に横田実行委員長の軽妙な司会によるオークションが行われ大いに盛り上がった中で全ての行事を終えることができた。（佐野　忠則）

■岐阜支部

二〇〇五年度は日本山岳会の創立百周年に当たり、それに関す

る行事の多い一年だった。

三年目に入った中央分水嶺踏査だが、当支部の担当区間は残り七・八キロとなっており、三回の山行で予定通り完了した。最後の踏査山行は九月十日の土曜日、その晩は下呂温泉で盛大に祝賀パーテーを行った。

京岐北陸ブロックの百周年記念式典は福井支部の主管で福井市内で開催された。立松和平氏の百霊山についての講演と翌日の霊山越知山への登山、当支部からも多数参加した。その他東海ブロックや近畿ブロック、フォッサマグナブロックの記念式典にも参加している。十月十五日の本部の百周年記念式典には二十二名が参加し、翌日の景信山にも多数登らせてもらった。

百周年記念山行と銘打った今年の海外山行は、チベットの聖山カイラスの一周トレッキングである。天候に恵まれ、全員が無事に五六三〇メートルのドルマ峠を越えてカイラス山を一周した。八十三歳になる高木碕男名誉会員も参加されたが、おそらくカイラスを一周した日本人の最高齢記録ではないだろうか。百周年に相応しい快挙であり、支部一同心からお祝いを申し上げたい。

百周年関係以外で特筆すべきことは、奥美濃の小津権現山の県有林において、岐阜県林政部とタイアップして「県民の森づくり構想」をスタートさせたことである。〇五年度中には四回の調査山行を行ったが、〇六年度からはいよいよ遊歩道の開設にかかる。〇七年八月八日の「岐阜県山の日」までの完成を目標に、自然保護の理念に基づいた模範的な遊歩道を開設する事業が始まったわけである。

それ以外の行事としては、恒例の山岳講演会では北アルプス双六小屋のオーナーであり写真家の小池潜氏においでいただいた。氏の知名度の高さのおかげで、過去最高の参加者があり、講演も大好評であった。

その他は例年の行事を無難にこなした一年であったが、今後の問題としては退会者が五名あり、新入会員がわずか一名だけだったことである。結果として会員数が百名を切ってしまった。高齢化はやむを得ないこととはわかっているが、だからといって会員減を仕方ないこととは考えず、会員増強にもっと努力すべきであろうと思っている次第である。

（堀　義博）

京都支部

百周年記念事業の中央分水嶺踏査は前年四月より十五回にわけ実施、七月二十四日（日）最終行程ダンノ峠から小野村割岳を踏査。サポート含め延人数二百三十三名が参加し、京都支部受け持ち区域が一本の線でつながり完了した。

四月十三日支部総会を京大会館にて開催（四十一名出席）し、〇五年度の支部活動を始める。

四　月・大日岳研究会による山頂付近の雪庇現地調査（全体五十名参加）
・スケッチ山行　鹿島槍ヶ岳（五名参加）
五　月・今西錦司レリーフを守る会（十四名参加）
・第五回五支部合同懇親山行　白山・釈迦ヶ岳、千振尾根（七名参加・全体五十六名）
六　月・日本真ん中五支部―石川・京都・岐阜・福井・富山―日本山岳会百周年記念式典（福井まちなか文化ホール）と山行（越知山）（六名参加・全体八十五名）
七　月・大文字ビアパーティ（二十一名参加）
八　月・沢登り　比良山系三舞谷（十一名参加）
九　月・例会山行　奥美濃　オサンババ（十二名参加）
・お月見山行　南木曽岳（八名参加）
十　月・例会山行　奥美濃　ロクロ天井（九名参加）
・京都・広島支部合同山行　三倉岳（五名参加・全体十四名）
十一月・岩登り講習会　滋賀県山岳センター（九名参加）
・森の勉強会（東海・京都・関西自然保護委員会）伊勢神宮の森（七名参加・全体六十九名）
・スケッチ山行　南アルプス鋸岳（六名参加）
一　月・京都支部二十周年記念式典　京都弥生会館（九十四名）
・第六回大日岳積雪地形研究会　京大会館（四十名参加）
二　月・わかん山行　京都北山　雲取山（六名参加）
・雪山遭難救助訓練　比良山系蓬莱山（十七名参加・救助犬一頭）
・スキー例会　長野八方尾根スキー場（十五名参加）
三　月・関西・京都・福井支部合同スキー山行　恩原三国山（十名参加・全体三十名）
・スキー例会　妙高高原（十九名参加）
四　月・展望の山　奈良・矢田丘陵（四名参加）

▼全国・他団体関係

日本山岳会総会、日本山岳会支部長会議、ヒマラヤン・グリーン・クラブ主催「乾燥地における植林」、日本山岳会支部長・事務局担当者会議、藤木祭、日本山岳会創立百周年記念式典（十八名参加）、関西支部創立七十周年式典（十一名参加）に出席参加した

京都支部委員会　毎月第一水曜日に開催。

「京都支部だより」は年四回発行（六月・九月・十二月・三月）。

今後の活動は大日岳積雪地形研究会、今西錦司レリーフを守る会、京都支部二十周年実行委員会（京都「今西錦司賞」表彰委員会）、雪山の遭難救助等の継続。京都支部活性化委員会が新たに発足した。

なお、残念なことにお二人の方が逝去なされた。

お一人は京都支部参与の小谷隆一氏。三月二十三日（享年八十一歳・会員番号四一〇二）に急逝。登頂できなかったが一九六五年カラコルム・ディラン峰登山隊長として。また中国新疆省・コングール峰への一九八〇年～八九年隊長・総隊長として活躍。京都岳人にとって記憶に残るところである。

あとお一人は清水朝一氏で一月二十二日（会員番号一〇七一五）に急逝。前日本山岳協会副会長、京都府山岳連盟会長として、また小谷隊長のコングール峰への裏方として活躍した。

心からご冥福をお祈りします。

（池田　祥祐）

■富山支部

二〇〇五年度は、四月十四日の五十七回総会で始まる。参加者二十八名。

四月二十二～二十四日、中央分水嶺踏査。野麦峠～乗鞍岳、これで完了する。七名参加。

五月八日、播隆祭と例会山行は中止。

五月二十八～二十九日、五支部懇談会。石川支部担当、白山釈迦岳・千振尾根コースで実施し、天候に恵まれ無事終了（次年度は、岐阜支部担当）。参加者七名。

六月十一～十二日、京岐北陸ブロック百周年記念式典と山行が福井支部で開かれた。参加者七名。

七月一日、例会。九月に百周年記念海外登山の話で盛り上がる。参加者十七名。

七月十八～十九日、例会山行、来馬温泉で一泊。雨飾山へ。花を多く見ることが出来た。参加者七名。

八月十九日、百周年記念海外登山隊の壮行会、全員の無事登頂を祈る。参加者三十三名。

八月三十一日、海外登山隊、富山を出発。家族や支部会員、新聞社、関係山岳会の皆さんに送られ元気に出発。

九月二十六日登山隊より連絡が入り、ギャジ・カン峰（七〇三八メートル）に九名内七名登頂したと連絡が入る。無事に下山を祈り、支部会員と関係機関に連絡。

十月十日、百周年記念海外登山隊無事に帰富。スリムになった隊長、隊員の元気な顔を見て迎えに出た家族、会員は皆嬉しそうだった。

十一月二十三日、例会山行。今回はきのこ山行。馬場島できのこ汁を作り、山行の疲れをいやし、心も体も温まる。参加者十名。

十一月二十五日、ギャジ・カン峰登頂報告会、支部会員。各山岳会よりの参加者も多く百二十名以上の参加者があり、山の大きさ、大変だったことなど映像を見ながら感じたのではないかと思う。

十二月三日、ギャジ・カン峰登頂祝賀会（例会）。隊長、隊員の話を聞きながら美味しいお酒に話がはずんだ。参加者三十名。

十二月十五日、役員会。新春山行について話し合う。十一名参加。

一月十四日～十五日、新春山行、西穂高へ登る予定だったが雪が多く、懇親会だけになる。参加者七名。

三月二十四日、役員会。今年は海外登山という百周年記念事業があり、秋の山行が出来なかったりしたので十八年度の行事について話し合う。二年後には支部創立六十周年なので準備を始めなければならないのではとの話もあり、若い会員の入会も考えながら、〇六年度を迎えたい。

（高柳　清美）

■石川支部

二〇〇五年度の懸案は中央分水嶺の完全踏査であった。まだ踏査されていない分水嶺のほぼ中間点に登り、そこから左右に屏風山に向かう隊と刈安山に向かう隊に分かれて、四月二十二日から三日をかけてテント泊で一気に踏破した。豊富な残雪と天候に恵まれ、短期間でやりとげることができたのは幸運であった。この時踏破できずにいたら、強烈な藪漕ぎを強いられて、なかなか年内中の踏破は難しかったと思われた。

二〇〇五年度の石川支部の主な行事は次のとおりである。

四月十六日　総会　白山市白峰御前荘貸別荘「やまどり」　参加者二十名

今年は役員改選の年であったが、全員再選となった。また翌週行われる中央分水嶺踏査について最後の討議を行った。

その後の懇親会では、例により釣名人の会員が釣ってきた岩魚が沢山出た。翌十七日は、天気が思わしくなく予定されていた山行は取りやめとなった。

四月二十九日　鈴ヶ岳開山祭　小松市　参加者十一名

当日は生憎の雨で、参加者が少なかったが、大日山まで足を伸ばした者もいた。

例によりメッタ汁や山菜のてんぷらが振る舞われた。

五月二十八日～二十九日　第五回京岐北陸五支部懇親山行　「白山周辺」　参加者十七名

今回は石川支部がお世話させていただき、懇親会場は白山市ノ瀬「永井旅館」で、山行は白山釈迦ヶ岳と千振尾根で行った。懇親会では、石川支部ならではの岩魚の骨酒や、当地自慢の山菜の手料理を出し皆さんには好評だった。翌日はあまり天気が良くなかったが、ブナの新緑と残雪のコントラストを楽しんでいただいた。五支部参加者計五十五名

六月二十五日～二十六日　分水嶺打ち上げ会兼出湯山行　懇親会場　白山市白峰「山和」、山行　能郷白山・杉峠（加越国境）

参加者十五名

打ち上げは、分水嶺の思い出を肴に大いに盛り上がった。

翌日は、踏破した分水嶺を俯瞰しようと能郷白山に行く隊と、

杉峠の登山道整備を兼ねて加越国境に行く隊に分かれて山行を行った。

七月三十日・七月三十一日　上高地山研集会　参加者十五名

恒例の山研集会には、支部会員以外にも二名が参加したが、全部で十五名とやや少ない集会となった。今回も昨年に引き続き山海の幸の炭火焼きを楽しもうと、珪藻土のコンロで本格炭火焼きをした。今年は鮎の塩焼きがメインだったが、釣り名人のチョンボ（沢山釣ったが生け簀から逃げられた）から、鮎の数が少なく皆さん堪能するというわけにいかなかった。

翌日は「奥穂高岳」「奥又白池」「焼岳」等に別れ、山行を行った。

九月十七日から十九日　白山南北縦走路踏破　参加者二十一名

日本山岳会が結成百周年を迎えるにあたり、石川支部の記念行事として、三方岩岳～妙法山～白山御前ヶ峰～別山～三ノ峰～銚子ヶ峰～石徹白を二泊三日の行程で縦走を行った。この区間は大変景色が良く岳人憧れのルートであるが、交通の便が悪いため、車での送迎のサポートがないとなかなか実現は難しいルートである。

十月十五日　創立百周年記念式典・祝賀晩餐会　東京　参加者九名

高輪プリンスホテルで皇太子殿下ご臨席の下開催された。

十月三十日　紅葉山行　「山毛欅尾山」　参加者十一人

今年の紅葉山行は、日帰り山行となった。当初冬爪山を予定していたが冬爪山は道もはっきりせずまた険しい所も多く、前日の雨で滑りやすくなっていたので、初心者には危険との判断から山毛欅尾山となった。

十一月二十六日　山祭り　白山市白峰　御前荘貸別荘「やまどり」

参加者二十五名

今年の山行の話や、来年の行きたい山の話を肴に、夜遅くまで宴会は続いた。ここは、貸別荘なので、時間や周りを気にしなくてもよいので会員の評判は良い。

十二月十日～十一日　鈴ヶ岳山仕舞い　小松市「冒険の砦」　参加者十一名

前日は、鈴ヶ岳を守る会の皆さんの手料理と豪快な猪の炭火での丸焼きで、宴はえんえんと続いた。翌日は餅つきを行い、今年の山行の無事を祝った。

二月二十五日～二十六日　支部長・事務局担当者会議　富士吉田市　参加者一名

三月四日　かんじき山行　奥獅子吼山　参加者八名

今年度からの試みで、かんじき山行を行った。それぞれが、多種多様のかんじきを持参しその長所短所を比べたが、新雪には地元石川のかんじきが良いようであった。

以上が石川支部の〇五年度の年間行事のあらましであるが、こ

の他に役員会を不定期に何度か行った。

今後当支部では、かんじき山行等少し毛色の変わった山行を行事に取り入れて、変化に富んだ山行を行うことにより魅力ある支部にしたいと考えている。

（織田　伸治）

福井支部

二〇〇六年度の通常総会は、四月二十二日日委任状を含め五十八名が参加して福井支部例会場にて行われた。事業報告・新年度の事業計画案・決算報告・予算案が提案され、全議案を原案通り承認された。

連休頃までには中央分水嶺を完踏してしまおうと、総会の翌日と五月の連休を利用して、天候の悪いのにもかかわらず踏査を実施した。六月の十七～十八日は最後の美濃平家岳にて打ち上げをすることになった。会員の川口さんの配慮で、送電線の巡視路小屋を借りれることになり、十七日十二名が参加して行われた。平家岳の分岐から左に道をとり、アップダウンを繰り返して小屋に。しかし空模様がよくないが、とにかく美濃平家まで行く必要があり、支部長・山本・江田・牧田・大和・川口・小林・野路が出かける。途中雨が降り出しずぶ濡れになって五時近くに帰ってきた。

越前地区担当　檜峠～毘沙門岳～温見峠～能郷白山～冠山～三国岳～栃の木峠～行市山～三国山～駒ケ岳までの分水嶺踏査の線が完全に引かれた。

打ち上げでは嶺南担当を完踏して亡くなられた井上さんの写真にお神酒と肴を飾り、黙祷をし、お祝いの乾杯。支部長がいつになく雄弁になる。困難な事業だっただけによほど感無量だったのではないかと思われた。この事業に際して最初から熱心に参加され、本部への報告書も担当してくださった大和さんに、支部から殊勲賞が送られた。

五月二十日、支部長会議が日本山岳会会議室にて行われ、宮本支部長が出席した。

五月二十七～二十八日、第六回五支部合同懇親会および山行は岐阜支部主管にて新平湯温泉長作の宿「なかだ屋」にて行われた。

秋田支部主催にて六月三～四日、第二十三回東北・北海道地区集会が秋田の乳頭温泉郷・鶴の湯での開催と聞き、福井から支部長と女性三名が参加する。その折、語り部の集いが催され何ともいえぬやさしい、楽しい一時を与えてくださった。

七月一日～二日日本山岳会・上高地山岳研究所にて支部長会議が開催され、宮本支部長が出席する。

八月二十～二十一日、白山親子登山が実施される。

十月七～九日、福井支部主催にて全国集会を永平寺山にて行う。それに向けて支部一丸となって取り組んでいる真っ最中。大勢の方の参加がありますよう念じている。

（船田　洋子）

関西支部

二〇〇五年度は〇四年度から継続して取り組んできた、日本山岳会創立百周年、関西支部設立七十周年記念事業が完遂した。その代表意的な事業としては、〇四年度に実施した西チベット学術登山隊の派遣と報告書の出版、中央分水嶺踏査については足掛け三年、延べ四百人を超える参加者の健闘で、五十区間二七四㌔を完全踏査した。それに加え、中央分水嶺の支線として紀伊山地参詣道踏査を実施した。

〇五年度最大の事業であった関西支部設立七十周年記念式典は十一月五、六日に高野山において開催し、全国十三の支部や首都圏から総勢百四十名が参加、盛大な式典となった。そのうち講演会と式典は、高野山大学会議室で行い、第一部の講演会は「日本の登山文化の原点を探る」というメインテーマのもと、まず、高野山大学奥山直司教授に「河口慧海の道を追う」と題して、一昨年見つかった慧海の明治三十三年三月十日から十二月三十一日までのヒマラヤの旅の中で綴った日記に沿って、慧海が越えた峠の解明についての報告をしてもらった。続いて、吉野山金峯山寺の田中利典執行長には「役行者と修験道」と題して、山岳宗教の祖、役行者の生涯と修験道について話をしていただいた。第二部の式典では、平山会長と田中文雄日本山岳協会会長から祝辞をいただいた。また、阿部前支部長に「関西支部の七十年の歩み」を話してもらった。そして、七十年の歴史の中で三十九年に渡り支部蔵書四千三百余冊の保管をしていただいている、（株）今西組の今西邦夫社長に感謝状を贈呈した。第三部の懇親会は遍照光院に場所を移し、平林百周年記念事業委員長の挨拶に続いて、支部参加者を代表して秦野一彦北九州支部長に祝辞をいただいた。その後、田邊副会長の乾杯の音頭で祝宴が開始され大いに盛り上がり、斎藤元会長の中締めでお開きとしたが場所を変えて二次会、三次会と続いた。翌日の山行は、壇上伽藍から九度山に至る二十一㌔の町石道と、金剛三昧院から高野三山を巡る女人道を歩いた。また支部恒例事業として実施してきたチロル・スキーツアーが十年目を迎え、総集編として「ベストセレクション in Tirol」が実施され、有終の美を飾った。

〇六年度においては、創立百周年・支部設立七十周年事業で培った会員の活性化をさらに促進すべく、各委員の拡充をはかり幅広い世代と要望に対応できる魅力ある山行活動を展開したいと考えている。特に本年度のメインは「四国の分水嶺踏査」で、徳島県の平石山から愛媛県の黒森山まで総延長一五〇㌔を毎月第四土・日に実施し、支部の活性化はもとより、四国在住会員の増強にもつなげ、いずれ四国支部設立の機運の台頭と、近隣支部との相互交流をはかる所存である。

（重廣　恒夫）

山陰支部

▼中央分水嶺踏査は二〇〇五年九月九日に終了し、九月十五日には本部に報告。九月二十三日には山陰支部分水嶺打上げ会を大山で開催した。

▼「大山横手道上ブナを育成する会」

○五年四月十六日、山陰支部第五十六回通常総会で大山横手道にブナを植林する意見が出、ゲストとして出席していた朴元常務理事が共感。十月一日、経験がある吉岡淳一会員が、支部を母体とした、有志による独立した植林ボランティア団体「大山横手道上ブナを育成する会」を設立した。会の会長には、伯耆町長の住田圭成氏、事務局長には吉岡淳一会員が決定した。翌年、一月三十日には会費制会員募集を開始。五月には会員九十名に達した。そして六月四日、第一回植樹祭を行い、八十一名が参加。ブナ百八十本、ミズナラ四十本の植付けを行うことができた。今後百年先を見据え、息の長い活動の継続と拡大を期待するところである。

▼日本山岳会自然保護委員会「〇六全国集会」を予定

○六年十月二十一日に、自然保護委員会「〇六全国集会」が行われる。会場となるホテル大山での事例報告では、登山者自身の問題を含め、小西毅会員が二十三年前にはじめた官民一体の大山頂上保護復元活動について述べ、続いて行われる午後の分科会討論につなげる予定。大山頂上保護については、すでに「全国集会」で何度か取りあげられているが、翌日には実際に大山頂上に登るなど、実態を観察していただき、さらに論議を深めたい。

▼その他

○五年七月十五日～二十四日　長田健三会員、山の写真展を米子市淀江公民館で開催。

○五年十一月十五日　河野利晴会員、大山の写真集第二集を出版。

○五年十二月十日　支部年次晩餐会。ゲストに重廣関西支部長。

○六年一月八日～三月二十六日　伯耆の国山岳美術館で日本山岳会百周年記念写真展を開催。

○六年四月二十二日　山陰支部第五十七回通常総会。神崎総務小委員長出席。新たに事務局担当副支部長ポストを設け、中井俊一会員が就任。また事務局長を七年間務めた吉川明秀事務局長が勇退し、後任に伊澤寿高会員が選出された。（高田　允克）

広島支部

広島支部は一九九七年十一月、日本山岳会第二十四番目の支部として誕生した。来年度が創立十周年というからまだ日が浅いとも言えるし、早くも十年かという感慨もわく。こうしたなかでの二〇〇五年度支部活動を次の五つの項目で整理してみたいと思う。

①中央分水嶺の踏査完了

○六年三月二十六日、北海道支部に次ぐ全長三六二㌔の分水嶺を踏査し終えた。山陰支部との合同キックオフから二年間、百十一日間をかけ延べ六百一名の力で百七十四ポイントの踏査であった。実行委員会委員長の野間弘会員は四十五回、副委員長の佐々木弘磨会員は五十九回の踏査回数となった。トピックスとしては広島・島根県境の分水嶺一・五㌔を踏査後、日をあらためて登山道として復活させたことがある。歩き初めは平山会長も招いて創立百周年中国ブロック事業の記念登山として位置づけた。当日は共催の山陰支部や北九州支部有志、一般登山愛好者など百三十名の賑わいとなった。この道開きで西中国山地の名だたる山の縦走が可能となった。

②百周年記念事業に「南極フォーラム」

山陰支部と合同で開催した中国ブロック記念事業のテーマは「南極フォーラム」。日本の南極観測五十周年記念にも結びつけ、岳人が見せた極地でのパイオニア精神を若い世代に知ってもらおうと企画した。当日は平山会長の講演後、昭和基地とテレビ会議を行い会場の高校生三百三十名の代表者が越冬隊員と熱く語りあった。この模様をまとめた支部報をさっそく「しらせ」により昭和基地に届けてもらった。後日談としてはテレビ画面に登場した広島大学助教授佐藤高晴氏が帰国後、芸北八幡高原の斎山荘を訪れ親しく広島支部の関係者と歓談した。その場で佐藤氏は当会会員になるという花も添えた。

③地元新聞社の登山教室に協力

中国新聞文化センターの登山教室を受託して二年目。ニーズに応えて里山ハイキングは土曜日以外に水曜日教室も開講した。初級講座の上に新設した中級講座ではテント泊を重ねながら腕を磨いてもらおうと月例山行の中に北アルプス遠征も含めた。一年間の受講者数は九百二十六名であった。○六度は初級講座の方も二教室に拡充している。

④支部創設者があいつぎ逝去

○五年十一月の広島支部創立八周年をはさむかのように支部創立発起人の伊藤祐道氏（八十七歳）が十月に、初代支部長泉尾忠氏（九十一歳）が十一月に、いずれも病気で逝去された。顧問の伊藤氏は主に三菱重工広島で登山者の指導に当たり「カラビナの強度試験」など技術講座講師の顔のほか絵画でもプロ級の腕前だった。泉尾氏は会員番号二〇〇二で永年会員。地元クライマーの草分けとして今も近くの岩場に泉尾ルートが残る。

⑤会員の動向

○四年度から支部友会制度を設けた広島支部は仲間が増えている。○四年度末が会員・支部友会員合わせて七十四名、○五年度末には八十六名となった。この原稿執筆中の○六年七月時点では百七名とささやかながらも大台を突破している。○六年度総会で支部友会員は、将来支部を支える基盤人材として位置づけ、新設の支部友委員会で研鑽していただくことになった。

病気療養中の種村重明支部長を支える副支部長に新たに杉村功医科学委員長が就任し、平位剛顧問が名誉支部長に就任した。平位剛会員は長年の「ワハン回廊」研究と著書刊行により〇五年十一月中国新聞社主催の「中国文化賞」を受賞した。（国枝　忠幹）

福岡支部

△二〇〇五年度の主な事業▽

●カンリガルポ（岡日嘎布）山群第五次調査

福岡支部は二〇〇一年から毎年カンリガルポ山群に出かけており、第四次までは主として未知の山名調査と山座同定、未探検の谷の偵察を行ってきた。その後、カンリガルポ山群を単行本としてまとめるため総合的に、特に高山花を見る必要性が生じた。〇五年七月二十六日から八月四日の間、山群第五次調査を実施し、松本徨夫隊長をはじめ七名の会員が参加した。

目的は高山花卉（草花）の観察と撮影で徳母拉（デモラ四九二〇メートル）を最主眼とにおいた。キングドン・ウォードは一九三三年にこの地を往復しているが、花卉の記録がほとんどないことに疑問をもったからである。結果は、青いケシ、雪蓮のほか、多数の花卉を観察でき、満足すべき成果を得ることができた。詳細は福岡支部報No.19（二〇〇六）に報告した。

●中央分水嶺福岡支部担当コース踏査終了

・第七区間（北坂本～英彦山～篭り水峠～上塚山～ガラメキ峠）：〇五年四月十九～二十日

・第一区間（平尾台・吹上峠～竜ケ鼻～味見峠）：〇五年五月二十四日

これらを踏査し福岡支部担当の四十二キロを全て終了した。福岡支部担当ルートを概観すると大きく三つの特徴的エリアに分けられる。ます、国定公園となっている平尾台ルートは産業開発地域の中を通り、石灰岩の採掘が進みカルスト台の景観が大きく変化している。次に障子ケ岳の牙城跡、さらに岩石城は平安末期から戦国時代の歴史を秘めたルートである。そして山岳宗教の霊山であった英彦山は山伏の峰入コースである。これらは低山ながら分水嶺ハイキングコースとして整備する価値があり、今後の課題である。

●自然観察会を〇五年十二月二～三日、九州大学宮崎演習林にて行った。自然災害および鹿の害について現状を観察した。

●「新年のつどい」を一月二十一日に開催した（参加者三十名）。

●支部報No.19（〇六年四月十五日）を発行した。Ⅰ部、岡日嘎布山群調査（一次隊～五次隊）特集。Ⅱ部、五次隊調査報告。Ⅲ部、中央分水嶺踏査報告。Ⅳ部、会員活動報告。

●「二〇〇五年度通常総会」を五月二十一日に開催した。

役員改選が行われ、再任、新任を含め新役員が選任された。支部長：中山健、副支部長：副島勝人、委員（総務）：渡部秀樹、

倉智清司、辻和毅、浦一美、（会計）：佐々木耕二、（自然保護）：山本博、井上晋、五十周年事業準備委員：松本徑夫、深田泰三、監事：斉田貴典、中馬董人、顧問：三日月直之、田中昭男、阿部克雄、松本徑夫、深田泰三、事務局：渡部秀樹（渡部　秀樹）

■北九州支部

△二〇〇五年度の支部活動▽

一、総会開催

四月十六日（土）　第六回通常総会を大谷会館で開催。出席者三十二名、委任状提出者五十二名（三月末現在の会員数、正会員八十二名、会友七十四名）

二、委員会開催

定例委員会六回、臨時委員会二回

三、行事

四月九日～十日　百周年記念自然保護全国集会（八王子）に事務局長出席。

五月八日　中央分水嶺踏査完了を記念し、平尾台キャンプ場で祝賀パーティを開催。

出席者　秦野支部長以下二十五名。

五月二十一日　支部長会議（東京）に支部長出席。

五月二十八日～二十九日　北九州支部創立五周年記念式典を英彦山で開催。

記念講演として「わが国南極観測隊の五十年」をテーマに平山会長に講演していただいた。懇親会終了後、添田町主催の英彦山山開き前夜祭に参加。平山会長に挨拶をいただいた。翌日、英彦山登山と山開き神事に参列。

記念行事参加者五十八名。本部より平山会長、他支部十六名（関西、熊本、東九州、宮崎）、北九州支部四十一名。

七月十六日～十七日　百周年記念九州ブロック式典（霧島えびの高原、宮崎支部主管）に支部長以下十六名出席。

九月十日　支部長事務局担当者会議（東京）に支部長、事務局長出席

十月十五日　日本山岳会創立百周年記念式典と祝賀晩餐会（東京）に支部長以下十七名出席。記念式典で吉村支部名誉会員が特別表彰された。

十一月二日～三日　宮崎ウェストン祭と祖母山登山、参加者五名

十一月五日～六日　百周年記念関西ブロック式典、関西支部創立七十周年記念式典（高野山）に支部長以下八名出席。

十一月二十六日　北九州支部忘年パーティ開催（和布刈山荘）。

出席者支部長以下四十五名。

二〇〇六年二月二十五日～二十六日　支部長・事務局担当者会議（富士吉田）に支部長、事務局長出席

四、山行

（一）中央分水嶺踏査

A班（担当区域：仏峠～木戸峠）

二〇〇五年三月二十七日踏査完了、踏査日数二十日、延べ参加人数百二十二名。

B班（担当区域：木戸峠～大ケ峠）

〇五年一月三十日踏査完了、踏査日数十一日、延べ参加人数八十二名。

C班（担当区域：大ケ峠～壇ノ浦）

〇五年四月十四日踏査完了、踏査日数二十二日、延べ参加人数百九名。

D班（担当区域：壇ノ浦～平尾台吹上峠）

〇五年五月八日踏査完了、踏査日数七日、延べ参加人数五十六名。

（二）通常山行

二〇〇五年七月三十日～八月二日　剣岳～立山連峰　参加者九名

十月十二日～十四日　百周年記念式典のプレ山行（奥白根山・男体山）参加者十六名

十月二十二日～二十三日　大崩山　参加者五名

〇六年一月十四日～十五日　野間岳・開聞岳　参加者二十名

三月四日～五日　九重（法華院温泉）、平山会長との懇親登山　支部長以下十八名参加

五、今後の活動の重点

（一）会員の登山技術の向上

（二）支部としての遭難対策の具体化（遭難対策基金の設置など）

（三）山岳会としての地域社会への貢献（中高年を対象にした初心者登山教室の開催など）

（四）自然保護活動の推進（九州森林管理局より森林保全巡視員として四十二名が委嘱され、ボランティアとして活動中）

（五）広報活動の充実化（支部報の隔月発行）（大庭　常生）

東九州支部

東九州支部の二〇〇五年度事業は、日本山岳会の百周年に関する記念事業と完全に連動するものだった。山行の面では中央分水嶺の踏査だったし、記念行事は平山善吉会長を迎えての講演会などである。

分水嶺のうち、当支部が担当したのは大分県内の一一九㌔。これを大きく九つの区間に分け、それぞれに支部役員をリーダーに、支部会員六十余人と会友の全員を配置した。すでに前年度から取り組んでいたので、踏査は順調に進み、年度始まりの直後の六月

には完了した。

この過程で、いろいろな収穫があった。まず第一は、支部会員・会友のほぼ全員が参加したことによって、親睦・相互理解が深まり、支部の組織と行動についての結束が強まったことだろう。また、これがマスコミに報道されることによって、日本山岳会そのものの知名度アップにつながった。

同時に、大分という「ふるさとの山」についての問題点も見えてきた。行程のほとんどがヤブ漕ぎだったが、予想以上に山は荒れていた。自然林は別としても、人工林の荒廃が目立った。さらに、著名な登山地は登山道もそれなりに整備されていたが、訪れる人の少なくなった、いわゆる「忘れられた山」が多くなっているのも大いに気になったことである。

記念行事は本部や九州ブロックでの祝賀会に参加したほか、支部独自の企画として「平山会長講演会」を開いた。会長はこれまでも大学の集中講義のため大分に来られており、そのたびに懇親会などで会員と懇談していただいていたが、今回は一般の人たちにも会長に接して欲しいと講演会を考えた。七月二十三日、大分文化会館のホールで開催。支部会員や会友だけでなく、自然に関心を持つ一般の人も参加、八十人を超える人が会場を埋めた。会長は「南極　自然と人」をテーマに、映像を交えながら優しい語り口でお話くださり、大変好評だった。特に「これを機に環境問題を改めて考えたい」などの声が寄せられた。その夜は大分市内のホテルで恒例の「会長を囲む会」を開き、南極の氷による水割りの杯を挙げながら話がはずんだ。支部会員が会長に親しく接する年に一度のチャンスでもある。

翌日は登山会。支部では例年、夏休みの最初の日曜日を中心に「青少年登山体験の会」を開き、当年は四回目だが、今回は特に平山会長にもご参加をいただき、百周年記念登山会と分水嶺完踏記念をあわせて開くことにした。参加者の層は厚く、何と三歳から九十歳までの総勢約六十人となり、楽しい大会となった。登山したのは久住山だが、それを含めて中央分水嶺のコースを歩いた。また九十歳の男性は会員であり、クジュウでクジュウに登ったわけである。後日、彼の誕生日に再度、祝賀登山をした。

それにしても、百周年は支部と所属会員たちに、改めて日本山岳会の重みを考えさせる契機になった。支部の歴史は四十五年である。支部設立を発起した会員のうち、昭和初めに入会していた人が数人いるが、その人たちはすでに故人。日本山岳会の歴史と彼らの業績を顕彰する良い機会でもあった。このうえは、やがて来る大きな節目である支部五十周年へ向けて、大分登山界のリーダーとしての支部の充実と活性化を図らねばならないと痛感した。

（梅木　秀徳）

熊本支部

二〇〇五年度支部総会は、五月二十日に開催した。前年度に全国支部懇談会を開催し、全支部の中で最小の支部ながらも、全国から遠路熊本まで大挙参加していただき、どうにか支部の責任を果たせたことは、支部員それぞれに大きな喜びと、今後の支部活動の活性化に繋げる自信を得た総会になった。

中央分水嶺踏査も、計画では前年度中に終了しているはずであったが、二年続きの大型台風が九州を直撃し、九州脊梁山地の被害は甚大で、林道は各所で崩壊や倒木により寸断され、分水嶺踏査も大幅に遅れる結果となった。

本支部の担当区域は、大分県境の瀬ノ本高原から、宮崎県の白髪岳山系の八ヶ峰山麓までの一八〇㌔、GPS測量点九十九ヶ所を二十八回に分け、延べ人員百八十九名で踏破した。前半の阿蘇山系では草原帯が多く、踏査も比較的順調に進んだ。読売新聞にも掲載された「分水嶺は九番ホールのグリーン上」。ゴルファーの中には何も知らずに、太平洋側から有明海側に超える〝中央分水嶺通過パット〟を決めている人も……は、この区間内にあり、この話題も今回の踏査の成果であった。しかし、脊梁山地に入ると、この地名物の鈴竹に悪戦苦闘することになる。台風被害により分水嶺への接近が困難になり、遠回りしながらの踏査は、時間的にも経済的にも大きな負担増となり、帰宅が夜中になることも屡々あった。結局〇五年度に八区間分を持ち越し、十一月二十日の踏査をもって本支部担当区間の踏査は終わった。

七月には、山岳会創立百周年九州五支部合同記念式典が宮崎支部の肝いり霧島山系で行われた。完璧な準備、運営で大きな節目の式典に相応しい集会で、本支部からも十六名が参加した。

十一月一日には、九州森林管理局において国有林野内における森林保全巡視活動を行う「森林保全巡視員」委嘱状の交付式が行われ本支部からも十四名の会員が委嘱された。公益法人見直しに備えるわけでもないが、我々山岳愛好家の活動を山という自然に求める以上、国民の貴重な財産である森林等の自然保護に無関心ではいられない。少しでも自然保護活動に貢献できるよう九州森林管理局の森林保全巡視活動に協力を始めた。

十一月五～六日、日本山岳会百周年および関西支部七十周年記念式典に六名が参加した。その内の何名かは前日から出掛け、藤本慶光評議員の特別案内を受けた者もいた。参加者にとって高野山詣ではそれぞれに大きな感動を持ち帰っていた。

平成十九年度には熊本支部設立五十周年を迎える。これまで数回の準備会を開催し、記念行事と、百周年へ向けた新しい支部の活動について検討を始めている。

（工藤　文昭）

宮崎支部

二〇〇五年度における宮崎支部の最大重点事業は、日本山岳会創立百周年記念九州ブロック式典を主管し、円滑に運営実施すること、および宮崎支部創立二十周年記念式典の開催ならびに支部創立二十周年記念誌の発刊であった。

九州ブロック記念式典の開催にあたっては当初〇三年五月に宮崎支部創立二十周年記念事業準備委員会を立ち上げたが、同年十月に日本山岳会創立百周年ブロック別記念式典の開催が決定され、九州ブロックは宮崎支部が主管することとなった。

宮崎支部では同委員会の組織を強化し、それぞれの分野において会員が式典に向かって周到に取り組んだ。

七月十六日から二日間霧島山系えびの高原の国民宿舎「えびの高原荘」で開催した記念式典および交流会においては平山会長、田邊副会長をはじめ全国各地から会員百三十人の参加を得て盛大に開催することができた。

翌十七日には霧島連山の最高峰、韓国岳（標高一七〇〇メートル）を中心にして、三つの班に分かれて実施した記念交流登山には百十四人の参加を得て、それぞれの思いで宮崎の夏山登山を満喫していただくことができた。

支部創立二十周年記念誌の発刊にあたっては、支部活動の歴史を回顧するとともに支部の更なる発展と支部会員の絆を深めることを願いに、会員十名の編集委員会のメンバーが、二十数回に及ぶ編集会議を重ねて苦心の末、〇六年二月に記念誌「山嶺」（A4版、百三十ページ、五百部）を刊行することができた。

事業推進にあたっては、一人ひとりの力は小さいが、小さな力の結集や継続がやがて大きなうねりとなり、さらなる発展の礎となることを感じることができた。

宮崎支部における〇五年度における公益的事業は次のとおりである。

①第八回子ども登山教室（四月二十三日～二十四日、熊本県阿蘇山系「烏帽子岳」、参加者四十八人）および小林市須木地区子ども会登山教室（十月二十二日、宮崎県野尻町「七熊山」、参加六十四人）

②宮崎支部水源の森づくり（補植・育樹作業）活動（七月二十四日、三月二十六日、西都市ロキシーヒルの森他三ケ所、延べ参加者三十九人）

③第二十一回宮崎ウェストン祭の開催（十一月二日～三日、宮崎県高千穂町五ケ所高原、参加者百五十人・前夜祭約五百人）

④家庭裁判所少年補導委託登山の実施（四月八日、二月六日、二回実施、宮崎市近郊「双石山」、延べ参加者二十七人）

⑤第二十一回日本一早い諸塚山山開きの開催（三月五日～六日、宮崎県諸塚村「諸塚山」参加者二十五人・一般参加者約千五百人）

⑥宮崎県警察山岳遭難救助指導者研修会師派遣（二月十六日～十七日、延岡市「行縢山」受講生十三人、講師二人派遣）
⑦清掃登山（十二月十日、宮崎市近郊「双石山」、「花切山」等四座、参加者二十九人）
⑧日本列島中央分水嶺踏査完了（熊本県境白髪山～鹿児島県佐多岬まで、全長二十二キロ、延べ四十九日間、延べ参加人員二百八十六人）
⑨救急法講習会の参加（三月十八日、日本赤十字社宮崎支部主催、参加者十八人）
⑩宮崎支部創立二十周年記念登山（九月十四日～二十四日、長野県穂高連峰、参加者　二十四人）および九州支部創立五周年記念式典・交流登山（五月二十八日、福岡県英彦山、参加者十人）

この他支部の定例的事業として毎月一回の役員会、定例登山研究会（年十二回、延べ五百四人）、定例山行（年十回、延べ二百七十二人）および宮崎支部報「第十九・二十合併号」（B5版、百ページ、三百部）の発刊を行ったほか、支部懇談会（四十六人）、記念式典反省慰労会（三十五人）、支援晩餐会（四十八人）等を開催した。

宮崎支部では、登山活動を通じて自然保護の高揚を図り、健全な登山活動の普及と山岳に関する研究を深め、支部相互の連携を強化し、日本山岳会の発展に寄与するため新しい百年に向けた事業の推進として、支部における現状を正しく認識し、会員がいかに満足し、充実した支部活動を推進することができるかについて幅広く意見を求めるとともにアンケートを行っている。

今後における公益的活動、会員の若年化対策、安全対策事業、自然保護に対する取組み、他団体との連携・交流などさまざまな課題の強化に努めながら、今後支部としていかにあるべきかを模索しているところである。

（末永　軍朗）

会務報告

二〇〇五年（平成十七年）六月～二〇〇六年（平成十八年）五月

◇二〇〇五年度役員・評議員・支部長

会　　長　※平山善吉

副 会 長　※平林克敏、※橋本　清、※田邊　壽

常務理事　※吉永英明、※贊田統亜

理　　事　石田要久、篠崎　仁、大蔵喜福、野口いづみ、斎藤健一、藤井正善、渡邉雄二、石橋正美、古野　淳

監　　事　一力英夫、山本健一郎

※印役員は常務理事会メンバー

常任評議員　小倉董子、重廣恒夫、今村千秋

評 議 員　村上勝太郎、竹田寛次、中村　保、松永敏郎、和田豊司、西村政晃、高原三平、磯野剛太、田中文男、深川安明、日下田實、岩坪五郎、河野　長、田部井淳子、藤本慶光

支 部 長　新妻　徹（北海道）・下山　壽（青森）・菊池修身（岩手）・佐々木民秀（秋田）・斉藤哲郎（山形）・千石信夫（宮城）・佐久間高男（福島）・平田大六（越後）・中野和郎→金子丞二（信濃・二〇〇六年五月交代）・古屋学而（山梨）・大石　惇（静岡）・寺西申生→和田豊司（東海・二〇〇六年五月交代）・早田道治（岐阜）・横田明男（京都）・木戸繁良（富山）・津田文夫（石川）・宮本数男（福井）・重廣恒夫（関西）・高田允克（山陰）・種村重明（広島）・中山　健（福岡）・秦野一彦→大庭常生（北九州・二〇〇六年五月交代）・梅木秀徳（東九州）・工藤文昭（熊本）・井野元繁（宮崎）

◇理事会記録

◎二〇〇五年六月臨時理事会　六月一日　本会会議室

出席者　理事十二名、山本監事一名、委任三名

議事に先立ち、平山会長より、本年度は百周年の年であり、各種行事が予定されている。各会員、支部、委員会の意見を積極的に伺い成功させたい。また、執行部組織の改革も予定されているので、各理事の協力方を要請した。

【審議事項】

一、担当役員等について

①副会長担当

支部・自然保護部門　平林副会長

委員会・同好会部門　田邊副会長

登山部門　橋本副会長

②総務・財務担当（常務理事）

総務担当　吉永理事

財務担当　贊田理事

会長直轄部門担当委員長

山岳編集担当　南川金一会員

英文ジャーナル編集担当　中村保会員

会報編集担当　神長幹雄会員

資料・映像担当　羽田栄治会員

図書管理担当　水野勉会員

山岳研究所運営担当　堀嘉余子会員

二、定例理事会等開催日程について

定例理事会　毎月第二水曜日

定例常務理事会　毎月第四水曜日（会長・副会長・常務理事出席）

【検討事項】

一、百周年記念事業委員会及び行事実行委員会メンバーについて

各種の記念行事実行中のため、原則として継続でお願いする。

二、マナスル初登頂五十周年記念行事の取り組みについて

来年、五十周年を迎えるため、担当副会長の下に委員会を組織して取り組むこととなった。

三、会員名簿発行について

個人情報保護法が施行されたため、掲載内容、広告主への対応等早急に検討することとした。

◎二〇〇五年六月理事会　六月八日　本会会議室

出席者　理事十五名、監事一名、常任評議員二名

議事に先立ち、平山会長より調整中であった常任評議員一名の人選について、今村評議員が互選された旨報告された。

【審議事項】

一、組織改革(案)について

別添資料により検討、支部との関連を明確にして七月理事会で決定することとした。　継続

二、平成十七年度収支予算の総会資料訂正について

総会資料の一部に誤記があったため訂正した。　承認

三、定款第一六条第二項に基づく「会長職務代行者順序」について

平林、橋本、田邊各副会長の順序とすることとなった。　承認

四、百周年記念事業関連

①式典委員会・式典内容について

別添資料により神崎総合式典委員が説明。特に式典への外国関係者招待・案内先について関係者より幅広く意見を聞き対応して欲しいとの要望があり今後式典委員会において成案を得次第、逐一理事会に報告することとなった。　継続

②学生部・日中韓学生交流登山計画(案)について

別添資料により検討。本年九月中旬、日中韓学生交流登山を日本で実施し、東京でシンポジウム開催予定。　承認

③ブロック別式典役員等派遣について

会長を主として各ブロックに最大二名以内を派遣することとなった。　承認

五、マナスル初登頂五十周年記念行事について

審議の前に大蔵理事より先般の事業委員会・マナスル登山―二〇〇五年の報告があり、併せて五十周年記念行事に対する在ネ日本大使館、ネパール山岳協会側の要望について説明があった。田邊副会長を担当として実行委員会を組織して対応することとなった。　承認

六、ネパール皇太子来日歓迎会協賛について

名古屋万博を機に来日されるネパール皇太子殿下の歓迎会(七月下旬・日本ネパール協会主催)に協賛として協力することとなった。　承認

七、各委員会構成について

各委員会を早期に立ち上げるため、早急に委員長・委員の選任をお願いする通知を発出することとした。なお、検討中であった会長直轄の資料・映像担当は羽田栄治会員となった。　承認

八、後援等

①名義後援願：山梨支部「第六回雷鳥会議」

②後援願　日本ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト「国際交流青少年環境体験登山」

③転載許可願　二階堂匡一郎会員「吾妻山回想譜」追録出版のため、「山岳」

の転載。
④写真借用及び原稿依頼　長野市一草舎「目で見る北アルプスの一〇〇年」（仮題）発行のため。
以上四件承認・但し一部有料
九、その他
①八月理事会について
例年八月理事会は開催されないが、本年は百周年記念事業実行中のため開催することとした。　承認
②会員減少対策について
山本監事より、昨今、会員の減少傾向が顕著となっているため、会費、終身会費のあり方等について検討すべきであるとの指摘がなされた。
理事会において検討することとした。　承認

【報告事項】
一、信濃支部　ウエストン祭・六月四～五日　平山会長
二、東北ブロック式典・五月二十八～二十九日　平林副会長
三、五十城文哉展・七月十六～八月二十八日　於東京ステーションギャラリー　平林副会長
四、環境大臣に対する早池峰山の自然保護に関する要望書提出　篠崎理事
五、登山医学シンポジウム・五月二十日　於鹿屋市　野口理事
六、平成十七年五月入会二十二名、物故四名、退会二十八名
七、事務局勤務体制について
七月より深田氏週三日、吉田氏（パート）週三日となる。

会報「山」七二三号参照

◎二〇〇五年七月理事会　七月十三日　本会会議室
出席者　理事十五名、常任評議員三名

【審議事項】
一、組織改革（案）について
別添資料により六月理事会に引き続き検討、意思決定機関としての理事会と、執行委員会としての各委員会を区分し、とりあえず実行に移すこととなった。　承認
二、平成十七年度第一・四半期の財務状況について
会費収入　五〇〇二万一〇〇〇円（対予算七五・四五％）
支出　一八六〇万二〇七一円（対予算二〇・三六％）で、ほぼ前年同期並みである。　承認
三、総務・財務担当者について
事務量の増大に伴い、補助者を下記のとおり選任した。
総務　斉藤理事
財務　石橋理事
四、ルーム交換・鑑定結果
かねてより交渉中であった二〇一号室（日本山岳会所有）と一〇四号室（日本山岳会賃借中）の交換について、監事の指示等に基づき鑑定評価を依頼していたが、鑑定結果が下記のとおりとなった。この結果を一〇四号室所有者に示し、交換交渉を進めることとした。　承認
二〇一号室（日本山岳会所有）　三九〇〇万円
一〇四号室（日本山岳会賃借中）　三七〇〇万円
五、創立百周年記念事業関連
①式典計画の進行状況について
去る七月に開催の有識者会議の状況を踏まえ、特に外国招待者の取扱いについて報告した。　承認
②特別表彰について
創立百周年を記念した特別表彰のあり方等について検討結果を報告、八

月理事会に素案を提示することとした。　承認

六、マナスル初登頂五十周年記念事業委員会委員について
ネパール側からの呼びかけを踏まえ、次の委員で検討することとした。　承認

委員長　田邊副会長
委員　大蔵・吉永各理事、宮原・神崎・小川各会員

七、秩父宮記念山岳賞審査委員について
平成十七年・十八年度の審査委員を下記のとおりとした。　承認

村木・斉藤各名誉会員
平林・田邊・橋本各副会長
長尾・宮下（啓）・松浦・竹内・山口各会員
事務局（吉永常務理事）

八、海外登山基金委員会委員について
平成十七年・十八年度の委員を下記のとおりとした。　承認

委員長　古野理事
委員　宮崎・小川・黒川・貫田各会員

九、契約　カシオ計算機㈱
百周年記念腕時計売買契約及び個人情報秘密保持に関する契約を締結した。　承認

一〇、後援依頼　山梨県立文学館
企画展「山の文学展」（九月二十三日～十一月二十七日）　承認

一一、写真貸与願　㈱テレビマンユニオン
七月三十日（土）放映の「世界・ふしぎ発見」でのマナスル初登頂等の写真貸与　承認・有料

一二、推薦及び名簿使用願　㈱山と溪谷社
「目で見る日本登山史」に対する本会の推薦及び発行宣伝のための会員ラベルの打出し願いであるが、会員ラベルの使用については発行図書の宣伝に限定すること及び個人情報秘密保持を内容とする契約を締結することを条件とすることとした。　承認・有料

【検討事項】

一、ルーム改築計画について
平山会長よりサロン・会議室の新設等の改装計画概要について説明があり、百周年記念式典終了後を目途に改装費用等について詳細に検討することとした。

二、会員減対策について
山本監事より資料をもって提唱された会員減退策の具体案について次回理事会以降継続して検討することとした。
会員減は将来における財務に直接的に影響する重要事項のため、担当委員会を設置し、真摯な検討を加えるべきとの意見があり、今後理事会でき得る限りの時間を割き検討することとした。

【報告事項】

一、百周年記念行事実行委員会・六月二十三日　式典計画、海外登山計画、分水嶺踏査、百年史発行の進捗状況について　平林副会長

二、百周年記念シンポジウム「山での救急蘇生を考える」・七月四日　野口理事

三、山岳四団体懇談会・七月八日（平山会長・田邊副会長出席）
十八年度は本会が幹事団体となる。　田邊副会長

四、ネパール皇太子殿下来日歓迎会・七月十日
本会が協賛しており二十名が参加した。　吉永常務理事

五、委員長会議・七月十二日

組織改革に伴う執行部門長会議で、今後二カ月に一回程度の頻度で開催し、理事会等との意思疎通を図ることとした。　平林副会長

六、「医療ハンドブック」の発行

既に市販しているが、百周年記念式典時のお土産としても活用する。　野口理事

会報「山」七二四号参照

◎二〇〇五年八月理事会　八月十日　本会会議室

出席者　理事十名、監事一名、常任評議員二名、委任五名

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①募金状況

平成十七年七月末現在　五九九〇万六八九〇円

②財務状況

平成十七年七月末現在総支出　一八一九万八七四七円

平成十七年八月繰越金　四一七〇万八一四三円

③式典関連進捗状況

式典委員会・神崎委員長より式典・祝賀晩餐会の実施内容、外国招待客・国内招待客への案内等につき説明があった。講演会の内容等について未定の部分があるので、早急に検討し、式典・祝賀晩餐会の全容を九月理事で決定することとした。　承認

④特別表彰について

平林副会長より目下の検討状況につき説明があった。全体として五～八名の個人・団体が対象となっており、表彰者、表彰方法について九月理事会で決定することとした。　承認

二、ルーム交換交渉経過

二〇一号室（日本山岳会所有）と一〇四号室（日本山岳会賃借中）の交換について、鑑定結果を一〇四号室の所有者に提示して交渉中であったが、八月四日先方より等価交換に応ずる旨の返答があった。交換後の二〇一号室の賃借希望、交換に伴う費用の負担等につき明確にした上で、交換を進めることとした。これに伴い、現在賃借中の二一一号室を期間満了の十月に解約すること、交換後の一〇四号室の改修及び交換・賃借後の二〇一号室の一部改装を行うこととし、早急に工事見積を依頼することとした。　承認

三、委員会担当について

今般の組織改革に伴う会長担当の委員会（六委員会）を除く委員会の担当副会長を下記のとおりとした。

平林副会長　自然保護

橋本副会長　青年

田邊副会長　事業、図書、指導、医療、科学、学生部指導

吉永総務理事　海外（総務委員会に国内・外関連団体交流小委員会があるため）　承認

四、後援等

①ヒマラヤ観光開発㈱　九月三日「ヒマラヤの集い」講演会名義後援　承認

②㈱美術出版社　本会所蔵の大下藤次郎氏関係書籍の写真撮影　承認・有料

【報告事項】

一、創立百周年記念事業委員会・七月十四日

募金状況、式典計画、中央分水嶺踏査状況等について報告し、各委員より意見をいただいた。　平林副会長

二、九州ブロック式典・七月十六日～十七日

宮崎県「えびの高原荘」での開催状況の報告があった。　平山会長

三、創立百周年記念シンポジウム・七月二十二日

東京都体育館において「一九七〇年以降のヒマラヤ登山隊の果たした役割とは」をテーマとして実施された。　平林副会長

四、東九州支部分水嶺踏査完了記念登山大会・七月二十三日～二十四日　平山会長

五、マナスル初登頂五十周年記念事業委員会・七月二十八日

二〇〇六年五月九日のカトマンズでの記念レセプショントレッキング等の記念行事計画について検討中であるとの報告があった。　田邊副会長

六、七月新入会員十三名

会報「山」七二四号参照

◎二〇〇五年九月理事会　九月十四日　本会会議室

出席者　理事十三名、監事一名、常任評議員三名、委任二名

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①募金状況

平成十七年八月末現在　六一五二万六〇〇〇円

②財務状況

平成十七年八月末現在　総支出　二〇九三万〇八〇七円

（寄付金支部還元金支払済）

平成十七年九月繰越金　四〇五九万五一九一円

③式典・祝賀晩餐会について

式典委員会・神崎委員長より十月十五日の講演会・式典・祝賀晩餐会の会員・招待者の出席状況、次第・運行方法等についての詳細な説明があり、質疑。

一部に未定の部分があるため、九月中を目途に検討を加え、十月六日に会長・副会長出席の下で最終点検をすることとした。

④特別表彰・感謝状贈呈者について

平林副会長より、委員会において検討の結果二支部に対し表彰、二社・三個人に対し感謝状贈呈を行いたい旨の提案があり、承認された。

十月十五日式典の中で表彰・感謝状贈呈を行うこととなった。　承認

二、ルーム交換及びこれに伴う二〇一号・一〇四号の改装について

九月十三日、二〇一号と一〇四号の交換契約を締結し、これに伴い現在、賃借中の二一一号については契約期間満了の十月十四日解約することとした。また、二〇一号は和室があるため、早急にこれを改装し、現在、二一一号に収納中の物品・書籍を二〇一号に移し、今後会議室としても利用することとなった。改装工事は九月二十七日～十月一日の予定。なお、一〇四号の改装は、早急に設計を行い、年内には会議室として改装予定。承認

三、平成十七年度名誉会員・永年会員について

名誉会員・小倉常任評議員より、九月三日開催の評議員会において今年度名誉会員の推薦はなかった旨の報告があり、承認された。

永年会員・昭和三十年四月～昭和三十一年三月入会の今年度永年会員は十三名、十月十五日の式典において永年会員章を授与することとした。

四、後援等

①㈱ＮＨＫエンタープライズ　所蔵映像等の二次使用願　承認

②東京都山岳連盟　第十三回日本山岳耐久レースの名義後援　承認

③㈳日本山岳協会　オールスポーツマンゴルフ大会への参加依頼　希望者があれば参加

④㈱山と溪谷社　十一月号（十月十五日発売）日本山岳会創立百周年記念記事用写真使用願　承認

【報告事項】

一、北海道ブロック式典開催・八月二十六日～二十七日　　平山会長

二、名誉会員を囲む会開催・九月一日

ルームで行われ、五名の名誉会員が出席された。

三、評議員会開催・九月三日

名誉会員の推薦等について

四、支部長・支部事務局担当者会議開催・九月十日

本年は創立百周年記念式典当日の開催は困難なため、ルームで開催された。

会務報告、百周年記念式典の準備状況報告等があり、終了後、市ヶ谷アルカデアで懇親会を実施した。

五、「高尾の森」作業資材置場敷地の使用許可につき東京神奈川森林管理署長と契約

六、八月新入会員六名、復活会員一名

【検討事項】

一、日本レスキュー協議会への参加（「山岳事故調査」業務）について

「山岳事故調査」については有意義なものと認められるが、調査方法、保険会社との関係等について不明な点があるため、次回担当者に説明を求めることとした。

会報「山」七二五号参照

◎二〇〇五年十月理事会　十月十二日　本会会議室

出席者　理事十四名、監事一名、常任評議員二名、委任一名

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①募金状況

平成十七年九月末現在（概算）　　六三九四万四〇〇〇円

②財務状況

記念式典等準備のため未集計、十月下旬までに集計予定。

③式典・祝賀晩餐会の準備状況

去る十月六日、理事懇談会を開催して準備状況を点検したが、再度、式典委員会、神崎委員長より最終的出席状況、式次第等について詳細な最終説明があり、質疑。式典委員会・理事会一丸となって実行に当ることとした。

④前夜祭・エクスカーションの準備状況

外国招待者を対象とした十月十四日の前夜祭及び十月十六日の日光・東照宮へのエクスカーションの準備状況について式典委員会より遺漏なく整った旨の報告があり、理事会側参加者の確認がなされた。

二、後援等

①ヒマラヤ国際映画祭実行委員会「ヒマラヤ国際映画祭」名義後援（二〇〇六年七月下旬開催）

開催日時、場所、映画内容等不明のため、明確になった時点で前向きに再検討することとした。　　継続

②㈱アド・ティーアンドエス　東京新聞都内版紙上での日本山岳会「創立百周年記念」特集の広告企画　　承認

【報告事項】

以下の件が担当者より報告され承認された。

一、ルーム一〇四号と二〇一号の交換　　吉永常務理事

交換を原因とした所有権移転登記を完了した。

二、中国ブロック式典・九月十七～十八日　於広島市　　平山会長

三、中部ブロック式典・九月十七～十八日　於新潟県　　平林副会長

四、九月新入会員十六名

会報「山」七二六号参照

◎二〇〇五年十一月理事会　十一月九日　本会会議室

出席者　理事十五名、監事二名、常任評議員三名

議事に先立ち、平山会長より創立百周年記念式典・祝賀晩餐会を滞りなく終了できたことに対し、関係者の努力に感謝する旨の挨拶があった。

【監査報告】

一力監事より去る十一月八日実施された平成十七年度上半期の監査について、概ね適正に執行されている旨の報告があった。

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①収入状況

平成十七年九月末現在　　八一二七万三七〇四円

（内募金六三九四万五二二九円）

②財務状況

平成十七年九月末現在総支出　三九三四万七三六六円

十月繰越金　四一九二万六三三八円

③今後の事業展開等について

・百年史の発行

去る　十月二十六日の常務理事会において百年史刊行委員会の松田雄一委員長より進捗状況、経費見込み、配布についての委員会の意向等を聴取し、二〇〇六年五月の発行を見込み、配布方法については委員会の意向を重視しつつ十一月十日開催予定の記念事業委員会の意見を聞き、総合的に勘案し、十二月理事会において決定することとした。

・第二回記念フォーラムの開催

二〇〇六年二月十一日（土）、日本青年会館において「日本山岳会と登山の未来に向けて」をテーマとした講演とパネルディスカッションを予定。

・英文ジャーナルは予定通り発行

・中央分水嶺関連報告書の発行

二〇〇六年に踏査が完了する。予算にしたがって報告書を発行する。

・学生部・海外遠征計画

二〇〇六年八月～十月、ネパール・ヒマラヤ、マナスル山群のパンバリ・ヒマールへの遠征が計画されている。予算の範囲内で応援することとした。

・決算について

二〇〇六年に全ての事業が終了する見込みのため、二〇〇七年（平成十九年）度の総会において、決算報告をする予定。二〇〇六年度の総会においては中間決算とする。

二、十月常務理事会検討事項について次のような報告があった

①定款改定

組織改革に伴い、平成十九年度からの実施を目指した理事及び評議員の定数にかかる定款改定を検討する。今後検討を重ね、平成十八年度総会に提案を予定することとした。

②名誉会員推薦規定改定

「名誉会員推薦に関する内規」について名誉会員候補の推薦者の規定等に不備が指摘されているため、全体的な手続きを含む見直しを行い、二〇〇六年度における推薦に適応できるようにすることとした。

③二〇〇六年二月支部長会議

支部活性化を図る観点から、地方開催を検討することとした。

④マナスル初登頂五十周年記念事業について

・二〇〇六年五月九日　記念レセプション（於カトマンズ　ネパール山岳協会主催）
・これに併せた「記念トレッキング」を実施（一月号会報「山」に要綱発表し、参加者募集）
・マナスル・デー企画
・二〇〇六年は日本・ネパール国交樹立五十周年に当たり、記念行事の中でマナスル・デーの企画があるため、これに参加する。
・マナスル登山計画
　橋本副会長が前向きに検討中である旨の報告があった。

⑤本会内におけるいわゆる公募的海外登山について
　常務理事会において、会員がいわゆる公募登山に参加することについては一切関知しないが、本会の役員が主導して本会内において参加者を募集する公募的海外登山については、今後、自粛する方向とし、本会の「冠」を付すことに慎重であるべきとの意向が集約された旨の報告があった。今後継続して検討することとした。

⑥ルームの拡充策
・一〇四号室の改装　三つの会議室に改装することとし、一月中に工事を完了させたい。
・集会室のサロン化　改装後の一〇四号室及び賃借している二〇一号室の利用状況を勘案しつつ、各方面の意見を聴取し、出来るだけ早い機会に方針を決定する。

⑦青年部の扱い
　「日本山岳会青年部」として団体会員になっており、委員会としての青年部と区別がつかず、ルーム利用、予算の執行についての問題があるため、近日中に委員長から事情を聴取し、改善策を検討することとした。

三、日本山岳レスキュー協議会・山岳事故調査への参加
　九月理事会に引き続き検討したが、事故情報の把握方法、個人情報保護との関連、本会の山岳傷害保険との関連に不明確な面が見られるので、参加は見送るとの意見が大勢であったが、再度、指導委員会の意見を聴取することとした。　承認
四、中村保会員の海外講演補助について
　十一月三十～十二月一日、英国山岳会及びデンマーク山岳会において講演。渡航費の一部を補助することとした。　承認

【報告事項】
各担当者より、以下の件が報告された。
一、記念式典への海外招待者エクスカーション・十月十六日　吉永常務理事
　バスにて日光に案内、東照宮・日光博物館（旧田母沢御用邸）を見学、栃木県教育委員会の協力も得、好評であった。
二、東海ブロック式典・十月二十九～三十日、於名古屋市　平山会長
　全国より百八十六名が参加、盛大に行われた。
三、関西ブロック式典・十一月五～六日、於高野山　平林副会長
　全国より百四十名あまりが参加、盛大に行われた。
四、NHK海外ラジオ放送の英語による百周年関連取材　藤井理事
五、パキスタン大地震救援募金について　古野理事
六、十月新入会員六名、復活会員一名
会報「山」七二七号参照

◎二〇〇五年十二月理事会　十二月十四日　本会会議室
出席者　理事十四名、監事一名、常任評議員三名、委任一名
議事に先立ち、平山会長より創立百周年という多忙な年であったが、役員各位の協力によって年末を迎えることができた。新しい年に向かって、引続きよろし

くお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連（報告）

①収入状況

平成十七年十一月末現在　九七〇〇万九七〇四円

（内募金六五八八万一二二九円）

②財務状況

平成十七年十一月末現在総支出　四四九二万九六三一円

十二月繰越金　五二〇八万〇〇七三円

③「百年史」配布方法について

百年史（委）の要望及び理事会・常務理事会・創立百周年記念事業委員会の審議経緯を踏まえ、「百年史」を希望しない会員（会報にて申し出を広報）を除く全会員に無償で配布することとした。

なお、印刷所については、二社より見積りを徴した結果、価格及び経験を勘案し、技報堂とすることとした。

二、今後の運営方針「新しい一〇〇年に向かって」について

平山会長より常務理事会に対し検討の指示があったため、先に山本監事より提出された会員減対策に対する提言を含め、常務理事会において特に短期的施策を中心とした方針をまとめ、一月理事会に提案することとした。

承認

三、定款改定について（理事定数）

理事　現行十五名以上二十名以内→十名以上十五名以内（但し、評議員については、諮問機関としての機能を鑑み、現行の十五名以上二十名以内のままとする。）

前項、二の「今後の運営方針」についての合意を得た上、二月あるいは三月理事会にて議決、評議員会の意見を得、平成十八年度総会に提案（平成十九年度施行）する手順で進めることとした。

四、名誉会員推薦規定の改定について

現行規定の候補を推薦できる者の範囲に不備が指摘されているため、理事会及び常任評議員による各々の改定案を作成、調整の上、評議員会において今年度中に審議・決定することとした。

承認

五、公益法人改革に伴う対応について

国の公益法人改革に伴い社団法人の非営利法人への移行が予定されるため、平成十八年三月の提出が見込まれている改革法案内容判明時にプロジェクト・チームを設置し、「公益非営利法人」の認定を目指すこととした。

承認

六、公益法人会計基準の改正に伴う対応について

平成十八年度より減価償却の導入、費目の変更等を内容とする公益法人会計基準の改正が施行されるため、早急に財務委員及び有識者によるプロジェクト・チームを設置して対応することとした。

承認

七、一〇四号室の改装工事について

工事費見積り　大成サービス一〇二九万円、創家建設工業　一一五五万円（ほか二社は辞退）となったため、大成サービスに消費税込み一〇〇〇万円で請け負わせることとした。（なお、二〇一号室のエアコン・照明の設置及びキッチン撤去工事については、大成サービスに二一〇万円で発注する。）

承認

八、マナスル初登頂五十周年記念事業について

日程を以下のごとく決定した。

・二〇〇六年二月十八日

〝THE ナマスル〟―過去から未来へ―・於東京都体育館

・二〇〇六年五月七日～十六日
　記念トレッキング（マナスル関連四コース、会報一月号・二月号で広報し参加者募集）
・二〇〇六年五月九日
　カトマンズ・記念レセプション（NMA主催）
・二〇〇六年五月十四日
　本会主催レセプション（於カトマンズ）
・二〇〇六年九月二十四日～二十六日
　日・ネ国交樹立五十周年記念ネパール展・レセプション参加　於京王プラザホテル。マナスルのスペース確保　　承認

九、役員の出張経費について
　従来からやや不明確な点が指摘されていたため、今後、原則として下記のようにすることとした。
　交通費（実費）及び宿泊費（一泊八〇〇〇円）支給
　イベントに対する祝儀一律一万円（但し、補助金を支出している場合は、なし。）
　派遣人数　原則として一名（なお、支部等からの後援依頼に基づく場合は、当該支部等の負担によることをお願いする。）

一〇、レスキュー協議会・山岳事故調査への参加について
　十一月理事会の審議に引続き、十一月常務理事会において黒川指導委員長より経緯、内容等についての説明を受けたが、事故発生の把握と保険との関連等を明確にする必要があるため、本年度における参加は見送ることとした。但し、公益性の観点から重要な事業でもあり、来年度当初において再検討することとした。

一一、青年部の活動状況等について
　「同人きりぎりす」（会員番号一三九四七、十一月理事会における「日本山岳会青年部」として団体会員になっている旨の説明は誤りのため訂正。）と執行部の一員としての青年部の活動が混同されている実状が判明した。二月に予定している予算編成会議における今年度の事業報告、来年度の事業計画案を検討し、今後の対応を探ることとした。但し、青年部発行による「きりぎりす」は若年層に対する指導奨励の観点から有用なため、今後における継続的発行を前提とする。　　承認

一二、事務員の社会保険加入について
　麹町社会保険事務所より加入状況の問い合わせがあり、今後の公益非営利法人の認定にも影響することが懸念されるため、平成十八年度からの加入を検討することとした。　　承認

一三、名義後援
　「さいたま文学館」　企画展「秩父文学散歩」（二〇〇六年四月二十九日～七月三十日）　　承認

一四、「山岳」転載許可
　「独立行政法人産業技術総合研究所」　山岳第三年及び第二十二年の岩手山関連　　承認

【報告事項】
各担当者より、以下の件が報告された。

一、創立百周年記念事業委員会・十一月十日　　吉永常務理事
　特に「百年史」の配布方法についての意見を伺った。

二、委員会・同好会代表者説明会・十一月十二日　　吉永常務理事
　一〇四号室の改装案についての意見・希望を聴取した。

三、新入会員オリエンテーション・十一月十九日　　吉永常務理事
　出席新入会員三十八名、会長・副会長の出席を得、本会の活動内容等の説

明と意見交換を行った。

四、創立百周年記念事業反省・慰労会・十一月二十九日　吉永常務理事

記念式典・祝賀晩餐会を滞りなく終了し、一段落したのを機に開催。残る五事業についての見通しを確認した。

五、北海道支部創立四十周年記念祝賀会・十二月十日　平山会長

平山会長及び平林副会長が出席、盛大に行われた。

六、十一月新入会員十名

会報「山」七二八号参照

◎二〇〇六年一月理事会　一月十一日　本会会議室

出席者　理事十三名、監事一名、常任評議員三名、委任二名

議事に先立ち、平山会長より新しい年を迎えたが、日本山岳会にとっては発展のための懸案が山積みしている。役員各位の一層の協力をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①収入状況

平成十七年一二月末現在　九七五六万四七〇四円

（内募金六六〇一万八一二九円）

②支出状況

平成十七年十二月末現在　六三八九万五二一七円

一月繰越金　三三六六万九四八七円

創立百周年記念事業財務（委）の吉永副委員長より一年あまりの期間を残すのみとなったが、百年史、英文ジャーナル、分水嶺関連報告書及び一〇四号室の改修等、今後に予定されている事業費を何とか賄える見込みとの報告があった。

二、当面の運営方針について

十二月常務理事会において新しい百年の第一歩としての〝当面の運営方針〟について論議した結果が提出された。一月中に具体的実施策を策定するための会長・副会長をトップとするグループを編成し、二月中に取りまとめることとした。　承認

三、定款改定について

理事定数を現行の十五名以上二十名以内を十名以上十五名以内とする改定案について、既に数回の理事会において検討を加えてきた経緯もあり、「当面の運営方針」の取りまとめに合せ三月理事会までに決議することとした。　承認

四、一〇四号室改装工事について

床下を含む一〇四号室の会議室としての全面改装工事を一月十二日より着工した。二月下旬竣工予定。　承認

五、ヒマラヤンクラブ主催・ナンダデビ登頂七十周年記念セミナー

二〇〇六年一月二十二日、インド・ムンバイで開催される上記セミナーに一九七六年日本山岳会隊の隊員であった梶正彦会員（六六七六）が参加するため、記念品代を負担することとした。　承認

【報告事項】

一、山梨支部新年会・一月七日　平山会長

次回、支部長・支部事務局担当者会議を山梨県で開催することもあり出席、盛大に行われた。

二、十二月新入会員十二名

会報「山」七二九号参照

◎二〇〇六年二月理事会　二月八日　日本山岳会会議室

出席者　理事十四名、監事一名、常任評議員三名、委任一名

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連

①収入状況

平成十八年一月末現在　一億一七七万四七〇四円

（内募金七〇六四万六二二九円）

②支出状況

平成十八年一月末現在　六四二二万六四二一円

二月繰越金　三七五四万八二八三円

二、「当面の運営方針」の具体策取りまとめについて

一月理事会に提案された〝当面の運営方針―新しい百年の第一歩として―〟の具体策について、理事会に五つの検討グループを設置して鋭意検討中である。二月中に取りまとめ、三月理事会に提案する見込みである旨の報告があった。　承認

三、名誉会員推薦規定（内規）について

先に常任評議員より規定の改定案が示されたが、既定の方針に従い、早急に常務理事会案を提示し、両案の調整を行ったうえ、三月評議員会に規定改定を提案することとした。

なお、改定にあたっては、名誉会員推薦規定創設当時の文書が残されているため、この要点を整理する事とした。また、常任評議員側より定款では会員外の者の推薦も排除していないのではないかとの意見が寄せられた。承認

四、〝公益法人会計基準〟改定対応のプロジェクト・チームについて

平成十八年度からの公益法人会計基準改定に対応するためのプロジェクト・チームを下記のとおりとし、早急に対策を講じることとした。

平井財務委員、篠崎財務協力委員、三上総務委員、

贄田財務担当常務理事　承認

五、マナスル初登頂五十周年記念行事

①「THEマナスル―過去から未来へ―」・二月十八日、於東京都体育館

②記念レセプション及び記念トレッキング・四コース・五月七～十六日、於ネパール

③「日・ネ国交樹立五十周年」記念ネパール展に資料展示・九月二十四～二十六日、於新宿京王プラザホテル

担当の田邊副会長より上記の日程で実施する旨の報告があり、特に二月十八日のパネル・トーキング等の内容及び広報状況の報告があった。承認

六、平成十八年度予算編成会議

二月二十四日、午後二時より十六委員会の委員長より来年度の事業計画等を聴取する予算編成会議を開催するため、理事、監事各位の出席を要請した。　承認

七、支部長・支部事務局担当者会議について

二月二十五日～二十六日、山梨県において開催される。参加人数、会議内容等について報告があった。　承認

八、「平成十七年度海外登山基金」助成先ついて

二月七日の委員会において計六隊の申請について審査した結果、助成先を下記のとおり決定した旨、事務担当　古野理事より報告があり、報告どおり決定した。

①日本山岳会東海支部　ローツェ南壁（冬期）　六〇万円

②東海大学　K2（南々東稜）　三〇万円

③鱶鰭同人　インド　ガンゴトリ山群メルー峰　三〇万円

④日本山岳会学生部　マナスル山域パンバリ・ヒマール　三〇万円

各隊とも若干の条件が付されたが、特に登山終了後の報告提出を徹底するよう要請することとした。　承認

【報告事項】

一、講演会「山で起きやすい怪我の応急手当と搬送法」・二月六日　野口理事
参加者約七十名、会員外の方の参加も多く、関心の高さを実感した。医療委員会として今後もこの種の講演会を継続実施していきたい。

二、渡辺兵力名誉会員ご遺族からの寄付金について（吉永）
秩父宮記念山岳賞基金へ、ご遺族の川口佐喜様より金二十万円が寄せられた。ご遺志にしたがって有効に活用したい旨の会長名礼状を発送した。

三、創立百周年記念シンポジウムについて・二月十一日　重廣常任評議員
皇太子殿下ご出席予定のため、準備状況についての報告があった。

四、税務調査について　吉永常務理事
二月二十二～二十三日、麹町税務署による税務調査が実施される旨報告があった。

五、平成十八年度除籍予定者の件（吉永）
一月末現在、九十一名除籍予定者がいるため、知り合い等へ接触を要請した。

六、環境省「西大台地区利用適正化計画検討協議会」について　篠崎理事
協議会への参加が内々に要請されている。今後、この種の協議会へは積極的に参加していきたい。

七、一月新入会員二名
会報「山」七三〇号参照

◎二〇〇六年三月理事会　三月八日　本会会議室
出席者　理事十四名、監事一名、常任評議員三名、委任一名
議事に先立ち、財務委員・〝公益法人会計基準〟改定対応プロジェクト・チームの平井拓会員より、去る二月二十二日と二十八日実施された麹町税務署の税務調査結果及び会計基準改定に伴う減価償却について報告があった。早急に委員会行事にかかる講師謝礼等の源泉徴収の実施及び交通費支出の厳格化に伴う旅費関連規則の改定を行うよう指摘された。

【審議事項】

一、創立百周年記念事業関連
①収入状況
平成十八年二月末現在　一億一七九万六七八四円
（内募金等　七〇六六万八二二九円）
②支出状況
平成十八年二月末現在　六四七四万八五二九円
三月繰越金　三七〇四万八二五五円
寄付金の免税措置適用が三月末日までのため、三月中に予定されている寄付金の免税措置について、遺漏のないよう対応することとした。

二、平成十八年度事業計画（案）及び収支予算（案）について
総務担当の吉永、財務担当の贄田各常務理事より説明があった。
事業計画（案）については二～三年後に予想される「公益社団法人」への移行を見据えた公益事業と会員のための事業の区分を行い、収支予算（案）については会員減に伴う収入減に対応した緊縮予算とした。　承認

三、定款の一部改定（案）について
定款第十三条　理事定数を十名以上十五名以内とする。
定款第五〇条　施行を平成十九年四月一日よりとする。
平成十七年度からの組織改革に伴って理事の委員長兼任の廃止及び会運営の意思決定の迅速化を図るため、理事定数を減員することとした。今後、評議員会の意見を聞き、平成十八年度通常総会に提案する。　承認

四、監事一名の辞任願いの扱いについて
去る二月二十八日、一力英夫監事より退任願が会長宛提出された。受理を

前提として定款第二〇条第四項による新監事就任までの職務続行をお願いし、通常総会における新監事の選出を行うこととした。　承認

五、「当面の運営方針」について

施策の具体策を含む「当面の運営方針」を提示した。そのうち、事務局強化策としての「事務局長」の設置及び年次晩餐会の地方開催（平成十八年度は東海支部所管で、名古屋地区を予定）について、人選、準備を急ぐこととした。　承認

六、名誉会員推薦等に関する内規改定について

常務理事会において検討した理事会案を評議員会に提示し、先に提出された評議員会案との調整協議を行うこととした。第一回は三月二十五日。承認

七、公益法人改革の概要について

文部科学省より改革（案）概要が示された。改革法案は三月十日閣議決定され、今年度通常国会において成立する見込み。平成二十年度中に施行されることとなっているが、本会としては「公益社団法人」を目指すこととしている。　承認

八、所蔵写真の掲載許可願　神戸新聞総合出版センター

「ウエストン夫妻と上條嘉門次、根本清蔵」の写真　承認・有料

九、名義後援　NPO法人セブンサミッツ持続社会機構（理事長　野口　健）

マナスル・富士山同時清掃登山の名義後援　承認・誓約書

【報告事項】

一、創立百周年記念「第二回シンポジウム」・二月十一日

皇太子殿下がご出席になられ、約八十名の参加者があった。「別紙」により報告。　重廣常任評議員

二、「THEマナスル―過去から未来へ」・二月十八日　田邊副会長

初登頂五〇年記念事業の一環として実施、当時の隊員を含む約百名の出席者があった。

三、平成十八年度予算編成会議／・二月二十四日　吉永常務理事

十六の委員会委員長より平成十七年度事業実績及び平成十八年度事業計画についてのヒアリングをおこなった。今回がはじめての試み。

四、支部長・支部事務局担当者会議・二月二十五～二十六日　吉永常務理事

山梨支部と共管で山梨県人材開発センターで実施。特に北海道・東海・宮崎各支部より各種公益的事業についての報告が注目された。

五、麹町税務署の税務調査・二月二十二及び二十八日　吉永常務理事

特にイベント時の講師謝礼等に対する源泉徴収及び委員会の交通費について厳しい指摘があった。四月上旬までに対応する必要あり。

六、日本・ネパール国交樹立五十周年記念協力会発足総会・三月五日　田邊副会長

「交詢ビルディング」において開催され、六十六団体が参加。名誉会長に川喜田二郎氏、会長に橋本龍太郎氏が就任した。

七、一〇四号室完成披露・三月七日

午後の部約四十名、夕刻の部、約十名が参加した。

八、環境省「吉野熊野国立公園西大台地区利用適正化計画検討協議会への参加について　篠崎理事

この程正式メンバーとして参加することが決定し、今後は篠崎理事が関西支部と協力して提言していく。

会報「山」七三一号参照

◎二〇〇六年度第一回（四月度）理事会　四月十二日　本会会議室

出席者　理事十三名、監事一名、常任評議員三名、委任二名

議事に先立ち、平山会長より新年度を迎え、今後、公益法人としての活動が求められる。本日は、来る五月二十日に予定されている平成十八年度通常総会への

提出議案について十分な検討をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

一、平成十七年度事業報告（案）及び収支決算（案）について

総務担当吉永、財務担当贊田各常務理事より説明があった。事業報告（案）については平成十七年度通常総会において承認された計画に基づき実施され、特に創立百周年関連事業を中心とした活動が精力的に実行された旨報告があった。収支決算（案）については会費収入の減少状況、及びルーム改装費一三七八万円を創立百周年記念事業特別会計より繰り入れ、資本的支出となる一一六八万円を資産勘定とした旨が財務諸表により説明され、検討の結果、承認された。　承認

二、創立百周年記念特別会計・平成十七年度中間決算（案）について

記念事業（委）・吉永財務副委員長より、平成十八年三月末現在、収入一億三四六万四七四円（内募金等七一七七万六二二九円）、支出七九〇二万一八五七円、次期繰越二四四四万二九二七円となる旨報告され、平成十八年度中の支出予定（百年史発行繰越事業案等）についても説明があり、検討の結果、承認された。　承認

三、監査結果について

去る四月七日実施された一力・山本両監事による監査結果について、山本監事より概ね妥当であることが報告された。　承認

四、定款の一部変更（案）について

去る三月三十一日、文部科学省へ平成十八年度事業計画・収支予算を届け出た折、事業計画等についても総会の承認が必要なことが指摘され不受理となった。また、平成十六年十二月十四日に実施された文科省の実地検査においても理事会の開催回数等について指摘を受けていたため、三月理事会において承認された定款第一三条の変更（理事定数の減員）に加え、役員等の選出方法、理事会の開催回数等に関する第一四条、第一五条、第二七条、第四二条、第四三条及び第五〇条の一部を変更することとした。文科省の事前手続（内諾）に時間がかかるため、通常総会に間に合うよう努力している旨報告があった。　承認

五、監事（補欠一名）選任の件

一力監事の辞任に伴い、新監事として財務委員の竹中　彰氏を評議員会に推薦することとした。　承認

六、旅費規程改正（案）について

税務当局より、指摘があったため、各種行事における交通費支出の規定をより明確化・厳格化することとした。特に会費を徴収して行事を実行する場合、行事担当者の交通費は当該行事による会費内で処理することとし、例外として会より補助する場合は会費を含む収支報告書の提出を義務付けることとなった。　承認

七、「山岳」記事転載許可願　同志社大学山岳会

同志社大学山岳会八十年誌のため、第三十一年第一号他の転載許可願。承認

八、「山岳」及び写真等転載許可願　㈱山と渓谷社

「山と渓谷」五月号における特集記事「慣有恒とマナスル」への写真、資料の転載許可願。申請があまりにも遅いため、今後十分に留意するよう伝えることとした。　承認・有料

九、東京都山岳連盟の社団法人化への対応について

東京都山岳連盟が社団法人化されることとなり、五月下旬設立総会が予定されている。傘下の本会に正会員として登録するよう連絡してきているが、全国組織である本会と都岳連の会員の範囲が合致しないとの意見があるため、評議員の意見を聞いた上、東京都岳連の上部団体である日本山岳協会の意見も伺い慎重に対応することとした。　承認

【報告事項】

一、評議員会・三月二十五日

平成十八年度事業計画（案）・収支予算（案）及び名誉会員推薦等に関する内規改定について検討

二、委員長会議・三月二十八日

平成十八年度委員会予算（案）、源泉徴収及び交通費支出について

三、文部科学省へ平成十八年度事業計画（案）及び収支予算（案）届出（不受理）三月三十一日

四、一力・山本両監事による監査・四月七日

会報「山」七三二号参照

◎二〇〇六年第二回（五月期）理事会　五月十七日　本会会議室

出席者　理事十四名、監事一名、常任評議員三名、委任一名

議事に先立ち、平山会長より、通常総会直前の理事会である。追加議案もあるので、十分な審議をお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

一、定款の一部変更（追加）について

先に第一四条ほか八条の変更について検討し、平成十八年度通常総会に提案することを決定していたが、去る四月二十九日付で文部科学省競技スポーツ課より第一二条他一二条分についての文言の明確化、総会定数、書類及び帳簿の備付に関する規定の創設等について指摘があったため、五月十五日、先に文部科学省に提出した内諾関係書類を差換えた。「新旧対照表」（案）を詳細に検討の結果、文部科学省の内諾が得られることを前提として総会に提案する。

なお、総会議案のため、評議員の意見を聞く必要があるが、総会期日が迫っているため文書をもって連絡したが、特に意見は寄せられなかった。承認

二、支部長交代について

信濃支部　中野和郎氏→金子丞二氏

東海支部　寺西申生氏→和田豊司氏

北九州支部　秦野一彦氏→大庭常生氏

以上、三支部の支部長交代があった。「支部設立並びに運営に関する規定」第九条による理事会の承認を求めてきているため、これを承認した。

三、退職金規定の改定（案）について

現行退職金規定に不備があるため、これを改定すべく案が提示され、本会の都合（例えば、いわゆるリストラ等）で解雇する場合についての支給に不明確な点があるため、今後一カ月程度で調査し、再検討することとした。

継続

四、事業委員会の予算要求について

事業委員会より平成十八年度予算の復活要求が提案されているが、事業委員会の経費支出のほとんどが交通費であることから、今後は行事計画の段階で、参加会員の会費を含む収支予算案を行事の都度理事会に提出してもらうこととし、理事会で検討の上、行事毎の支出額を考えることとした。

五、支部長・支部事務局担当者会議における質問・要望に対する回答（案）について

去る二月二十五日～二十六日に開催された支部長・支部事務局担当者会議における支部側からの質問・要望に対し、理事会としての回答（全一六項目）が示され、検討の結果、承認された。なお、本回答は、五月二十日開催の平成十八年度第一回支部長会議において支部側に提示することとした。

六、資料の写真撮影許可願

日本郵趣出版より「山形県山岳連盟五〇周年記念誌」中の写真

承認・有料

七、映像の二次使用（ＤＶＤ）願
　ＮＨＫエデュケーションより「一九七〇年エベレスト登山隊」の登頂時の映像　　承認

八、資料借用願
（財）立山カルデラ砂防博物館より「ウェストン氏の書簡」等八点
　　一部を除き承認・有料

九、中央分水嶺踏査事業の完了式について
　多数の会員が参加した創立百周年記念事業のため、多数の会員が参加できる完了式を実施することが望ましいことから、今後、中央分水嶺踏査委員会を中心に日程、内容等検討するよう指示することとした。

【報告事項】

一、総会資料について
　本日、承認された定款の一部変更（追加）を加え、五月十八日中に準備することとした。

二、支部長会議資料について
　本日、承認された「支部長・支部事務局担当者会議」における質問・要望に対する回答を加え、五月十八日中に準備することとした。

三、マナスル初登頂五十周年記念事業について
①記念式典の延期
　ネパールにおける政情混乱のため、五月九日の記念式典が延期されたが、先般、ネパール山岳協会より十二月十一日～十三日に実施したい旨の連絡があった。
②〝Nepal Week in Japan〟における展示計画
　日本・ネパール国交樹立五十周年を記念した行事が九月十六日～十八日、アキバ・コンベンションホールで開催される。本会も「マナスル」に関する資料等の展示で参加予定。

四、創立百周年記念事業委員会・四月十三日
　特別会計の中間決算案、平成十八年度の事業収支について説明した。

五、長期登山計画委員会・四月十四日
　橋本副会長を中心に五カ年程度の海外登山計画の立案を開始した。

六、評議員会・四月二十二日
　平成十七年度事業報告（案）・収支決算（案）について意見を聞き、通常総会に提案することとした。

七、四月度新入会員四十三名
会報「山」七三三号参照

◇二〇〇六年度通常総会

二〇〇六年五月二十日　弘済会館
出席者　百三十三名（ほか委任状二千八百五十）

議案
一、平成十七年度事業報告及び収支決算、財産目録承認の件
二、平成十八年度事業計画及び収支予算承認の件
三、創立百周年記念事業特別会計・平成十七年度中間決算承認の件
五、定款一部変更の件
六、監事（補欠一名）選任の件
七、平成十八年度除籍予定者の件
八、その他

◎会務報告

平成十七年度末会員数
名誉会員　　二六名（内、海外の名誉会員六名）
永年会員　　一一一名

終身会員　一六五名
通常会員　五〇九五名
青年会員　八名
夫婦会員　一四〇名
団体会員　九〇団体
計　五六三五名（前年度末会員数五七三五名）

平成十七年度中の新入会員　一四六名
復活会員　四名
物故会員　五〇名
退会者　一三一名
除籍者　七〇名

◎二〇〇五年六月～二〇〇六年五月事業報告

一、登山の指導と奨励に必要な集会、研修会、講演会、展覧会及びシンポジウムの開催

・四月九～十日　自然保護全国集会（自然保護）　高尾の森
・四月十六～十七日　学生部所属大学山岳部新入部員歓迎会（学生）　奥多摩
・四月二十一日　連続講演会第四回「村山雅美名誉会員」（資料映像）　東京都体育館
・四月二十九日　山研開所（山研）　上高地
・五月二十日　支部長懇談会（総務）　弘済会館
・五月二十一日　支部長会議（総務）　弘済会館
・五月二十一日　通常総会（総務）　弘済会館
・五月二十一～二十二日　第二五回日本登山医療シンポジウム（医療）　鹿屋体育大学
・五月二十八～二十九日　東北ブロック記念式典（青森、岩手、秋田、山形、宮城、福島支部）　猪苗代
・六月四～五日　新入会員のための徳本峠越えとウェストン祭（山研）　上高地
・六月十一～十二日　京岐北陸ブロック記念式典（京都、岐阜、福井、石川、富山支部）　福井市
・六月十八～十九日　探索山行「菅平高原の地形と植生の特徴を探る」（科学）　菅平高原
・六月二十二～二十五日　若葉山行（事業）　青森白神岳
・七月二日　クライミング集会（学生）　江戸川
・七月四日　講演会「山での救急蘇生を考える」（医療）　東京都体育館
・七月十四～十五日　全国山岳遭難協議会（指導）　福島市
・七月十六～十七日　九州ブロック記念式典（福岡、北九州、東九州、熊本、宮崎支部）　えびの高原
・七月十六～十八日　東北の山を歩く（事業）　鳥海山・栗駒山
・七月二十一日　気象講座「白馬岳での定点観測」（科学）　本会
・七月二十二日　創立百周年記念シンポジウム（事業）　東京都体育館
・七月二十八～二十九日　ミニ水力発電点検（山研）　上高地
・八月七～九日　山の自然学研究会（自然保護）　上高地
・八月二十一～二十二日　フォーラムＩＮ後援（自然保護）　早池峰
・八月二十六日　北海道ブロック記念式典（北海道支部）　北海道
・八月二十八～二十九日　上高地星の会（山研）　上高地
・九月一日　名誉会員を囲む会　本会
・九月二～三日　自然観察会（自然保護）　上野村
・九月十日　支部長・支部事務担当者会議（総務）　本会

・九月十七～十八日　中部日本ブロック記念式典（越後、信濃、山梨、静岡支部）　関川村
・九月十七～十八日　オータムコンサート（山研）　上高地
・九月十八～十九日　中国ブロック記念式典（山陰、広島支部）　広島市
・十月五～九日　紅葉山行（事業）　韓国雪岳山
・十月八～十八日　創立百周年記念山岳図書・絵画展（図書、資料映像）　丸善
・十月十五日　創立百周年記念総合式典（総務）　新高輪プリンスホテル
・十月十六日　創立百周年記念総合式典（事業）　高尾山
・十月二十九～三十日　東海ブロック記念式典（東海支部）
・十一月三日　連続講演会第五回「松丸秀夫名誉会員」（資料映像）　東京都体育館
・十一月五～六日　関西ブロック記念式典（関西支部）　高野山
・十一月五日　山岳博物館連絡会議（資料映像）　本会
・十一月五日　公開セミナー「通信機器の進歩と応用」（科学）　東京しごとセンター
・十一月五～九日　世界遺産熊野古道を歩く（事業）　和歌山県熊野
・十一月六日　山研閉所（山研）　上高地
・十一月十三日　学生部所属大学山岳部マラソン大会（学生）　皇居
・十一月十七日　第十四回山を語る（図書）　本会
・十一月十九日　新入会員オリエンテーション（総務）　本会
・十二月三～四日　レスキュー講習会（青年）　千代田湖
・十二月三十～一月三日　山研保守状況チェックの為の年末年始開所（山研）　上高地
・一月七～九日　スキー懇親会（事業）　岩手県雫石
・二月四～五日　第三回雪崩講習会「雪を知る」（指導）　栂池
・二月六日　山の怪我の処置と搬送法（医療）　東京都体育館
・二月八日　雪崩講習会「机上講座」（指導）　東京都体育館
・二月八～九日　アイスクライミング集会（学生）　八ヶ岳
・二月十一日　シンポジウム「日本山岳会のこれからを考える」（フォーラム）　日本青年館
・二月十一～十二日　雪崩講習会「実地講習」（事業、指導）　白樺湖
・二月十八日　マナスル初登頂五十周年記念シンポジウム　東京都体育館
・二月二十五～二十六日　支部長・支部事務担当者会議（総務）　富士研修所
・三月二日　講演会「パミール最奥部を行く」（海外）　学習院
・三月十七日　第三四回山岳史懇談会（図書）　本会

二、登山施設の運用、その他登山のための適切な事業
・上高地山岳研究所の運用
・受入れ資料保管
・各博物館、美術館との連携強化
・海外遠征の記録、会合、行事等の記録、フィルムのデジタル化による保存

三、山岳遭難の予防とその対策に関する企画及び指導
・七月　全国山岳遭難対策協議会への出席（滋賀県）
・通年　日山協、労山、都岳連との合同調査活動

四、自然保護活動の推進
・環境行政等への意見書、政策提言の発信
・自然保護委員会による自然保護知識啓発のための自然観察山行
・自然保護委員会による「高尾の森づくり」
・白神山地育林事業

・猿投の森づくり
・自然保護委員会会報「木の芽草の芽」隔月発行

五、機関紙等の発行
・「山岳」第百年（二〇〇五年）の発行
・会報「山」七一九号～七三〇号の発行
・インターネット・ホームページの更新
・海外向英文誌「Japanese Alpine News」発行
・青年部会報「きりぎりす」発行
・医療委員会「山の救急医療ハンドブック」発行
・所蔵図書・絵画展目録発行

六、国内及び外国山岳団体との情報交換
・国内関係団体（日本山岳協会）東京都山岳連盟、日本ネパール協会、日本ヒマラヤ協会、HAT－J、その他）との連絡
・海外登山団体との機関誌の交換及び情報誌の購入

七、海外登山等
・四月十五～六月一日　マナスル登山隊
・七月十三～八月十七日　第八次インドヒマラヤ登山隊二〇〇五（東海支部）
・九月三～十九日　礼那日字峰（ジャナリツ峰）登山隊（福井支部）
・九月四～十月十六日　ギャジ・カン峰登山隊（富山支部）

八、百周年記念事業の推進
・百年史の編集・発刊
・総合式典、ブロック式典の実施
・「新日本山岳誌」の編集・発刊
・所蔵山岳図書、絵画展の開催
・中央分水嶺踏査の完遂
・各種フォーラム、シンポジウムの開催
・海外登山

九、その他目的を達成するために必要な事業
・山岳図書の整備
・山研ミニ水力発電装置稼動運営
・海外登山基金による助成（四隊）
・第八回秩父宮記念山岳賞の授与
・その他

◎その他のトピックス

▽定款変更

定款の変更が通常総会で承認された。変更の主旨は、組織改革による理事機能・意思決定の迅速化となる定数の減、公益社団法人に適合するよう文部科学省の指導も参考に全体を見直したことによる。主たる改定点は次の通り。この改定は認可の日から有効となる。

・第一三条の理事定数を現行の「十五名以上二十名以内」から「十名以上十五名以内」に減員する。
・第二七条の通常総会を「毎年一回以上」とし、第四二条の事業計画と収支予算の決定を総会の議決を要することとする。
・第一二条の会員の除名や第二〇条による役員、評議員の解任の際、対象者に弁明の機会を与える。
・第四九条に必要な帳簿、書類を備え、情報公開に備える。
・その他

▽監事選任

一力英夫の退任に伴い通常総会において監事一名を選任した。

新任者　竹中　彰（一二九八一）

山に学ぶ－歩いて観て考える山の自然	小疇尚研究室／編	古今書院	4000	B5	172p
山のかたみ	萩生田浩	西田書店	1400	四六判	177p
山の救急医療ハンドブック	日本山岳会医療委員会／編	山と溪谷社	980	四六判	159p
山の遭難　生きた、還った	永田秀樹	東京新聞出版局	1600	A5	191p
山の仲間たち	池内　紀	幻戯書房	2300	四六判	267p
山のミステリー	工藤隆雄	東京新聞出版局	1500	四六判	247p
槍ケ岳讃歌　＊写真集	近藤辰郎	山と溪谷社	3800	A4横	111p
悠久の山河－中国大陸・上巻	白川義員	小学館	880	文庫判	221p
夢をあきらめない－チームホンダ エベレスト登山日誌	チームホンダ	チクマ秀版社	1800	A5	287p
よいクマわるいクマ－見分け方から付き合い方まで	萱野　茂・前田菜穂子／著　稗田一俊／写真	北海道新聞社	2400	A5	260p
四度目のエベレスト	村口徳行	小学館	680	文庫判	224p
歴史の山をあるく－関東周辺	敷島悦朗	JTBパブリッシング	1400	A5	159p
ロープウェイで山歩き	山と溪谷社／編	山と溪谷社	838	A4変	114p
六甲高山植物園	倉下生代／写真　六甲高山植物園／監	東方出版	1200	170×185	70p
六甲山に行こう	山と溪谷社／編	山と溪谷社	743	B5	119p
私が登った群馬300山　上	横田昭二	上毛新聞社	1600	A5	337p
私が登った群馬300山　下	横田昭二	上毛新聞社	1600	A5	312p
私の兵庫百山	松川良衛	友月書房	1600	A5	236p

北海道夏山ガイド5－道南・夕張の山々	梅沢　俊・菅原靖彦	北海道新聞社	2300	四六判	319p
北海道 野の花－最新版	谷口弘一・三上日出夫／編	北海道新聞社	3800	A5	631p
北海道の山－新・分県登山ガイド0	伊藤健次	山と溪谷社	1500	A5	131p
マイカーで行くアルプス＆信州周辺の名山	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1048	A4変	170p
マイカー登山ベストⅡ セレクト50	佐々木亨	山と溪谷社	1400	A5	143p
松山周辺 道後平野から望む山の楽しみ方30章	いせきこうたろう	アトラス出版	800	新書判	79p
まるごと富士山、みんなの富士山	宝島社／編	宝島社	1200	B5	127p
三重の峠－自転車でめぐる峠の魅力	庄山剛史	風媒社	1500	四六判	258p
南アルプス西山麓－太古の山気に清められて	新葉社／編	新葉社	2400	A4	139p
妙義山　＊写真集	鈴木隆志	上毛新聞社	1300	200×235	76p
見る・撮る・描く 絶景の山－北アルプス	日本山岳写真協会松本支部／写真　菊地俊朗／文	信濃毎日新聞社	1905	B5	156p
無形の宝物－「チャレンジ坂戸山四十回登頂」十年間の参加記録	林 明子	新風社	1000	文庫判	221p
目で見る日本登山史　＊付「日本登山史年表」	山と溪谷社／編	山と溪谷社	7800	B5変	352p
森の紳士録－僕の出会った生き物たち	池内　紀	岩波書店	700	新書判	214p
夜景を楽しむ山歩き	寺田政晴	東京新聞出版局	1500	A5	144p
やさしく登れるアルプス3000m峰	ディーター ザイベルト／著　松田展夫／訳	山と溪谷社	1800	A5	167p
野鳥日和　＊写真集	石川正美	山と溪谷社	4500	280×270	105p
山あるきを楽しむカシミール3D活用術	杉本智彦	実業之日本社	1500	240	95p
山憶い 都市憶い	寺田和雄	茗溪堂	1800	四六判	249p
やまがたグリーン・ツーリズムガイドブック	山形県グリーン・ツーリズム推進協議会／監	みちのく書房	960	A4	151p
山形県の山－新・分県登山ガイド5	高橋金雄・斎藤政広・寒河江伸治	山と溪谷社	1500	A5	135p
山口県の山－新・分県登山ガイド34	中島篤巳	山と溪谷社	1500	A5	119p
山で死んではいけない	山と溪谷社／編	山と溪谷社	952	A4変	162p
山との語らい－剱岳のふもとから　＊写真集	佐伯邦夫	山と溪谷社	1500	200×220	143p
山と人と－ぬくもりのある風景	斉藤善久	文芸社	1600	四六判	272p

ハピネス気分で山歩き	平野恵理子	山と溪谷社	1800	A5	159p
榛名山　＊写真集	鈴木隆志	上毛新聞社	1300	200×235	80p
悲運の武将 佐々成政－豪雪の北アルプス越え	はまみつお	郷土出版社	1600	四六判	187p
光と花の日光－日光国立公園の自然　＊写真集	青山忠道／写真・文 青山　広・猪又敏男／監	下野新聞社	2300	205×230	119p
秘境・和賀山塊	佐藤　隆・藤原優太郎	無明舎出版	1600	四六判	207p
飛騨丹生川 中部山岳国立公園五色ケ原　＊写真集	田邊雅一・馬渕英樹／編	岐阜新聞社	1524	A4	58p
一人がいい。マイカー花の山旅－関東甲信越70路	石井昭子	東京新聞出版局	1500	四六判	263p
ヒマラヤ植物大図鑑	吉田外司夫	山と溪谷社	13000	B5	799p
ヒマラヤに花を追う－秘境ムスタンの植物	大場秀章・五百川裕／著　緑育成財団／監	緑育成財団　八坂書房／発売	1800	四六判	254p
101歳の少年	三浦敬三	実業之日本社	1400	四六判	192p
百名山登頂記	西村保司	新風舎	2000	A5	304p
氷河小吟　＊歌集	雁部貞夫	短歌新聞社	952	四六判	118p
比良山－湖西の山	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1400	A5	143p
広島のブナ林－四季を歩く59山	眞田恭司	南々社	2300	B5	127p
夫婦で出かける山あるき 東京・首都圏	ブルーガイド編集部／編	実業之日本社	1500	A5	159p
ふくおか無名山　中・南部篇　＊改訂版	滝沢昭正	西日本新聞社	1700	A5	245p
ふくしま自然散歩－阿武隈山地	蜂谷　剛・五十嵐彰	歴史春秋社	1200	四六判	160p
ふくしまの滝	小林隆文	歴史春秋社	2000	A5	117p
富士山－美JAPAN	河野元昭／監	四季出版　東洋書院／発売	3800	B5	391p
富士 四季讃歌　＊写真集	白簇史朗／編　山岳写真の会「白い峰」／写真	朝日新聞社	4200	250×260	188p
富士憧憬－ふるさと富士を訪ねて北海道から九州まで	鈴木　清	文芸社	1300	四六判	192p
富士・不二・不死　＊写真集	尾形真隆	鹿島出版会	4762	260×310	
富士を写す－構図のまとめ方　＊写真集	白簇史朗／編・著 山岳写真の会「白い峰」／写真	新日本出版社	4200	297×257	177p
フリークライミング	北山　真・杉野　保・新井裕己	山と溪谷社	1800	B5	165p
ふるさと安達太良山の植物	佐藤光雄	歴史春秋社	2000	四六判	285p
ふるさと百名山	日本経済新聞社／編	日本経済新聞社	1800	A5	240p
房総山岳志	内田栄一	崙書房	4700	A5	362p
ほくりく日帰り山歩き	柚木寿二	北國新聞社	2200	B5	149p
星野道夫と見た風景	星野道夫・星野直子	新潮社	1300	A5	125p
北海道夏山ガイド4－日高山脈の山々	梅沢　俊・菅原靖彦	北海道新聞社	2300	四六判	279p

遠き雪嶺－下　＊小説	谷　甲州	角川書店	552	文庫判	294p
徳島県の山－新・分県登山ガイド35	徳島県勤労者山岳連盟	山と溪谷社	1500	A5	119p
登山者・トレッカーのためのサバイバル救急・処置読本　＊改訂版	Jim Duff・Peter Gormly／著　安田一郎／訳　野納邦昭／監	本の泉社	1200	新書判	236p
栃木百名山ガイドブック	栃木県山岳連盟	下野新聞社	1800	A5	424p
長崎県の山－新・分県登山ガイド41	山野辺捷雄	山と溪谷社	1500	A5	119p
ナショナル・ジオグラフィック－冒険・探検の世界	ナショナル・ジオグラフィック／編	日経ナショナル・ジオグラフィック	2200	280×210	202p
ナチュラリスト・田淵行男の世界	東京都写真美術館・田淵行男記念館／企画監修	山と溪谷社	3200	B5変	277p
南極－国境のない大陸＊写真集	武田　剛	朝日新聞社	1905	B5	95p
西和賀　カタクリの里	瀬川　強	熊谷印刷出版部	800	A5	47p
2450 WORLD	大塚憲一	文芸社	1600	四六横	84p
日光・那須・谷川岳	中村成勝・菊池哲男	山と溪谷社	1500	A5	159p
新田次郎文学事典	新田次郎記念会／編	新人物往来社	2800	A5	306p
日本滝名鑑4000	木田　薫	東方出版	28000	B4変	514p
日本の山を殺すな!－警鐘！破壊されゆく山岳環境	石川徹也	宝島社	680	文庫判	252p
日本百名山地図帳	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1714	A4	287p
日本楽名山－50歳からの爽快山歩き	岳　真也	祥伝社	780	新書判	259p
ネパール　ピークハントトレックベスト53コース	石原裕一郎	山と溪谷社	1600	A5	175p
乗鞍岳　自然観察ガイド	山と溪谷社／編	山と溪谷社	857	新書判	127p
灰色の北壁　＊小説	真保裕一	講談社	1500	四六判	244p
白山・御嶽山・比良	林　正一・島田　靖・山本武人	山と溪谷社	1500	A5	159p
初めてのネパール・アンナプルナ一周の旅	樋口清作	白山書房	1200	文庫判	318p
はじめての山登り	越谷英雄／監	地球丸	1600	B5	127p
八幡平の不思議－高橋喜平92歳新種アザミ発見	高橋喜平	岩手日報社	1900	A5	127p
バトル・オブ・アリューシャン	新谷暁生	須田製版	1600	A5	280p
花かおる葦毛湿原	吉田　豊	ほおずき書籍　星雲社／発売	1000	新書判	108p
花かおる草津・白根山	湯田六男／著　山口昭夫／撮影	ほおずき書籍　星雲社／発売	1000	新書判	113p
花かおる乗鞍岳	小野木三郎	ほおずき書籍　星雲社／発売	1000	新書判	92p
花と山の幸－信州・自然探求術	橋本郁三	信濃毎日新聞社	2400	A5	253p
母への詫び状－新田次郎、藤原ていの娘に生まれて	藤原咲子	山と溪谷社	1400	四六判	232p

たかやま高原 四季の花	木村拓郎	上毛新聞社	1150	A5	119p
脱出記	スラヴォミール ラウイッツ／著 海津正彦／訳	ソニー・マガジンズ	2200	四六判	384p
達人の山旅１－山と私の対話	志水哲也／編	みすず書房	2000	四六判	236p
達人の山旅２－森と水の恵み	高桑信一／編	みすず書房	2000	四六判	260p
立山の三代目平蔵と日本百名山	佐伯元信	新風舎	2300	A5	465p
谷川岳に逝ける人びと	安川茂雄／著・遠藤甲太／編	平凡社	1200	HL判	250p
度々テント－東海自然歩道熊野古道を歩く	小山義雄	日本文学館	800	四六判	117p
団塊諸君 山もいいぞ	大野剛義	日本経済新聞社	1600	四六判	247p
丹沢の行者道を歩く	城川隆生	白山書房	2000	A5	190p
丹沢の沢を歩く	高橋 栄	夢工房	1500	B6	182p
父と子の多摩川探検隊－河口から水源へ	遠藤甲太	平凡社	1600	四六判	208p
地の果てに挑む－マナスル・南極・北極	村山雅美	東京新聞出版局	1500	四六判	256p
チベット語になった『坊っちゃん』	中村吉広	山と溪谷社	1600	四六判	285p
チベットのアルプス	中村 保	山と溪谷社	3200	A5	381p
中央アルプス－宝剣・木曽駒ケ岳 ＊改訂版	中村至伸	ほおずき書籍 星雲社／発売	1286	167×188	107p
中央アルプスの自然－駒ヶ根市誌・自然編１	駒ヶ根市誌編纂委員会／編	駒ヶ根市教育委員会・駒ヶ根市立博物館	2600	A4	350p
中央線からの山あるき	JTBパブリッシング／編	JTBパブリッシング	1500	A5	191p
中国地方の山 100選	中國新聞社／編	中國新聞社	1800	A5	230p
沈黙の森	北日本新聞社編集局	北日本新聞社	2100	A5	325p
津軽半島の植物	井上 守	青森県文芸協会出版	2600	A5	318p
つながるいのち－生物多様性からのメッセージ	日本環境ジャーナリストの会	山と溪谷社	1500	B6	247p
燕岳静謐 ＊写真集	大川 淳	東京新聞出版局	2381	250×260	59p
翼を持ったお巡りさん	谷口凱夫	山と溪谷社	1600	四六判	254p
デジカメで山を撮る	斉藤 誠	東京新聞出版局	1500	A5	160p
天空の聖山－中国大陸・下	白川義員	小学館	880	文庫判	224p
凍	沢木耕太郎	新潮社	1600	四六判	300p
東京都の山－新・分県登山ガイド12	東京都山岳連盟	山と溪谷社	1500	A5	135p
登頂八〇〇〇メートル－明治大学山岳部十四座完登の軌跡	谷山宏典	山と溪谷社	2200	A5	326p
東北自然歩道を歩く	田嶋直樹	無明舎出版	1600	四六判	253p
東北の避難小屋150－完全ガイド ＊増補改訂版	高橋信一	随想舎	1800	A5	200p
遠き雪嶺－上 ＊小説	谷 甲州	角川書店	552	文庫判	302p

静岡県・高草山 低山の四季博物誌	鈴木紳弋	静岡新聞社	2000	A5	264p
静岡県の山－新・分県登山ガイド21	加田勝利	山と溪谷社	1500	A5	127p
静かなる尾根歩き－奥多摩から八ケ岳まで100コース	松浦隆康	新ハイキング社	1600	A5	287p
自疏句集・山	岡田日郎	梅林書房	3600	A5	238p
縦走登山	山田哲哉	山と溪谷社	1800	B5	151p
樹海の歩き方	栗原　亨	イースト プレス	1500	A5	230p
「白神山地」ものがたり	奥村清明	無明舎出版	900	A5	84p
知られざる山々－山形・新潟・福島の道無き山	羽田寿志	白山書房	1800	四六判	257p
知床－きたの方舟　＊写真集	朝日新聞社写真センター	中西出版	2000	220×260	129p
知床の植物Ⅰ	斜里町立知床博物館／編	北海道新聞社	1800	A5	240p
知床半島の山と沢	伊藤正博	共同文化社	1800	A5	224p
白馬　＊写真集	菊池哲男	山と溪谷社	3800	260×310	119p
白馬岳の百年	菊地俊朗	山と溪谷社	1600	四六判	240p
信州高原トレッキングガイド	日野　東	信濃毎日新聞社	1600	A5	203p
新 にいがた花の山旅	新潟県山岳協会／監	新潟日報事業社	1600	A5	262p
新日本山岳誌	日本山岳会	ナカニシヤ出版	18000	菊判	1992p
新編 山 紀行と随想	大島亮吉／著　大森久雄／編	平凡社	1400	HL判	367p
スイス・アルプス山里めぐり	池田光雅	双葉社	1700	四六判	261p
図解 ロープワーク大全	前島一義	成山堂書店	3600	B5	267p
全ての装備を知恵に置き換えること	石川直樹	晶文社	1600	四六判	238p
青春の山脈	大江捷也	熊本日日新聞社	1000	新書判	179p
世界遺産 知床の素顔－厳冬期の野生動物王国をいく	佐古浩敏・谷口哲雄・山中正実・岡田秀明	朝日新聞社	1200	四六判	212p
世界遺産 秘境知床半島　＊写真集	兼本延男	淡交社	2000	B5	141p
世界遺産を歩く知床	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1143	280	130p
世界の屋根に登った人びと	酒井敏明	ナカニシヤ出版	1800	四六判	204p
脊梁50名山	熊本日日新聞社／編	熊本日日新聞社	1429	A5	199p
絶対に死なない－最強の登山家の生き方	加藤幸彦	講談社	1700	四六判	213p
全図解 レスキューテクニック（初級編）	堤　信夫	山と溪谷社	1400	A5	152p
続・山は筑波嶺－文人群像	石塚弥左衛門	STEP	1500	A5	167p
大雪山 花の道－エゾコザクラに逢いたくて	駒井千恵子	栃の葉書房	1500	A5	144p
大山・蒜山の花	安原修次	ほおずき書籍 星雲社／発売	2800	A5	198p
高尾山自然観察ガイド	茅野義博	山と溪谷社	857	新書判	127p

北のウォーキングおすすめ45コース	山谷　正	北海道新聞社	1714	A5	191p
岐阜県の山－新・分県登山ガイド20	島田　靖	山と溪谷社	1500	A5	127p
君を六甲山と強くなれ	成美昭彦	文芸社	1300	四六判	117p
九州の山歩き	吉川　満	弦書房	2000	A5	224p
九十歳、山守の遺言	三原義秋	南方新社	1200	四六判	135p
欣ちゃんの山一辺倒	山森欣一	アテネ書房	2500	四六判	378p
草津・白根山　＊写真集	山口昭夫	ほおずき書籍星雲社／発売	1286	168×188	108p
熊本県の山－新・分県登山ガイド42	吉川　満	山と溪谷社	1500	A5	131p
クライマーズ・ボディ	菊地敏之・前之園多幸	東京新聞出版局	1700	A5	192p
鞍掛山の花－イーハトーブ風景地	工藤　宏／著　猪苗代正憲／監	熊谷印刷出版部	1500	A5	111p
クルマで行く日帰り山あるき東京・首都圏	中田真二	実業之日本社	1600	A5	199p
クルマで山あるき 関東周辺	JTBパブリッシング／編	JTBパブリッシング	1500	A5	207p
黒部別山－積雪期	黒部の衆／編	黒部の衆	6800	菊判	674p
群馬県の山－新・分県登山ガイド9	太田ハイキングクラブ	山と溪谷社	1500	A5	143p
ぐんまの駅から登る山歩き3	高木正史	あさを社	700	四六判	112p
健康長寿登山	大森義彦	東京新聞出版局	1600	A5	200p
源流をたずねて4	吉村朝之	岐阜新聞社	1700	A5	219p
越路の山旅Ⅰ	橋本　廣	北日本新聞社	6500	A5	696p
越路の山旅Ⅱ	橋本　廣	北日本新聞社	6500	A5	748p
五十歳からの挑戦－アルプス4000m峰36座登頂	内田陽一	東京新聞出版局	1600	A5	264p
こちら南極ただいまマイナス60度	中山由美	草思社	1600	B6	253p
古道巡礼	高桑信一	東京新聞出版局	2000	四六判	415p
こんなに楽しい岐阜の山旅100コース 美濃・上　＊増補改訂版	吉川幸一	風媒社	1500	A5	182p
最軽量の山用具－正しい選び方と使い方	中　一実	成山堂書店	1800	A5	175p
埼玉県の山－新・分県登山ガイド10	打田鍒一	山と溪谷社	1500	A5	127p
ザイルに導かれて－登山家石岡繁雄の半生	石岡繁雄	あるむ	4000	B5	328p
山岳－第百年	日本山岳会／編	日本山岳会	3500	A5	396p
山岳気象入門	村山貢司・岩谷忠幸	山と溪谷社	1800	B5	141p
山岳地形と読図	平塚晶人	山と溪谷社	1800	B5	159p
志賀高原　＊写真集・改訂版	中村至伸	ほおずき書籍星雲社／発売	1286	167×188	108p

1年で120種類の野鳥と出会える本	中野泰敬	文一総合出版	1400	B5	112p
伊吹百草	福永円澄	サンライズ出版	1200	四六判	226p
今から始める山のスケッチ	山里寿男	山と溪谷社	1500	B5	127p
今から始める山のデジタル写真	畠山　高	山と溪谷社	1500	B5	127p
岩手山－いわての名峰徹底ガイド	岩手日報社出版部／編	岩手日報社	1200	A5	79p
雨後の山	樋口清作	白山書房	1200	文庫判	291p
永遠の未踏峰	渡部由輝	山と溪谷社	1600	四六判	272p
近江 湖北の山岳信仰	市立長浜城歴史博物館／編	サンライズ出版	1800	A5	133p
近江 山の文化史	木村至宏	サンライズ出版	1200	四六判	237p
大分県の山－新・分県登山ガイド43	藤田晴一	山と溪谷社	1500	A5	135p
大阪府の山－新・分県登山ガイド26	岡田敏昭・岡田知子	山と溪谷社	1500	A5	127p
大峰・台高・大台ケ原	山と溪谷社／編	山と溪谷社	1500	A5	175p
奥岳へ－屋久島の山旅＊写真集	岡住達夫	西日本新聞社	3200	220×310	112p
奥日光自然観察ガイド	宮地信良	山と溪谷社	857	新書判	127p
奥日光の自然－光と彩りのなかで	鈴木克洋	山と溪谷社	3048	A4	7p
奥美濃とその周辺の山130山＊増補版	富永　豊	サンライズ出版	1600	A5	223p
奥美濃のヤブ山－50山51コース	八代竜也	まつお出版	1600	A5	173p
尾瀬 撮影ガイド	花畑日尚	ニューズ出版	1429	280×210	112p
尾瀬の花	小林　隆	歴史春秋社	1150	四六判	124p
甲斐駒開山	宮崎吉宏	山梨日日新聞社	2000	四六判	207p
快適キャンプ入門	長谷川哲・森山　俊	山と溪谷社	1600	B5	127p
岳書縦走	雁部貞夫	ナカニシヤ出版	5500	菊判	425p
鹿児島県の山－新・分県登山ガイド45	鹿児島山岳会	山と溪谷社	1500	A5	127p
カモシカの民俗誌	鳥海隼夫	無明舎出版	1500	四六判	160p
軽井沢植物園の花	佐藤邦雄／監　軽井沢町教育委員会／編	ほおずき書籍 星雲社／発売	2000	205×125	149p
川辺川ダムはいらん!	川辺川ダム問題ブックレット編集委員会／編	花伝社	800	A5	77p
関東の山 ベスト100決定版	JTBパブリッシング／編	JTBパブリッシング	1600	A5	255p
関東パノラマ山あるき	ブルーガイド編集部／編	実業之日本社	1600	A5	255p
気軽に3時間山あるき 関東周辺	水尾一郎	実業之日本社	1400	A5	159p
傷だらけの百名山	加藤久晴	新風舎	690	文庫判	288p
傷だらけの百名山・続	加藤久晴	新風舎	690	文庫判	304p
奇跡の6日間	アーロン ラルストン	小学館	2000	B6	360p

山岳図書目録（2005年）

「山岳図書目録について」

日本山岳会図書委員会

「山岳書が売れない」と耳にする一方で、「おもしろい山の本がない」という声も聞きます。過去には600冊のリストを掲載した年もあるこの目録も、ここ数年はリスト数が半分以下になり、さびしいかぎりです。

インターネットを通して、地図や資料を簡単に手に入れられる現在、「山岳図書とは？」「本に求められるものは？」を問い直す時期にきているのかもしれません。

本目録では店頭で見つけにくい地方出版社の本を、幅広く紹介することを心がけています。また、「登山」と密接に関わる「環境問題」「里山」「冒険・探険」「宗教」などの分野の本も、一部とりあげています。どうか有効にご活用ください。

＊記載は書名、著者名、発行所、価格、判型、ページ数の順です。

＊判型が数字で表示されているものの単位はmm（天地×左右）、価格は原則として本体価格ですが、ごく一部税込みになっています。

＊記載の配列は、書名の五十音順です。

山岳図書目録

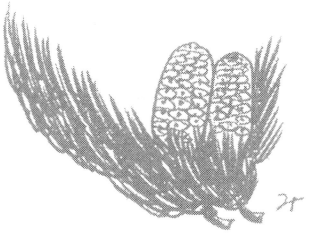
書　名	著者名	発行所	価格	判型	ページ数
アウトドア・ロープワーク入門	鳥海良二／監	地球丸	1600	B5	127p
赤城山　＊写真集	鈴木隆志	上毛新聞社	1300	200×235	76p
秋田駒ケ岳花抒情	田村武志	秋田文化出版	2286	217×217	272p
朝日・蔵王・飯豊・磐梯・吾妻・安達太良	高橋金雄・渡辺徳仁	山と溪谷社	1500	A5	163p
足尾の緑　Vol.2	足尾に緑を育てる会／編	随想舎	1000	A5	79p
安曇野・松本 野山の草木	柴野武夫	郷土出版社	1800	A5	183p
遊びは真剣に	安藤昌宜	中央公論事業出版	1200	四六判	142p
アタック 山梨百名山	山梨日日新聞社／編	山梨日日新聞社	2000	A5	216p
雨のち晴れて、山日和	唐仁原教久	山と溪谷社	1800	A5	141p
綾の照葉樹林ガイド	綾の森を世界遺産にする会／編	鉱脈社	1000	四六判	92p
アンデス登攀記　下	ウィンパー／著　大貫良夫／訳	岩波書店	700	文庫判	302p
IWOR 知床・生命の聖域　＊写真集	後藤昌美	山と溪谷社	3200	235×250	98p
石川県の山－新・分県登山ガイド18	林　正一・舟田節子・山本健二・その他	山と溪谷社	1500	A5	127p

た上で，代替案を提案している．　（「山岳」第94年　A 41～58頁）

「はかなさゆえに美しい山上湿原と池塘―白神・田代岳高層湿原自然環境調査報告―」

［小岩　清水］

＊いまだに人跡が少なく登山者による破壊を免れているが，温暖化による影響か，泥炭層の乾燥が進み，チシマザサが増えている．1998年3月と8月に詳しい調査を行い，過去のデータとの比較から，人為的な破壊や影響がなくても湿原は終末的な状況に直面している，と警告．　（「山岳」第94年　A 59～76頁）



「富士山の自然を考える」　［近藤　緑］
＊3月14日，忍野村で開催された富士山憲章制定記念シンポジウムの報告．コンサートや翌日の山行など，地元と提携して一般参加者を視野に入れた催しが成功した．
（「山」648号，「木の目草の芽」34号，36号）

「絶滅から救おう　高山植物！」
＊高山植物盗掘防止シンポジウムの記録，その三．　（「木の目草の芽」35号）

「芦生の森を歩く（その五）」　［橋村　一豊］
＊ 11月9日，中世古支部長と共に歩いた由良川源流行．しぐれ空の下，岩場を高巻き，渡渉地を探す原始境．集落跡に古き森人たちを偲びつつ下る．　（「山」648号）

図書紹介『沼田眞・自然との歩み―年譜・著作総目録』堀込静香・編　［松田　雄一］
＊年譜「1997年までの年ごとの生い立ち」著作目録「1941～97年までの全著書・論文・書評・随筆・序文等」すべてが年代別に収録され，まとめられている．編者や協力者に人を得て，国際的な生態学者としての沼田眞像がよく描かれている．
（「山」648号）

東海支部「森を見る目を養う」　［猿山　昌夫］
＊京都・関西両支部と共催で勉強会．植生・生態系・遷移などシステムとしての森の見方を主体にした計画．今後も三支部の自然保護委員会で話し合い企画して行きたい．
（「山」652号）

「ラリグラス植林報告『発芽からの育苗』をはじめました」　［大森弘一郎］
＊シバプリでは，屋久島の苗床で育てて持って行った4千本の苗が順調に育っている．現地でも「発芽からの育苗」を始めた．これらの花が山々を彩るようになるのはいつのことか．　（「山」653号）

平成11年度自然保護全国集会　［伊藤　敞］
＊9月18～19日，宮城県栗駒高原で開催された集会の記録．「鳥海山のイヌワシ問題のその後」に続き，ケーススタディ・早池峰として「日本山岳会の自然保護活動のあり方」をめぐって活発な議論が交わされた．
（「山」654号，「木の目草の芽」38号，39号）

「人工改変のすすむ上高地の自然」　［岩田　修二］
＊上高地では大規模な自然の改変が行われている．工事の目的や効果を検討し，このまま建設が進むと上高地の自然はどうなるのかを予測する．また，土木工事を中止した場合，防災対策をどうするのか，現在使われている山小屋などへのアクセスをふまえ

いて．直筆原稿，著書，色紙，尾瀬資料，カメラ等遺品のほか，遺族から提供された博士所蔵の全資料が公開され，横浜開港資料館（アーネスト・サトウ資料）と共に研究の拠点となる見込み．（「山」643号）

「南アルプス林道の現状と課題－開業から18年，繰り返す崩壊と補修－」［岡澤　修一］
＊「山岳と山林の変貌」（山岳第79号）に続いて明治大学エコロジー研究会の調査結果に基づき，南アルプス林道の自然破壊の現状を報告．南ア林道に限らず，林道の多くが林業振興に役立って居らず観光用に使われているが，崩壊がひどいため管理・補修費が収入をはるかに越えているとの指摘．（「山岳」第93年A 55～72頁）

『水越武写真集　森林列島』［杉本　誠］
＊著者自身「生態系から見た日本列島という視点から，列島を彩る多様な自然の中から十二の生態系を取上げ…」とある通り，南はサンゴ礁の海に始まり，北海の波浪に終わっている．解説「列島断想」の各章が写真と対応している．
（「山岳」第93年176～179頁）

平成11年度（1999年）

平成10年度自然保護全国集会「芦生の森から学ぶ」［大森弘一郎・大蔵喜福］
＊京都府美山町の芦生の森は，大正10年以来99年の期間設定で京大演習林として保護されてきた．期間切れと共にダム開発の計画がある一方，世界遺産登録の運動も起きている．11月14～15日，この地で開催された全国集会の報告．（「山」644号）

「シバプリ植林体験と展望トレッキング」［高橋　浩］
＊JACネパールトレッキング・Jコースに参加．シバプリでの植林作業の後，そのまま山頂に登り，尾根伝いにナガルコット及びバドガオンに行く．第89回山の自然学現地講座の記録．（「山」645号）

「芦生の森を歩く（その四）　幻の古代杉を尋ねて」［大口　瑛治］
＊「芦生の森に幻の古代杉を発見」という新聞記事を見て，10月7日，東海・京都両支部の有志が現地を確認．さらに全国集会前日の11月13日にも入山して，巨大な古代杉を計測する．ただしこれを目当てのオーバーユースは避けたい．（「山」645号）

「早池峰インターハイ山岳競技問題」［大蔵　喜福］
＊高山植物が「特別天然記念物」として厳重に保護されるべき早池峰で，9月にインターハイが開催されることから文化庁及び環境庁へ質問とお願い書を提出．それをめぐっての本部と支部との関係をめぐる見解．（「山」648号，木の目草の芽42号）

「『日本百名山』による自然破壊」　［本多　勝一］

＊「『樹木の山旅』という本について」（「山」637号）の見解に始まり，深田久弥『日本百名山』巡礼者による自然破壊を取り上げている．自らも『日本百名山』でなく自分なりの『日本百山』を出そうかと迷っているうちに西丸震也氏が刊行してしまった．各自が選択した百名山を歩くことで山を守ろうと提言．（「山」641号）

「木曽・赤沢自然休養林」　［伊藤　畝］

＊10月3〜4日，赤沢自然休養林で実施した自然保護委員会自然観察山行の記録．赤沢から森林鉄道で終点丸山渡しへ．ここから延長6,5キロの「ヒノキ学術研究路」に入る．千本立，奥千本など，ヒノキの天然林があり，国有林［植物群落保護林］にも指定されている．（「山」642号，「木の目草の芽」32号）

図書紹介『九重の自然と歴史』松本徑夫・武石干雄・佐藤真一・佐藤三千代・甲斐素純共著　［加藤　英彦］

＊九州の岳人にとって心のふるさとである九重山にこだわりを持つ人々による共同執筆．（一）火山・地質誌編を松本，（二）動物誌（1）を武石，（三）動物誌（2）を佐藤真一，（四）植物誌を佐藤三千代，（五）歴史・民族史を甲斐の各氏が分担．最後に田本政宏が「九重山記」について触れている．（「山」642号）

図書紹介『山は知っている―環太平洋一周環境調査登山の記録』日本山岳会東海支部編　［杉田　博］

＊「環太平洋環境調査」（「山」630号）の記録．アラスカのマッキンリーから南極のビンソンマシフまで．東はボリビア・アンデスのイリマニから西はインドネシア，バリ島のアグンに至る太平洋を囲む33山のうち29峰に登頂．酸性雨による環境汚染を地球規模で捕らえるために検体を採取してデータを分析する．篠崎登山隊長はこれによりロレックス賞を受賞．（「山」642号）

シンポジウム「高山植物の保護と盗掘防止を考える」　［伊藤　畝］

＊1998年9月23日，お茶の水全電通ホールで開催された日本山岳会自然保護委員会，北海道高山植物盗掘防止ネットワーク共催「絶滅から救おう高山植物－保護と盗掘防止を考える－」の報告．基調講演「高山植物の現状と保護」（小野有五），講演「高山植物の特性と保護について」（大場達之），パネルディスカッション「高山植物と盗掘防止について」パネリスト白簱史朗，水尾若尾，池田啓，植田明浩，所芳博，篭橋隆明．会場発言の後アピールを採択して終幕．（「山」643号，「木の目草の芽」31号，32号）

「武田久吉メモリアルホール，尾瀬に開館の運びに」　［土橋　進一］

＊1999年5月，檜枝岐ミニ尾瀬公園内に開設される武田博士のメモリアルホールにつ

「『里山ブームは自然保護なのか』に答える」　［伊藤　敞］
＊635号に児玉氏が書いた，自然の推移である「照葉樹林への移行」を阻止し「雑木林の自然を守る」ことが本来の自然を守ることなのか，という疑問に対し，「自然保護とは何か」と北村昌美氏（山形大名誉教授）の説を引用して答えている．
（「山」636号）

「芦生の森を歩く（その二）　北山型民家と静寂の雪の森林」　［猿山　昌夫］
＊633号に続き，積雪の芦生の森の探勝記．美山町の北山型民家を見学，夜は「芦生の森を世界遺産にする会」の現状報告と芦生の森の歴史と熊撃ちの話．翌日は降雪の中，由良川源流を歩いたという記録．　（「山」636号）

会務報告・助成金交付の件　［5月理事会］
＊大森前理事をキヤップとして進められているネパール・シバプリ植林事業に対し，地球環境基金より本年度助成金340万円交付内定の通知があった．
（「山」638号，自然保護委員会5月議事録）

「高山植物盗掘のプロも登壇」　［市川　義輝］
＊9月23日，お茶の水全電通ホールで開催される日本山岳会・北海道高山植物盗掘防止ネットワーク共催のシンポジウム「絶滅から救おう！高山植物―保護と盗掘防止を考える－」の予告．盗掘のプロも登壇して経験を語ることになっている．
（「山」639号）

「芦生の森を歩く（その三）　雨にかすむ幽玄の谷道二つ」　［鈴木　美代］
＊この地域で樹齢3000～4000年の巨大杉の群落が発見されたばかりとあって，悪天候の中，期待をもって歩く．横尾峠を越え，櫃倉谷を魚止の滝へ，杉尾峠から由良川源流上谷に沿って下る道は，雨にけぶって幽玄な雰囲気．　（「山」639号）

図書紹介『北の山里に生きる－みちのくの自然と人生―』根深　誠著　［松家　晋］
＊北奥羽地方の山里に取材したルポ．「山暮らしの四季」「北に生きる人々」「変わる村と暮らし」「北の自然を見守る」の四章から成る．前半は山里の自然と関わって生きる人たちを紹介，後半では開発や近代化によって荒廃していく集落や伝統行事，そして最後に地道に自然保護を続けている人々に触れている。　（「山」640号）

「自然エネルギー展延長」　［森　武昭］
＊8月2～22日，上高地山研において，JAC主催の自然エネルギー展を開催．自然エネルギー利用の意義や普及状況を説明すると共に写真パネルで紹介．JACが計画しているミニ水力発電をアピールするため，太陽光・風力・ミニ水力の各発電装置を展示し電気の流れを示した．　（「山」641号）

「南極観測と地球環境」　［横山宏太郎］
＊第35次南極観測隊による観測と越冬生活の記録．特に氷床の掘削と内陸旅行に伴う苦労は高所登山にも匹敵する．持ち込んだもので一年間を過ごし，廃棄物は全て持ち帰る．南極は地球環境を観測する基地であると同時に環境について学ぶ教室でもあると．　（「山」634号）

図書紹介『林野庁解体論』岡島成行著　［伊藤　敞］
＊崩壊に瀕しつつある日本の森林を救うためには林野庁の組織を思い切って変える必要があると，その方策を提言している．「日本の森林は死に瀕している」「林野行政の歴史をひもとく」「林野庁解体へのシナリオ」「日本の森と林業再生のための処方箋」の4章から成る．　（「山」634号，「木の目草の芽」第30号）

「国有林はどうなる」龍久仁人さんに聞く　［自然保護委員会］
＊青森営林局長を最後にこのほど林野庁を退職された龍会員が語る国有林や事業の現状．抜本的改革は可能か，その具体策は如何．　（「木の目草の芽」第30号）

図書紹介『鳥海山』斉藤重一著　［松沢　節夫］
＊象潟町に生まれた著者が，終生の思い入れの山域について，修験道，自然誌，登山史，とくにブナと自然保護活動について登山史と教育者の視点から語っている．
（「山」634号）

「『ヒマラヤに緑を取り戻そう』を合い言葉に」　［遠藤　京子］
＊1993年6月，ブロードピーク登山の折，幹の裏側を斧で削られたビャクシンの大木を見て以来，登山隊・トレッキング隊のために木を切らせてはいけないと，ポーターたちの村で植林を続けている．また，植えた木を育てて貰うためにも教育が必要と，小学校建設も進めている．　（「山」635号）

「里山ブームは自然保護なのか」　［児玉　茂］
＊632号掲載の「身近な自然，雑木林の保全ということ」に対する疑問．里山での市民運動は大切だが，山に登る日本山岳会の自然保護運動は「奥山」にあるべきではないか．自然林・自然地域を守る立場に立つことこそ肝要．　（「山」635号）

「日本の国土をブナ林に」　［桑田　結］
＊1980年秋，故津田周二氏を中心に設立された「ブナを植える会」の活動も，10年にしてようやく大地に根を下ろした活動となった．植林18年目に入り事業部・総務部・特別委員会と組織も充実，今後の課題として植林の適地，若手メンバーの育成，下草刈りなど管理の問題がある．最近，六甲の実生苗を六甲に植樹するという夢が実現した．　（「山」636号）

平成10年度（1998年）

「自然保護シンポジウム 登山と自然保護を考える」 ［松本　恒廣］

＊平成9年11月22日（土）～23日（日），神奈川県藤野町で開催された自然保護シンポジウムの報告．原一平氏（日山協）は国体委員長の立場から山岳競技のあり方について，高室陽二郎氏（山梨岳連会長）は南ア大樺沢汚染問題に端を発した屎尿持ち帰り作戦を，小倉董子氏（森林インストラクター）はいかにして自然と共に暮らすかを訴えた．（「山」632号，「木の目草の芽」23号，24号，28号）

「身近な自然　雑木林の保全ということ」 ［伊藤　敞］

＊神奈川県藤野町峰山での観察山行で思ったこと．かつて農山村において薪炭農用林として経営されて来た雑木林は，昭和30年代の燃料革命，化学肥料の普及に伴ってその用途を失った．開発やスギ・ヒノキなどの人工林化が進み，衰退しつつある雑木林に，最近市民参加の「里山管理運動」が起こっている．（「山」632号）

図書紹介『木の声』稲本正著 ［林　栄二］

＊著者は飛騨高山近くの山林に住み，オーク・ビレッジを創設，「ドングリの会」を主宰するなど自然保護を実践している．木を植えた人々，木と語る人々，木と暮らす人々，木を守る人々，木を組む人々の5章から成る．（「山」632号）

「芦生の森を歩く　東海支部と京都支部の交歓」 ［橋村　一豊］

＊東海・京都両支部が由良川源流域の原生林を訪ねて，森人の話を聞き，森を歩いて自然保護について考えた記録．京都大学演習林であるこの森は2020年の期限切れと共に，関西電力若狭原発の揚水ダムになる計画があるため，今後の開発を阻止しようとユネスコ世界遺産登録の動きがある．（「山」633号）

図書紹介『上高地の谷から』百武允著 ［三好 まき子］

＊「上高地の谷から」「パークレンジャーの道」「国立公園の管理とパークレンジャー」からなる三部作．著者自身，30年にわたって尾瀬・阿寒・西表島など国立公園のパークレンジャーとして活躍してきた．自然保護やパークレンジャーへの理解を深めるのに最適．（「山」633号）

図書紹介『北海道 森と川からの伝言』小野有五著 ［三沢　一三］

＊「イキモノとしての私たち自身が，ひとつの自然なのだ．その感覚を大切にしたい」という著者は，北大教授で自然保護活動家．「地球の環境は，そこに生きる生物によって見事に自己調節されている」はずなのに，人間だけがそれを壊そうとしていることへの警告．（「山」633号）

日本山岳会・自然保護の歩み（５）

平成10年（1998年）～平成11年（1999年）

はじめに

1905年（明治38年）創立された山岳会は，山を敬うという伝統的な山岳宗教，志賀重昂の『日本風景論』の風景保護論などの影響もあって，草創期から山岳保護，現代風に言えば自然保護思想が強く打ち出されていた．

草創期の自然保護思想に，近代の自然との共存哲学を導入したきっかけは小島烏水がつくった．米国のJ.ミューアの活動，ミセミテなどの国立公園の知識を得た小島烏水が1992年に帰国し，日本山岳会は翌年に会長制をしき，小島烏水が初代会長となって「富士山ケーブルの建設反対」，「尾瀬のダム建設反対」運動を展開する．これが日本山岳会のその後の自然保護活動の原点となった．

その延長線上に1964年（昭和39年）に松方三郎会長が，自ら委員長になって発足した自然保護委員会があり、その活動も40年以上が経過し，山岳会も創立百周年を過ぎて，環境問題は地球規模の問題として認識されるようになった．

自然保護活動を進める上で，過去の歴史を知ることも重要であろう．その意味で自然保護委員会は，山岳会の諸先輩の残した随筆，記録などの貴重な文献を抜粋して『山岳』誌上に「日本山岳会・自然保護の歩み」（１）～（４）として掲載してきた．そして本稿の取りまとめは自然保護委員会近藤緑が担当した．この（５）を一応の区切りとしたい．本稿以前の「自然保護の歩み」は次のとおり『山岳』に掲載されている．参考にされたい．

（１） 明治38（1905）年～昭和50（1975）年 『山岳』第86年（1991年）
（２） 昭和51（1976）年～昭和63（1988）年 『山岳』第87年（1992年）
（３） 平成 1（1989）年～平成 5（1993）年 『山岳』第89年（1994年）
（４） 平成 6（1994）年～平成 9（1997）年 『山岳』第97年（2002年）

（**訂正**；（４）の見出し副題の「～平成８（1996）年」は「～平成９（1997）年」に，本文（A 77頁）の３行目「白神山地で意見書提出」からは平成９年の記事なので，２行目と4行目の間に「**平成９年**（1997年）」を挿入）

日本山岳会自然保護委員会

日本山岳会所蔵絵画展示作品

足立源一郎　北穂高岳主峰 73×84 cm
足立源一郎　滝谷　87×103 cm
田辺　穣　ヒマラヤの朝 71×59 cm
中村清太郎　雪渓（長次郎谷）43×52 cm
武井　　清　マチャプチャリー　87×68 cm
丸山　晩霞　白馬雪田　126×56 cm
中村清太郎　初夏の槍ヶ岳 88×76 cm
倉員　辰雄　麓春　147×104 cm
足立源一郎　朝の槍ヶ岳 60×47 cm
藤江幾太郎　ヒマラヤの古都 89×106 cm
武井　　清　タムセルク　ヒマラヤ 107×92 cm
牧　　潤一　エヴェレスト 74×55 cm
茨木猪之吉　奥秩父 57×63 cm
茨木猪之吉　しゃくなげ　73×62 cm
後藤三男　梓川秋色 70×60 cm
日本山岳会所蔵絵画展示作品
日本山岳会所蔵絵画展示作品

22.2×14.5 cm pp. 207. Hodder & Stoughton, London. 1956

エヴァンズはイギリスの医師で登山家。ハント隊のエヴェレスト遠征にも参加し、第1次攻撃隊に選ばれている。1955年、イギリス隊を率いてカンチェンジュンガ（8598 m）初登頂に成功した。とはいえシッキム政府との約束を守り、人の踏まぬ「神聖な頂き」を眺めたと記している。のちにアルパイン・クラブ会長。島田巽訳『カンチェンジュンガ　その成功の記録』（朝日新聞社、1957）

50.　Herrligkoffer, Karl M.

Nanga Parbat 1953

22.4×15.2 cm pp. 194. J.F. Lehmanns Verlag, München. 1954

ドイツ登山界が多大な犠牲を払って標的としてきたナンガ・パルバット（8125 m）を1953年、ヘルリヒコッファー率いるドイツ・オーストリア隊がついに征服した。隊の名称は1934年に同山で遭難死した著者の義兄メルクルに因んでヴィリー・メルクル記念遠征隊。初登頂はヘルマン・ブールの超人的な単独行だった。横川文雄訳『ナンガ・パルバット』（朋文社、1954）

51.　Eggler, Albert

Gipfelüber den Wolken. Lhotse und Everest

23.6×16.8 cm pp. 288. Buchergilde Gutenberg, Zürich. 1956

1956年、スイス隊はプレモンスーンのエヴェレストを目指した。隊長は山岳兵を訓練するスイス軍の将校も務めた弁護士にして登山家のアルベルト・エグラー。まずローツェ（8511 m）の西壁から初登頂に成功し、続いてサウス・コルからエヴェレストの第2登、第3登を果たした。本書はこの遠征の報告書。横川文雄訳『雲表に聳ゆる峯々』（朋文堂、1958）

52.　Franco, Jean

Makalu

19.7×13.3 cm pp. 256. Jonathan & Cape, London. 1957

フランス語原書, “Makalu” Arthaud, Paris. 1955の英訳。1955年、ドーフィネ・アルプスの岩稜登攀で名を馳せたフランコ率いるフランス隊は、前年からの標的マカルー（8481 m）の初登頂に成功、しかも9名の隊員が3回にわたって全員登頂した。英語版カバーにある副題 a team triumphant はその勝利にふさわしい凱歌と言える。近藤等訳『マカルー　全員登頂』（白水社、1956）

53.　Tichy, Herbert

Cho Oyu, by Favour of the Gods

21.5×14.0 cm pp. 196. Methuen, London. 1957

ドイツ語原書 “Cho Oyu－Gnade der Götter－” Liechtenstein Verlag, Liechtenstein. 1955の英訳。ティヒーはオーストリアの地質学者、1930年代からヒマラヤ地域を彷徨した。とくに1936年、巡礼に変装してのカイラス、マナサロワール湖巡遊で知られる。1954年秋、隊長以下3人の隊員とシェルパ5人の小さな個人隊を率いてチョー・オユー（8153m）の初登頂に成功。横川文雄訳『チョー・オユー登頂』（朋文堂、1957。世界山岳全集8）

54.　Eiselin, Max

The Ascent of Dhaulagiri

22.8×15.6 cm pp. 160. Oxford University Press, London. 1961

ドイツ語原書 “Erfolg am Dhaulagiri” Orell Füssli, Zurich, 1960の英訳。アイゼリンは1932年生まれ、これまでの8000 m峰の遠征隊長より一回り以上若い世代である。1958年スイス隊の一員としてダウラギリ（8167 m）遠征に参加、1960年には隊長としてダウラギリに挑み、小型飛行機を駆使して荷揚げや人員輸送するなど新しい試みのすえ、スイス隊を初登頂に導いた。横川文雄訳『ダウラギリ登頂』（ベースボールマガジン社、1963）

5回目の参加となったシプトンが小遠征隊を率いて南面を調査し、登攀の鍵となるアイスフォールを突破、登頂の可能性を見出した。E. ヒラリーら二人のニュージーランド人が現地合流で参加。87葉の写真と事前入手した4葉の航空写真を掲載。

44. Hunt, John

The Ascent of Everest

22.1×14.5 cm pp. 300. Hodder & Stoughton, London. 1953

前年春秋2度のチャンスを得たスイス隊の敗退の後、エヴェレスト9回目の遠征となるイギリス隊が軍人ハントを隊長に起用、執念の初登頂に成功した記録。シプトン隊とスイス隊の経験を引き継ぎ、クーンブ氷河、サウス・コル経由でまず第1次攻撃隊が南峰に達し、ついで第2次攻撃隊のヒラリーとテンジンが世界最高峰の初登頂の栄誉に浴した。ヒラリーがその登頂部分を執筆。朝日新聞社訳『エベレスト登頂』(朝日新聞社、1954)

45. Noyce, Wilfrid

South Col

21.3×13.7 cm pp. 323. W. Heinemann, London. 1954

ハント隊に参加し、サウス・コルへのルート工作と荷揚げに献身したノイスの個人的記録。ハントからの一本の電話 "Are you free to come to Everest?" で始まり、歴史的な大遠征隊に一隊員として参加し、しかも第二次隊不成功の場合の第三次隊として選ばれていた著者が体験した、喜びと苦闘の日々が克明に語られる。浦松佐美太郎訳『エベレスト　その人間的記録』(文藝春秋社、1956) の邦題が本書の内容を的確に表している。

46. Hillary, Edmund

High Adventure

20.2×13.8 cm pp. 225. Hodder & Stoughton, London. 1955

シェルパのテンジンとともに世界最高峰の初登頂を成し遂げたニュージーランド人ヒラリーの登山家としての自叙伝。若き日の山との出会いと修業時代、シプトン隊に加わった1951年の偵察行、トレーニング遠征としてのチョウ・オユー行に続き、1953年のエヴェレスト登頂の手記がクライマックスとなっている。展示の日本山岳会所蔵本には著者の署名がある。松方三郎・島田巽訳『わがエヴェレスト』(朝日新聞社、1956)

47. Herzog, Maurice

Annapurna premier 8000

20.0×14.5 cm pp. 298. Arthaud, Paris. 1952

人類初の8000 m峰登頂の記録。1950年、フランス隊を率いてアンナプルナ (8091 m) の登頂に成功したエルゾーグが、下山途中の凍傷治療中に口述したもの。この壮絶な登攀記は25ヵ国語に翻訳され、山岳書として史上最高の発行部数を記録した。国民的英雄となったエルゾーグは、その後ド・ゴール政権下のフランスで初代のスポーツ大臣を務めている。近藤等訳『処女峰アンナプルナ』(白水社、1953)

48. Desio, Ardito

Ascent of K2

21.8×14.2 cm pp. 240. Elek Books, London. 1955

イタリア語原書 "La Conquista del K2" Garzanti, Milano. 1954 の英訳。副題は Second highest peak in the world。1954年、デジオ率いるイタリア隊が世界第2の高峰K2 (8611 m) の登頂に成功した記録である。デジオはイタリアの地質学者で探検家、戦前からアルプス、アラスカ、カラコルムなどで学術調査・探検を行っていた。近藤等訳『K2登頂』(朋文堂、1956。世界山岳全集7)

49. Evans, Charles

Kangchenjunga : The Untrodden Peak

Mount Everest, the Reconnaissance, 1921

31.6×24.0 cm pp. 356. Edward Arnold, London. 1922

ハワード・バリー中佐率いるイギリス隊による1921年第1次エヴェレスト遠征の報告書。限定特装版（98／200）。派遣母体は王立地理学協会とアルパイン・クラブによる合同エヴェレスト委員会、副題のように登頂より偵察を目的とした。シッキム経由チベット側から入山、北面、東面を広範囲に踏査、マロリーらが東ロンブック氷河に入りノース・コルに達した。ヤングハズバンドが序文、偵察山行はマロリーが詳述。コリーが論評。

39. Bruce, Charles G.

The Assault on Mount Everest 1922

25.1×17.2 cm pp. 339. Edward Arnold, London. 1923

前年の偵察隊の成果を受け、ただちに組織されたイギリス隊による第2次エヴェレスト遠征隊の記録。グルカ連隊の准将ブルースが隊長となり、前年のルート、ノース・コルからの登頂を目指した。ノース・コルにC4、さらに7600m地点にC5を設営、まずマロリーらが無酸素で人類初の8000mに到達、ついでフィンチらが酸素使用で8326mにまで達した。そのあと不幸にして7名のポーターを雪崩で失う事故に遭遇した。

40. Norton, Edward F.

The Fight for Everest：1924

25.1×17.2 cm pp. 372. Edward Arnold, London. 1925

イギリス隊による1924年の第3次エヴェレスト遠征記録。隊長のブルースが病に倒れ、ノートン少佐が指揮をとった。ノース・コル経由のルートをさらに延ばし8170m地点にC6を設け、ノートンが無酸素で8572mに達した。ついでマロリーとアーヴィンが頂上アタックに出て行方不明となり、オデルがその最後の模様を詳述している。第2部にマロリーの夫人宛手紙10通を掲載。山崎安治訳『エベレストへの闘い』（あかね書房、1967）

41. Ruttledge, Hugh

Everest 1933

25.4×17.4 cm pp. 390. Hodder & Stoughton, London. 1934

第3次の9年後、1934年に実現したイギリス第4次エヴェレスト遠征の報告。ラトレッジを隊長にスマイス、シプトンら新世代の隊員構成で挑んだが、悪天候に加えソラ・クーンブからのポーターの到着の遅れなどのため前回以上の高度には至らなかった。キャンプ高度としてこれまで最高の8350mに設けたC6の上部でマロリーまたはアーヴィンのものと思われるピッケルを発見。高柳春之助訳『エヴェレスト探検記』（岡倉書房、1941）

42. Smythe, Franncis S.

Camp Six

21.5×13.7 cm pp. 229. Hodder & Stoughton, London. 1937

イギリス第4次エヴェレスト遠征隊に参加した著者の個人的な報告。名文家スマイスの残した27冊の著書の内、Kamet Conquered とともに代表作とされる。ダージリンからシッキム経由でエヴェレスト北面に至る旅、高所キャンプでの生活と登攀、とくにシプトンと過ごした8350mのC6、体調を崩したシプトンを残して最高所での幻覚に襲われながらの単独登攀の模様を詳述している。伊藤洋平訳『キャンプ・シックス』（朋文堂、1959）

43. Shipton, Eric E.

The Mount Everest Reconnaissance Expedition 1951

26.4×21.2 cm pp. 128. Hodder & Stoughton, London. 1952

第2次大戦後エヴェレスト遠征を再開させたイギリス隊にとっては8回目の遠征となった1951年秋の偵察記録。戦後チベット側が閉ざされたため、ネパール側からの入山で、エヴェレスト遠征

妻ファニー（1859〜1925）、夫ウィリアム（1848〜1937）のワークマン夫妻はアメリカの探検・登山家。副題は The exploration of nineteen hundred square miles of mountain and gracier。1911〜12年に行った第5回（夫妻の最後のヒマラヤ行）のカラコルム遠征記録である。フーシェ谷、シアチェン氷河、バルトロ氷河を探検・踏査した。同じ本が同時にニューヨークの Datton 社からも刊行されている。

33. Bauer, Paul

Im Kampf um den Himalaja

23.0×15.0 cm pp. 176. Knorr & Hirth, München. 1931

バウアー（1896〜1990）はドイツの登山家。副題は Der erste deutsche Angriff auf den Kangchendzonga 1929。バイエルン隊による第1回のカンチェンジュンガ攻略の記録。ゼムー氷河から北東稜を登って頂上を目指したが、7400 m で断念した。伊藤愿訳『ヒマラヤに挑戦して』（黒百合社、1931。中公文庫、1992）。なお第2回の遠征記録 “Um den Kantsch”（1931）は慶応大山岳部員有志訳『ウム・デン・カンチ』（登高会、1936）

34. Smythe, Francis S.

Kamet Conquered

23.0×15.0 cm pp. 436. Victor Gollancz, London. 1932

イギリスの登山家スマイス（1900〜1949）が1931年にガルワール・ヒマラヤのカメット（7756 m）を初登頂したときの記録。1910〜1913年の C.F. ミードによる試登以来10回にわたってカメットの登頂が試みられたが、いずれも失敗している。スマイスの7756 m 登頂はそれまでに人類が達した最高点であった。田辺主計・望月達夫訳『カメット登頂』（朋文堂、1961。世界山岳全集4）

35. Tilman, Harold W.

The ascent of Nanda Devi

22.0×14.0 cm pp. 246. Cambridge Univ. Press, Cambridge. 1937

ティルマン（1898-1977）はイギリスの登山・探検家。1936年ナンダ・デヴィの初登頂の記録。イギリス・アメリカ合同隊による壮挙で、C. ハウストン、A. カーター、N. オデルなど著名な登山家が隊員として参加した。頂上に立ったのはティルマンとオデル。晩年のティルマンはヨットによる極北の海の探検に専念し、フォークランド諸島の沖でアナヴァン号とともに消息を絶った。池野一郎訳『ナンダ・デヴィ登攀』（朋文堂、1942）

36. Shipton, Eric

Blank of the Map

22.1×14.5 cm pp. 315. Hodder & Stoughton, London. 1938

イギリスの登山・探検家シプトン（1907〜1977）が1937年、当時は未踏査の山域であったシャクスガム氷河流域を探検・踏査したときの記録。シプトンは多くの登山・探検行にティルマンをパートナーとしたが、このときも二人は行動を共にした。晩年のシプトンはヒマラヤを離れ、パタゴニアなどの探検も行った。諏訪多栄蔵訳『地図の空白部』（あかね書房、1967。ヒマラヤ名著全集10）

37. Longstaff, Thomas George

This My Voyage

22.0×14.3 cm pp. 324. John Murray, London. 1951

ロングスタッフ（1875〜1964）はイギリスの登山・探検家、医師、博物学者にして軍人、アルパイン・クラブ会長や王立地理学協会副会長も務める。本書はかつて歩いた世界の山岳地域を網羅した、偉大な岳人の自伝的旅行記。アルプス、コーカサス、ネパール・ヒマラヤ、チベット、カラコルム、ロッキー、シュピッツベルゲン、グリーンランド、そしてイギリスの山々。望月達夫訳『わが山の生涯』（白水社、1957）

38. Howard-Bury, C.K.

はカラコルム探検史上最初の大規模な遠征である。ブロード・ピークやヒドゥン・ピークもこのときコンウェイによって命名された。山岳画家マコーミックが300点におよぶみごとな挿絵で本書を飾っている。付録に地図と科学調査報告。

27. McCormic, A.D.

An Artist in the Himalayas

22.0×14.5 cm pp. 306. Fisher Unwin, London. 1895

マコーミックは1860年生まれのイギリスの画家、探検家、登山家。1892年のM. コンウェイ率いるカラコルム遠征隊に参加し、展示のコンウェイ著 "Climbing and exploration in the Karakoram-Himalayas" に多くの挿絵を描いたが、自らも文章とスケッチで本書を上梓した。1895年にはC. デントらとともにコーカサスの遠征も行っている。

28. Collie, J. Norman

Climbing on the Himalaya and Other Mountain Ranges

22.0×14.5 cm pp. 315. David Douglas, Edinburgh. 1902

コリー（1859〜1942）はイギリスの登山家。1920〜22年にアルパイン・クラブ会長、王立地理学協会の副会長も務める。本書はアルプス、ヒマラヤ、カナディアン・ロッキーの紀行・記録である。1895年にはママリー、ブルースとともにナンガ・パルバットの踏査を行ったが、ディアミール氷河でママリーを失った。本書ではとくにヒマラヤに多くのページを割いている。

29. Rawling, Cecil G.

Great Plateau

22.5×14.5 cm pp. 324. Edward Arnold, London. 1905

セシル・ローリング（1870〜1917）はイギリスの軍人で探検家。副題に「1903年の中央チベットおよび1904〜1905年のガルトック遠征の報告書」とある。1903年にソージ・ラやレーなどを探検し、1904〜1905年にブラマプトラの谷やマナサロワール湖を通り、ラサからシムラまで探検・踏査したときの記録。ローリングは第1次世界大戦中フランダース地方で戦死した。王立地理学協会からゴールドメダルを授与。

30. Mumm, Arnold L.

Five Months in the Himalaya

25.0×16.0 cm pp. 273. Edward Arnold, London. 1909

マム（1859〜1927）はイギリスの登山家。副題はA record of mountain travel in Garhwal and Kashimir。1907年にロングスタッフ、ブルースとともにガルワール・ヒマラヤを訪れ、その後ブルースとカシミールなどを訪れた。このときロングスタッフはトリスル西峰の初登頂を行っている。マムは日本も訪れ、北アルプスの山に登っている。丹部節雄訳『ヒマラヤの5ヵ月』あかね書房、1968。ヒマラヤ名著全集7

31. Fillipi, Fillipo de

Karakoram and Western Himalaya, 1909 I, II

26.5×21.0 cm pp. 469. Constable, London. 1912

原書 "La spedizione nel Karakoram. e nell' imalaya Occidentale, 1909" Zanichelli, Bologna. 1912の英訳。フィリッピ（1869〜1938）は1909年にイタリアのアブルッツィ公の遠征隊の隊員としてバルトロ氷河に入り、K2およびその周辺の偵察行を行う。ブライド・ピーク（チョゴリザ）では頂上直下まで迫った。Iはその遠征記録、IIは図版と地図。盛岡英治郎・宮崎武夫抄訳「カラコルム紀行」（「山岳」第32年第2号〔1937〕, 1938）

32. Workman, Fanny Bullock & Workman, William Hunter

Two Summers in the Ice-wilds of Eastern Karakoram

22.7×16.0 cm pp. 296. Fisher Unwin, London. 1917

On Ancient Central-Asian Tracks

23.4×16.8 cm pp. 366. Macmillan, London. 1933

スタイン（1862〜1943）はハンガリー系イギリス人の中央アジア探検家。東トルキスタン、パミールの踏査探検を3回にわたって行っている。第1回は1901〜02年、第2回は1906〜08年、第3回は1913〜16年。この3回の調査には膨大な報告書があるが、本書は3回の旅を総合的に一般の人も興味をもって読めるよう簡略に書かれたものである。沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』（白水社、1966。西域探検紀行全集8）

22. Rickmers, W. Rickmer

Alai ! Alai !

22.8×15.2 cm pp. 230. Brockhaus, Leipzig. 1930

リックマース（1873〜1965）はドイツの登山・探検家。副題はArbeiten und Erlebnisse der Deutsch-Russischen Alai-Pamir Expedition。1928年の独露（ソ連）合同遠征隊のアライ・パミール遠征登山記録である。このときドイツ隊員のウィーン、シュナイダー、アルワインによってカウフマン峰（7134 m、現レーニン峰）の初登頂がなされた。リックマースはコーカサスと東トルキスタンの踏査にも活躍した。

23. Weston, Walter

Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps

23.5×160 cm pp. 346. John Murray, London. 1896

ウォルター・ウェストン（1861〜1940）はイギリスの宣教師、アルパイン・クラブ会員。3回の日本赴任中に数多くの山行を重ね、日本山岳会の設立に寄与。本書は明治20年から28年までの第1回滞日中の登山記。岡村精一訳『日本アルプス　登山と探検』梓書房、1933。山崎安治・青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』あかね書房、1962、日本山岳名著全集1。黒岩健訳『同題』大江出版社、1982。青木枝朗訳『同題』岩波文庫、1997

24. Weston, Walter

The Playground of the Far East

21.5×13.8 cm pp. 333. John Murray, London. 1918

ウェストンの第2回の滞日は明治35年から38年まで、第3回は明治44年から大正4年まで。本書はそのときの登山記。鳳凰山地蔵仏岩塔や妙義山筆岩のザイルを使用した登攀、槍ヶ岳北鎌尾根や奥穂高南壁の岩稜・岩壁のクライミングは、当時の日本の登山界には思いもよらない登り方だった。明治43年、最初の日本山岳会名誉会員に推される。岡村精一訳『極東の遊歩場』山と渓谷社、1970。水野勉訳『日本アルプス再訪』平凡社、1996

25. Hooker, Joseph Dalton

Himalayan journals

22.7×19.0 cm pp. 606. Ward, Lock & Co, London. 1891

フーカー（1817〜1911）はイギリスの植物学者で探検家。1848〜50年にシッキムや東ネパールを広く踏査し、植物を観察した。副題はNotes of naturalist in Bengal, the Sikkim and Nepal Himalayas, the Khasia mountains, etc. 初版は1854年、2巻本として刊行された。初期のヒマラヤ文献として貴重な古典である。本書は1891年に上下を合わせて1巻本として縮刷・刊行されたもの。薬師善美訳『ヒマラヤ紀行』（白水社、1979）

26. Conway, William Martin

Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalayas

24.5×16.5 cm pp. 710, 128. Fisher Unwin, London. 1894

コンウェイ（1856〜1937）はイギリスの美術史家、政治家、登山・探検家。1892年カラコルムに遠征し、ギルギットからヒスパー氷河やビアフォ氷河、バルトロ氷河などを踏査した記録。これ

els in Manchuria, across the Gobi desert, through the Himalayas, the Pamirs and Chitral, 1884～1894。初版は1896年。ヤルカンドからムスタグ峠を越えてバルトロ氷河に出たり、パミールでロシアのイオノフ大佐に出会うなど、興味深い挿話が随所にある。石一郎訳『カラコルムを越えて』(白水社、1966。西域探検紀行全集5)

16. Freshfield, Douglas W.

The Exploration of Caucasus Ⅰ, Ⅱ

17.7×19.0 cm pp. 278, 295. Edward Arnold, London. 1896

フレッシュフィールド(1845～1934)はイギリスの登山・探検家。アルパイン・クラブの会長、王立地理学協会の会長も務めた。本書は1868、1887、1889年の三度に及ぶコーカサス遠征記録で、コッキン、デシ、ホルダー、ウレイも寄稿している。セラやドンキンの写真もみごと。1888年のコーカサスのコシタン・タウで遭難死したドンキンに捧げられている。コーカサス探検の重厚な古典。詳細な地図も添付。百部限定特装本(第4番)を併展。

17. Merzbacher, Gottfried

Aus den Hochregionen des Kaukasus Ⅰ, Ⅱ

23.8×16.0 cm pp. 957, 963. Duncker & Humbolt, Leipzig. 1901

メルツバッハー(1843～1926)はドイツの登山・探検家。本書『コーカサス高地より』は展示のフレッシュフィールド、デシの著作と並んでコーカサス開拓の古典の一つ。189192年の遠征記。このときメルツバッハーはオーストリアの登山家プルチェラーとともにコーカサスの数峰を初登頂した。第1巻の前後の表紙裏に各1部みごとなコーカサス西部と東部の地図が挿入されている。

18. Dechy, Moriz von

Kaukasus Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ

29.8×21.5 cm pp. 348, 394, 410. Dietrich Reimer, Berlin. 1907

デシ(1851～1917)はハンガリーの博物学者、登山家。1884年から1902年まで7回にわたってコーカサス山系の地理学、民俗学、博物学調査を行い、また多くの初登攀も果たした。とくに中央コーカサスのベゼンギ谷やバクサン谷周辺、およびグルジア側からの踏査を行い、その足跡は広範囲に及んでいる。第3巻は植物学、鉱物学などの博物誌。西コーカサスの2枚のみごとな40万分の1地図も添付されている。

19. Merzbacher, Gottfried

The Central Tian-Shan Mountains

22.0×14.5 cm pp. 285. Royal Geographic Society, London. 1905

副題はAn expedition into the Central Tian-Shan mountains carried out in the years 1902～1903。この2年間に天山中央部を縦横に踏査・探検した記録。いまなお天山探検のバイブルとなっている。南イヌイリチェク氷河、ハン・テングリ山麓の探検調査、ムザルト峠およびベデル峠越えなどを果たし、北イヌイリチェク氷河の舌端にある湖はメルツバッハー湖と命名されている。この調査により天山の外縁と中心部が解明された。

20. Hedin, Sven

Trans-Himalaya. Discoveries and Adventures in Tibet Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ

22.3×14.4cm pp. 460, 442, 432. Macmillan, London. 1909～1913

スウェーデンの探検家ヘディン(1865～1952)の数多い著作の一つ。1906～08年のヒマラヤ西部の踏査記。第1回はスリナガルからチャンタン高原を西から東へ横断してシガツェに達し、ツァンポ河を遡りマナサロワール湖に出てガルトクに至る。第2回はドルブクから再びチャンタン高原を東行、マナサロワール湖を通ってシムラに出た。青木秀夫訳『トランス・ヒマラヤ』上下(白水社、1965。ヘディン中央アジア探検紀行全集4、5)

21. Stein, Aurel

10. Coolidge, W.A.B.
The Alps in Nature and History
22.0×14.0 cm pp. 440. Methuen, London. 1908
ウィリアム・クーリッジ（1850-1926）はニューヨーク生まれだが14歳でイギリス留学、そのまま居ついて教師、聖職者となる。アルプスに魅了され、40数年にわたり、いわば静観派の登山家として峰、峠、谷を隅々まで歩いた。華々しい登山家というよりは優れた登山史家、山岳誌家である。本書はその集大成で、アルプス全域の自然、社会、歴史、地誌、登攀史、山案内、文献目録など、アルプス百科全書と言える古典的労作。
11. Young, G. Winthrope
Mountain Craft
22.2×14.0 cm pp. 603. Methuen, London. 1921（初版 1920）
スポーツ登山の確立とともに登山技術書が現れる。ツィグモンディ『アルプスの危険』1885、デント『登山術』1892、エイブラハム『完全なる登山家』1908など。20世紀初頭にアルプスの困難な岩稜・岩壁で果敢に初登攀を重ね、第1次大戦で片足を失ったヤング（1876〜1958）も、"On high hills" 1927など山岳文学の傑作とともに本書『登山術』を著した。町田立穂抄訳『登山の指導と監督』ジャパン・キャンプ・クラブ、1932
12. Javelle, Emile
Souvenirs d'un Alpiniste
18.7×11.7 cm pp. 308. Payot, Paris. 1920
詩想豊かなフランスの登山家ジャヴェル（1847〜1883）の山の文集。初版は1886年。この1920年版には仏学士院会員H. ボルドーの「エミール・ジャヴェルと山岳文学」なる序文がある。併展の尾崎喜八訳『一登山家の思ひ出』（龍星閣、1937年）は愛蔵版70冊之内第1冊、訳者が木暮理太郎に贈ったもの。同訳は角川文庫、朋文堂・世界山岳全集2、あかね書房・世界山岳名著全集5に再録。他に近藤等訳『一登山家の思い出』講談社文庫。
13. Tuckett, Francis F.
A Pioneer in the High Alps. Alpine Diaries and Letters of F. F. Tuckett 1856〜1874
22.0×14.5 cm pp. 372. Edward Arnold, London. 1920
黄金時代から1870年代にかけてアルプスで活躍した代表的なイギリスの登山家タケット（1834-1913）の遺著。アルプス165峰を登り、376の峠を越えたタケットの山日記、手紙、『アルパイン・ジャーナル』に発表した三つの紀行をW. A. B. クーリッジが整理・編集し、没後7年目に刊行された。西はドーフィネのモン・ペルヴーから東はチロルのダハシュタインやテルグロウまで、開拓期のアルプスを広く歩いた貴重な記録。
14. Mummery, Alfred F.
My Climbs in the Alps and Caucasus
26.5×18.0cm pp. 360. Fisher Unwin, London. 1895
スポーツ登山の始祖とされるイギリスの登山家ママリー（1855〜1895）の遺著。アルプスに初登頂の山がなくなり、ヴァリエーション・ルートを岩壁や岩稜に開拓した。マッターホルンのツムット稜やフルッケン山稜、エギーユ・デ・シャルモ、グレポン、コーカサスのディフ・タウ初登攀などを収録。ヒマラヤ遠征の直前に印刷に回されたが、著者はナンガ・パルバットで遭難死。石一郎訳『アルプス及コーカサス登攀記』朋文堂、1938
15. Younghusband, Francis E.
The Heart of Continent
21.5×14.0 cm pp. 262. John Murray, London. 1937
ヤングハズバンド（1863〜1942）はイギリスの軍人、探検・登山家。副題はA narrative of trav-

を目的とせず、一法律家として純粋に山を楽しむためにアルプスを歩いた。1854年グリンデルヴァルトからヴェッターホルンの初登頂は、イギリス人による近代登山開始の号砲となった。シャモニー山中に別荘「シクスト谷の鷲の巣」を営む。本書は展示のハドソン、ケネディの著作とともにイギリス登山界の生んだ最初のアルプス文献である。

5. Tyndall, John

The Glaciers of the Alps, being a Narrative of Excursions and Ascents, an Account of Origin and Phenomena of Glaciers, and Exposition of the Physical Principles to which they are Related

19.7×12.4 cm pp. 444. John Murray, London. 1860

ティンダル（1820〜1893）はイギリスの物理学者。氷河研究のためアルプスの山々を跋渉した成果を本書にまとめた。第1部は紀行、第2部は科学研究。この体験がティンダルを科学者から登山家に変貌させ、1861年にヴァイスホルン初登頂、ついにはウィンパーとマッターホルン初登頂を競うまでになる。登山記に Hours of exercise in the Alps. 1871 がある。矢島祐利訳『アルプスの氷河』岩波文庫、1932

6. Manning, Samuel?

Swiss Pictures Drawn with Pen and Pencil

l 27.8×19.4 cm pp. 214. The Religious Tract Society, London. 1870

自然美への憧憬、美としての山岳観の確立はイギリスの美術評論家J. ラスキンに負うところが多いが、すでに1870年に世界で最初の山岳版画集の1冊とされる本書が刊行された。写真機の性能が未熟だった時代、ペン画・鉛筆画は貴重な映像記録となった。ウィンパーは木版画家を職業とし、自筆の挿絵がその著書に臨場感を添えており、本書にも作品を寄せている。著（編）者名に？を付したのは本書の本体で確認できなかったから。

7. Whymper, Edward

Scrambles amongst the Alps in the Years 1860〜1869

22.3×16.0 cm pp. 432. John Murray, London. 1871

アルプス黄金時代の掉尾を飾るイギリスの登山家ウィンパー（1840〜1911）による1865年マッターホルン初登頂と、その前後の登攀記録を収める。アルプス文献の古典中の古典であり、文学作品としてもきわめて優れている。展示本はその初版。浦松佐美太郎訳『アルプス登攀記』岩波文庫、1936。福田陸太郎訳『同題』朋文堂、1961、世界山岳全集。石一郎訳『同題』旺文社、1971。新島義昭訳『完訳・同題』講談社学術文庫、1998

8. Dent, Clinton

Above the Snow Line. Mountaineering Sketches between 1870 and 1880

18.8×12.5 cm pp. 327. Longmans, Green, London. 1885

デント（1850〜1912）は医師、登山家。イギリス流の正統派アルピニストとして黄金時代終幕後のアルプスの岩稜をガイド付きで登った。18回の試登の末に成功した1878年のグラン・ドリュの初登頂はその白眉。本書にはウィンパーの版画2点も掲載されている。その後デントはコーカサスに矛先を転じ、同山域のパイオニアとなる。アルパイン・クラブの会長も務める。

9. Cunningham, C.D. & Abney, W. de W.

The Pioneers of the Alps

28.0×20.5 cm pp. 180. Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, London. 1888

登山という新スポーツを創造したイギリスの先駆的登山家は、その技術を地元ガイドから学んだ。ケーラス・ダンロップ・カニンガム（1856〜1896）とウィリアム・ドゥ・ワイヴルズリ・アブネイ（生没年不詳）の本書はその感謝と評価の表現である。主要内容はアルプス登攀史とガイドの銘々伝。さらにガイドレス登攀、冬季登攀、登山用具、山案内技術を付加している。ガイド伝は物故者と当時現役の猛者を網羅し、肖像も載せている。

それを連載10年目にまとめたのが本書である。別巻は著者が収集した山の写真集。著者の没後、編者の望月達夫・諏訪多栄蔵・雁部貞夫の増補・改訂による『ヒマラヤの高峰』上中下（白水社、1973）が刊行され、深田ヒマラヤ研究を集大成した。

65.　日本山岳会1970年エベレスト登山隊編

1970年　エベレスト登山隊報告書Ⅰ、Ⅱ

25.7×18.2 cm pp. 444, 142. 日本山岳会、東京、昭和47年（1972）

1960年代後半数年間のネパール入山禁止が解かれたあと、登山許可を得た日本山岳会は1970年春、松方三郎を隊長として30名からなる大遠征隊を、すでに5隊により3ルートから登頂されていたエベレストに送った。計画自体は未踏の南西壁の初登攀を前面に押し出し、一級のクライマーを動員したが力及ばず、南東稜から日本人初の登頂という成果にとどまった。第部の登山報告と第部の学術報告の分冊から成っている。

（2）洋書の部

1.　Saussure, Horace-Benedict de

Voyages dans les Alpes, precedes d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Geneve Vol. Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ

25.4×19.7 cm pp. 540, 641, 532, 594. Neuchatel, Geneve. 1779～1796

「アルプス登山の父」ド・ソシュール（1740～1799）の主著『アルプス紀行－ジュネーブ近郊の自然史に関する試論』全4巻の初版本。著者はジュネーブ近郊コンシェの荘園で生まれ育った自然科学者、アカデミー・ド・ジュネーブの哲学教授。賞金を拠出してアルプス最高峰モン・ブランの登頂を呼びかけ、1786年パカールとバルマの初登頂へと導き、翌年自らも登頂した。近藤等抄訳『アルプス紀行』朋文堂、1961。世界山岳全集1

2.　Forbes, James D.

Travels through the Alps of Savoy and Otherparts of the Pennine Chain with Observations on the Phenomena of Glaciers

23.8×16.2 cm pp. 424. Adam & Charles Black, Edinburgh. 1843

「科学的登山の父」「イギリスのド・ソシュール」と呼ばれる氷河学者、エディンバラ大学教授フォーブス（1807～1868）の主著。アルプスを広く探検し、やがてアルプス登山の主役となるイギリス人登山家の先駆けをなした。氷河の実地調査の成果に美麗な石版画や精密な銅板地図を付した本書は、スイスの地理学者にして先駆的登山家G. シュトゥーダーに献題されている。創立期のアルパイン・クラブ（イギリス山岳会）最初の名誉会員。

3.　Hudson, Charles & Kennedy, Edward S.

Where there's a Will there's a Way, an Ascent of Mont Blanc, by a New Route and Without Guides

19.5×12.0 cm pp. 95. Longman, Brown, Green & Longmans, London. 1856

アルプス黄金時代はガイド付き登山が主流だったが、この時期にすでにガイド無し登山を提唱し、実践するイギリス人登山家が現れた。標題の「意志あるところ道あり」、副題の「新ルートと無ガイドによる」モン・ブラン登攀は、その精神の宣言であった。ハドソン（1828～1865）は1865年にウィンパーとともにマッターホルン初登頂、下山中に墜死した。ケネディ（1814～1898）はアルパイン・クラブの創立メンバー、2代会長。

4.　Wills, Alfred

Wanderings among the High Alps

19.5×12.0 cm pp. 384. Richard Bentley, London. 1856

ウィルス（1828～1912）はアルパイン・クラブ3代会長。フォーブスの薫陶を受けたが科学研究

18.2×12.8 cm pp. 302. 生活社、東京、昭和19年（1944）

中村清太郎（1888～1969）は山岳画家であるとともに日本山岳会創成期の登山家でもあった。中村が山に入ったころ、まだ日本アルプスは開拓期で、本書の主要内容である明治末年の白峰南部への入山記録は驚くべきものであった。小島烏水が序文、田部重治が跋文を書いている。太平洋戦争末期の刊行で造本はきわめて粗悪だったが、昭和53年『山岳礼拝』と改題、みごとな新版が発行された（大修館書店、新編覆刻日本の山岳名著）。

60. 百瀬慎太郎

山を想へば

20.8×14.7 cm pp. 304. 百瀬慎太郎遺稿集刊行会、大町、昭和37年（1962）

大糸線開通前にこの方面を目指す登山者のほとんどが投宿した大町の對山館。その主人の百瀬慎太郎（1892～1949）は大正6年に北アルプス最初の山案内人組合を設立、大正14年に大沢小屋を建設するなど登山の発展に貢献した。本書の題は百瀬の愛唱句「山を想へば人恋し、人を想へば山恋し」から。若山牧水門下だった百瀬の短歌、紀行、随想、往復書簡、宿帳などを編集。書簡には錚々たる文化人の名が綺羅星のごとく並んでいる。

61. 日本山岳会編

マナスル 1952～3

25.7×18.2 cm pp. 本文234, 写真68. 毎日新聞社、東京、昭和29年（1954）

戦後の1950年、フランス隊によるアンナプルナ初登頂で幕を開けた各国の8000 m峰への初登頂レースで日本山岳会はマナスルという目標を得て、これに国家的事業との認識で取り組んだ。本書は昭和27年秋の今西錦司率いる踏査隊と翌年春の三田幸夫率いる第1次登山隊の詳細な報告書である。踏査隊はマナスル山群を一周して、可能な登攀ルートを見きわめ、第1次隊は登頂には至らなかったが7750 mに達した。

62. 日本山岳会編

マナスル 1954～6

25.7×18.2 cm pp. 本文364, 写真24. 毎日新聞社、東京、昭和33年（1958）

山麓のサマ部落で住民の妨害に遭い、ガネッシュ・ヒマールへの転戦を余儀なくされた第2次登山隊の失敗を経て、ついに初登頂に至った第3次マナスル登山にかんする記録の完結編である。別宮貞俊、松方三郎の序文のあと、隊長であり本書の編集委員長も務めた槇有恒が「いかに考え、いかなる準備のもとに、いかなる行動をなしたか」を詳細に報告すると述べている。各隊の隊員と協力者による広範な担当分野別の報告は完璧である。

63. 槇 有 恒 編

マナスル登頂記

18.2×12.8 cm pp. 232. 毎日新聞社、東京、昭和31年（1956）

昭和31年5月の日本人初の8000 m峰初登頂の快挙の興奮いまださめやらぬ3ヵ月後の8月に上梓された。第3次マナスル登山隊の公式報告書は翌々年の上梓を待つことになるが、いわば速報版ともいえる本書は、編者の槇有恒隊長が現地から毎日新聞紙上に寄せた「マナスル通信」を中心に、第1次、第2次登頂者となった今西寿雄、加藤喜一郎による「登頂記」、さらに各分野の担当隊員による「登頂のかげに」で構成されている。

64. 深 田 久 弥

ヒマラヤの高峰 全5巻、別巻写真集

18.2×12.8 cm, 別巻25.7×18.2 cm pp. 各巻平均214, 別巻112. 雪華社、東京、昭和39～40年（1964～1965）

『日本百名山』で知られる作家・深田久弥（1903～1971）はヒマラヤ研究の第一人者であり、昭和28年から甲州茅ヶ岳で急死するまで18年間、山岳雑誌「岳人」にヒマラヤの記事を書き続けた。

年11月の夜、越百山から南駒ヶ岳への尾根の途中で霙まじりの猛烈な暴風雨に遭って疲労死。本書の装幀は茨木猪之助、カットは生沢朗。

54. 木暮理太郎

山の憶ひ出

上下 18.6×13.4 cm pp. 上 556, 下 608. 龍星閣、東京、昭和 13～14 年（1938～1939）

序文によると木暮理太郎（1873～1944）自身は本書の刊行に消極的であったことがわかる。木暮は日本の山々がまだ信仰登山の対象であった時代から先駆的な登山を行ってきた。性格はいたって温厚で控えめ。本書に収められた膨大な文章は地味ではあるが、紀行・考証に優れたものがあり、的確で味わい深い内容のものが多い。展示本は 100 部限定の愛蔵版。用紙は特漉き和紙を使用し、表紙には著者愛用の銘仙の絣を使った造本の傑作。

55. 坂本直行

山・原野・牧場

19.0×13.0 cm pp. 232. 竹村書房、東京、昭和 12 年（1937）

北海道に生まれ育った坂本直行（1906～1982）は北大山岳部で活躍、日高の山の開拓の第一人者だった。30 歳で十勝原野に入植し、30 年間にわたり開拓農民として痩せた大地との実りの少ない苦闘を続け、農業のわずかな余暇をぬって山に登り、絵を描き、文章を書いてきた。本書は開拓を始めたころの牧場生活を綴ったもので、骨身を砕く労働の日々を独特の知的で重厚なユーモアが包んでいる。眼前にはつねに日高連峰が聳えていた。

56. 高橋文太郎

山の人達

18.8×12.8 cm pp. 328. 龍星閣、東京、昭和 13 年（1938）

山を愛する民俗学者・高橋文太郎（1903～1948）が折にふれて書いたエッセイをまとめたもの。「山と民俗と」「朝日山麓三面村記」「熊狩の日記」「秋田マタギの印象」「会津の木地屋部落」「山案内の発生」「本邦登山文化史の素描」など、登山文化史を民俗学の観点から照射し、さらに山に生きる人々の山岳観や信仰登山と近代アルピニズムとの葛藤を論じ、日本の山案内の意義の変遷を通して自然観や登山思想の発展の跡をたどる。

57. 加藤泰三

霧の山稜

19.4×14.8 cm pp. 310. 朋文堂、東京、昭和 16 年（1941）

加藤泰三（1911～1944）は東京美術学校彫刻科卒の美術家。日本山岳会永年会員でもある石井鶴三に師事、彫刻のみならず画家、図案家、詩人としても才能を発揮したが、昭和 19 年に太平洋戦争で戦死。東京近郊の山々や北アルプスを逍遥した。特筆すべき登山歴はないが、30 歳のときに上梓した本書によって日本の岳人列伝に不朽の名を残している。55 編のエッセイと絵を組み合わせた本書は画文集の傑作として山岳書の古典になった。

58. 加藤文太郎

單獨行

18.2×12.5 cm pp. 286. 朋文堂、東京、昭和 16 年（1941）

加藤文太郎（1905～1936）は神戸在住の登山家。六甲山麓の神戸は山好きの外国人の影響もあって早くから登山が盛んだった。著者も関西徒歩会や RCC に属したが、パーティを組まない単身の山行を好み、単独行の加藤として異色の存在だった。本書は没後（昭和 11 年 1 月、槍ヶ岳北鎌尾根で遭難死。このときはパートナーがいた）間もなく（8 月）刊行された『単独行　加藤文太郎遺稿集』（編集発行人・津田周二）を底本としている。

59. 中村清太郎

山岳渇仰

18.7×13.7 cm pp. 324. 朋文堂、東京、昭和9年（1934）

大正13年に登山用具専門店「好日山荘」を大阪で設立した西岡一雄（1886～1964）は山ノ内と門田のピッケルやアイゼンを普及させるなど登山技術の向上に貢献したが、自身もRCCの創立メンバーで、藤木九三と北穂高滝谷の初登攀を競うなど新進アルピニズムの担い手だった。本書は50歳に近くなった西岡が45編のエッセイをまとめたもので、山、人生、登山用具、沢・谷・川の呼称の東西分布などを縦横に語って興趣は尽きない。

49. 松井幹雄

霧の旅

18.7×13.7 cm pp. 456. 朋文堂、東京、昭和9年（1934）

「霧の旅会」の創立者であった松井幹雄（1895～1933）の遺稿集。大正8年に創立された「霧の旅会」は低山趣味の社会人山岳会として知られているが、文化の香り高い登山団体であった。著者が生前にまとめた著作に『大菩薩連嶺』がある。松井は30歳代で夭折したが、本書には生前おもに会誌「霧の旅」に寄稿した文章を中心に、他の刊行物に載せたもの、書簡などが収録されている。武田久吉、木暮理太郎がそれぞれ序文を寄せている。

50. 伊藤秀五郎

北の山

23.2×16.0 cm pp. 211. 梓書房、東京、昭和10年（1935）

伊藤秀五郎（1905～1976）は横浜生まれの北海道人、生物学者、教育者。大正15年に北大山岳部を発足させ、まだ未開拓だった北海道の山々をスキーを駆って精力的に踏査した。本書は日高山脈、石狩岳とニペソツ山、狩場山、北千島などの紀行編と、登山観を綴った感想随筆編から成っている。自己の登山を「静観的」と規定する著者は、激しい身体行動や肉体的緊張における自然観照と思索から、精神的な覚醒にいたる喜びを見出した。

51. 原全教

奥秩父 正続

正18.0×12.5，続18.7×12.7 cm pp. 正524，続706. 朋文堂、東京、昭和10年（1935）

昭和初期、まだよく知られていない奥秩父の山や渓に足しげく通い、こまめに記録をとる岳人がいた。本書の著者原全教（1900～1981）である。奥秩父は関東の諸都市からも地理的に近く、その原生林や渓谷の美しさは登山者を魅了してやまなかった。本書はそれに応える奥秩父の綜合的な案内書であり、研究書でもあり、また百科全書でもあった。正・続篇で1200ページを超える労作で、この山域についての屈指の古典的な文献である。

52. 尾崎喜八

山の繪本

20.5×16.0 cm pp. 360. 朋文堂、東京、昭和10年（1935）

詩人・尾崎喜八の最初のエッセイ集。たてしなの歌、念場が原・野辺山ノ原、神津牧場の組曲、御所平と信州峠、山への断片、など26篇。散文だが詩人でなければ書けない文章である。著者はこれを「日本でこれが最初の詩精神につらぬかれた生活と自然愛との協奏曲のような文学」「自然と詩のコンチェルト」と呼んだ。刊行されるや江湖の喝采を博し、装幀を変えて版を重ね、戦後も文庫や全集に収録されるなど長く愛読されている。

53. 細井吉造

伊那谷 木曽谷

20.3×15.1 cm pp. 319. 故細井吉造遺稿集刊行会、東京、昭和12年（1937）

子供のころ大良ヶ峰の近くから見た北岳に鮮烈な印象を受けた甲府生まれの細井吉造（1904～1936）は南アルプスとその周辺の山と沢を歩き尽くし、その足跡は全国の山にひろがり、美しい文章で紀行、随筆、評論を書き綴った。同盟通信社の記者の激務をぬっての山行だった。昭和11

秩父の紀行文からは当時の山の登り方、その風俗などが読み取れて興味深い。岳友であった木暮理太郎が序文を書いている。本書はのちに改訂増補され『山と渓谷』（第一書房）と改題、さらに山を愛する多くの読者に親しまれていった。

43. 冠松次郎

黒部谿谷

18.4×12.6 cm pp. 274. アルス、東京、昭和3年（1928）

大正中期から末期にかけての冠松次郎（1883～1970）の黒部川探検を、日本の近代登山史のなかでは「黒部時代」と呼んで評価している。本書は冠とその黒部探検の一連の著作の先駆けとなったもので、黒部の秘渓に紀行を重ね、研究的な立場からとりまとめたもの。また本書は渓谷の美しさを世に紹介するとともに、登山に渓谷跋渉という新たな分野を確立した書とも言える。

44. 石川欣一

山へ入る日

18.7×12.7 cm pp. 328. 中央公論社、東京、昭和4年（1929）

モース『日本その日その日』やグルー『滞日十年』などの翻訳で知られるジャーナリストの石川欣一（1895～1959）は大正3年に二高山岳部を創立した山の大先達であり、大阪毎日新聞調査部長として昭和11年の立教大学隊ナンダ・コット遠征の実現にも尽力した。大町対山館の百瀬慎太郎と親しく、若いころ「春夏秋冬大町を訪れて」は後立山連峰に登った。本書に収めた40篇の随想は軽妙な語り口で山好きの純な心情を伝えてくれる。

45. 武田久吉

尾瀬と鬼怒沼

18.6×12.4 cm pp. 本文370，写真100. 梓書房、東京、昭和5年（1930）

武田久吉（1883～1972）はイギリス公使アーネスト・サトウを父とする植物学者。日本山岳会創立メンバー。本書は初めて尾瀬に入った明治38年から昭和2年までの4回の尾瀬紀行をまとめたもの。貴重な植物と植生の紹介、周辺の山々の登山、自然景観の美しさ、尾瀬の守護者・平野長蔵のこと、そして自然保護の力説など、尾瀬に寄せる著者の情熱が全6章（第4章のみ館脇操記）に横溢している。尾瀬を語るには必読の古典である。

46. 武田久吉編著

富士山

25.7×18.2 cm pp. 271. 改造社、東京、昭和6年（1931）

理学博士・武田久吉と農学士・小林義秀による富士山大全。「日本地理体系」の別巻として刊行されたが、日本山岳会は版元の改造社から刷本50部を購入のうえ、特別の装幀をほどこし、20部を海外の主要山岳会に送呈し、30部を希望者に頒布した。展示本はその特装本の内の47番。地況、地形、地質、気象、登山史、登山道、富士の撮影、植物景観、笠雲などの委曲を尽くした概説のあとに、本書の半分以上を占める写真ページが続く。

47. 平賀文男

赤石渓谷

19.8×13.7 cm pp. 308. 隆章閣、昭和8年（1933）

平賀文男（1895～1964）は甲州の人。南アルプスや八ヶ岳の通暁者であった。本書は長大な赤石山系の渓谷の紀行と研究の書。大正半ばから昭和初期、登山者はその足跡を山頂ばかりでなく未知の渓谷の奥深くへと印すようになった。平賀は大井川上流の多くの秘渓をはじめ、まだよく知られていない渓谷の探査を続け、それを美しいユニークな文章で綴った。自然だけでなく歴史や民俗の考察も本書をいっそう潤いのあるものにした。

48. 西岡一雄

泉を聴く

山岳省察

19.8×13.8 cm pp. 278. 弘文堂書房、京都・東京、昭和15年（1940）

84歳で1500座の山頂を踏んだ今西錦司（1902～1992）は終生山を思索し続けた生物学者、探検家。三十路を終えるころ、少年期の京都北山彷徨、青年期の先鋭なアルピニズム、ヒマラヤ志向と戦時による挫折、北東アジアの草原への転進、その振幅の広い重層的な山岳観を回顧し、今後の歩みを展望した山の随想。ここに胚胎している今西山岳学のエッセンスは戦後のマナスル遠征、カラコルム・ヒンズークシ探検においてみごとに実現した。

38. 田中　薫

氷河の山旅

21.0×14.8 cm pp. 334. 朋文堂、東京、昭和18年（1943）

氷河に魅せられた地理学者・田中薫（1898～1982）が欧米、台湾、日本の氷河と氷河跡を歩きながら綴った紀行集。学者の調査報告というよりは、山好きのロマンあふれるエッセイになっている。チロル、イギリスの湖沼地帯、ハイランドの紀行など、太平洋戦争下の読者に大きなうるおいをあたえた。著者は神戸大学教授を長く続け、山岳部長として海外遠征を計画。『登山』『台湾の山と蛮人』などの著書がある。

39. 日高信六郎

朝の山　残照の山

20.2×14.8 cm pp. 349. 二見書房、東京、昭和44年（1969）

一高山岳部創立者（大正3年）として日本アルプス探検登山の一翼を担った日高信六郎（1893～1976）は外交官としてフランスに赴任、大正10年日本人として初めてモンブランに登頂した。第2次大戦下のイタリア大使を務め、ドロミテの山に触れる。のち日本山岳会会長、初代日本ネパール協会会長などを務め、高齢になるまで内外の山に登り続けた。本書はその長い登山の記録を晩年にまとめたもの。紀行、研究、随筆の3部から成る。

40. 三田幸夫

わが登高行　上下

21.0×14.8 cm pp. 上474，下516. 茗渓堂、東京、昭和54年（1979）

日本アルピニズム勃興期の第一線に立ち、戦後の第1次マナスル遠征隊を率いた三田幸夫（1900～1991）の著作集。青春の山、アルバータ遠征、インド時代とその回想、マナスル遠征とその後、山の仲間たち、随想、底倉記の全7部、92篇から成る。少・青・壮・老年期それぞれの山の足跡、山岳観、人との交友、人間観察、身辺雑記を味わい深い文章で綴った本書は、山の文芸としても近代日本登山史としても不朽の名著である。

41. 木暮理太郎監修

山岳講座　全8巻

21.8×14.8 cm pp. 各巻平均430. 共立社、東京、昭和10～11年（1935～1936）

日本最初の本格的な山岳講座。編者に高橋健治、黒田正夫、角田吉夫。積雪期登山、山の気象学、登山遭難史、地質と岩石、山岳地形、岩登り、夏期登山法、登山史など、山と登山に関する当時の最新知識を紹介するとともに、山の文学、音楽、哲学、民俗、さらには山岳映画の製作にいたるまで、文化面も幅広く取り上げ、その後の山岳関係の講座・叢書類の祖形をつくった画期的な全集である。

42. 田部重治

日本アルプスと秩父巡禮

17.7×10.4 cm pp. 350. 北星堂、東京、大正8年（1919）

田部重治（1884～1972）は明治の末に日本山岳会に入会し、会誌「山岳」に寄稿するようになって登山の文章を書きはじめている。本書は田部の最初の山岳紀行文集。黎明期の日本アルプスや奥

の詩をはさんだ本書は、アルピニズムの神髄として「雪と岩とに精進し、徹底する思慕の念」にあふれている。著者は本書上梓の6年前にロック・クライミング・クラブ（RCC）を結成し、自らの行動をもって岩登り術の普及に務めた。

32. 大島亮吉

山　研究と随想

22.1×14.8 cm pp. 492. 岩波書店、東京、昭和8年（1933）

初版は昭和5年。創立期の慶応大学山岳部で活躍し、積雪期登山の先駆者となった大島亮吉（1899～1928）は28歳にして春の前穂高岳で遭難死した。本書はその遺著。収録の紀行、雪の穂高登攀記、随想、アフォリズム、雪崩の研究論文は、いずれも深い思索と詩情にあふれ、槇有恒は序文で「山岳を通して人生深奥の秘を私等の前に実現した」と述べている。昭和10年には大島の積年のアルプス登山史研究が『先蹤者』として刊行された。

33. 長谷川傳次郎

ヒマラヤの旅

30.2×23.0 cm pp. 本文142＋30，写真200. 中央公論社、東京、昭和7年（1932）

古美術研究のため大正14年から昭和4年までインドに留学した長谷川伝次郎（1894～1982）は2度にわたってヒマラヤに入った。カイラス巡礼、カシミール行、ナンガパルバット観望。その成果として本書に収められた201点の写真は、アルプスからヒマラヤに目を転じはじめた日本の新世代の登山家に多大な感銘をあたえた。槇有恒が序文、巻末に三田幸夫、木暮理太郎が一文を寄せている。

34. 京都帝國大學白頭山遠征隊

白　頭　山

25.3×19.8 cm pp. 本文148，別掲写真40点. 梓書房、東京、昭和10年（1935）

早くからヒマラヤを志向し、K2に標的を定めた京大学士山岳会が、その予行演習として昭和9年12月から10年1月にかけて行った厳冬期の朝鮮・白頭山遠征の報告書。隊長は今西錦司、隊員は西堀栄三郎、高橋健治、加藤泰安、児島勘次ら12名、藤木九三が特別参加した。外地における長路の荷運び、装備の改良、新機軸の極地法の採用、科学研究調査の併行など、戦後のヒマラヤ遠征におけるノウハウの祖型がここでつくられた。

35. 松方三郎

アルプス記

19.5×13.3 cm pp. 326. 龍星閣、東京、昭和12年（1937）

大正14年から3年間、ヨーロッパ留学中の松方三郎（1899～1970）は日本人としては槇有恒に続く本格的クライマーとして西アルプスの山々を登りまくった。本書は帰国後10年間に発表した文章をまとめた最初のエッセイ集。瑞々しい感動にあふれる紀行とともに、長い登山の歴史が創りあげたアルプス文化の香りを伝えんとする知的情動が印象深い。帰朝後の著者は新時代にふさわしい日本山岳会の再興に務め、図書室の充実に尽力した。

36. 竹節作太

ナンダ・コット登攀

25.5×18.6 cm pp. 本文100，写真116. 大阪毎日新聞社、大阪、昭和12年（1937）

戦前の日本で唯一実現した登山隊によるヒマラヤ遠征と初登頂の記録。立教大学山岳部は昭和11年、ガルワール・ヒマラヤの一峰ナンダ・コット（6861 m）に挑んだ。隊長・堀田弥一以下4名。毎日新聞記者で早稲田大学スキー部出身の竹節作太は特派員として参加し、隊員全員とともに頂上を踏んだ。本書は著者が現地から送った記事と写真をもとに刊行。約半世紀後に堀田弥一『ヒマラヤ初登頂・1936年のナンダ・コート』が世に出た。

37. 今西錦司

著者はインド独立を叫ぶ言辞のゆえに下山と同時にイギリス官憲に逮捕され、押送されたシンガポールで脱獄して帰国した。

26. 辻村伊助

スウィス日記

23.0×16.0 cm pp. 280. 横山書店、東京、大正11年（1922）

27. 辻村伊助

續スウィス日記 自筆草稿

日本アルプス探検登山の黄金時代を飾った辻村伊助（1887～1923）は大正3年スイスに遊び、念願のアルプスの高峰に挑んだ。ユング・フラウとメンヒを登り、シュレックホルンに登頂するも下山中に雪崩で負傷。その紀行は日本山岳会機関誌「山岳」に分載され、最初に刊本となったのが展示の『スウィス日記』（前半1／3が未掲載）である。

関東大震災のさい箱根湯本の自宅が山上貯水池の決壊によって埋まり、著者はスイス人の妻と3児とともに死亡。その土中から掘り出されたのが展示の『続スウィス日記』原稿である。高野鷹蔵、茨木猪之吉ら岳友の手で美しく装幀された。昭和5年、横山書店版の欠を補い、出土の「続」を付した『スウィス日記』完本が梓書房から刊行された。

28. 槇有恒

山行

22.0×12.8 cm pp. 266. 改造社、東京、大正12年（1923）

世界の第一級のクライマーに伍してアイガー東山稜を初登攀した槇有恒（1894～1989）は日本におけるアルピニズムの旗手として、従来の登山の観念、技術、装備、服装まで一変させた。アルプス登山史、アイガー東山稜を白眉とする登攀記、技術論文「岩登りに就いて」などを収める本書は勃興期のアルピニストの教典となる。槇は本書上梓の2年後アルバータに初登頂、戦後マナスル遠征隊長として日本人初の8000 m峰登頂に導いた。

29. 加納一郎

氷と雪

18.7×12.8 cm pp. 331. 梓書房、東京、昭和4年（1929）

加納一郎（1898～1977）は京都一中から北大農学部に入り、北海道のスキー登山のパイオニアとなる。在学中に日本最初の山岳雑誌『山とスキー』を創刊、その後『ケルン』『探検』の編集に携わるなど、山と探検のジャーナリズムに新分野を開く。本書は「雪学」の深い造詣を開陳した最初の著書。水と氷の理学的性質、降る雪積もる雪、雪華の研究、積雪の性質とその形態、雪崩、氷河と氷山、氷期及び人と寒冷、など9章から成る。

30. 板倉勝宣

山と雪の日記

18.7×13.7 cm pp. 198. 梓書房、東京、昭和5年（1930）

大正12年1月立山で遭難死した板倉勝宣（1897～1923）の遺稿集。板倉は学習院から北海道大学に進み、近代アルピニズム（とくに冬山登山・スキー）のパイオニアだった。本書は板倉の没後友人たちによって編集され配られた『遺稿』（限定150部）の改訂普及版。『遺稿』の主要部分だった論文と書簡が削除されている。巻頭に遭難時の同行者だった槇有恒が「追憶」の筆をとり、巻末に編者の一人、松方三郎が本書出版の由来を記す。

31. 藤木九三

雪・岩・アルプス

22.1×15.0 cm pp. 409. 梓書房、東京、昭和5年（1930）

日本の近代アルピニズムの飛躍を目ざして新たな実践と哲学を希求しつづけた山岳ジャーナリスト藤木九三（1887～1970）の代表作。研究、紀行（欧州アルプス・日本アルプス）、訳章に、自作

山水供養

18.7×12.7 cm pp. 196. 春陽堂、東京、大正2年（1913）

明治後期から詩趣豊かな散文集を数多く発表した著者（筆名・麗水）は明治26年の富士登山を「富士の高根」に著し、明治文学に紀行文の分野を開いた文士とされる。本書に収録の40年6月の八ヶ岳登山では、夜行列車で早朝の小淵沢駅に降り立つと、上司の命で同行するという巡査と村人4人の出迎えを受け、そろって登山するという珍しい登り方をしている。44年の「雪の裾野」では富士山の美しさをさまざまな視点でとらえている。

21. 一戸直蔵・河東碧梧桐・長谷川如是閑

日本アルプス縦断記

17.8×10.0 cm pp. 380. 大鐙閣、東京、大正6年（1917）

俳人の河東碧梧桐、評論家の長谷川如是閑、天文学者の一戸直蔵、今日で言うところの文化人3名が大正4年7月に信濃大町から針の木峠へ登り、蓮華岳、烏帽子岳から槍ヶ岳を経て上高地へ下った8日間の紀行。併せて登山者の心得が付してある。さらに碧梧桐が「登山の時期きたる」と題する一文で世の青年に修養訓として「近代的登山のすすめ」を載せている。

22. 河東碧梧桐

日本の山水

14.7×8.0 cm pp. 561. 公文書院、東京、大正7年（1918）

正岡子規の高弟が著した登山案内書。富士山をはじめ各地の富士、日本アルプス、諸国の名山を取り上げたうえ、ほとんどの登山案内書がただ名所旧跡を案内し、一定の形式順序によって機械的に指示するだけで、それに先達され、方向を定められない旅人を憐れむと述べている。異色を呈するものとして志賀重昂『日本風景論』と小島烏水『日本アルプス』を挙げ、科学的見地に立って、他に文学的趣味を加味している点を評価している。

23. 徳富猪一郎

名山遊記

18.8×12.7 cm pp. 230. 民友社、東京、昭和3年（1928）

明治・大正・昭和にわたり時代を動かした評論家・蘇峰の山書。版元は著者が明治20年に興し、開化期の啓蒙運動の拠点となった民友社。明治からの文人墨客の山登りを締めくくる書物といえる。ここで蘇峰は「名山遊記は、登岳記ではない。岳麓の遊記だ。即ち富士山を中心として、その周辺を逍遥したる遊記だ。これを名山遊記と称するは、いずれの方面を旅行するも、常に富士山を目指しているからだ」と述べている。

24. 鹿子木員信

アルペン行

18.8×12.8 cm pp. 264. 政教社、東京、大正3年（1914）

鹿子木員信（1884〜1949）は日露戦争時の海軍機関士官から哲学者に転じた異色の思想家。ドイツ留学中の明治44年8月から9月にかけてベルナー・オーバーラントを峠越えで縦断、アルプス気分を満喫して、山岳での体験を人生哲学の域に昇華させた。日本人が書いた初のアルプスについての単行本として登山史上重要な意味をもつ。本書上梓の翌年、教鞭をとった慶応大学の山岳部創立に関与、大正10年に東京大学のスキー山岳部も創立。

25. 鹿子木員信

ヒマラヤ行

18.8×12.8 cm pp. 237. 政教社、東京、大正9年（1920）

大正7年、哲学研究のためインドに渡った著者は、10月から11月にかけてダージリンからシッキム・ヒマラヤに入り、カンチェンジュンガ山麓の氷河を彷徨し、悪戦苦闘のすえ黒カプア峰（4810 m）に登頂する。その遠征を綴った本書は日本で最初のヒマラヤ登山記となった。ちなみに

る「富士山保護論」、第4巻の「上高地風景保護論」のような現代の自然保護問題につながる社会的な問題提起もみられる。全4巻を通した美麗な造本は、美を追求してやまない烏水の面目が躍如している。

15.　日本山岳會

高山深谷　全8輯

写真集、各輯12葉。日本山岳会、東京、明治43年～大正6年（1910～1917）

日本山岳会が上記期間に毎年編集・刊行した山岳写真集。各輯とも発行部数は100部前後。辻村伊助のスイス風物写真を集めた第6輯（題字は横山大観）を除けば日本アルプスの写真が大部分を占める。造本はすべて芸術家会員の手作りで、皮革、ベニヤ板、カンバス地、絹どんすの表紙、手彫りの銅版、焦絵、篆刻など「凝りに凝った趣向を極尽」（小島烏水）した。のち昭和8年に第9輯、16年に第10輯が普通の刊本として出ている。

16.　石田吟松

山の画帳　全9冊の内

34.0×24.0cm　全60葉。私家本、大正元年～大正8年（1912～1919）

画家・石田探山、のち吟松の登山絵日記。大正元年8月13日、中房温泉でW. ウェストンと同宿した。ウェストンは著書『極東の遊歩場』でこれに触れ、日記にもこのときの宿のサービス、宴会客の騒音、翌14日に石田と連れ立って有明山に登ったことを記している。本画帳にはそのとき山頂で記した同行者ウェストン、百瀬彦一郎（宿の主）、二木亀一（信濃民報記者）のサインがある。他に大正6年の燕－常念－槍－上高地など8冊。

17.　志村烏嶺

千山万岳

22.0×14.7cm pp. 340.　嵩山房、東京、大正3年（1914）

志村烏嶺（本名・寛。1874～1961）は植物学者、初期の山岳写真家、日本山岳会創立メンバー。紀行文「木曽の御岳」「高原の雨、峠の霜」「日本アルプス縦走記」「乗鞍行」と研究論文「高山の植物」「日本アルプス」から成る。ウェストンの「序」があり、「日本山岳家青年時代の熱心を刺激するに資すること大なるは確かなるべし」と述べている。新発見の喜びが躍動する、近代登山のパイオニアの瑞々しい感動にあふれる書である。

18.　幸田露伴

枕頭山水

19.0×13.0cm pp. 222.　博文館、東京、明治26年（1893）

明治時代の登山の気風を鼓吹したものに、山好きの文士たちの活動がある。代表作『五重塔』で知られ、明治20年代に尾崎紅葉と紅・露時代を成した露伴は紀行文家としても活躍、上州をよく訪れ、本書や『草鞋記程』などを著し、明治の旅の風俗を書き残した。巻頭の「易心後語」では夏の東北地方を巡る旅で、栗駒山、岩手山、岩木山、鳥海山などを訪れている。（いずれも荒天などのため登頂はしていない。）

19.　大町桂月

一簑一笠

15.0×11.0cm pp. 372.　博文館、東京、明治34年（1901）

明治・大正期に詩人、評論家として活躍した桂月は、生涯を旅にそそいだ文士で、紀行文も多い。巻頭の「富士だより」で、富士に登るのは五穀豊熟を祈るためでも、植物採集や地質の研究でもなく、富士の霊気に触れたいためだと断言している。これはまさに近代登山精神の発露といえる。他に明治33年8月の立山、30年の筑波山、31年の相州雨降山、32年の伯耆大山などの紀行が収録されている。

20.　遅塚金太郎

東京、昭和12年（1937）

西本願寺第22世宗主・大谷光瑞（1876〜1948）は明治35年から大正3年にかけて3回にわたり中央アジアに探検隊を派遣し、第1次のタシュクルガンからミンタカ峠を越えてフンザ、ギルギット、スリナガルに至る探検は自ら率いた。この大谷探検隊の中央アジア踏査は日本の近代探検史に誇るべき壮挙であった。本書はその調査・研究の成果を集大成したもの。編者は上原芳太郎。書題は『大谷光瑞師の生涯』を著した徳富蘇峰の命名。

10. 野 中 至

富士案内

18.7×12.7 cm pp. 196. 春陽堂、東京、明治40年（1907）

明治34年初版の訂正再版。気象台技官の野中至（1867〜1955）が明治28年10月1日から12月21日までの3ヵ月間、厳冬期の富士山頂剣ガ峰に造った小屋に夫人と滞在し、気象観測を行ったときの壮絶な生活記録。同年2月に行った偵察登山は厳冬期の富士山初登頂とされる。夏の富士登山に対するアドバイスや冬季登山を勧める記述もあり、日本の近代登山の黎明に先んじた科学研究登山者の貴重な遺産。新田次郎『芙蓉の人』のモデル。

11. 高 頭 式

日本山嶽志

22.0×15.0 cm pp. 1336. 博文館、東京、明治39年（1906）

本邦初の本格的山岳百科事典と言うべき歴史的文献。索引、登山術、山嶽諸説、日本地質構造概論、日本山嶽志、山嶽噴火年表、山嶽表から成る。高頭式（のち家督を継いで仁兵衛。1877-1958）は新潟県長岡市の旧家の生まれ。家人に登山を禁止された不満が10年に余る地誌の文献渉猟に没頭させ、この浩瀚な山岳誌を造り上げた。二千座を越える山岳の山名考、所在、標高、登路等は黎明期の登山家の座右の書となる。題字は榎本武揚。

12. 小 島 烏 水

山水無盡藏

19.0×12.5 cm pp. 316. 隆文館、東京、明治39年（1906）

日本山岳会初代会長・小島烏水（本名・久太。1873〜1948）の最初の著作としての山岳紀行文集。明治32年秋の中仙道、飛騨街道の紀行文5編、35年夏の槍ヶ岳登頂報告「槍ヶ岳探検記」を収録。その山に対する姿勢には、自然美への憧憬とともに、志賀重昂の『日本風景論』に啓発された、従来の宗教的な登山とは異なる、未知の山岳に対する強烈な探究意欲にもとずく近代登山の萌芽がみられる。序文は島崎藤村。丸山晩霞の絵2葉。

13. 丸山注連三郎・高島傳二良・野本又次

槍が嶽乃美觀

22.5×15.0 cm pp. 234. 慶林堂高美書店、松本、明治39年（1906）

小島烏水に続き、翌明治36年8月に地元松本の小学校教員の登山グループ、上記3名の共著者が槍ヶ岳に登頂した。近代登山としては第二登になる。登山を「中流以上」の人々に拡げるべきだとし、それが「国民的実力の養成」に価値あることと位置づけている。「登山の必要を論ず」「登山日記」「槍ヶ岳の生物」など6編から成り、入山2日目に赤沢の岩屋で下山中のアメリカ人6名の一行と出会い、記念写真を撮ってもらっている。

14. 小 島 烏 水

日本アルプス 全4巻

23.0×16.0 cm pp. 331, 304, 294, 317. 前川文栄閣、東京、明治43年（1910）、明治44年（1911）、明治45年（1912）、大正4年（1915）

小島烏水の代表作。本邦近代登山の先駆者である著者が明治から大正にかけて精力的に中部山岳を中心に登山した山岳紀行に、併せて山岳・地理研究、芸術論を幅広く掲載している。第1巻にあ

25.5×17.5 cm pp. 62. 万延元年（1860）

幕末・維新期の北方探検家・松浦武四郎（1818～1888）が著した自家版「東西蝦夷山川地理取調紀行」全8冊（安政6－文久3年）の2冊目。著者は伊勢の郷士の子、青少年期から諸国を遊歴し、目につく山を片っ端から登った。やがて探検の意欲は北方に向かい、蝦夷、樺太を踏査、幕府蝦夷御用掛となり、維新後も開拓判官を拝命、蝦夷を北海道と改称させた。数多くの著作に山の記述が見られるが、本書では石狩岳登山記が印象深い。

4. 高島得三

歐洲山水奇勝　佛蘭西・伊太利・蘇格蘭　全

24.3×17.7 cm pp. 108. 東陽堂、東京、明治26年（1893）

アルプスを現地で描いた日本人最初の画集。他に2種の2巻本がある。高島得三（号・北海。1850～1931）は農商務省の官命により明治17年ヨーロッパ出張・留学、その3年余に各地の山域を歩き、画才を生かして写生した。サランシュから見たモン・ブラン、フレジェールから見たメール・ド・グラス、フランス中部のドーム山、ピレネーのピク・デュ・ミディ、スコットランドのローモンド、北イタリアの湖水風景など40図を収める。

5. 高島北海

寫山要訣

22.0×15.0 cm pp. 253. 東陽堂、東京、明治36年（1903）

明治30年に官界を退いた高島北海はその後30有余年の生涯を絵画三昧に過ごした。本書は山岳、岩石、植物などの自然を絵画によって写しとる技術を論じた風景画入門書。150点の挿絵を収める。絵画は独学だった北海は旧来の日本画、新来の西洋画の技法にとらわれず、「実景を研究し　地質学の原理に依りて真山水を解剖し作画の基礎を立つる」ことを心がけた。滞仏中広く日本美術を紹介しアールヌーボー期の欧州工芸界にも影響を与える。

6. 志賀重昂

日本風景論

22.0×14.8 cm pp. 222. 政教社、東京、明治27年（1894）

地理学者・志賀重昂（1863～1927）の主著。版を重ねるたびに表紙の絵（樋畑雪湖画、展示の初版本は木曽駒ヶ岳）が変わり、改訂を加えるので頁数や本文中の図版にも異同がある。世界に類のない日本の風景美の要因として、気候・海流の多変多様、水蒸気の多量、火山岩の多々、流水の浸蝕激烈をあげ、科学的に詳述する。また登山の気風を鼓吹し、西洋伝来の最新の登山術を紹介するなど、当時の登山家は本書に多大な感化を受けた。

7. 河口慧海

西藏經歷談

新聞連載全切り抜き、大阪毎日新聞社、明治36年（1903）

8. 河口慧海

西藏旅行記　2巻

22.3×14.8 cm pp. 上412，下456. 博文館、東京、明治37年（1904）

河口慧海（1866～1945）は独立独歩の仏僧。チベット語経典を求めて明治30～36年インド、ネパール、チベットを遍歴、ラサの僧院で修学、ダライ・ラマに謁見した。帰国後その体験を口述し、明治36年5月から大阪毎日新聞に155回にわたり連載された（展示のスクラップブック）。翌年それをまとめた『西蔵旅行記』が上下2巻で刊行された。5年後に英訳され（Three years in Tibet）世界のチベット探検・研究家の必読文献となる。

9. 大谷光瑞・他

大谷家藏版　新西域記　上下

38.0×26.0 cm pp. 上1～440＋18，別綴写真21葉；下441～818＋78，別綴写真46葉. 有光社、

いて、珠玉の紀行・記録・文芸・芸術が並ぶ目録に目をとめて、山岳書の豊かな実りの世界を逍遥することを思い立つ動機としてくれることが望まれる。

そういう次第で、たんなる記録としてだけでなく、日本登山史の要約として、同時に海外の登山史の略図として全会員に目を通していただくことを祈って、出展物の目録とその解題文を本誌に掲げる次第である。　（山岳編集委員会）

目　次

和書の部
明治以前の愛山家・探検家…1〜3
日本山岳会創立前後　・・　近代登山の黎明…4〜17
山に遊んだ明治の文人…18〜23
アルピニズムの成立…24〜41
日本の山旅　・・　開拓と逍遥　静観と思索…42〜60
マナスルとエヴェレスト…61〜65
洋書の部
アルプス登山の黎明期　・・　アルピニズムの誕生…1〜13
アルプスからコーカサス・中央アジアへ…14〜22
ウェストンの日本アルプス…23〜24
ヒマラヤ探検と登山の時代…25〜37
エヴェレストへの道…38〜46
ヒマラヤ黄金時代…47〜54

日本山岳会所蔵絵画展示作品

（1）　和書の部

1.　谷文晁

日本名山圖會　天地人3巻

25.6×18.5 cm pp. 天68, 地62、人70. 文栄堂、江戸、文化9年（1812）

文化2年（1805）刊の『名山圖譜』の普及版。多くの異本のなかの一つ。北海道の志利邊津山（後方羊蹄山）から鹿児島県桜島の御岳まで90座の山の写生図を収める。作者の谷文晁（1783〜1840）は江戸の武家生まれの画家。希代の旅行好きで蝦夷地を除けばほとんど日本全土に足跡をしるし、山水奇勝を目にするたびに克明に写生した。元の『名山圖譜』は同じく山好きの医師・川村錦城が企画・編集。本邦初の真の山岳写生集と言える。

2.　十返舎一九

諸國名山往来

18.1×12.7 cm pp. 26. 森屋治兵衛、江戸、文政7年（1824）

江戸の戯作者・十返舎一九（1765〜1831）は『東海道中膝栗毛』の大好評をうけて、その後20年にわたり続編を出した。ちなみに続膝栗毛は「金比羅参詣」「木曽街道」「中仙道中」など。これを支えた江戸庶民の旅行熱は山にも向かい、それに乗じて撰したのが本書である。取り上げた山は富士山、日光山、金華山、羽黒山、立山、身延山、阿蘇山、伊吹山、吉野山、大峰山、金剛山、愛宕山、箱根山、筑波山、妙高山、浅間山など32座。

3.　松浦武四郎

石狩日誌

日本山岳会創立100周年記念
所蔵山岳図書・絵画展

目録と解題

本会の創立100周年記念行事の一環として「所蔵山岳図書・絵画展」が2005年10月8日から17日まで、東京駅丸の内北口の至近距離に新築された建物に移転して間もない丸善本店の4階ギャラリーで催された。そもそも日本山岳会と丸善の間には、創立30周年記念として開催された山岳図書展以来の深い関係があった。1935年に日本橋の丸善本店で催された日本山岳会主催の展覧会は、日本における最初の本格的な山岳図書展としての特別な意義を持っていた。今回の催しが丸善株式会社の後援によるものであるのも、歴史を偲ばせることなのであった。そして、当時の『山岳』に掲載された出品図書目録は、日本登山史にとって図書の演じた役割を証明する貴重な資料となった。

日本山岳会の歴史は、いろいろな意味で図書と深い関わりを持ち続けてきた。内外の出版物が登山への刺激としての役割と、登山の記録を後世に伝える役割とを、並行して演じつづけてきた。図書を重要視した先見の明のある先輩諸氏によって日本山岳会の図書室は山岳図書館と呼ばれるに足る内容を持つに至った。ちなみに、2004年度末現在、図書室に和書11,174冊、洋書3,360冊が蔵されていた。

その一部なりと一堂に陳列して日本登山史を支える力の源になった書物、およびその成果を示す書物を選出して展覧しようという企画が生まれた。本会の100年の歩みを、その歴史的背景とともに、代表的な書物によって象徴させようとする企画であった。会場の壁面を活用して本会に所蔵される絵画の一部も展示されることとなった。

書物の選択とその解説の執筆はけっして容易ではなかった。展示する価値のある書物は枚挙のいとまのないほど多いのに、会場のスペースに限りがある。取捨選択の段階ですでに大きな苦労が始まっていた。解題についても、限定された字数の枠の中に収めるための苦心は並大抵でなかった。本会の図書委員会において提案されたことからスタートし、理事会の議を経て組織されたのが「日本山岳会創立100周年記念図書・絵画展委員会」であった。田村俊介氏を委員長とし、大森久雄、越田和男、平井吉夫の3氏を中核とする委員会の労を多としたい。この委員たちが他の多くの会員たちからの意見を徴しながら、和書65点（約100冊）と洋書54点（邦訳書を含めて約100冊）を選んだ。併せて、山岳会所蔵の絵画から16点が選ばれて図書展に彩りを添えることとなった。

選択にあたって、和書は「戦前の山岳名著と稀観書の初版本、およびマナスル初登頂に関するもの」を、洋書は「エヴェレスト初登頂までの山岳書の古典、8000メートル峰の初登頂の記録」が中核をなすものとされた。さらにこの人々が改題の文章を作成した。それらを通読するだけでも、日本山岳史が、世界山岳史とともに、要約された形で浮かび上がるように思える。人々が書物から疎遠になる傾向が強まりつつある現代にお

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081

Office Bearers and Committee

2006 (May 2006-April 2007)

President : HIRAYAMA Zenkichi

Vice President : HIRABAYASHI Katsutoshi
HASHIMOTO Kiyoshi
TANABE Hisashi

Secretary : YOSHINAGA Hideaki

Editor : MINAMIKAWA Kin-ichi

Treasurer : NIEDA Munetsugu

Auditor : YAMAMOTO Ken-ichiro, TAKENAKA Akira

Director

FUJII Masayoshi	ISHIDA Toshihisa	SAITOH Masayoshi
FURUNO Kiyoshi	NOGUCHI Izumi	SHINOZAKI Hitoshi
ISHIBASHI Masami	OHKURA Yoshitomi	WATANABE Yuuji

Council

FUJIMOTO Keikow	KOHNO Masaru	SHIGEHIRO Tsuneo
FUKAGAWA Yasuaki	MATSUNAGA Tosio	TABEI Jyunko
HIGETA Minoru	MURAKAMI Katsutaro	TAKAHARA Sanpei
IMAMURA Chiaki	NAKAMURA Tamotsu	TAKEDA Kanji
ISONO Gohta	NISHIMURA Masaaki	TANAKA Fumio
IWATSUBO Goro	OGURA Nobuko	WADA Toyoji

Section Chair

Hokkaido : NIIZUMA Toru
Aomori : SHIMOYAMA Hisashi
Iwate : KIKUCHI Osami
Akita : SASAKI Tamihide
Yamagata : SAITOH Tetsuro
Miyagi : SENGOKU Nobuo
Fukushima : SAKUMA Takao
Echigo : HIRATA Dairoku
Shinano : KANEKO Jyoji
Yamanashi : FURUYA Gakuji
Shizuoka : OHISHI Atsushi
Tohkai : WADA Toyoji
Gifu : HAYATA Michiharu
Kyoto : YOKOTA Akio
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : TSUDA Fumio
Fukui : MIYAMOTO Kazuo
Kansai : SHIGEHIRO Tsuneo
San-in : TAKADA Mitsuyoshi
Hiroshima : TANEMURA Shigeaki
Fukuoka : NAKAYAMA Takeshi
Kita Kyushu : OHBA Tsuneo
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : KUDOH Fumiaki
Miyazaki : INOMOTO Shigeru

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 101 No.159 **Issued December 2006**

CONTENTS

It is memories of three old members as for coverage
—Takazou TAKANO, Hisayoshi TAKEDA and Matsujiro KANMURI
……SUGIMOTO Makoto……(7)
Companions in mountain that gathers history and there
in "Hut Kirigamine" ……TAKAHASHI Yasuo……(17)
Some considerations about "Heidi"-story for adult mountaineers
—About deep meaning that lurks in it's historical background—
……MIYASHITA Keizo……(37)
A journey of the peaks and lower-forbidden Yi'ong Tsangpo
in East Tibet—October～November 2005 ……NAKAMURA Tamotsu……(54)
Book Reviews ……(74)
In Memoriam ……(108)
Report from Local Sections ……(126)
Club Notes June 2005—May 2006……(158)
The 100th anniversary JAC—Exhibitions catalog of JAC owing
books and paintings—Bibliography……(A13)
Nature conservation activities by JAC……(A37)
Catalogue of Japanese mountain books in 2005 ……(A45)

世界の山旅®
辺境の旅

日本の山旅®

世界の山旅を手がけて37年

「一人では行けない、でも、行きたい。」
それにお応えするのが実体験に基づいた
アルパインツアーの旅づくりです。

山旅一筋・専門特化

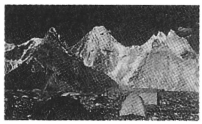
アルパインツアーなら、
きっと愉快な山仲間に
出会えます。

トレッキングからエクスペディションまで。

「頂に充足あり」
単純にして明快
登頂ツアー

山麓から一気に
氷河や稜線へ
ヘリコプター
ハイキング

テントからテントへ
より山を味わい、楽しむ旅
迫力のシーンが展開する
充実トレッキング



可憐な花々、珍しい動物
青い氷河、神秘のオーロラ
大自然探訪の旅

山小屋から山小屋へ
大自然の息吹を感じ
山に囲まれて過ごす数日間
小屋泊りトレッキング

興味津々、感動、驚き、
文化、民族に
ふれる旅

ホテルやロッジから
快適日帰り
のんびりハイキング

サイクリング、カヌー、
キャンプ、フィッシング
大自然を舞台に
アウトドアを満喫

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

東　京／〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1（西新橋1森ビル2階）　TEL.03-3503-1911
大　阪／〒550-0003 大阪市西区京町堀1-4-3（TCF肥後橋ビル2階）　TEL.06-6444-3033
名古屋／〒450-0002 名古屋市中村区名駅3-23-6（第2千福ビル8階）　TEL.052-581-3211
福　岡／〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-2-8（セントラルビル5階）　TEL.092-715-1557
広　島／広島サービスステーション（大阪支店転送電話）　TEL.082-542-1660
仙　台／仙台サービスステーション（東京本社転送電話）　TEL.022-265-4611
札　幌／北海道地区総代理店（株）りんゆう観光 〒060-8582 札幌市東区北9条東2丁目　TEL.011-711-7106

http://www.alpine-tour.com　　e-mail:info@alpine-tour.com

mountain dax

完璧を追求して、山を知り尽くした者たちが造りだす山装備。

DM-216　ミディ
32L　税込価額￥11,760
(本体価額￥11,200)
●サイズ61×23×19cm
(高さ×幅×厚さ)

DM-217　ブランシェ
38L　税込価額￥14,490
(本体価額￥13,800)
●サイズ65×29×22cm
(高さ×幅×厚さ)

DAXは『完璧を追求して』
最新アイテムを造り続けて30年。
その間、多くの遠征隊、登山者の支持を得るとともに、
彼らを力強くサポートしてきました。
DAXはこれからも確かな製品とともに、
熱いエールを送り続けます。

mt.dax

〒125-0031 東京都葛飾区西水元6-22-15
TEL 03-3608-8441　FAX 03-3600-7371
E-MAIL:inf@mtdax.co.jp　URL:www.mtdax.co.jp

SINCE 1975

mont·bell

越えられる
可能性があるかぎり。

高みに、自分自身に挑むアルピニストたちの
最高のパフォーマンスを引き出すために生まれた、
モンベルのアルパインサーマシェル。
高機能の可能性を追求し続け、
ついにたどり着いた
『次世代』のアルパインクロージング。
身につけた瞬間、難関を越えていく
自分の姿が目に浮かびます。

Alpine Therma Shell
アルパインサーマシェル ジャケット
#1102363…¥35,000(税込)
パンツもご用意しています。

商品について詳しくは「2006-2007秋冬カタログ」をご用意しています。ご請求はウェブサイトまたはお電話で
承ります。(1冊300円／送料別)　●お問い合わせ(フリー)0088-22-0031／TEL.06-6536-5740

www.montbell.com

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

http://www.arai-tent.co.jp

〒359-0021 埼玉県所沢市東所沢5-12-12 TEL 04-2944-5855

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア

株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

西遊旅行ホームページ（http://www.saiyu.co.jp）

■本　社／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町２－３－１
岩波書店アネックス５F
☎03（3237）1391（代） FAX 03（3237）1396

■大阪営業所／〒530-0026 大阪市北区神山町６－４ 北川ビル５F
☎06（6367）1391（代） FAX 06（6367）1966

お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル（通話料無料）をご利用下さい。

0120－811391

見つけませんか、私達と一緒に。

ハイカーからエキスパートまで
幅広くサポートします。

ヒトと地球のインターフェイス

ICI石井スポーツ

http://www.ici-sports.com/

●ICI本店 〒169-0073 東京都新宿区百人町2-1-2
※新大久保駅から徒歩2分 03(3208)6601

●新宿西口店	03(3346)0301	●宇都宮今泉店	028(639)9650	●仙台店	022(297)2442
●神田小川町店	03(3295)0622	●太田高林店	0276(38)0620	●秋田広小路店	018(884)1771
●神田本館	03(3295)3215	●甲府店	055(221)0141	●盛岡大通店	019(626)2122
●八王子店	0426(46)5211	●松本店	0263(36)3039	●札幌店	011(726)2288
●大宮店	048(641)5707	●長野店	026(229)7739	●伏古店	011(787)0233
●川越店	049(226)6751	●新潟店	025(243)6330	●神戸三宮店	078(335)0355
●高崎店	027(327)2397	●新潟とやの店	025(241)5134	●大阪梅田店	06(6361)0171
				●メールオーダー係	03(3200)7219

営業時間●本店:全日10:30~20:00●支店:平日10:30~20:00 日／祭10:30~19:00

創造する山の旅

カザフスタン・キルギス・ウズベキスタン・タジキスタン
など中央アジア諸国（パミール・天山山脈）
ロシア：カフカズ山脈、シベリア、カムチャッカ、
極東そしてネパール、ブータンのスペシャリストです。

企画手配専門

株式会社 アースデスク

〒107-0052 東京都港区赤坂3-18-3ラカーサ小林ビル2F 東京都知事登録旅行業第3-4158号

お問い合わせ・お申し込みは

TEL 03-3586-3380 FAX 03-5570-2514

Eメール earthdesk@erch.or.jp http://www.erch.or.jp/earthdesk/

弊社は山旅の企画手配専門旅行会社です。どんな山旅についてでもまずはスタッフまでご相談ください。

GAKUJIN
山の専門誌「岳人」が贈る山の本

最新 アルパインクライミング

菊地敏之著　定価 1,785 円

世界標準の技術解説を軸に、新しいアルパインクライミングの技術と本質に迫る決定版。ロングセラー『最新クライミング技術』とあわせ、クライマーのバイブルとして常備したい解説書。この一冊で日本の登山が変わる!?

日本の登山家が愛したルート 50

岳人編集部編　定価 1,680 円

世界の高峰を登ってきた「日本を代表する登山家たち」が、国内の山からお気に入りのルートを紹介。名クライマーの山への思い入れや、ルートにまつわる歴史や逸話も盛り込んでいる。ルートマップ、概念マップ付き。

山は真剣勝負

山田哲哉著　定価 1,470 円

“歩けなくっちゃ話にならないんだよ”ーこの本で著者が投げかけるメッセージは、「よりよい登山のためにもっと真剣になり、もっとちゃんと登山のイロハを学ぼうよ」ということ。“ちゃんと登る”ための、辛口登山原論。

百霊峰巡礼・第一集

立松和平著　定価1,890円

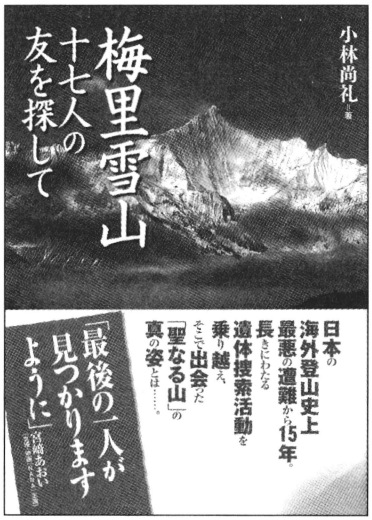
団塊の旗手・立松和平が、人々と出逢い、神々の息吹にふれ、太古の精神を求めて巡礼登山する『癒やしの山旅』。岳人編集部が選んだ百霊峰のうち、岳人連載第1回～25回までの25霊峰を収録。

東京新聞出版局（中日新聞東京本社）
〒100-8505 東京都千代田区内幸町2-1-4
TEL03-6910-2527　FAX03-3595-4831　http://www.tokyo-np.co.jp/tbook/

遭難から15年、捜索活動を乗り越え、出会った聖山の姿とは

梅里雪山（メイリーシュエシャン） 17人の友を探して

小林尚礼 著



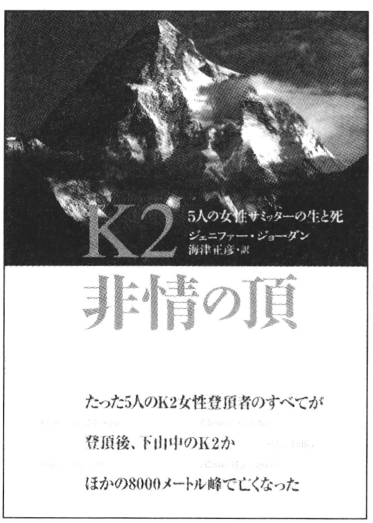
1991年、京都大学と中国の合同登山隊が、中国のチベット自治区と雲南省との境にそびえる梅里雪山（メイリーシュエシャン）6740メートルの初登頂を目指した。しかし、17人の隊員全員が死亡するという登山史上最悪の遭難となってしまう。そして1998年、その遭難遺体が氷河上に出現し、小林はその後7年間にわたり遺体の収容作業を続けていく。日本の登山史上最悪の海外遭難をあらためて振り返るとともに、この遭難を通して見た梅里雪山、そしてその山を聖山と敬う山麓に住む人々を写真と文章で描く。

■定価2,415円／A5判／304ページ

5人の女性サミッターの生と死

K2非情の頂

ジェニファー・ジョーダン 著
海津正彦 訳



本書執筆の時点で、世界第２の高峰Ｋ２の女性登頂者はたったの５人しかいない。しかも、彼女たちの生きざまは、まったく違うものだった。共通しているのは女性であることと、全員8000メートル峰で亡くなっているということ。本書は、Ｋ２と女性登頂者のこの不思議な因縁に心を動かされた著者が、実際にＫ２に行き、精緻な取材を重ね、女性の視点から彼女たちのＫ２登頂にまつわる物語を描き出したノンフィクションである。

■定価2,520円／A5判／464ページ

山と溪谷社

■〒107-8410 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル1階
■TEL.03-6234-1602　FAX.03-6234-1623
■ホームページ http://www.yamakei.co.jp

日本山岳会創立100周年記念出版

21世紀最新最大の山岳情報事典

山を愛するすべての人々に
山のことを知りたい方々に

日本山岳会●責任編集

新日本山岳誌

北は択捉（えとろふ）・国後（くなしり）などの北方四島の山から、
南は西表（いりおもて）・石垣（いしがき）などの南西諸島の山まで、
日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。
全国二五支部約五百名の会員の
登頂体験をもとに足で書かれた四〇〇〇山。
日本山岳会の英知がここに結集。

すぐに役立つ！こんな使い方！
・ふるさとの山を知る
・登りたい山を決める
・登山計画を立てる
・山の周辺を知る
・山名や地名を調べる

定価18,900円（税込）

菊判（1992頁）上製／クロス装／カバー掛け／函入り

ISBN4-7795-0000-1 C0525

・カタログをご請求ください。

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15 郵便振替 01030-0-13128
Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095
URL http://www.nakanishiya.co.jp/ E-mail iihon-ippai@nakanishiya.co.jp

ナカニシヤ出版

編集後記

・ここ十数年来の本誌と比べると、今号はかなり薄い感じのものになった。昨年号までは百年史に関する研究・論考を優先的に発表しておくという考え方にもとずく編集をしてきて、百年史の完成が目前にあるとあれば、一応、百年史に関するものは第百年号で区切りをつけるべきであろうと考えたことによる。ただ、本会の百年の歴史は百年史の完成をもって解明を終わるというものではなく、今後新たな資料が見付かれば、当然それをもとにした新しい知見が生じ、新たな観点からの歴史の解明が必要になるであろうし、新たな視点からの解明も出てくるから、今後も引き続き本会の歴史に関する研究・論考を取り上げていくべきことはいうまでもない。

・もう一つの理由は、第百一年からの『山岳』のあり方といったものを議論して、それを踏まえた編集とすることは当然のことなのだが、その時間的余裕がなかったことによる。例年四月頃には編集委員会を開いてその年度の企画についての議論を始める。ところが、今年度は五月頃までには百年史を完成させる計画であったので、その作業に目途がついたところで、『山岳』編集委員会を開いて『山岳』のあり方についての議論を始めたいと考えていた。しかし、五月の完成はおろか、完成の時期すら読めない状況になってきた。このままでは『山岳』の編集には責任を持てないので、会長に『山岳』編集委員長の辞任を申し出たのだが、適当な後任者が見付からないとあって、続投せざるを得なくなった。それも、六月中旬というかなり遅い時期になってのことであり、とても企画を練っている余裕などありはしない。委員会を開いて議論をしている時間はないので、編集委員諸氏に手持ちの企画を出してもらい、各々の責任において進めてもらうという状態でのスタートであった。

・戦後、延べ二十年余にわたり本誌の編集を担当した望月達夫氏が、何歳まで『山岳』に携わっていたかのかを調べてみて驚いた。六十歳である。六十歳という歳はけっして若くはないにしても、現在の会の働き手と比べてみると随分若い。本誌の編集委員は八十一歳を筆頭に、平均年齢六十八歳という高齢である。筆者も、いつの間にか六十歳を遥かに越えてしまい、注意力散漫、集中力の低下を実感する毎日である。望月さんがそんなに若い歳で退くことができたのは、当時は会全体がまだ若く、後を託すに足る若い働き手がいたからである。しかしいま周囲を見渡すと、二十年前と変わらない顔ぶれのメンバーがいまもなお老骨に鞭打って働いている場面を目にすることが少なくない。美徳といえば美徳ではあろうが、あまりにも残酷であり、組織としては異常である。人は多くいても、頼りになる若い働き手がいないような組織は、動脈硬化をきたした人間の身体と同じであり、そんな組織に明日はないだろうと考えるが、如何だろうか。

・今号の編集委員と担当は次のとおり。

南川金一（総括・長老と共に…・追悼）、高遠　宏（東チベット…）、宮下啓三（霧ヶ峰…・図書紹介）、関塚貞亨（ハイジ物語・会務報告・自然保護の歩み）、永田弘太郎（支部だより・図書目録）、浦邉　充（会務報告）。

（南川）

『山岳』第百年（二〇〇五年）掲載記事の訂正

『山岳』第百年（二〇〇五年）掲載の「『チャンタンの蒼い空』西チベットの未踏峰に挑む」と題した記事中、二〇一頁下段四行目「……ところが、思いがけなく同志社大学山岳会もこの計画に合流したいとの意志表示があり、最初はとまどったが…」の表現は不適切な表現であるとの申し入れにより、次のように訂正致します。

「一九九七年より三回にわたり同地域を計画的に登山、踏査していた同志社大学山岳会と、大阪山の会がそれぞれ隊員を選出し、関西支部の登山隊として合同で踏査する方針を建てることとした。」

（関西支部・阿部和行）

山岳　第百一年（通巻一五九号）
二〇〇六年十二月二十日発行

価二〇〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二―〇〇八一）
電話　〇三―三二六一―四四三三
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九

発行人　平山善吉
編集人　南川金一

印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　〇三―三二九一―九四四二
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七三三

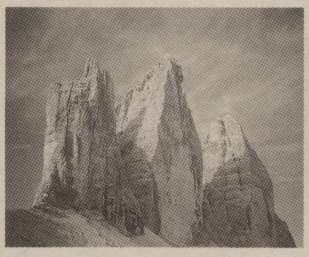
本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

トレック、アニマルウォッチング、撮影の旅、エクスペディションまで、あらゆる山旅をコーディネイトします。

世界各地の山々へ。



スイスの草原とはまた違ったイタリアドロミテの岩峰を巡る旅

天空を突き刺すヒマラヤの巨人を眺めるヒマラヤトレック

清らかな川の流れと繁茂するシダ類、コケ類の調和。ミルフォードトラック

大自然の中で思わず野生動物に出合う事も！カナディアンロッキー

世界の高峰を撮る。フォトトレックパタゴニア・パイネ山群にて

★世界各地、日本の名峰へのレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取り扱っております。

●お問い合わせ・お申し込みは　国土交通大臣登録旅行業第1167号

株式会社アトラストレック

〈東京〉03-3341-0030（代）
東京都新宿区三栄町25番地三栄ハウス202
FAX：03-3341-9200

〈大阪〉06-6946-9111（代）
大阪市中央区谷町3丁目4番地5号-501
FAX：06-6940-3799

〈北海道地区総代理店〉株式会社ノマド
011-261-2039（代）
札幌市中央区南2条西6丁目一閣ビル1F・2F
国土交通大臣登録旅行業第1668号

〈名古屋〉052-788-2422（代）
名古屋市千種区東山通り5-113オークラビル6F
FAX：052-788-2423

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol.101

2006